アニメ＆ゲームキャラ大集合！ 2nd　復讐の戦場

青いタヌキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アニメ&ゲームキャラ大集合！　２ｎｄ　復讐の戦場

【Ｎコード】
Ｎ８１８８Ｈ

【作者名】
青いタヌキ

【あらすじ】
それは、前作から少し経った後のお話……。『アニメ&ゲームキャラ大集合！』シリーズの第２弾（全体としては第３弾）です。

プロローグ：姉妹の誓い（前書き）

※文章や戦闘描写など、まだまだ未熟なところがありますが、よろしくお願いします。

プロローグ：姉妹の誓い

――　とある住宅　――

その日の夜、いつもより明るかった。　なんでこんなに明るいんだろうって思ってると、お母さんが私とお姉ちゃんの手を引っ張った。
お外に出ると、家全体が火、火、火……火でいっぱいだった。
お母さんが必死で私たちの手を引っ張って逃げる。　だけど、お母さんの前に誰かが立ってて、お母さんの顔は険しくなった。　何か話してるみたいだったけど、聞き取れなかった。　お母さんがここを動いちゃダメよ、って言って手を離してデバイスをその人に向けたの。　だけど次の瞬間、お母さんは目を見開いた後、うつぶせる形に倒れちゃった……。　お母さんの懐から何かを取ってその人は消えてしまった。　私とお姉ちゃんはお母さんに近づいたとき、まだ息はあった。　私とお姉ちゃんは覚えたばかりの治癒魔法でお母さんの身体から赤いのが流れてる傷口を塞ごうと頑張った。　だけど、あんまり上手にできない私たちじゃ完全に塞ぐことはできなかった。　その後、お母さんは駆け付けた魔導師の人たちに病院まで運んでもらった。
幸い私たちが魔法を使ったおかげでお母さんは一命をとりとめた。
だけど、鎮火した家からお父さんが胸を鋭利なもので刺され焼け焦げた状態で見つかった……私とお姉ちゃんは悲しんだ。　悲しんで悲しんだ結果、私たちは決意した。――お父さんを殺してお母さんをひどい目に遭わせたやつを見つけてやると。　そして、私たちは魔導師になった。　それから１０年の年月が過ぎた……。

――　会場　――

アナウンサー
『さーてやってまいりました、今回の“格闘王・決定戦”！』

ワァァァー！

アナウンサー
『皆さんの技術・知力・体力など……様々な力が問われるこの大会……いよいよ決勝戦を残すだけとなりました！』

ワァァァー！！

……

？？？
「わぁー、すごいねぇ～」

ピンク色のちっちゃい身体の“カービィ”が言う。

？？？
「うん……なんてたって本局が毎年力を入れてる大会だからね」

金髪の髪の女性……“フェイト・Ｔ・ハラオウン”が言う。

？？？
「つったってよ、何でこんなとこに来なくちゃいけねぇんだ？　しかも今回は俺１人だけかよ」

銀髪の天然パーマの“坂田　銀時”が言う。

???

「あんたはまだ増しなほうだぜ、俺のほうは……」

オレンジの髪の男……“黒崎　一護”が後ろをチラッと見た。

???

「何でこんな大会があるんだったら教えてくれねぇんだよ」

赤い髪の男……“阿散井　恋次”が一護を睨みながら言う。

一護

「てめぇに言ったらこうなるのは目に見えてたんだよ」

恋次

「なんだとぉ!?」

???

「……少しは静かにしてろ」

銀髪碧眼の少年……“日番谷　冬獅郎”が言う。

一護

「ところで、なんでおまえがいるんだ?」

冬獅郎

「こいつに無理矢理連れて来らされた」

恋次
「なっ！？　そんな言い方ないっすよ、日番谷隊長」

冬獅郎
「事実を言ったまでだ……」

カタン……

そのとき、フェイトの右隣に座った者がいた。

？？？
「……ここだけなんか騒がしすぎるな」

フェイト
「あ、チンクじゃない。　どうしたの？」

チンク
「他の皆よりも早く仕事が片付いたんで……」

“チンク”と呼ばれた銀色の髪に眼帯を付けた女性がフェイトを見て言った。

フェイト
「それじゃあ……」

？？？
「私もいますよ、フェイト執務官」

フェイトの左隣にはオレンジの髪をストレートにしている、“ティアナ・ランスター”が座っていた。

フェイト
「ここでは執務官じゃなくてもいいからね、ティアナ」

ティアナ
「あ、はい……」

カービィ
「あ、始まるみたいだよ～」

アナウンサー
『まず最初に入場するのは、新人にして初の快挙を成し遂げようとしている……魔導師の“日比谷　雷光”ーーーっ！』

ワァァァーーー！

歓声とともにゴツイ身体をした男性が出てきた。

フェイト
「あ、あの人……」

カービィ
「フェイトさん、知ってるの？」

ティアナ
「知ってるもなにも、最近“本局の暴れん坊”で有名なやつよ」

カービィ
「ふ〜ん……僕も出ればよかったかな〜……」

フェイト
「えっと、カービィが出たら話にならないような気が……」

カービィ
「そうかな？」

アナウンサー
『対しまして、こちらも新人魔導師として、しかも初の女性優勝者になろうとしている……“ナオ・ストワール”ーーーっ！』

ワァァァーーーッ！！

さっきよりも高い歓声で出てきた女性は、オーシャンブルーの肩までのセミロングの髪をしていた。

一護
「すっげぇ歓声だな」

チンク
「彼女も本局では“海風シスターズ・ファンクラブ”ができるほどの有名人だからな」

銀時
「それはまた人気があってよろしいことで」

そう言いながら銀時は“週間少年ジャン○”を読んでいる。

カービィ
「あれ、いま姉妹って言ってたけど……」

フェイトが「それはね……」と言ってモニターを開いた。　モニターに出てくるパネルにタッチしていくと、ナオという女生と同じオーシャンブルーの長い髪を（画面から見て）右側のサイドポニーテールにまとめている女性が映し出された。

フェイト
「彼女……ナオ・ストワールは、いま映ってる“リマ・ストワール”の妹なの」

カービィ
「そうなんだ……」

アナウンサー
『さて、それでは両者……デバイスを構えて……』

ジャキ……

雷光
「さて、さっさと終わらせるか」

雷光はソード状のデバイスを構えた。

ナオ

「……」

一方、ナオは彼女の髪と同じオーシャンブルーの色の杖を構えた。

アナウンサー
『レディ……ゴーッ！』

こうして、試合が始まった。

プロローグ：姉妹の誓い（後書き）

※いかがでしたか？　感想などがありましたらお便りください。

第1話：重なる影

ワァァァーー！

会場が歓声一色で染まるなか、駆け足で観客席に急ぐ影がいた。

皐月
「もうっ、なんでこんなときに限って仕事があんなにあるのよ！」

神代皐月――管理局の嘱託魔導師をしている女の子。

ヴィヴィオ
「仕方ないよ。　なのはママからのお願い、断れないもん」

高町ヴィヴィオ――高町なのはの娘さんで、魔導師として活躍中。
皐月とは親友の間柄である。

雅也
「皐月、おまえも悪いんだぞ。　ヴィヴィオにばっか仕事任せてるから」

久本雅也――皐月の幼なじみで、ヴィヴィオとは親友の間柄。
現在は嘱託魔導師として復帰し、３人で活躍中とのこと。

皐月
「今のはそういう問題じゃないでしょーが！」

雅也
「だったらどういう意味なんだよ？」

皐月
「それくらい自分でわかりなさいよね」

雅也
「わかんないから聞いてるんだろ」

皐月
「わかんないあんたが悪い」

雅也
「なにぃ～っ！」

皐月
「やる気っ？」

ヴィヴィオ
「2人とも喧嘩はダメだよ～」

立ち止まって口喧嘩をしている2人をヴィヴィオが宥(なだ)めようとする。

そこに、雅也のユニゾンデバイス――メアリーがやってきた。

メアリー
「マスター、こんなところで喧嘩してる場合じゃないぞ。急がないと決勝が終わってしまう」

雅也
「そ、そうだったな」

皐月
「ちっ……」

雅也
「『ちっ…』って……」

ヴィヴィオ
「とにかく早く行こ。　フェイトママが待ってるはずだから」

ヴィヴィオがそう言うと、３……いや、４人は観客席へと続く廊下を駆け抜けていった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ヴィヴィオ
「それじゃあ、フェイトママにどこにいるか聞いてみるね」

雅也
「ああ」

ヴィヴィオが念話してる間に雅也たちは周囲を見回した。

ワァァァーーー！！

辺りは決勝戦を見に来た観客の歓声に包まれていた。

雅也
「すごい歓声だな」

皐月
「でも、こんなもののどこか良いんだか」

メアリー
「そこは各々、違うと思うぞ」

とそこへ、

ヴィヴィオ
「フェイトママ、あっちにいるって」

と言うヴィヴィオの声が聞こえてきた。

雅也
「そうか、それじゃ……」

皐月
「いっくわよ～～！」

皐月が雅也の背中を押しながら観客の前を通り過ぎていく。

雅也
「お、おい、押すなって……」

皐月
「いいじゃない、たまにはこれくらい」

雅也
「いつもこれくらいのことはやってるぞ」

と言いながら押し合いっこをしている2人。

ヴィヴィオ

「あはは……」

メアリー
「あの2人は放っておいて……フェイトさんのところまで頼む」

ヴィヴィオ
「うん！」

そう言って2人はフェイトがいる場所の方へと向かった。

雅也
「おいーっ！」

皐月
「私たちを置いてくなーっ！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方、フェイトたちの方はというと、彼女――ナオの戦いっぷりをとくと観戦していた。

相手の剣は大振りで斬ってくるのに大して、ナオは左右に避けて攻撃をかわしている。　彼女が避けたところには大きな穴がいくつもあいている。

カービィ
「うわぁ……あれに斬られたら一貫の終わりだね」

チンク
「さすがというべきか……」

ティアナ
「ただ気が荒いというか……」

一護
「てか、あんな振りだとちょっと、な？」

恋次
「ああ……更木隊長といい勝負してるぜ」

2人は“更木剣八”のことを想像していた。
力押し……剣の振り……まわりを気にしない態度……すべてそっくりであったからだ。

冬獅郎
「やつは新人なんだろ？　だったら……」

フェイト
「ですが、そんな彼にもちょっと問題が……」

冬獅郎
「……というと？」

フェイト
「彼、物凄いバトルマニアみたいで、同じ部隊に所属する隊員たちに大怪我をさせて、最近まで謹慎処分扱いだったんです」

一護
「あ～……」

恋次
「まるで、一角さんみたいなやつっすね」

フェイト
「ちょっとシグナムに似てるかも」

チンク
「まぁ、その後始末でこっちにも飛び火してきたわけだが」

つまり、チンクたちは彼がやらかしたことの尻拭いをさせられていたということだ。

ティアナ
「まったく……嫌になっちゃいますよ、ほんとに」

フェイト
「まあまあ……」

とティアナを宥めるフェイト。

フェイトたちが話をしているうちにヴィヴィオたちが合流し試合観戦に戻った。　だが、話している間に勝負は意外な方向に向かっていた。

先程まで攻撃をかわしていただけのナオが、一転して攻撃一線の態勢に入った。

杖状のデバイスを上下左右に振り、雷光を押しているのだ。

しかも、ナオは彼の周りにはオーシャンブルーの魔弾が展開され、彼女が何かを叫んだ後、彼に向かっていった。

彼がプロテクションで防ぐ。　その隙をついて彼女はバインドをかけた。

捕縛され懸命に解こうとするが、彼女は杖を彼に向けた。

それが……勝敗を決めたのだった。

彼女の杖から一筋の閃光が走ったかと思うと、彼を閃光が包み込みプロテクションがかかっている場外まで吹き飛ばした。

その時、バリバリッとバリアにひびが入る音がした。

そして、閃光が消えた先には、バインドがかかったまま気を失っている雷光の姿があった。

彼女の杖から白い煙があがっていた。　どうやら、彼女のデバイスにはカートリッジシステムが使われているらしい。

フェイト
「すごい……」

チンク
「力押しのやつには良い薬だろ」

ティアナ
「ですね」

雅也
「……メアリー、分析できたか？」

メアリー
「はい、ですが……」

と何かを躊躇（ためら）っているメアリー。

雅也
「どうした？」

メアリー
「彼女の使用した魔法のランクをまとめてみたんですが……」

と言いながらモニターを開き、解析結果を表示する。

モニターには、このように表示された。

・集束魔法：Ｓ×４（ＳＳＳＳ）
・魔力斬撃：ＳＳ
・捕獲系魔法：ＳＳＳ
・魔力許容量：ＳＳＳ
・魔導師ランク：Ｃ＋

雅也
「え……？」

ヴィヴィオ
「ねぇメアリー、このデータ解析って間違いないよね？」

メアリー
「はい、解析プログラムは最新のものを更新してますから」

皐月
「だとすると……」

フェイト
「ちょっといいかな？」

雅也
「あ、はい」

不意に声をかけてきたフェイトに雅也は少し驚いた反応をした。

フェイト
「今の試合のデータ解析したんだよね？」

雅也
「はい。　それでメアリーが出した結果が……」

フェイトに解析結果を見せた。

フェイト
「……うん……こっちも同じ結果になった」

雅也
「それじゃあ……！」

と何かを言おうとした雅也よりも先にフェイトが言い始めた。

フェイト
「明らかにおかしいところが１つ…」

「ここ」と言ってフェイトは解析結果のあるところに指を差した。

フェイト
「ほとんどのランクがＳＳ以上なのに、魔導師ランクがＣ＋……しかもリミッターがかかっていない……」

皐月
「ということは……つまり…」

フェイト
「彼女、相当な実力の持ち主ってことだね」

……

雅也たちは黙り込んでしまった。

ティアナ
「でも、今回の大会はほとんど新人ばっかりだったからそんなに心配しなくてもいいんじゃ……」

チンク
「だが、彼女の実力は本物だぞ」

ティアナ
「そ、それはそうだけど……」

と話していると、ナオが辺りをキョロキョロ見回しはじめた。

銀時
「あ？　何やってんだあいつ？」

ジャン◯を読み終わったのか、銀時が彼女の異様な行動を見ていた。

カービィ
「辺りをキョロキョロ見回してるみたいだけど」

とカービィも不思議に思っていたその時！

ナオ
「出てこいっ！　貴様がこの会場にいるのはわかってるんだ！」
と、訳のわからないことを口走りはじめた。
恋次
「何言ってんだあいつ」
ナオ
「早く出てこい。　出てこないと……」
ゴオオオオ！
彼女からとてつもない魔力が感じられる。
その時、彼女の前に現れた人がいた。
フードを被っていて顔は見えないが、容姿から見て男性かと思われる。
？？？
「おやおや、きれいなオーシャンブルーの髪が台無しになるぞ」
ナオ
「黙れッ！」
？？？
「……で私に何かご用ですか？」

ナオ
「……言わなくてもわかってるはずだぞ」

ナオはデバイスを構えた。

???
「今の疲れ切ってる貴女に私は相手にならないかと」

ナオ
「うるさい！　さっさと構えろッ」

ガチャ……

???
「そうですね……周りから怪しい目で見られてますから、さっさと終わらせますよ」

そう言ってフードの人物は杖状のデバイスを構えた。

ナオ
「はあぁぁぁあ！！」

ナオがデバイスを薙ぎ払いしようとする。

???
「……走れ、隼（はやぶさ）…」

バンッ！

ナオ

「ぐふっ……！」

というナオの呻き声と同時に身体がよろめいた。

ナオ

「また……ダメ…か……」

バタ……

ナオが倒れたのを見ると、フードの人物はデバイスを収めた。

？？？

「所詮……新人ということだな」

そう言うとフードの人物は姿を消してしまった。

一護

「な、何だったんだ、今のは」

カービィ

「あっという間の出来事で何が何だか…」

冬獅郎

「それより、今の一撃……霊圧が感じられた」

フェイト

「えっ！？」

一護
「本当かよっ？」

皐月
「う～ん…なんか謎だらけね」

と討論してる間に、２人は担架で運ばれていった。

ナオが運ばれていく担架の影がなぜか虚しく見えた。

第2話：姉妹の過去

ナオ
「う……うぅん……」

ナオが目を開けて見た先には、白く塗られた天上があった。　どうやら、ここは病院の一室――しかも個室のようだ。

ナオ
「あれ？……あたし……」

そう言って身体を起こすと、

？？？
「あ、やっと気がついた」

という声が聞こえた。

ナオが顔を向けると、そこには自分と同じオーシャンブルーの髪の女性が椅子に座っていた。

ナオ
「ああ…リマ姉……」

リマ姉……つまり、ナオの姉のリマがそこにいたのだ。　しかも顔を歪ませて……。

リマ
「『ああ…』じゃないでしょ！」

リマの怒声が病室に響いた。

その声にナオの身体がびくんと反応した。

リマ

「あれだけ無駄に魔力を使っちゃダメって言ったのに使っちゃって……さっきフェイト執務官から聞かれたわよ、『妹さんはどうしてそんなに魔法ランクが高いんですか？』ってね」

ナオ

「あ……」

リマ

「『あ……』って、まさか……忘れてたとかって言わないわよね？」

顔を顰めてナオをじぃーっと見つめるリマ。

ナオ

「えっと…その……」

ナオは目をキョロキョロさせている。

リマ

「ハァ～……」

ナオの様子から察したリマは、顔に手を当て溜め息を吐く。

リマ

「それと、会場で戦ったフードの人……そのことについても聞かれ

たわ」

ナオ
「……」

黙ってリマの話を聞くナオ。

リマ
「ナオもバトル好きのところがちょっとあるみたいだけど、それで周りが見えなくなったらおしまいよ」

ナオ
「ごめん……リマ姉…」

リマ
「今回はごめんで済む程度で済んだけど、私たちがやってきたことが無駄になっちゃうかもしれないんだから、気をつけてよね」

ナオ
「……（コクッ）」

ナオは小さく頷いた。

リマ
「……というわけで、どうぞ」

ナオ
「??」

リマの声で病室の戸が開いた。

開いた戸の前にはフェイト、その隣にはティアナが立っていた。

ナオ
「フェ、フェイト執務官……ティアナ執務官……」

フェイト
「決勝戦、見させてもらったよ。　なかなかの腕前でちょっとびっくりしたけど」

ナオ
「あ…ありがとうございます」

フェイト
「それでね、私たちがここに来た理由（わけ）はわかるよね？」

ナオは小さく頷いた。

フェイト
「1つはナオの魔法ランクについて、もうひとつは会場に現れたフードの人物について……」

ナオ
「……」

ティアナ
「お姉さんの方からある程度聞いたんだけど、貴女からも話を聞かなきゃいけないから」

フェイト

「無理に話してとは言わない。　けど、他にも気になってることがあるから早めに話してもらえるとうれしいかな」

ナオ
「……」

ナオはリマの顔を見た。

リマ
「ナオ……2人にだったら話しても大丈夫だよ。　いつかこうやって話すときは来るってわかってたから……」

ナオ
「リマ姉……ッ」

ナオは意を決したのか、口を動かした。

ナオ
「魔導師ランクについては、あた……私が記載しないでってリマ姉に頼んだんです。　私……あまり難航するような仕事に就きたくなかったので」

フェイト
「それは何故ですか？」

ナオはグッと唇を噛み、少し間を置いてから話しだした。

ナオ
「ある事件の調査がしたかったんです」

フェイト
「それは、ご両親のことについて、ですよね？」

ナオはコクリと頷いた。

ナオ
「私たち……小さい頃に両親が誰かに襲われて母が瀕死の重傷を、父は身体を鋭利なもので滅多刺しにされて焼死体として発見されました」

リマとフェイトは俯き、ティアナは顔色が少し悪くなっていた。

ナオ
「母は私とリマ姉が当時覚えたてだった治癒魔法がうまくいったおかげで一命を取り留め意識も回復しました。　ですが、その事件のせいで母の魔導師の地位はを降格させられ、違う世界へ左遷されました。

私たち姉妹も母に付き添うような形でその世界に渡りました。　そしてその世界に来たとき、初めて父と母が担当していた事件のことを聞かされました」

リマ
「それが、先程お話しした謎の生物…父と母は“ホロウ”と呼んでいて、その事件を『ホロウ事件』と呼んでました」

と、ナオの間にリマが割って話してきた。

ティアナ
「……」

フェイト
「……」

フェイトとティアナは少し顔を歪ませたが、リマは気にせず話を続けた。

リマ
「父と母は色々な世界の生物の調査を行っていました。　その中で気になったと思っていたのが、『妖精』…『副葬処女』…『精霊』…『天人』…『ヴァルキュリア』そして…『ホロウ』……」

ナオ
「そのことから『ホロウ』の調査を任され、一段落ついて家に帰ってきたときに……父と……母が……」

ナオはそれ以上言葉には出せなかった。　その先を言おうとするだけで涙があふれてくる。

リマ
「そのとき、ナオがフードを被った人物が母の懐から何かを抜き取るのを見たっていうんです。　それが……」

フェイト
「会場にいたフードの人に似ていた……と」

リマ
「さっき見せてもらった映像だけだとそう判断はできないと私は思いましたが、ナオはそうは考えていなかったみたいで」

ティアナ
「先走りしてあんなことをしてしまったと……」

リマ
「おそらく……」

ナオ
「……」

ナオが何も言わないところから見て、ティアナの言う通りなのだろう――そこで2人の話は終わった。

フェイト
「それでは、今回の件についてはこちら側で行いますので……」

と言って病室を出ようとした。

ナオ
「フェイト執務官ッ」

フェイト
「……何ですか？」

ナオ
「あの……やっぱりなんでもないです。すいません、引き止めてしまって」

フェイト
「……別に大丈夫だよ。それじゃ、身体に気をつけてね」

ナオ
「はい……」

そしてフェイトとティアナは病室を出た。

病室にはナオとリマの2人だけしかいない。

リマ
「ナオ……」

低い声で妹の名前を呼ぶ。

ナオ
「リマ姉……ごめんね……」

ナオは今にも泣きそうな目をしていた。

リマ
「いいのよ、いつかはこうなるってわかってたから」

リマがそう言うと、ナオの目に溜まっていた涙が一瞬にしてあふれ出てきた。

ナオ
「う……うぁ……うあああああっ……っ！」

ナオがリマにしがみつき泣いた。

リマもギュッとナオを抱き締めた。

リマ
「そう……いつかはこうなるって……わかってた……から……」
リマの瞳からはいつのまにか涙があふれていた。

それからしばらくの間、病室の中は2人の泣き声だけが響いていた。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

フェイト
「……気になるね」

ティアナ
「はい？」

フェイト
「2人の話を聞いててちょっと気になったことがあるの」

ティアナ
「気になる……というと？」

フェイト
「うん、それは向こうである人から話を聞いてから話すから」

ティアナ
「は、はぁ……」

そして2人はとある場所へ向かった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

―　某室　―

コンコン

???

「はい、どうぞ」

ガチャッとドアを開けて入ってきたのはフェイトとティアナであった。

そこには、椅子に腰を掛けている男性がいた。

フェイト

「フェイト・T・ハラオウン執務官です」

ティアナ

「ティアナ・ランスター執務官です」

2人は自己紹介をし、敬礼した

???

「そんなに畏まらなくてもいいですよ。　俺は管理局の人間じゃないですし」

ティアナ

「ですが……っ」

フェイト

「言われてみればそうですね」

ティアナ
「フェイト執務官ッ！」

フェイト
「ティアナ……」

フェイトがそれ以上言うな、という目でティアナを見る。

ティアナ
「……わかりました」

少し納得がいかない顔をするティアナを余所に、フェイトが話を進める。

フェイト
「今日、貴方に来ていただいたのは……」

？？？
「例の格闘大会の決勝戦のことについて、だよね？」

フェイト
「さすがですね……」

？？？
「これでも情報収集は早いもので」

男は少し自慢げに言った。

フェイト
「単刀直入にお聞きします」

？？？
「……」

フェイト
「今回の出来事に貴方が関連しているんですか？……青い死神さん」

青い死神…本名、秋本優太――数年前に『戦艦ハルバード事件』を引き起こした張本人で、先の戦では自分たちに力を貸してくれた人物である。　今はどこかに住んでいるらしいが、どこなのかは不明である。

優太
「久しぶりだな……最近その名前を使うことがないから、何か懐かしい感じがするよ」

ティアナ
「フェイトさんの質問に答えてください！」

バンッと会議室の机を叩いて怒鳴るティアナ。

優太
「まあまあ、そんなに怒らなくても」

ティアナ
「だったら早く答えてください」

と優太への回答を促すティアナ。

優太
「確か……公開された映像に映し出されていたのは、フードを被った人物だったね？」

ウンウンと2人は頷く。

優太
「しかし、顔は見えていない……」

再び2人は頷く。

優太
「その人物が男か女かだなんて普通は判断できるわけがない。それで私を疑うのはどうかと思うが？」

フェイト
「確かにその通りです。　ですが……！」

優太
「少しでも情報がほしい…と」

フェイトは静かに頷いた。

優太はフゥ～…と溜め息を吐いた。

優太
「確かに、それに関する情報がないという訳ではないけど……」

ティアナ
「だったら早く教えてください！」

優太
「そんなに焦らなくてもちゃんと教えるよ。　ただ……」

フェイト
「ただ……何ですか？」

優太
「あのストワール姉妹の事情は知ってるね？」

フェイト
「はい、彼女たちから聞きましたから」

優太
「この情報は、たぶんそれにちょっと関係があると思うんだけど、いいかな？」

2人は驚いた顔をしたが、フェイトはすぐにいつもの顔に戻った。

フェイト
「それは、話の内容にもよります」

優太
「……ま、そうだね」

と言うと、少し間を置いた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

優太
「つい最近、ある機関で人体についての研究が行われていて、その研究の課題が

――――『人間の身体の中に秘めている未知なる力を見出だすこと』
――――

というものらしい。　そして、その調査をすることになったのが…『時空管理局』…っていうことだ。　本局の人間は、いろんな空間を行き来することができるからな、それに目を付けたらしい。実際に実験等を行う場所とかまではまだわかっていないな。　ただ、調査対象となった主な地域っていうのが、『ガリア公国』…『メニス帝国』…『洛芦和高校』……らしい。　他にもいくつかありそうだが、それは上に問い質せば白状するはずだ」

フェイト
「それは……確かなんですか？」

優太
「ああ……絢から聞いた情報だから間違いない。　こっちでも裏は押さえたし、こっちから上に掛け合ってもいいくらいだ」

フェイト
「そうですか……」

優太
「……それで、これからどうするつもりだ？」

フェイト
「……上層部に確認をとり、その後その場所に調査にいこうと思ってます」

優太

「そう……」

優太はハァ～…と溜め息を吐き、フェイトを見る。

優太
「今回はあまり俺も干渉しないけど……無茶だけはしないほうがいいぞ」

フェイト
「はい……」

「ご協力感謝します」と言うと、フェイトはドアに向かって歩きだした。　ティアナもそれに続くようにして慌ててフェイトのあとをついていった。

フェイトが「それでは……」と言ってティアナとともに部屋を出ていった。

フェイトが出た後、再びハァ～…と溜め息を吐いた。

優太
「まったく……彼女も少し無茶するところあるからなぁ……」

そう言うと椅子から立ち上がった。

優太
「こっちでも少し調べといたほうがいいかな……」

そう言って、優太も部屋を出ていった。

第3話：出発点（前書き）

※今回から新コーナー、スタートです！　新コーナーは最後のページに掲載しているので、最後まで読んでいただけるとうれしいです。
それでは、本編の方をどうぞ……。

第3話：出発点

その後、フェイトが優太が絢から聞いた情報を上層部に問い質したが、なかなか話してくれず途方に暮れていたところ、裏で彼の根回しがあったのかはわからないが、ようやく白状した。

当時、“戦闘機人”の実験を行うなか、生体実験を専門とする機関から調査を依頼されたらしい。詳しいことまでは聞いていないと言うが、それは定かではない。

ただ、調査対象となっていた地域が他にもあったらしく、名前は“第97管理外世界”……つまり、“地球”であるという。しかも、地球での調査地域を聞くと、一護のいる『空座町』…銀時のいる『大江戸』……そして、なのはの出身の『海鳴市』も含まれていたらしく、話をあわせると最低でも5ヶ所はあったのだ。

他にもあるらしいのだが、そこの世界にいるのが、女の子として存在する『三国志』の英雄ということしかわかっていない。

フェイト
「ハァ……」

ティアナ
「大丈夫ですか？」

フェイト
「うん……大丈夫……それより、もう皆集まってるかな」

ティアナ
「はい……ただ」

ティアナの顔色が少し曇った。

フェイト
「何かあったの？」

ティアナ
「集まるには集まったんですけど……人選がちょっと」

フェイト
「？？」

フェイトは首を傾げる。

ティアナ
「入れば分かります」

そして、２人はある部屋の前で止まった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

――　某室　――

コンコン

ティアナ
「失礼しま……」

銀時

「なんでこんなやつと一緒に行動しなくちゃいけないわけ？　もっとましな人材いなかったの？　あーだるい、マジでだるいんですけどー」

ナオ
「なんで貴方にそんなこと言われなくちゃいけないんですかッ。女性を大切にしろってお母さんに言われませんでしたかッ」

銀時
「やっかましーんだよ。　てめーみたいなガキこそとっととお家に帰って布団の中でガタガタ震えながら『お母さん怖いよ～…』って言ってればいいんだ、コノヤロー」

ナオ
「ひどいっ！　それが女性に大して言うことですかッ！！」

銀時
「女とか男とか関係ねーんだよ。　要はてめーのそのカチンコチンに堅い頭を少しは直せってことだよ」

ナオ
「今の話のどこにそんな話があったんですか！」

フ・ティ
「……」

部屋に入った途端、銀時とナオの口喧嘩を目の当たりにした2人は茫然としていた。

ヴィヴィオ

「あ、フェイトママ！」

フェイトに気付いたヴィヴィオが近くにまで寄ってきた。

フェイト
「えーと…ヴィヴィオ、これはいったい……」

ヴィヴィオ
「実はね……」

ヴィヴィオの話によると、どうやら銀時が『そんな歳にもなってそんだけのボリュームしかないっていうのは、なんか虚しーな』という一言からここまでの大喧嘩になったらしい。

ティアナ
「2人とも、喧嘩はやめてください」

と、ティアナが制止を呼び掛けるが……

銀時
「ワーワー！」

ナオ
「ギャーギャー！」

と騒いで一向にやめようとしない。

そこで、ティアナが2人の間に割って入った。

ティアナ

「やめてくだ……！」

銀時
「だあーーーっ！」

バシッ

ティアナ
「キャッ！」

ナオ
「はあーーーっ！」

ベシッ

ティアナ
「ふみゅっ！」

銀時
「せいやあぁぁあぁ！！」

バシンッ

ティアナ
「ぐふっ！」

ナオ
「とりゃあぁあぁあ！！」

ドカッ

ティアナ
「ぴぎぃ……」

……

……などという具合で、ティアナは2人に殴られ叩かれまくって、その場に倒れた。

フェイト
「ティアナ、大丈夫っ？」

ヴィヴィオ
「ティアナさん、しっかり！」

と2人の呼び掛けにピクンッと反応したあと、ティアナが起き上がった。　しかし、ティアナの目はいつもとは違っていた。

ティアナ
「……」

フェイト
「ティ…ティア……ナ？」

ティアナの様子に気付いたフェイトが止めようとして手を触れようとした瞬間！

ティアナの目が……さらに異様なものになった。

フェイト

「!?　ティアナ!?」

と呼び掛けるフェイトの言葉はティアナの耳には届いておらず、ティアナはデバイスを構え2人に向けた。

ティアナ
「いい加減に……しろーーーっ!!」

銀時・ナオ
「ギャーーーーーッ!!!!」

チュドーン…

ティアナの連続射撃の餌食となった2人がそこにはいた……。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

銀時とナオが黒焦げになり、フェイトがティアナの説教を終えた後、フェイトは知っていることをすべて話した。

ちなみに、室内に集められたのは、一護・恋次・冬獅郎、銀時・カービィ・チンク、ヴィヴィオ・雅也・皐月、そして、ナオとリマの姉妹である。

一護
「ってことは、今度は俺たちのとこが危ないっていうのか?」

フェイト
「話の内容からすると…おそらく……」

恋次

「なんてこった……」

冬獅郎
「……阿散井、俺はこのことを総隊長に伝えに一旦戻る。その間は……」

恋次
「こいつと協力しろ……ってことっすね」

冬獅郎
「そうだ……」

銀時
「ったく、んなめんどーなことに巻き込まれるだなんて聞いてねーぞ」

カービィ
「あの……なんで僕も数に入ってるんですか？」

フェイト
「カービィの能力はかなり役に立つと思って」

皐月
「ま、カービィとヴィヴィオがいれば私は満足だけど」

と言って2人に抱きつく皐月。

雅也

「フェイトさんの頼みとあれば……な？」

メアリー
「はい……」

フェイト
「ありがと……」

チンク
「自分も参加しなくてはいけないのか？」

ティアナ
「まぁ…成り行き上そうなっちゃったみたい」

チンク
「……妹たちに何て言えばいいことか」

ティアナ
「あはは……」

ナオ
「リマ姉……」

リマ
「……何？」

ナオ
「これで、いいのかな？」

リマ
「……どうかな。　今はまだわかんない」

ナオ
「そう……だよね……」

リマ
「だけど……これだけは言えるよ」

ナオ
「？？」

リマ
「私たちは、今ようやくスタートラインに立ったんだって」

ナオ
「……そうだね」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

後日、フェイトたちはそれぞれの場所を調査するため旅立った。

そんななか、１人の人物が様子を伺っていた。

？？？

「ここからだ……すべてはここから始まる……」

そう言ってその人物はその場を後にした。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ヴィヴィオ
「新コーナー、後書き呼び出しコーナー！」

一同
「わーーーー！！」

雅也
「このコーナー、他作品のコーナーと被っている気が……」

皐月
「という疑問は置いといて、さっそくこのコーナーの説明に入りまーす♪」

ヴィヴィオ
「このコーナーは『他の作品のキャラを勝手に借りちゃえ！』っていうものです」

雅也
「こんなのってあるのか……作者、こんなのってあるのかよーっ！」

作者
「あると思いますっ！」

皐月
「……そのネタがやりたかったのね」

雅也
「でもさ、他の作品からキャラを借りるんだったら、その作者から

の許可をもらったほうがいいぞ」

作者
「それはそうだけど……どの作品のキャラが出るのかっていうのも楽しみの1つに入れたほうがいいかなぁ～…って」

雅也
「それで今回借りてきたのが……」

チラリ……

雅也
「あの人、なんですか？」

作者
「なんか、使いやすくてね」

皐月
「そういう理由？」

ヴィヴィオ
「と、とにかく！　メアリーちゃん、紹介よろしくね！」

メアリー
「やっと出番が回ってきたな。　それでは新コーナー最初の呼び出しキャラは……」

ジャカジャカ……

ジャン！

メアリー
「魔法少女リリカルヴィヴィオから、通称…キング・オブ・ヘタレの名を持つ……不死身の男、カーナーンーーー！」

ワァァァー！

カナン
「って、なんでこんな紹介のされ方なんだっ！」

雅也
「すまんなカナン君、うちの作者が勝手に呼んじゃって」

ヴィヴィオ
「ヨシュアさん、勝手にカナン君をお借りしてスミマセン」

ペコリ

カナン
「いや、雅也さんたちが悪いわけじゃないから気にしてないよ」

雅也
「そうか……」

？？？
「だったら……」
？？？
「あたしたちの持て成しを受け取ってぇ～～～！！」

ドカッ！
バキッ！
メリッ！
バリバリッ！
キキキキィ～～～！
ドンヤ～～～♪
ジィストーーーッ♪
ジャスタウェイ！！
アウ、アウ！
ガブッ！
ディバイン…バスター…！
スターライト…ブレイカー…！
月牙…天衝！
散れ…千本桜……
空気砲ー！
ドカーン！

カナン
「ぎゃあああああああああ！！！！」

ズザザザー……

雅也
「うっわぁ……」

皐月
「派手にやっちゃったわね～…」

ヴィヴィオ
「今回は、ストワール姉妹にも参加してもらいます」

ナオ・リマ
「よろしく～♪」

メアリー
「いろいろなものが混ざっていたが、いいのか」

作者
「ま、別にいいでしょ。　というわけで、今回はおしま……」

カナン
「待て待て待て待て待て～～～～！！！！」

雅也
「復帰早いな……」

リマ
「さすが、不死身の男ね。　尊敬しちゃう～」

カナン
「そんなとこで尊敬されてもうれしくないから……逆に悲しくなるから」

ナオ
「それじゃあ……ヘタレ？」

カナン
「……しくしく」

ポン…

雅也
「カナン君……負けるなよ」

カナン
「はい……もう慣れたので平気です」

ヴィヴィオ
「えーっとね、今回は質問が来てるんだよ。『新キャラの姉妹の声優さんは誰なんですか？』だって」

銀八先生
「はい、ズバリお答えします。今のところまだ決まってません。ていうか、細かい設定なんかもまだ決めてないのに声優の人を決めることなんか無理だっつーの」

雅也
「いきなり出てきてそれーっ！　ていうか、あなたこのコーナーに出る予定ないから。今ので読む人明らかに少なくなるからっ！」

銀八先生
「んなもん知るか。　というわけで質問を送ってきた人、楽しみに待ちながら廊下に立ってなさい」

皐月
「絶対にコーナーの趣旨間違ってるから！　さっさと戻りな…さいっ！」

ギューギュー…

…しばらくお待ちください

……

メアリー
「ようやく戻ったな」

雅也
「ああ……」

ナオ
「あたし、あの人苦手……」

リマ
「まあまあ、そう言わずに……ね？」

カナン
「もしかして、俺の出番ってこれだけ？」

雅也
「いや、もう1つサプライズがあるらしい」

カナン
「な、なんだよそれ……」

皐月
「まだ考察中なんだけど、勝手に作っちゃったみたい」

カナン
「……誰が？」

雅也・皐月
「「作者が」」

カナン
「何を？」

雅也・皐月
「「カナン君の……妹さんを……」」

カナン
「……はい？」

？？？
「「おにーーちゃーん！」」

カナン
「だ、誰だっ、おまえら！？」

？？？
「初めまして、お兄ちゃんの妹の“風間美智江”です」
？？？
「もう1人の妹“風間遊佳（ゆか）”です」

カナン
「こんなサプライズ、いらんわーーー！！」

作者
「ちなみに、彼女たちはこっちでのクロスをやるときに出そうかなって考えてるキャラです」

カナン
「こんなのでクロスしたくねーよ！」

作者
「ヨシュアさん、ぜひご検討を！！」

カナン
「しなくてもいい、ていうかしないでくれーーー！！」

美智江・遊佳
「「お兄ちゃん♪」」

カナン
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

バタ……

雅也
「カナン君っ！」

美智江・遊佳
「「お兄ちゃんっ！！」」

作者
「あ～…やっぱり刺激が強すぎたかな」

皐月
「刺激が強いとかが問題じゃなくて…」

メアリー
「妹を作るという方に問題があるかと…」

作者
「そうかな？」

ヴィヴィオ
「と、ということでっ、今回の後書き呼び出しコーナーでしたっ！」

ナオ・リマ
「次回もよろしくね♪」

※誠に勝手なことをして申し訳ありません！

ですが……ですが、どうかご検討の余地を……！

皆さんからのお便り、待ってまーす……。

第４話：最初の世界……（前書き）

※更新が遅くなってスミマセン。

第4話：最初の世界……

皐月
「さーて、はじまりました今回の前書きコーナー！」

一同
「ワァーーー！！」

ヴィヴィオ
「皆さん、今回も読んでいただき、本当にありがとうございます」

雅也
「ていうか、これに前書きコーナーってあったっけ？」

皐月
「今回からはじめたらしいわよ。　なんでも、某小説の影響が大きいんじゃない」

メアリー
「内容は質問に答えるというものか。　前書きで質問に答えるとして……質問は届いているのか？」

雅也
「あ、だったらこの前の質問――『新キャラ2人にCVをつけるとしたら誰にしますか？』……これに答えたらいいんじゃねえか？」

ヴィヴィオ
「あ、それにいいね」

サッ

ヴィヴィオ
「え～と、作者さんが考えたＣＶは、こんな感じになったんだって」

ナオ・ストワール：
豊口　めぐみ

リマ・ストワール：
柚木　涼香

※他に似合いそうな声優さんがいたらお便りください。

雅也
「え～と……こんな感じでいいのか？」

皐月
「どうだろうねえ……」

メアリー
「どうなんでしょうか……」

ヴィヴィオ
「どうなのかな～……」

雅也
「おいおい……誰も答えになってないって」

皐月
「でもねぇ……何も言えないと思うけど」

ヴィヴィオ
「うん」

メアリー
「まぁ……そうだな」

雅也
「そ、それはそうだけど……」

皐月
「それじゃ、本編に移るわよ！」

ヴィヴィオ
「では、どうぞ♪」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

【前回までのあらすじ】

管理局が行っていた調査によって起きようとしている事態を究明すべく、フェイトたちが調査が行われていた世界へとむかった。

はてさて――これからどうなることやら……。

……。

……。

…。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？

「はぁ……はぁ……」

ヒトの頭蓋骨のホネをかぶった少女が息を切らしながら何かから逃げていた。

その何かとは、少女の後ろから追い掛けてくる怪物の顔の仮面をつけた男であった。

？？？

「はぁ……はぁ……んっ……く……」

？？？

「……いつまでも逃げているだけか？」

？？？

「はぁ……はぁ……」

少女は睨みつけるようにして男を見る。

？？？

「そうか……なら、ここで終わらせてもらおうか」

男が刀を取り出し少女に向ける。

？？？

「――――壊せ……舞爪」

？？？

「――――っ！！！！」

少女が危険だと思い、男から離れようとした瞬間にそれは起こった。

ザシュ！！

？？？

「うっ！！」

少女は呻いたかと思うとその場に倒れた。　身体を鋭利な刃物で斬られてしまったのだ。

？？？

「――――おまえが悪いんだぞ……俺の言うことを聞かないから……」

？？？

「うぅ……かはっ……」

少女は身体を起こそうとするが、腕がガタガタ震えて力が出ないで立てないでいる。

しかも、口からは血を吐いていて、切り口からも血がドクドクと流れていた。

？？？

「……そこで死をひたすら待っていることだな」

少女が死ぬと判断した男はその場から姿を消した。

？？？
「う……うぅ……うぅぅ……」

誰もいない……来ない場所で、少女は必死に助けを求める声をあげていた……。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

―空座町（からくら）町―

一護
「つーか、なんで最初が俺たちのいるとこなんだよ」

恋次
「俺が知るわけねえだろ」

銀時
「てめーらのとこがいまんとこ危ないってことじゃねえの」

一護
「そ、そうなのか！？」

ティアナ
「いえいえ、まだ危ないと決まったわけじゃないですから」

フェイト
「まぁ、この町のことを調査することも含まれてるけど」

チンク
「要するに、あの冬獅郎というやつが来るのを待っている間に調査を行うというわけだな」

フェイト
「そうだよ」

ナオ
「……あれ？」

リマ
「どうしたの、ナオ？」

ナオ
「あのね……カービィの姿が見えないんだけど」

ヴィヴィオ
「そういえば……」

メアリー
「ここに来てからは見てないが」

皐月
「ま、雅也もいないわよっ」

フェイト
「もしかして……迷子？」

……。

……。

…。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カービィ
「あれぇ～？」

雅也
「もしかして……迷子なのか？」

2人は転送された際の誤作動なのか、みんなとは違う場所に飛ばされてしまったようだ。

カービィ
「え～と……みんなどこにいったのかなぁ？」

雅也
「どこだろーな……ちょっと訊いてみるよ」

そう言って雅也は、念話で連絡を取ってみることにした。

雅也
（皐月……ヴィヴィオ……聞こえるか……）

皐月
（雅也っ！？）

ヴィヴィオ
（雅也くん、今どこにいるの！？）

雅也
（いや……どこって言われてもどこだかわからないから訊いてるんだけど……）

フェイト
（……雅也…）

雅也
（ふぇ、フェイトさん……なんでそんな怒ったような感じなんですか？）

フェイト
（雅也が違う場所に転移されたからだよ）

雅也
（そ、そんなぁ～……俺が悪いわけじゃ……）

フェイト
（言い訳無用だよ）

雅也
（あぅ……）

フェイト
（……それで、今どんなのが見えてる？）

雅也
（えぇーと……普通に住宅が建ち並んでいて……それから……）

そこで雅也はあるものを見つけた。

雅也
（……）

フェイト
（どうしたの？）

雅也
（い、いま……目の前に人が……倒れてるんですけど）

フェイト
（えっ！？）

雅也
（とにかく、いま確認しますから一旦切ります）

皐月
（ちょっと待ちなさ……）

ブツッ

雅也は強制的に念話を切った。

雅也
「ふぅ……それじゃカービィ、行こう……か？」

カービィ
「Ｚｚｚ……ムニャムニャ……」

雅也
「寝っちゃったのか……」

雅也はいつのまにか寝てしまったカービィを抱えた。

雅也
「でも、今のこの中でどうやったら寝れるんだろ……」

そんなことを呟きながら倒れている人のもとへと急いでいった。

雅也
「こ、これは……！」

――近づいてわかったのだが、そこにいたのは、うつ伏せ状態で動かず、辺りには血をたくさん流していて、しかも小さい少女であった。

雅也
「きみ……大丈夫、きみ……！」

？？？
「……う……うぅ……」
まだ息はある……。
雅也
「きみ……きみ……！！」
……。
……。
…。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
雅也
「……」
フェイト
「……」
皐月
「……」
メアリー
「……」
ヴィヴィオ

「えーと……」

ティアナ
「ヴィヴィオ、ここは黙ってたほうがいいわよ」

チンク
「そうだな……」

ヴィヴィオ
「は、はい……」

フェイト
「雅也……これはどういうことかな？」

雅也
「い、いや……その……」

今、雅也は皐月たちと合流し、そのままフェイトに問い詰められている――もちろん、雅也が倒れた少女に治癒魔法をかけていたということもあるのだが……。

雅也の横では、カービィがスヤスヤと眠っていた。

フェイト
「こんなにかわいい子を……まさか、雅也が…」

雅也
「なんで俺が見ず知らずの少女を襲う必要があるんですか！」

フェイト

「それは……」

雅也
「それは？」

フェイト
「なんとなく……かな？」

雅也
「な、なんとなくって……そんなこと言わないでくださいよ」

フェイト
「でも……ねぇ……」

フェイトは少女を見た。

フェイト
「こんなかわいい子が襲われるなんて……」

ナオ
（フェイト執務官って、もしかして……ロリコン？）

リマ
（ナオ、それ以上言ったらフェイト執務官に何されるかわからないわよ）

ナオ
（そ、そうだね）

本局では名の知れている、別名・『金の閃光』と呼ばれ、『白き悪

魔』とも呼ばれる、高町なのはの親友の彼女――フェイト・T・ハラオウンにこのことが知られたら何をされるかわからないからである。

ティアナ
「フェイトさん、この子、今回の調査に関係してるんじゃ……」

フェイト
「どうだろ……もう少し調べてみないとわからないかな」

チンク
「……」

ティアナ
「どうしたのよ、そんな考え込むような顔をしちゃって」

チンク
「黒崎一護……この少女の格好を見てどう思う？」

一護
「こいつの格好を見てか？」

一護は少女をじっくりと見た。

頭蓋骨のホネをかぶった少女――そういえば、ホネをかぶってるということに関しては、ネルに似ているような気がする。

一護

「こいつ……破面（アランカル）か？」

アランカル――悪霊・虚（ホロウ）が仮面を外して死神の宝を手に入れた上位種である。

恋次
「このちっこいやつがか？」

一護
「見た目で判断しないほうがいいと思うぜ」

恋次
「あ？　なんでだよ？」

一護
「他にもいたろ、ちっこいのに破面のやつが」

恋次
「あぁ～……いたなそういうやつ」

一護
「ま、事情はこいつが目を覚ましてから聞こうぜ」

ちなみに、今彼らがいるのは『浦原商店』だった。ホロウのような少女の治療のためにやってきたのだ。

？？？

「……で、今回はどんな用で？」

一護たちの前に浦原喜助がやってきた。

一護
「浦原さん、実は……」

一護は一通り話した。

浦原
「そうですか……ま、だいたいのことは彼から聞きましたからある程度の情報は仕入れてますよ」

一護
「彼っていうと？」

浦原
「青い死神さんですよ……こちらのことについての情報がほしいとかで」

一護
「そ、そっか……」

浦原
「それであなた方が魔法使いっすか……」

フェイト
「そうですけど……」

浦原
「いや～彼から話は聞きましたけど、なかなかかわいい子がいます

ねえ～」

ナオ
「か、かわいいだなんてそんな……」

リマ
「なんか……恥ずかしいじゃないですか…」

雅也
「えーと……それで彼女は大丈夫ですか？」

雅也が恥ずかしがる2人を無視して浦原に尋ねた。

浦原
「傷はかなり深かったみたいですけど、あなたが少し塞いでくれたおかげでなんとかなるみたいっすね」

雅也
「そうですか……」

浦原
「彼女……黒崎さんが察するとおり、アランカルっすね。それもかなりの使い手みたいっすよ」

ティアナ
「そんな人があんなになったということは……」

浦原
「ものすごく強いってことっすね」

ヴィヴィオ
「でも、どうしてこんなことになったのかな？」

チンク
「これはあくまでわたしの推測にすぎないが、仲間同士でもめ事が起きた。　それが原因で仲間のもとからいなくなりその仲間から攻撃を受けた……」

浦原
「まぁ、たしかに推測にしかすぎませんが、その可能性はあると思いますよ。　その前に、なぜ霊力以外の治癒能力で回復したんでしょう……？」

一護
「そういや何でだ？」

浦原
「これはわたしの推測ですが……彼女――今のアランカルは霊圧とは違う特殊な能力……魔法に適応しているんじゃないっすか」

恋次
「どうしてそうなったんですか？」

浦原
「それは……それこそ彼女に聞いたほうがいいみたいですね」

カービィ

「Ｚｚｚ……はっ！！」

寝ていたカービィが突然目を覚ました。

雅也
「うおっ！？　ど、どうしたんだ？」

カービィ
「今、魔獣の気配がした……！」

フェイト
「でも、この町に魔獣なんて……」

浦原
「そういえば最近、岩の柱のような格好をしたものがいるっていうのを聞きましたよ」

一護
「浦原さん、それってどこなんだ？」

浦原
「たしか……河原だったと思いますよ」

カービィ
「僕……行ってくる！」

カービィは勢い良く飛び出していった。

皐月
「あ、待ちなさい！」

一護
「2人とも勝手に行くんじゃねえ！」

カービィのあとを皐月、一護の順に追い掛ける。

銀時
「……俺、いてもいいか？」

チンク
「わたしも行くから貴様も来い」

ズルズルズル……

チンクに引きずられて銀時も後を追った。

ヴィヴィオ
「みんな、大丈夫かな……」

ヴィヴィオが心配そうに外を見ていた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

―　河原　―

カービィ
「ここかな～？」

皐月
「どこなの～？」

一護
「こんなとこにいるわけ……」

???
「ウォォォーーー……」

カービィ
「ひゃ……！」

皐月
「な、なによ……今の？」

カービィ
「もしかして……あれ？」

河原の近くに、岩の柱がそびえ立っていた。

皐月
「たしかに、岩の柱よね……」

銀時
「つーか、こんな柱があること事態不思議だっつーの」

チンク
「……この柱、生命反応があるな」

皐月
「それじゃあ……！」

ゴゴゴゴ……！

突然、地面が揺れだした。

？？？

「フッフッフッ……ついに来たな、カービィ……」

カービィ

「どうして僕の名前を……？　おまえはいったい何者だ！？」

？？？

「我(われ)か……我は『ギガント・ゴーレム』……貴様を倒すために送られた魔獣だ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カービィ

「僕を……なんで……？」

ギガント・ゴーレム

「貴様のような我ら魔獣にとって有害な者は排除しろという命令でな……」

カービィ
「そ、そんな……」

皐月
「ちょっと待ちなさい、今命令って言ったわよね……だったらあなたに指示した人がいるってことよね……」

チンク
「誰なのかは教えてもらえる……わけがないか」

ギガント・ゴーレム
「そういうことだ……」

ゴゴゴゴ……

ギガント・ゴーレム
「さぁ……我の岩の力を思い知るがいい……」

銀時
「うりゃあぁぁあぁぁあぁぁあ！！」

バキャ！！

ギガント・ゴーレム
「げぼっ！」

カービィ・皐月
「「なっ……！！」」

2人は銀時が飛び蹴りであっさりと蹴ったことに驚いていた。

銀時
「てめぇーの話はなげーんだよ。　説明ならさっさと早く終わらせろっつーの」

チンク
「……貴様、なぜ先に攻撃した？」

銀時
「だから今言ったろ？　話が長すぎるってよ、俺はなグダグダ言ってるやつは嫌いなんだよ。　そんなやつに足蹴りして何が悪いんだ？」

チンクは溜め息を吐いた。

チンク
「少しは状況というものを考えて行動したらどうなんだ。　そんなことでは聞けるものも聞けなくなってしまうではないか」

銀時
「本人が話したくないって言ってんだからよ～～話したくなるまでボッコボコにしちまえばいいんじゃね？」

銀時は木刀を握った。

皐月
「あ、それいいわね」

皐月はデバイス・マリーを杖状にして構えた。

チンク
「まぁ、今回だけは大目に見てくれるだろう」

チンクは投げナイフ型の「スティンガー」を取り出した。

カービィ
「え、え!?」

一護
「マジでやるのかよ……」

ギガント・ゴーレム
「おのれ～……許さん……許さんぞ……！」

こうして、戦いの火花がきっておろされたのだ……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「後書き呼び出しコーナー！！」

一同
「ワァー――――！！」

雅也
「ていうか、ほんとに勝手に呼び出すのか？」

皐月
「当然でしょ、じゃないと面白みないんだから」

ヴィヴィオ
「それで、今回は誰を呼んだの？」

皐月
「聞いて驚け……見て笑いなさい、今回のゲストは……リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　ＷｉｔＨ　から、神崎ウィズさんでーす。
　というわけで……出でよ、ウィーーーズーーー！！」

タタタタッタタ～ララ、タラ～ララタ～ラ♪

ボムッ！！

ウィズ
「どうもー……ていうかなんで登場シーンがこんな効果音にＢＧＭなの？」

メアリー
「いやなに、作者が『星のカービィＵＳＤＸ』のカービィが踊るシーンの曲が好きでつけてみただけだそうだから、あまり気にしないでほしい」

ウィズ
「そ、そうか……それで俺は何をすれば？」

サッ

カンペ
『何かおもしろいことを1つ……』

ウィズ
「おもしろいことっていわれても……」

アテナ
『それなら、相棒が全オリ主の中で1番弱い……最弱キャラだということだな』

ウィズ
「ぅおいっ！　たしかに作者も最弱だって書いてるけど……それのどこがおもしろいんだよ！」

レイラ
『その理由は……』

アテナ
『相棒の後ろにいる人物が知ってるぞ』

ウィズ
「俺の……後ろ？」

ちらり……

ウィズ
「……」

雅也
「あ、優太さん、どうしたんですか？」

優太
「本編での出番が少ないっていうことで、今回は特別にウィズくんの相手をすることになりました」

ウィズ
「無理無理っ、ぜーったいに無理だから！　自称・最強キャラを目指してる人と最弱キャラがやりあったら、結果はもう見えてるじゃないですか！」

優太
「だから、そこがおもしろいんじゃないか。　最弱キャラをフルボッコにできるってことがさ」

ウィズ
「ひどっ！？　初登場のとき（別小説参照）よりも扱いがひどくなってるんですけど？！」

優太
「まあまあ、そんなことは気にせず、さっさとあそこに入ろうか」

ウィズ
「あそこって、もしかして……あそこですか？」

『トレーニングルーム（カナン・ウィズ専用）』

ウィズ
「専用ーーーっ！！　あそこの部屋って、俺専用なのか！！」

優太
「というわけで……さっそく猛特訓しようね～……もちろん、デバイスの2人も一緒にね」

アテナ
『何っ！？　それでは話と違うじゃないですか！』

レイラ
『そうですよ、主を連れてくれば特訓はなし……という約束だったじゃないですか！』

優太
「たしかにそう言ったけど、それじゃあウィズくんが可哀想だからねぇ……甲冑なしだと耐えられないと思うし」

ウ・ア・レ
「どれだけキツい特訓をさせる気だ（なんだ）（なんですか）！！！」

優太
「まぁ……それは中に入ってからのお楽しみ……ってことで」

ガシッ！！

優太
「とりあえず……中に入ろっか？」

ズルズル……

ウィズ
「ま、雅也くん……助けてくれ……！」

アテナ・レイラ
『メアリーさん！！』

雅也
「ウィズさん……」

メアリー
「お2人とも……」

雅也・メアリー
「グッジョブ……」

ウ・ア・レ
「そ、そんな～～～！！！！」

ギィ……バタン！

……。

……。

…。

雅也

「な、中から叫び声がわずかに聞こえてくるのは気のせいか？」

メアリー
「あの中は防音対策や衝撃対策が完璧に施されているらしい」

皐月
「……2人とも、ある意味鬼ね」

メアリー
「いや……あそこで何か言えば……」

雅也
「逆にこっちがあの中に入れられそうな気がして……」

皐月
「あぁ～……」

ヴィヴィオ
「それ……何となくわかるかも」

……。

……。

……。

…。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

―　数十分後　―

雅也
「……なかなか出てこないな」

皐月
「そうね、もうここで終わらせたほうがいいんじゃない？」

サッ

カンペ
『そうしてください』

ヴィヴィオ
「えーと……というわけで、以上で今回の後書き呼び出しコーナーを終わります」

メアリー
「次回もよろしくお願いします」

ブツンッ……！

※1：というわけで、八神煌斗さん、勝手にウィズをお借りしました。　誠に申し訳ありません！

※2：小説に関する質問や感想などがありましたら、『評価／感想』から書いてお送りください。

第４話：最初の世界……（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『評価／感想』から書いてお送りください。

第5話：アランカルの企み（前書き）

※今回の本編はかなり短いです……はい。　その分、前書き・後書きを読んでいただけるとありがたいです。

第5話：アランカルの企み

雅也
「雅也と」

皐月
「皐月と」

メアリー
「メアリーと」

ヴィヴィオ
「ヴィヴィオの」

雅・皐・ヴ・メ
「「「「前書きコーナー！！」」」」

ワァーーー！！

皐月
「さて、今回もやってきました、前書きコーナー」

雅也
「なぁ、ほんとに前書きコーナーって必要なのか？」

皐月
「それはそうよ、後書きでは勝手に呼び出しちゃうんだからね」

メアリー

「だが、すでに呼び出す人はいなくなったのでは？」

皐月
「ふっふっふ……ま、それは後書きになればわかるわよ」

ヴィヴィオ
「そ、それって……もしかして……」

雅也・メアリー
「「？？？」」

皐月
「とりあえず、ひとつ質問を読みましょ。
『勝手に呼び出したりして不安に思ってることはありませんか？』
作者より」

雅也
「……」

ヴィヴィオ
「……」

皐月
「……（ムカッ）」

グシャッ！

メアリー
「さ、皐月……」

ギロッ！

皐月
「なぁーに？」

メアリー
「な、なんでも、ない……」

皐月
「それは不安に思うときはあるわよ、しかも高い割合でね～」

ヴィヴィオ
（い、いつもやさしい皐月ちゃんが……）

メアリー
（かなり怖い顔をして怒っているみたいに見える……）

雅也
（いや、あれは確実に怒ってるからな。　ああなってるときの皐月を刺激しないほうがいいぞ）

メアリー
（それはなぜだ？）

雅也
（それはな……）

エヌゼット
「♪～～～」

皐月
「……ふんっ！」

ガシッ！

エヌゼット
「え？」

皐月
「グラヴィティ・ハンド！」

ガコッ！

ズブズブズブ……

ガコンッ！

皐月
「ふっとべぇーーーっ！！」

バシンッ！

エヌゼット
「ぎゃあぁぁぁぁぁあ！！」

キラーン♪

雅也
（……ああやって“グラヴィティ系”の魔法で吹っ飛ばされるんだ）

ヴィヴィオ
（そ、そうなんだ……）

メアリー
（ということは、マスターも同じ目に……）

雅也
（あぁ……あれはひどかったよ、１日の大半は皐月の魔法を受けて過ごしたようなものだからな）

ヴィヴィオ・メアリー
（（な、なんて不幸な……））

皐月
「ふぅ、スッキリしたぁ……で、あんたたちはコソコソと念話してるの？」

雅也
「え、いやそれは……」

皐月
「ハッ！　……雅也、あんた……話したわね？」

雅也
「な、何を？（ビクビク）」

皐月
「さっきのときの私のことを……」

雅也
「は、話すわけないだろ、なぁ、ヴィヴィオ、メアリー」

ヴィヴィオ
「えっ！？　う、うん……雅也くんは何も話してないよ。皐月ちゃんが怖いときは重力系（グラヴィティ）の魔法で解消するって」

雅也
「……」

メアリー
「ヴィヴィオ……しゃべってるぞ」

ヴィヴィオ
「え……あっ！」

ボキ、ボキ

皐月
「ま～～さ～～や～～～……覚悟はいいわねぇ……？」

雅也
「あの、えぇーと……よくな……」

皐月
「問答無用！！　グラヴィティ・バスター！！」

雅也
「ぎぃあぁぁぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあ！！！！」

チュドーン！

ヒュルル……ドガシャーン！！

雅也
「な、なんで……こう、なる……ガクッ」

皐月
「フンッ、自業自得よ」

ヴィヴィオ
「あの、えぇと……それでは、本編……始まります……」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

銀時
「とりあえず……」

ギシ……

銀時
「その前歯を折らせろ」

バシン

ギガント・ゴーレム
「ウォォォ……！！」

銀時は前歯をいとも簡単に折った。

チンク

「そんな折れた歯の代わりに、これをくれてやる」

チンクはそう言うと、スティンガーを投げた。

ギガント・ゴーレム
「グォォォ……口にナイフがぁ……！」

チンク
「それだけではない」

ギガント・ゴーレム
「何っ!?」

ドーン

ギガント・ゴーレム
「ぐほぉっ!!」

チンクが投げたスティンガーは、口の中で爆発した。

なぜなら、チンクのＩＳ（インヒューレントスキル：先天固有技能）『ランブルデトネイター』によって、金属が爆発物に変化したのである。

チンク
「これくらい、なんてことないな」

ギガント・ゴーレム
「おのれ～……舐めたマネを……」

皐月
「それじゃ、ここはひとつ……」

グォン！

ギガント・ゴーレム
「な……う、動かないぞ……」

皐月
「当然よ、あんたには今、グラヴィティ・プレス……重力によって圧迫されてるんだからね」

皐月の得意とする重力による魔法……最近はかなり技に切れが出てきている。

皐月
「ま、今回はいつもの倍の重力をかけてるからね」

一護
「んな一方的でいいのかよ？」

皐月
「いいのよ、こんなやつなんてね、どうせろくな魔獣……っていうか、生き物じゃないんだから」

一護
「お、おまえな……」

皐月

「それじゃあ、止めはカービィがやってね♪」

カービィ
「えっ！？　ぼ、僕がやるの？」

皐月
「当たり前でしょ、こいつはカービィを狙ってきたんだから」

カービィ
「……わかったペポ」

皐月
（ひ、久しぶりに聞いたわ……カービィの『ペポ・ポヨ語』……）

カービィ
「……」

カービィは川の水を吸い込み、『ウォーター』をコピーした。

カービィ
「……」

ギガント・ゴーレム
「ま、まだ……まだやられるわけには……」

そう言うと、口からガレムを出してきた。

カービィ
「……」

カービィは口から大量の水を吐きだした、激流のごとく…。

ガレムはあっという間に激流に飲み込まれた。

カービィ
「……これで終わりなの？」

ギガント・ゴーレム
「ぬぅ……ま、まだまだぁーっ！」

今度は岩石を出して攻撃してきた。

カービィ
「ハァーーーーッ！！」

水が岩石を押し返し、ギガント・ゴーレムの顔面に直撃した。

ギガント・ゴーレム
「ぬぉぉぉ……っ！！」

一護
「まさに一方的じゃねえか……」

皐月

「ま、こんなときがあっても別にいいんじゃない？」

銀時
「これで読者の心をがっしりと掴んだわけだ」

チンク
「……そうだろうか？　普通はそうではないと思うが」

チンクは当然のことを言った。

銀時
「細かいことは気にするなよ」

チンク
「いや、気にしないほうがおかしいぞ」

カービィ
「……」

ギガント・ゴーレム
「く……」

カービィ
「ハァーーーッ！！」

カービィの出す大量の水が、ギガント・ゴーレムに襲い掛かる。

ギガント・ゴーレム

「グ……グォォォーーーーッ！！」

そして、ギガント・ゴーレムは川に落ち……

ドゴーン……

ギガント・ゴーレムは水の中で爆発した。

カービィ
「ふぅ～」

一護
「お……俺は？」

……。

……。

……。

…。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ティアナ
「……で、何も情報は得られなかった…と？」

チンク
「そ、それは……」

皐月
「だって……ねぇ？」

カービィ
「えっ、僕っ？！」

銀時
「そうだぞ、てめぇがやらなかったら俺たちはこうならなくてよかったんだからよ」

雅也
「あんたがそれを言いますかっ！」

メアリー
「まったくだ……」

ヴィヴィオ
「……フェイトママ」

フェイト
「ん、なぁに？」

ヴィヴィオは3人……とくに銀時を狙ってデバイス・ソフィアを向けた。

ヴィヴィオ
「……やってもいい？」

雅也
（ヴィ、ヴィヴィオ……な、なんてことを言うんだ？！）

皐月
（ひょっとして……2代目魔王、降臨？）

フェイト
「ダメだよ、そんなことしちゃ」

雅也
（そ、そうだよな……フェイトさんがそんなことさせるわけ……）

フェイト
「でも、今回はいいよ」

雅也・皐月
（（な……っ！？））

フェイト
「今回は出られなかったから、その鬱憤を晴らしてね♪」

雅也
（その一言が1番恐ろしいんですけど？！）

皐月

（そ、そんなぁ～～～～っ！！）

ヴィヴィオ
「というわけで……」

チンク
「どんなわけだ!?」

ヴィヴィオ
「3人……特に……銀さんには…たーーーっぷりとね」

銀時
「なんで、なんで俺だけ?!　2人もやったし、こいつだって……」

ヴィヴィオ
「どうせ、銀さんが強制的にさせたんでしょ?　カーくんがそんなことをするわけないもん」

銀時
「もし、もしもしてたらどうすんだよ?」

ヴィヴィオ
「それは……そのとき考えるよ」

銀時
「てきとぉーーー！　ものすごーく適当だよ、この娘さん、この『白い魔王』の娘なだけはあるよ、ほんとに」

ムカッ……

ヴィヴィオ
「……やります、銀さんだけ」

銀時
「おいーーーっ！　なんで俺だけ？　対象が俺だけになってるからーーー！！」

ヴィヴィオ
「ディバイン……バスター～～～ッ！！！！」

銀時
「ギャアアアアアアアア……！！！！」

銀時は、焦げたパンのように黒焦げになったそうな。

……。

……。

…。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　？？？　～

？？？

「……」

少女を殺したと思っている男は、ひと息ついていた。

カッ、カッ、カッ……

？？？

「……」

そこへ、物凄い剣幕で男に、ホロウの仮面を右肩につけた女性が近づく。

？？？

「……どういうことよ？」

？？？

「リアか……何のことだ？」

リア

「とぼけいでッ！　あの子を……なんで……なんで殺したのよ！」

？？？

「殺した？　……あぁ、ソナことか」

リア

「そうよ！　なんで……なんでよ！！」

？？？

「……彼女が我々に非協力的だからだ」

リア
「だからって……何も殺すことはないでしょ！」

？？？
「……これは、我々アランカルにとって重要なことなのだよ…
……空座町の占領はな。　リア……貴様もわかっているはずだ」

リア
「くっ……」

リアは口惜しい顔をして立ち去ろうとした。
そのとき男の配下のホロウが入ってきた。

？？？
「ボス、お話が……」

？？？
「何だ？」

？？？
「それが……ギガント・ゴーレムがやられました」

？？？
「……何？」

リア
（えっ……？）

？？？
「どういうことだ？」

？？？
「はっ……どうやら、未知の力と星の戦士にやられたようで……」
？？？
「星の戦士……だと？」
リア
（星の戦士っていったら、あいつが言ってた……カービィ、とかいうやつだね……）
？？？
「……で？」
？？？
「で……とは？」
？？？
「そいつらはどうした？」
？？？
「それが、今は死神代行のところにいるそうです」
？？？
「そうか……フッフッフ…」
男は不適な笑みを浮かべた。
？？？
「そいつらのところに奴ら……を行かせろ、すぐにだ」

？？？
「ハハッ！」
……。
……。
…。
リア
“……”、あんた……何を考えてるんだ？」
？？？
「……決まってるだろ……」
ガンッ！
？？？
「この“ザグランブラー”が、奴らの力を手に入れるのさ！！　そのためには奴らの犠牲だなんて……フッフッフ……ハーッハッハッ…！！」
リア
（あたしは……ソナのために何もできないっていうの……？）
リアは再び口惜しい顔をしてうつむいた。
……。

……。

…。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ソナ

「……ハァ……ハァ……リア…お姉ちゃん……んくっ……ハァ…

……ハァ……」

ザグランブラーによって瀕死の重傷を負ったが、雅也の治癒魔法で回復した少女――ソナは、必死にリアを呼んでいた。

しかし、呼ぶ者は来ることはなかった……。

それは、ソナが奇跡的に助かったことを誰も知らないからである…

……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月

「後書き呼び出しコーナー！」

ワァーーー！！

雅也

「……で、いったい誰を呼び出すんだよ？」

皐月

「それはもう決まってるわよ。
大変長らくお待たせしました、出す出すと言っておきながらなかなか出せずにいた、『オリジナル・Ｉ．Ｆ．シリーズ』から、ホワイト・ワドルディ、バイオ・スパークです！」

ワドルディ
「どうも」

バイオ
「よろしくお願いします」

雅也
「いやぁ～すみませんね、作者が出すと言ってからかなり時間が経ってしまいました」

ワドルディ
「いやいや、こっちは別に気にしてないから」

バイオ
「とは言ってますが、かなり前から『早く出ないかな……』と言ってましたよ」

ワドルディ
「いや、それは……」

バイオ
「……というのはここまでにしまして」

ワドルディ
「……」

バイオ
「さっそく、お話をしましょうか」

皐月
「そ、そうね、まずは……」

サッ

カンペ
『2人から見ての雅也、皐月、メアリーの印象は？』

ワドルディ
「そうだな……『恋愛成就しない』……かな？」

バイオ
「『未熟者』……ですね」

雅也
「ひどっ！」

メアリー
「だが、事実ということに変わりはない」

ヴィヴィオ
「そうだね……」

皐月
「そういえば、こんなものがワドルディさん宛に届いてるわよ」

ドン…

雅也
「な、なんだ、3メートルはある段ボールは？」

皐月
「なんかの部品だって言ってたけど、中身は……」

サッ

カンペ
『中身は後で見るように』

皐月
「……なんで？」

サッ

カンペ
『いや……我々がそれを言える立場ではないので……』

皐・雅・ヴィ・メ
「「「「……」」」」

ワドルディ
「もしかして、これは頼んでおいたガッ○スとラン○○ットの部品かい？」

ササッ！

カンペ
『だ・か・ら、それは向こうに戻ってからあけてください！』

バイオ
「……スタッフで遊ばないほうがいいですよ」

ワドルディ
「まぁ、大丈夫だよ、このくらい……」

ざざっ

カンペ
『ボムと大砲とガジェットの融合型、ガジェットドローン（ボム砲使用）をお見舞いしますよ……』

バイオ
「……スタッフがカンカンですよ」

ワドルディ
「軽い冗談だったのに」

バイオ
「冗談には聞こえませんでしたよ」

ワドルディ
「そう？」

バイオ
「……」

皐月
「ちょっと、これくらいのことで切れるんじゃないわよ」

雅也
「皐月、それはちょっと言い過ぎじゃ……」

皐月
「私はね、当たり前のことを言ったまでよ、文句ある？」

雅也
「ある・ないの前に、ゲストの前で言うことか？」

皐月
「うんっ！」

雅也
「おいっ！　すぐに返事するかよ！」

皐月
「雅也、あんたねぇ……何もわかってないのね」

雅也
「な、何がだよ？」

皐月
「ゲストが置いてけぼりになってるってこと」

……。

雅也

「いや、そうさせたのは皐月だろっ」

皐月
「雅也だってそうでしょーがっ」

メアリー
「マスター……」

ヴィヴィオ
「皐月ちゃん……」

雅也・皐月
「「何だ？／何よっ？」」

メアリー・ヴィヴィオ
「「あれ……」」

雅也・皐月
「「ん……？」」

サッサッ……

バイオ
「このクッキー、おいしいですね」

ワドルディ
「そうだな。　このクッキー、ほしいな」

バイオ
「そう簡単にいただくことはできませんよ」

ワドルディ
「それはそのときだよ」

雅也・皐月
「「……」」

メアリー
「マスターが作ったクッキーを食べてる……」

ヴィヴィオ
「わたしも食べるーっ！」

皐月
「私だって……雅也のクッキー食べる！」

雅也
「……俺も食べるとするか……」

メアリー
「というわけで、今回の後書き呼び出しコーナーは此処まで……
ということで……では私も食べるとしよう」

ザッ

カンペ
『あんたも食べるんかいッ！』

第5話：アランカルの企み（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『評価／感想』から書いてお送りください。

第６話：ホロウ部隊＆美少女部隊　参上！（前書き）

※結構長くなってしまいましたが、自分では良いと思っています。

第6話：ホロウ部隊&美少女部隊　参上！

皐月
「前書き質問コーナー！！」

ファーーー！！

雅也
「えーっと、この感じってあれのパクリか？」

皐月
「何言ってるの。　こっちはパクリじゃないの、ネタを参考にしただけ」

メアリー
「それも一応パクリというのでは？」

ヴィヴィオ
「皐月ちゃん、人のをパクっちゃダメなんだよ」

皐月
「……ごめんなさい」

雅也
「早ッ！？　観念するの早ッ！」

メアリー
「……まぁ、皐月が謝罪したところで今回の質問について答えるぞ。
マスター、後は頼みます」

雅也
「なんでメアリーは、たまに丁寧な言葉になるんだ？」

メアリー
「気にしたらダメです」

雅也
「どうして？」

メアリー
「どうしても、です」

雅也
「……」

メアリー
「で、ではお便りを紹介しまするです」

雅也
（なんか変な言葉になったんだけど……）

メアリー
「えーっと……ペンネーム・名無しさんからのお便りです。
『最近、青いタヌキさんが熱中になっている、または見ていたアニメは何ですか？』
というものだ」

雅也
「まぁ、この作品の情報で掲載されているように、

ＢＬＥＡＣＨ、銀魂、カオスヘッド、戦場のヴァルキュリア……いろいろあるけど、最近では、『Ｎ〇〇〇〇〇Ｓ』にはまってるみたいだな」

皐月
「へぇ～」

雅也
「それで、その話をこれに加えようって話が出てるらしい」

ヴィヴィオ
「そうなの？」

雅也
「それで、今回はこの話になったらしい」

メアリー
「タイトルどおり、ということですね？」

雅也
「まぁ、そうなるみたいだな」

作者
「というか、ネタバラしてどうするのっ！？」

雅也
「まあまあ、この後どうせわかることなんだしさ」

作者
「いつからそんなキャラになったーっ！！」

ササッ。

【そろそろお時間です】

皐月
「えっ？　もう時間なの？　まだ文字数がたっぷりあるのに？」

ササササッ。

【すみません。　これも作者（この人）の指示なので】

皐月
「……あっそ」

ガシッ……！

ワドルディ
「えっ！？」

皐月
「グラヴィティ……ハンド！！」

ドガシャーン！！

ワドルディ
「ぎぃあああぁ……！！」

ガガガガ……ドッカーン！！

雅也
「お、おい……皐月、それはやり過ぎなんじゃ……」

皐月
「雅也は黙っててちょうだい！　今の私の邪魔をしたらどうなるか……わかってるわよね？」

雅也
「は……はい……」

皐月
「というわけで、もう1発やらせてもらうわよ～っ」

ワドルディ
「ひいぃぃ～～～！！」

皐月
「待ちなさーい！！」

ダダダダ……。

雅也
「え～……というわけで、さっそく本編の方をどうぞ」

ワドルディ
「た、助けて～～～～！！」

皐月

「もう1発、やらせなさーーーい！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　???　～

リア
「……」

???
「リア様、いかがなさいましたか？」

リア
「いいえ、なんでもないわ、フラル」

フラルと呼ばれた従属官（フラシオン）は、容姿はソナぐらいで、ホロウの帽子を頭にかぶっていた。

フラル
「しかし本当に、私たちだけで任務を行えというのですか？」

リア
「……あの方の命令だもの、やるしかないでしょ」

フラル
「ですが、その命は……」

ジャキ……。

フラル
「う……」

フラルの首もとにリアの剣が当てられた。

リア
「……私だって、好きでこんなことしてるわけじゃないわよ。あの子が……ソナが…あんなことになってるのに……あいつは平然としてるのよ……なのに……私は……私は……！」

リアは剣を下ろした。

フラル
「リア様……」

リア
「……とにかく、今はあの部隊の監視も兼ねてるしね。　行くわよ、フラル」

フラル
「はい、リア様」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

〜　浦原商店　〜

フェイトたち魔導師は、緊急召集を受けたため、急遽本局に戻った。

カービィと銀時は部屋で寝ている。

一護と浦原は、ソナの様子を見に来た。

ソナ
「はぁ……はぁ……」

数時間後、ソナは今だに苦しそうにしていた。

一護
「浦原さん、どうなんだよこいつは」

浦原
「そうですねぇ……もうしばらく様子を見てるしかないっすね」

一護
「だけどよ……」

ゴォォォォ!!

一護
「ッ!?」

この感じは……!

一護は無数の霊圧を感じ取った。

恋次
「一護ッ!」

一護
「あぁ……わかってるよ」

浦原
「それじゃ、外の方は任せましたよ」

一護
「あぁ！」

タッタッタッ……。

ソナ
「はぁ……はぁ……んん……」

浦原
「……頑張ってください。　もうすぐあなたのお仲間が来ますから」

……。

……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

浦原商店の外……というか上空に、無数のホロウがいた。

一護

「……テメェら、何者だ？」

部隊長
「我々はホロウ部隊……」

恋次
「ホロウ部隊だぁ？」

部隊長
「そうだ」

一護
「で、何しに来た？」

部隊長
「貴様らが倒したギガントゴーレムの敵討ち……とでもいったところか」

恋次
「ホロウが仲間の敵討ちとはな」

部隊長
「……星の戦士はどこにいる…？」

一護
「星の戦士？」

部隊長
「とぼけるな。　ここにいるのはわかっている」

恋次
「おいおい、俺らそんな話聞いたことねぇぜ」

部隊長
「……あくまで知らないというか…」

一護
「知らねぇもんは知らねぇんだよ」

部隊長
「そうか……。　ならば、仕方あるまい……」

ざざっ！

一護たちの周りにいたホロウたちが取り囲んだ。

部隊長
「貴様らを始末する……」

一護
「……そうかよ」

シュルル……。

恋次
「俺たちを始末……か」

ガチャ……。

一護

「テメェら……少しは人の話を聞けよ……」

部隊長
「……やれ」

ホロウ
「「「ギシャァァァ！！！！」」」

恋次
「やれるもんならやってみやがれッ！！」

……。

……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

リア
「……」

ホロウ部隊より遠いところから、リアとフラルは様子見していた。

フラル
「リア様、ここでよろしいのですか？」

リア
「今のところは、ね……」

フラル
「あ……ホロウたちが次々と薙ぎ倒されていきます」

リア
「そう簡単にはいかないみたいね」

フラル
「……部隊長、1人だけになりましたね」

リア
「……このままじゃ、やられるわね」

フラル
「……オレンジ髪の男が斬り掛かりましたね」

リア
「それをかわして、逆に吹き飛ばした……」

フラル
「そこへ、赤髪の男が攻めてきましたね」

リア
「また、かわした……」

フラル
「……ッ！？」

リア
「さらにそこを斬り掛かる……すごい執念ね」

フラル
「ですが……ホロウ部隊が全滅ですよ。　あの方に何て報告する

んですか？」

リア
「そのままのことを報告するまでよ」

フラル
「ですがッ！」

リア
「……」

リアの顔が険しくなった。

フラル
「リア様？」

リア
「……何か来るわね」

フラル
「来るって、いったい何が？」

リアは何も答えなかった。

リア
（ホロウでも死神でもない気配……これはいったい……）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ソナ

「ん……んん…」

ソナはゆっくりと目をあけた。

辺りを見回すと見たことが無い光景が広がっていた。

ソナ

「あれ……？　わたし……なんで……」

浦原

「ようやくお目覚めになりましたか」

ソナ

「ッ！！」

ザッ。

浦原の声でソナは起き上がり、壁ぎわに寄り身構えた。

浦原

「そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ。　あなたが倒れているところを見つけてここまで運んできたんですよ」

ソナ

「私が……倒れてた？」

浦原

「はい」

ソナ

「……あ」

浦原
「私たちは一応あなたの命の恩人ということになるんですけど……
…何があったか教えてもらえますか？」

ソナ
「……名前だけじゃダメですか？」

浦原
「……貴女がそうしたいのであれば」

ソナ
「ごめんなさい……」

浦原
「いいんですよ、別に。　それで、貴女のお名前は？」

ソナ
「私……ソナ、といいます」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ちょうどその頃、フェイトたちは浦原商店の前にいた。

フェイト
「遅くなっちゃったね」

ティアナ
「ええ、ですが……」

チンク
「今回の召集が、あのようなものだとはな」

ナオ
「まだ聞いてなかったことがあったなんて……」

リマ
「しかも、『本局で新たに調査を行う予定の地区について』って、ねぇ？」

チンク
「それで、その報告書がこれとは」

チンクは持っている報告書を見た。

そこにはこう書かれていた。

『今日、時空管理局では、突然変異で人間離れした能力を持った人たち、通称……“――――”について調査を行うことにした。
しかし、フェイト執務官たちは、その調査を行えないものとする。』

雅也
「あまりにも無茶苦茶じゃないですか」

皐月
「私たちに調査をさせないなんて、どういう神経してるのよっ」

ヴィヴィオ
「なんで、私たちに調べさせてたくないのかな？」

メアリー
「私たちが調べていることと何か関係があるのでは？」

雅也
「そうなのか？」

皐月
「私に聞かれたって困るわよ」

浦原
「おやおや皆さん、お早いお帰りで」

フェイト
「それほど早くもありませんよ」

……。

フェイト
「それで、彼女の様態は？」

浦原
「ついさっき、目を覚ましましたよ」

雅也
「ほ、本当ですかっ？！」

浦原
「えぇ。　ですが……」

皐月
「何か問題でも？」

浦原
「実はですね……」

……。

……。

…。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カービィ
「むにゅむにゅ……」

銀時
「……」

銀時はむくっと起きた。

銀時
「――腹、減ったな……何か食べにでも……」

カービィ

「行くーーーっ！！」

銀時
「てめぇ、今までいいだけ食べたりしてたろーがっ！」

カービィ
「え～～～、だってお腹すいたんだもん」

銀時
「おまえの胃袋は宇宙か？　某有名番組みたいに大量に食うのかよっ！」

カービィ
「でも……」

そのとき、フライパンが目に入った。

カービィ
「僕が自分で作るもんっ」

銀時
「そうかよ」

皐月
「カービィ、戻ったわよ～～！　……って、何かあったの？」

カービィ
「別になんでもないもん！」

カービィはそう言って出ていった。

ガシッ！

チンクは銀時に掴み掛かった。

チンク
「貴様……いったい何をした？」

銀時
「何って……」

銀時は先程の話をした。

チンク
「貴様……それでも大人か！　それくらいのことで」

銀時
「うるっせーな、別にいいだろーが」

ティアナ・チンク・皐月
「「「……」」」

グヮアシッ！

ティアナ・皐月
「「銀さん……」」

チンク・ヴィヴィオ

「「探しに行くぞ……／探しに行くよ……」」

銀時は、４人に掴まれた。

銀時
「な、何で俺が……」

フェイト
「いいから行くよ、銀時。　じゃないと……」

グァシャン。

ナオ
「デバイスで……」

リマ
「お仕置きしますよ……」

フェイト・ナオ・リマは、銀時にデバイスを向けた。

銀時
「ど、どうしても？」

女性陣
「当たり前です！／当然だ！／もちろん！」

銀時
「わかったよ……チッ」

メアリー

「今、チッ……って言わなかったか？」

メアリーは周りに氷の塊を出した。

銀時
「言ってないよ、別に言ってないよ！」

メアリー
「そうか……」

メアリーは氷の塊を消した。

メアリー
「だったら早く行くぞ」

銀時
「ぁぃぁぃ……」

雅也
（メアリー、ちょっとやり過ぎだろ）

メアリー
（まぁ、これくらいのことは大丈夫……ですよ）

雅也
（そ、そうかぁ？）

と言いながら、皆で出たのである。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

〜　荒地　〜

？？？
「で、ここで間違いないの？」

？？？
【うん】

？？？
「それじゃ、早く行こうよ〜〜」

？？？
「そんなに急がなくても大丈夫よ。　向こうは逃げるわけないんだから。　ていうか、ここから逃げられないからね」

？？？
「そうなの〜？」

？？？
「そういうものよ」

？？？
【どうするの？】

？？？
「決まってるでしょ？　戻る前に捕まえるまでよ」

？？？

「それじゃあ、早く行こうよ～～」

？？？

「だ・か・ら！　まだ行かないって言ってるでしょ！　今作戦の内容を説明するから。　行くのはその後よ」

？？？

「んい！」

？？？

【紹介（×）】

【了解（○）】

……。

……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カービィ

「とは言って出てきたけど」

カービィは、フライパン片手に出たものの、なかなか食べ物になりそうなものが見つからなかったのだ。

カービィ

「ていうか、ここってどこ？」

グゥ～～～。

カービィ・???
「「お腹すいたぁ～…」」

カービィ
「え……？」

???
「んあ？」

そこには青い髪の女の子がいた。

カービィ
「あの……どちら様ですか？」

???
「そういうお前こそ何者だ？」

カービィ
「僕？　僕はカービィ！」

???
「んじゃ、桃井ね」

カービィ
「んなっ？！」

???
「桃井、ここどこだ？」

カービィ
「どこって言われても……僕もわかんないよ。　って、僕は桃井じゃないよ！」

？？？
「ちぃ……使えねぇな」

カービィ
（何、この人！？　この豪放磊落『ごうほうらいらく』な感じ！？）

？？？
「あ、そういえば桃井」

カービィ
「カービィだよ！」

？？？
「これ、持ってないか？」

女の子は空き缶を見せた。

カービィ
「……何、これ？」

？？？
「何って、見ればわかるだろ？」

カービィ
「わからないから聞いてるんだけど」

？？？
「ひょっとして、桃井はこれを知らないのか？」
カービィはコクンとうなずいた。
？？？
「この『スーパーゲル状ゲロドロンドリンク』を知らないとはな……。　それで、こいつを知らないか？」
カービィ
「知らないよ」
？？？
「そうかぁ……」
グゥウゥ～～～。
？？？
「ぁぁぁぁ……」
女の子はヘナヘナとその場に座り込んだ。
カービィ
「そういえば、君の名前は？　まだ聞いてないよ」
？？？
「ぼくの名前？」
カービィはコクコクとうなずいた。

???
「ぼくは“イヴ・ノイシュヴァンシュタイン”だ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カービィ
「イヴさんはどうしてここにいるんですか？」

イヴ
「それはな、あの『妖怪きゃらかぶり』のせいだ」

カービィ
「妖怪、きゃらかぶり？」

イヴ
「ぼくとキャラがかぶってるやつが僕を連れていこうとしてるんだ」

カービィ
「そ、それは大変ですね」

イヴ
「そうなんだよ、あの『妖怪きゃらかぶり』のせいで……」

???
「誰がきゃらかぶりよ！！　かぶりたくてかぶってるわけじゃないわよ！」

イヴ
「あ……」

2人の前に、マリンブルーとミモザとローズピンクの髪の女の子が現れた。

イヴ
「妖怪きゃらかぶり」

???
「違うって言ってるでしょ！」

カービィ
「確かに……キャラかぶってるね」

???
「いいかげんにきゃらかぶりから離れなさい！」

???
「セツナ～、なんか違う子がいるよ～」

セツナと呼ばれたマリンブルーの髪の女の子は、カービィを見た。

セツナ
「あら、ほんとね」

???
【あの子、どうするの？】

セツナ
「そうねぇ……とりあえず、そっちの女から片付けるわよ。　未央、梔（くちなし）、準備はいい？」

未央
「んい！」

梔
【もちろん】

イヴ
「くっ……！」

セツナ
「ディーンドライブF・H（フォックスハウンド）！」

セツナの連続攻撃にイヴは耐えられず吹き飛ばされてしまう。

カービィ
（は、早い……！）

イヴ
「うぅ……」

セツナ
「それじゃ、おとなしく私たちに捕まりなさい」

イヴ
「誰が……きゃらかぶりに……捕まる、ものか……」

セツナ
「いい加減にしろっての！！」

セツナがイヴに再び攻撃しようとした。

カービィ
（どうしよう……このままじゃイヴさんが……）

カシャン……。

カービィ
（そうだ……これだ！）
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

セツナ
「これで終わりよ。
ディーンドライブＢ・Ｂ（ブラックバード）！！」

イヴ
「――――ッ！！」

……。

……。

セツナ
「なっ……！？」

未央
「おーーーっ！！」

梔
【これは……！】

イヴ
「桃井……お前……」

カービィ
「カービィです」

カービィは今、イヴの目の前にいて、頭（？）に青いハチマキをしている。

そう……カービィはガラクタを吸い込んで『スロウ』をコピーしたのである。

そして、カービィはセツナの両手を掴んでいたのだ。

カービィ
「そー……れっ！」

カービィは回転してセツナを放り投げた。

セツナは、瓦礫（がれき）にぶつかった。

セツナ
「イタタ……な、何、あいつ……」

未央
「キャハハ！！　すごいすごーい！」

梔
【関心（×）】
【感心（○）してる場合じゃないよ】

次にカービィは、持っていたフライパンを吸い込んだ。

――ゴックン！

ポワワン！

カービィは、『コック』をコピーした。

コックさんの帽子をかぶり、右手にはフライパンを持っていた。

カービィ
「さぁ、どんとこい！」

カービィはフライパンをギュッと握った。

セツナ
「こいつ……」

未央
「ねぇ、やっちゃっていいの？」

梔
【いいよね？】

セツナ
「もちろん……！」

ダッ！

セツナ・未央・梔が一斉に飛び掛かってきた。

カービィ
「待ってましたーっ！」

カンカンカンカン……！

セツナ
「そんなので私たちを倒そうなん、て……」

カンカンカンカン……！

未央
「おおっ！？」

梔
【空だ（×）】
【身体（○）が勝手に……！】

カービィ
「それそれそれそれーーーっ！！」

カンカンカンカン……！

黄色の大鍋に梔、未央、セツナの順に入れられていく。

カービィ
「あとはグツグツ煮込むだけ～♪」

グツグツ……。

カービィ
「♪～～～」

グツグツ……。

カービィ
「で～きたっ！」

そして……。

カービィ
「吹っ飛ばしちゃえ～～～！！」

ポンポン……。

セツナ・未央
「「キャ～～～～！！！！！」」

梔
【キャーーー！！】

ポンポン……。

キラーン☆

セツナたちは、そのまま夜のお星さまになった。

その間に、カレーライスや鰻重（うなじゅう）、メロンジュースなど……いろいろな食べ物や飲み物が大鍋からポンポンと出てきた。

カービィ
「バイバ～イ♪」

イヴ
「すごいな、桃井」

カービィ
「だから、僕はカービィだよ！」

イヴ
「そんなことより早く何か食べさせてくれ……」

グゥ～～～。

カービィ
「そうだね、それじゃあ……はい、これ」

カービィはイヴに缶を渡した。

それは、イヴが欲しがっていた『スーパーゲル状ゲロドロンドリンク』だった。

イヴ
「こ、これは……！」

カービィ
「これはね、さっき料理したときに出てきたんだよ」

イヴ
「そうか……ありがとな、カー……カー……」

カービィ
「カ・ー・ビ・ィ、だよ」

イヴ
「うん、ありがとな、カービィ」

カービィ
「うん！」

そして、イヴはお求めのドリンクを、カービィは鍋から出てきた食べ物・飲み物に手をつけたのであった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

〜　荒地　上空　〜

リア

「なるほど……そういうこと……」

2人の様子をリアは見ていた。

リア
「あの子が星の戦士……」

フラル
「リア様！」

リア
「そんなに慌てて、どうしたの？」

フラル
「それが、先程連絡があったのですが……」

リア
「何よ、早く言ってちょうだい」

フラル
「……実は、……ソナ様が生きているというもので」

リア
「……え？」

リアは、しばらくの間、石像のように動かず、言葉を発しなかった。

フラル
「一刻も早くお伝えしようと思いまして、急いで来たのですが……
…」

ガシッ！

リア
「ソナは……ソナは今どんな状態なの？　身体は？　食事ちゃんと取ってるの？　今、どこにいるの？」

フラル
「リア様、落ち着いてください」

リア
「でも……でも……！」

フラル
「……とりあえず、場所を移しましょう。　あの方々が来るので」

リア
「……そうね」

ソナの無事を聞いて動揺しているリアを、フラルの提案で場所を移したのである。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

フェイト
「あ、カービィがいたよ」

皐月

「ほんと、あんなところに……」

メアリー
「どれだけ遠くに来たんだ、いったい……」

ヴィヴィオ
「えっと……ざっと５００ｋｍぐらい」

雅也
「ありえないからね、普通は……」

一護
「ったく、心配かけやがって」

恋次
「とりあえず、ひと安心だな」

銀時
「うんうん、よかったよかった」

ティアナ
「誰のせいでこうなったと思ってるんですか」

チンク
「あとでちゃんと謝っておくことだな」

銀時
「わーってるよ」

ナオ

「ほんとかなぁ……」

リマ
「信用するしかないけどね」

銀時
「テメェら……」

皆がカービィを見つけたときは、すでに日が暮れていた。

そして、カービィとイヴが寄り添うようにして眠っていた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「後書き呼び出しコーナー！！」

ワァーーー！！

雅也
「いやぁ～、今回はすごいなぁ……」

ヴィヴィオ
「ほんとだよ。　こんなにお話を絡ませてくるなんて思ってなかったよ」

メアリー
「まさに、最近の投稿した話ではいいと思ったぞ」

皐月
「そうね。　とまぁ、この話はここまでにして……、さっそく今回の呼び出しキャラを紹介するわ。
……いでよ、カナン！」

ぼむっ！

カナン
「久しぶりに来たな」

皐月
「というわけで、今回は、こんな企画をたててみました。　題して……。
『どちらの妹がいいのでしょーかっ！！』」

カナン
「……はい？」

美智江・遊佳
「「お兄ちゃ～～～ん！！」」

カナン
「……出たな」

美智江
「はい、出ちゃいました♪」

遊佳
「ただ、こっちだけのオリキャラってのが残念だけど」

雅也
「ま……それはそうだね」

カナン
「こんなところ裕希奈に見られたら……」

美智江
「大丈夫ですよ。　裕希奈さんには許可取ってますから」

カナン
「マジで？」

遊佳
「それでこんな企画を開くことになりました」

皐月
「というわけで……、精一杯甘えちゃってください♪」

カナン
「えっ？！」

美智江
「というわけで、行こっ♪　お兄ちゃん♪」

カナン
「ど、どこにだ？」

遊佳
「もちろん、裕希奈さんのいるところまで、だよ」

カナン
「そ、それは、やってもいいのか？」

美智江・遊佳
「「もちろんだよっ、お兄ちゃん♪」」

ズルズル……。

カナン
「俺の出番って、これだけ？」

コクリ……。

カナン
「……」

バタン……。

皐月
「というわけで、今回の後書き呼び出しコーナーはここまでです！」

雅也
「次回もよろしくお願いします」

メアリー
「それでは、また次回……」

第６話：ホロウ部隊＆美少女部隊　参上！（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『評価／感想』から書いてお送りください。

第7話：美少女部隊　再び……（前書き）

※今回は、『前書き質問コーナー』はお休みです。

次回は、休まずにお送りします。

第7話：美少女部隊　再び……

ヒュ～……ドドーン！！

セツナ
「イタタ……」

未央
「んいぃぃ……」

梔（くちなし）
【やられた……】

カービィのコピー技でかなーり遠くに吹き飛ばされたセツナ・未央・梔は地面に叩きつけられた。

セツナ
「何なのよ、あのちっこいのは……」

未央
「可愛いけど強かったね」

梔
【これからどうするの？】

セツナ

「決まってるでしょ、人質を取り返しに行くのよ」

未央
「でも、このまま行ったらまたやられちゃうよ～」

梔
【香（フレグランス）が使えていたら…】

セツナ
「問題はそこよね。　いったいどうしたらいいかしら……」

？？？
「……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　浦原商店　～

イヴ
「おい、これはどういうことだ？」

カービィとイヴが寝ている間に浦原商店に連れてきたのだ。

一護
「こいつと一緒にいたから連れてきただけだ」

イヴ
「だったら早く帰せ、津田」

一護
「一護だ！」

銀時
「つーか、なんであんなとこにいたんだよ」

イヴ
「あぁ、それなら銀田」

銀時
「テメー、覚える気ねえだろ…」

イヴ
「あいつらが悪い」

カービィ
「あいつらって…あの女の子たちのこと？」

イヴ
「まぁな、それにあいつらは僕を捕まえに来るだろな」

チンク
「ではどうするのだ？」

イヴ
「決まってるだろ？　倒すまでだ」

恋次
「1度負けたくせにか？」

イヴ
「そ…それは……」

自分の攻撃で捕まったとは……言えない。

イヴ
「とにかく！　今の僕はあいつらには負けないさ！　ハーハッハッハッ！」

銀時
「けっ……可愛くねぇの」

イヴ
「ん？　何か言ったか？」

銀時
「別にぃ……」

イヴ
「？？」

イヴは、１本５０００キロカロリーを誇る『スーパーゲル状ゲロドロンドリンク』を飲みはじめた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そのころ、フェイト・ナオ・リマの３人は、ソナから事情を聞きにソナの目の前に座っていた。

フェイト
「それで、あなたが狙われた理由は何かな？」

ソナ
「……」

リマ
「少しでも話してくれないかな？」

ソナ
「……」

ナオ
「もうっ！　少しくらいは話してくれたっていいじゃない！」

リマ
「ナオ、言いたくもないのに言わせたらダメよ」

ナオ
「でも……！」

フェイト
「……ソナちゃん、話したくなったら話してね」

フェイトはそう言うとソナの前から離れた。

リマ
「私たちも行くわよ」

ナオ

「リ、リマ姉！」

リマが離れ、ナオもついていくように離れた。

ソナ
「……」

ソナは仮面に手をあてた。

ソナ
「リアお姉ちゃん……」

ソナはギュッと強く握り締めた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

リア
「！！
」

フラル
「リア様、どうかされましたか？」

リア
「……なんでもないわ。
それで……ソナはどうしてるの？」

フラル
「治癒魔法というもので奇跡的に命をとりとめたようです」

リア

「そう……」

リアはホッとした。

フラル
「リア様、これからどうなさるおつもりで？」

リア
「……もう少し様子を見るわ。　こっちの行動も監視されてるかもしれないからね」

フラル
「ですがあの方がこのことを知ったら！」

リア
「フラル……お願い……もう少しだけ待って。お願いよ……」

フラル
「リア様……」

そのころ、ザグランブラーが部下と話していた。

ザグランブラー
「ホロウ部隊がやられたか……」

？？？

「はい……これからどういたしますか？」

ザグランブラー
「次はおまえに行ってもらう。　いいな、バルバトス」

バルバトス
「ハッ……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　町郊外　～

一護
「で、なんでこうなってんだよ」

一護が横を見ると、左にはカービィ・イヴ・フェイト、右には銀時・ナオ・リマがいた。

銀時
「仕方ねぇだろイヴ（こいつ）は一応狙われてんだからよ」

イヴ
「だから、こんなのはいらないって言ったんだ」

フェイト
「ですが、こちらにいる間は私たちの言うことを聞いてもらわないと……」

イヴ

「僕が何したってかまわないだろ、ファイト」

フェイト
「フェイトです……」

カービィ
「でも、ここまで来るのかな？」

ナオ
「来るんじゃないの。
ほんとに彼女が必要だったら、ね」

リマ
「そうね……注意しないと」

バルバトス
「それじゃあ……はじめようか……」

セツナ
「いくわよ……」

未央
「んい！」

梔
【両替（×）】
【了解（○）】

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

セツナ
「やっと見つけたわよ！」

未央
「早く捕まっちゃったらいいんだよ」

梔
【覚悟しなさい】

イヴ
「出たな、妖怪きゃらかぶり」

セツナ
「違うって言ってるでしょ！！」

一護
「……」

ナオ
「あれが……その女の子たち？」

カービィ
「はい……」

銀時
「あんなチビに勝っちまうんだったら、たいしたことないんじゃね？」

ピク……。

セツナ
「ちょっと、そこのオジサン」

銀時
「あん？誰がオジサンだぁ、お兄さんと言いたまえ」

セツナ
「私たちをバカにしたこと後悔させてあげる」

銀時
「人の話を聞けよ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ヒュン！！

セツナの姿が見えなくなった。

そして次の瞬間、銀時の目の前に現れた。

銀時
「ッ！！」

セツナ
「ディーンドライブF・H（フォックスハウンド）！！」

ダダダダ……。

銀時は両腕で連撃を防いでいる。

銀時
「くっ……！」

セツナ
「どうしたの？　口ほど出もないわね」

ダダダダ……。

未央
「未央ちゃ～んパ～ンチ！」

ドゴッ！

イヴ
「何のこれしき……。
ドッペルゲンガー！！」

イヴは腕をドリルに変えた。

イヴ
「はあぁぁぁあ！！」

ダンッ！　ダンッ！

未央は淡々と攻撃をかわす。

未央
「未央にはそんなの効かないよ～だ」

イヴ
「ちょこまか動くな！」

じり……。

カービィ

「……」

ザザ……。

梔
【……】

じりじり……。

カービィ
「……」

ザザザザ……。

梔
【……】

ナオ
「2人とも何かしゃべりなさいよ」

リマ
「……」

ナオ
「リマ姉まで沈黙にならないでよ！」

一護・フェイト
「「……」」

ナオ
「もう好きにしてぇ！」

バルバトス
「……こっちも出てきてるのですから相手になってください……」

一護
「わかったよ。
……ったく、なんでこんなことばっかなんだよ……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カービィは、『すいこみ』をした。

スゥ〜〜〜……！

カービィは、何かを吸い込んだ。

ゴックン！

カービィ
「ふん……！　はあっ！」

カービィは、菱形（ひしがた）と渦のエンブレムがついた輪をかぶり、頭に竜巻が発生していた。

カービィ
「トルネイド！」

そう――カービィは『トルネイド』をコピーしたのだった。

梔
【メイデンリストリクション！】

梔の左腕に装備しているジェットガントレットから香りを出してきた。

カービィ
「はあっ！」

カービィが高速回転した。

すると、自らを竜巻にしてその香りに突っ込んでいった。

ビュオォォ……！

高速回転しているので、カービィが香りを人がいないほうに吹き飛ばしていく。

カービィ
「ポヨッ！」

梔
【フレグランスが効かない…！】

カービィ
「マッハトルネイドアターーーック！！」

ビュ～～……！！

高速回転での竜巻が周りにまで行き渡っている。

カービィ
「はぁぁぁ

カービィ
「ポヨポヨヨヨ～♪」

梔
【む、無念……】

梔は力尽きた……。

セツナ
「梔！！」

未央
「んい？！」

バルバトス
「……使えないですね」

一護
「何……」

ギギギ……。

刀と刀がぶつかり合う中、

アランカルのバルバトスが言ったことに一護は思わず声に出した。

バルバトス
「狙う相手が近くにいるので誘ってみましたが……
使えませんね」

セツナたちは攻撃の手を止めてバルバトスを見る。

セツナ
「アンタ……！！」

バルバトス
「使えないものは使えない……そう言って何が悪いんですか？」

カービィ
「……」

フェイト
「……カービィ？」

カービィ
「フェイトさん……やっちゃっていいですか？」

フェイト
「え、えぇと……」

銀時
「やっちまえ」

フェイト
「ぎ、銀時?!」

銀時
「テメェらもそれでいいな?」

セツナ
「……えぇ」

未央
「未央はそれでいいよ」

銀時
「というわけだ」

カービィ
「……」

カービィは、くないを飲み込んだ。

ゴックン!

カービィは、丁髷（ちょんまげ）のついた紅色の兜（かぶと）をかぶり、体色が薄い紫になった。

カービィ
「一護さん……」

一護
「……よし、やるか……」

バルバトス
「後悔しても知りませんよ……」

カービィ
「それはこっちのセリフです……」

カービィの目がいつもと違っていた……。

それはまるで、カービィが魔獣になったかのようだった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一護
「はあっ！」

バルバトス
「……」

ガキィン！

斬魄刀がバルバトスの刀にあたった。

バルバトス
「これでは先程と同じじゃないですか……」

カービィ
「それはどうかな……」

ガシッ！

カービィが後ろから掴み掛かった。

バルバトス
「それでどうするつもりだ？」

カービィ
「……いづなおとし！」

空高く飛び上がり……、

ドドーン！！

急降下で地面に叩きつける。

カービィ
「もういっちょ……！」

ドドーン！！

カービィ
「まだまだ……！」

ドドーン！！

カービィ
「……一護さん……」

一護
「あぁ……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

卍解状態の一護がトドメをさそうとしている。

バルバトス
「……おまえたち、私が刀剣解放（レスレクシオン）できるのをわかっているのか？」

一護
「知ってるさ。でも、今のアンタに刀が“あれば”の話だけどな」

バルバトス
「何……っ！！」

バルバトスは自分の刀がいつのまにかないことに気付いた。

イヴ
「おまえの刀はこれか？」

バルバトス
「っ！！！」

そう……、刀はイヴが持っていたのだ。

一護
「つーわけで……」

ゴォォォ……！

一護
「1発……でかいのをくらいな……」

ゴァァァァ！！

一護

「月牙……天衝！！」

ザンッ！！

……。

……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一護
「ふぅ……」

イヴ
「やったな津田」

一護
「一護だっ！」

カービィ
「それで……あなたたちはどうするんですか？」

セツナ
「……」

カービィ
「早く連れていかなくていいんですか？」

セツナ
「……今回は見逃してあげる」

未央
「でも、それじゃあ離瑠様に……」

セツナ
「まぁ……何とでもなるわよ。　未央、梔をお願いね」

未央
「……んい！」

未央は梔を担いだ。

カービィ
「……」

セツナ
「そこのちっこいの」

カービィ
「ぼ、僕のこと？」

セツナ
「あなた以外にいないでしょ？
……名前は？」

カービィ
「カ、カービィ……」

セツナ
「カービィ……ね……今回はありがと」

カービィ
「いや、別に僕は……」

セツナ
「けど、これで済んだと思わないでね」

未央
「ちなみに、こっちはセツナだよ。　なんかちょっとイイヤツだって思ったんだよ、きっと」

セツナ
「み、未央！！」

未央
「♪～～～」

梔
【無意識に意識してる…】

セツナ
「梔まで！！」

カービィ
「あ、あの……」

セツナ
「アンタのせいよ！」

カービィ
「何でっ！？」

その後、セツナは未央と梔に弄られながら去ったそうな……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「あとがき呼び出しコーナー！」

一同
「ワァーーー！！」

雅也
「物語の展開、ちょっと急ぎすぎたんじゃないのか？」

メアリー
「それは大丈夫、だと思う」

雅也
「いや思わないでしょ、今のじゃ」

ヴィヴィオ
「私たちの出番、なかったね」

皐月
「まぁ、物語の展開的に出れそうにないからね」

メアリー
「出れないんだったら出たらいいんじゃないのか？」

皐月
「それはそうなんだけど……勝手に出ることはできないでしょ、普

通は」

ヴィヴィオ
「え？　今まで普通じゃなかったの？」

皐月
「それはね……えっと……」

雅也
「そ、それじゃ、今回も勝手に呼び出すぞ！」

メアリー
「マスター、勝手に呼び出しちゃいけないと言ってなかったか？」

雅也
「そ、それは……時と場合を考えた結果、こうなったんだ！」

ヴィヴィオ
「そうなの？」

皐月
「そうよ！　そうなのよ！　それじゃあ今回はこの人を呼びだすわよ！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「……」

雅也

「……」

メアリー
「……」

ヴィヴィオ
「……」

？？？
「……」

一同
「……何？」

？？？
「……」

パァァァ……！

レナス
「どうも～♪　今回の呼び出しで来ました『魔法少女リリカルヴィヴィオ』のレナスです♪」

？？？
「……」

レナス
「あれ？　皆さんどうしたんですか？」

皐月

「な、なんで1人？」

レナス
「はい♪　主はいろいろあって来れなくなりました。
なので私が代わりに来ました」

雅也
「そうなんだ……」

レナス
「？？　皆さん、暗い顔をしてますけど……」

皐月
「ねぇ、ちょっと聞いてもいい？」

レナス
「何ですか？」

皐月
「あそこにいるの…何？」

レナス
「……あぁ、あれは○○ですね」

……。

一同
「……はい？」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「〇〇って……その……アレよね？」

雅也
「あの赤いのだよな？」

ヴィヴィオ
「小さくて可愛いよね」

雅也・皐月
「「それは人によって違うから！」」

レナス
「はい♪　〇〇はメイデンも好きなものですよ」

パァァァ……！

メイデン
「それは姉さんだけだ！」

レナス
「あら……来ちゃったの？」

メイデン
「来るに決まってるだろ！」

レナス
「そう……可愛いわね」

メアリー
「……かなり天然というか何というか……」

雅也
「まさに神業だな」

皐月
「だったらもう○○って言わなくてもいいわね。
それじゃ、○○に入るものは……」

ヴィヴィオ
「え～～言っちゃうの？」

皐月
「いや、普通言わないとわからないでしょ」

レナス
「○○～……○～○～……」

一同
「……」

メイデン
「ね、姉さん！」

レナス
「ん？　ふぁうふぃたの（どうしたの）？」

メイデン

「……もういいです。　言います。というか言わせてください。
○○に入るのは“蟹”です」

皐月
「私たちが言いたいことはね……」

雅也
「なぜ、１０メートルくらいもあるのか……ということなんだよ」

メアリー
「これじゃあ怪獣と同じではないか」

レナス
「でも、蟹さんには変わりありませんから♪」

メイデン
「……」

ヴィヴィオ
「そうだよ、蟹は蟹だよ」

雅也
「……」

皐月
「……雅也……」

雅也
「あぁ……今回はこれで終わるぞ」

ヴィヴィオ
「なんで？」

メアリー
「それは……な……マスター」

雅也
「俺にふるのか！？」

ヴィヴィオ
「雅也くん、なんで？」

雅也
「そ、それはな……また今度教えるよ」

ヴィヴィオ
「ふーん……」

皐月
「というわけで！　今回はここまでよ！」

メアリー
「勝手に呼び出してスミマセン！！」

雅也
「次回もよろしくお願いします」

プツン……。

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第7話：美少女部隊　再び……（後書き）

※次回は、あとがきに『質問コーナー』を設けようかな……。と考えています。

改めて、次回もよろしくお願いします。

第8話：想い……（前書き）

※投稿が遅れてしまいました……。

第8話：想い……

皐月
「前書き質問コーナー！！」

ワァーーー！！

雅也
「いやー、最近後書きがキツくないか？」

ヴィヴィオ
「キツいって……どういうこと？」

雅也
「キャラを呼び出すって言っても、作者が関係を持っている他作者の数は、明らかに少ない！」

皐月
「まぁ、確かに作者の手懸けている作品は、『この作品がメインだ！』とかないからね」

メアリー
「では、いったいどうするというのだ？」

雅也
「そうだな……」

ヴィヴィオ
「それじゃあね……この場を借りてアピールしてみるってのはど

うかな？」

皐月
「アピールって、何をアピールするのよ？」

ヴィヴィオ
「それはやっぱり……」

メアリー
「この作品の主人公キャラがマスターたちだということをアピールしてだな……」

雅也
「ていうか、まだ決めてないのにそんなこと言うな！」

皐月
「それ……いいかも！」

雅也
「話にのろうとするなぁーっ！」

ヴィヴィオ
「え～、せっかくいいと思ったのにぃ……」

雅也
「アンタが発案者かぁーーーっ！」

ヴィヴィオ
「……ダメ？」

雅也
「そ、そんなこといわれてもなぁ……」

メアリー
「……マスター、まだ本編にいかないのか？」

雅也
「まだ前書きの尺があるのに、そんなことするわけないだろ？」

メアリー
「む……ではいったいどうするんですか？」

雅也
「そうだな……」

フェイト
「私が話相手になるよ」

雅也
「それはありがとうございま……す……って！？」

皐月
「ふぇ、フェイトさん！！」

ヴィヴィオ
「フェイトママ、どうしたの？」

フェイト
「ん……ちょっと出番が少なくなったから出ることになってね」

皐月
「あ～……私たちと同じですね」

フェイト
「でも、毎回出てるから本編のレギュラーは決定みたいなんだ」

雅也
「うっ……！」

皐月
「ぐはぁ……！」

フェイト
「２人とも残念だね」

雅也
「い、今のフェイトさん、今まで以上にカオスだな……」

皐月
「そ、そうね……」

メアリー
「では、本編をどうぞ」

フェイト
「あとは後書きコーナーでね」

雅也・皐月
「「後書きもこれですかっ！」」

フェイト
「もちろん」

雅也・皐月
「「ちゃんとつなげられるかな……」」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　シメオン製薬ビル　某室　～

シメオン製薬――とある街でわずか数年でのし上がった製薬会社。
慈善事業という名目で活動をしており、市民からの信望も厚い。
だが、その裏では人体実験を繰り返し不老不死の薬を開発して貴族階級に売り捌いている。
夜、その会社のビルの一室にその人物はいた。

セツナ
「……」

未央
「……」

梔
【……】

セツナたち3人は1人の女性の前に立っていた。

？？？

「……どういうことかしら？
対象を連れてくることもできず、何の成果もなく戻ってきたってこと？」

セツナ
「も、申し訳……ありません……離瑠様……」

離瑠様――本名、楼閣寺離瑠はシメオン製薬の総帥・アークライトに仕える幹部であり、『美少女部隊』を率いている。

離瑠
「このままじゃ済まないことくらい……わかってるはずよね？」

セツナ
「も、もちろんです……」

離瑠
「そう……だったら〇〇までに対象を連れてくること……いいわね？」

セツナ
「……はい……」

未央
「んにゃぁ……」

梔
【……】

〜　シメオン製薬ビル　別室　〜

セツナ
「……」

未央
「これからどうするの？」

セツナ
「決まってるでしょ？
・・
神父を捕まえに行くのよ」

梔
【その必要はない】

セツナ
「……どういうこと？」

梔
【これ……】

梔は1枚の紙切れを取出し、セツナに渡した。

セツナ
「これは……！」

未央
「んにゃ？」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　某室　～

同時刻、カービィとイヴも1枚の広告紙を見ていた。
ちなみに2人はフェイトたちが借りてるマンションの相部屋という形になっている。

カービィ
「ペポ？」

イヴ
「なんだこれは？」

フェイト
「どうしたの？　そんなに驚いた顔して」

ちょうど風呂からあがったばかりの身体をタオルで隠したフェイトがやってきた。
髪は束ねておらず、蛍光灯の光が金色の髪についている水滴に当たりキラキラと光っている。

カービィ
「フェイトさん、フェイトさん！」

イヴ
「話があるんだ！」

カービィとイヴがフェイトの胸に飛び込んだ。

フェイト
「きゃっ！」

勢いよく飛び付かれたので尻餅をついてしまった。

フェイト
「ふ、２人ともどうし……」

ガチャ……。

ヴィヴィオ
「フェイトママ、どうした……の……？」

フェイトの声を聞いたヴィヴィオが入ってきた。
そしてヴィヴィオはこの光景を見ている。

ヴィヴィオ
「……」

フェイト
「あ、あのねヴィヴィオ、これはね……」

ヴィヴィオ
「……」

フェイトは感じた――ヴィヴィオから自分への黒いオーラを纏(まと)っている、そしてそのオーラは“なのは”に似ていると……。

フェイト
「ヴィヴィオ、これはねカービィとこの子が飛び付いてきただけで……その……」

ヴィヴィオ
「……ひどいよ……フェイトママ……」

フェイト
「あ、あのね、えぇと……！」

ヴィヴィオ
「私だって……私だって……フェイトママにやりたかったのに！」

フェイト
「え……？」

ヴィヴィオ
「2人だけにやるだなんてズルいんだから！！」

フェイト
「ヴィ、ヴィヴィオ…？」

ヴィヴィオ
「フェイトママ～～～！！！！」

フェイト
「何っ、こんな展開なのっ！？」

部屋にはフェイトたちの声が響いたそうな。

……。

ちなみに、広告紙には
『○月△日　午後○時より○○にて美少女部隊　特別講演開催！』
と書かれていた……。

？？？
「“美”はいらねぇだろーが、“美”は」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　十数分後　～

フェイト
「……それで？　これに行きたいの？」

カービィ
「えっとですね……えっと……まぁ、はい……」

ヴィヴィオ
「？」

イヴ
「もしかしたらそこにブレイドが来るかもしれないんだ」

フェイト
「ブレイド？」

カービィ
「あ、イヴさんの仲間のようです」

フェイトとヴィヴィオはフムフムと首を動かした。

フェイト
「でも、こっち（空座町）での騒ぎをなんとかしないと……」

？？？
「そうだな」

フェイト
「あ、あなたは……」

そこには尸魂界（ソウル・ソサエティ）に行ったはずの冬獅郎がいた。

フェイト
「行ってきたんですか？」

冬獅郎
「あぁ」

ヴィヴィオ
「少し遅かったみたいですけど」

冬獅郎
「まぁ、ちょっといろいろあってな」

フェイト
「いろいろ、ですか？」

冬獅郎
「あぁ……」

カービィ
「いろいろって？」

冬獅郎
「……」

イヴ
「カービィ、こいつは？」

カービィ

「あぁ、この人はね……」

カービィは、イヴに冬獅郎のことについて話した。

イヴ
「ふぅーん……だったらチビ」

冬獅郎
「チ…チビ……だと？」

冬獅郎の顔がピクピク……と動いた。

イヴ
「チビはこれからどうすんの？」

冬獅郎
「あ……あのなぁ、俺は……」

イヴ
「あたしさ、物覚え悪いからチビでよろしく」

冬獅郎
「……」

フェイト
「え、えーと……今日はもう遅いから明日きちんと話そうよ、ね？」

冬獅郎
「……わかった」

フェイト
「ちなみに、冬獅郎くんはそこで寝てね」

冬獅郎
「そこって……」

フェイト
「“そこ”は“そこ”だよ」

冬獅郎
「……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　???　～

ザグランブラー
「……」

リア
「……」

リアは現・破面の将のザグランブラーに呼び出された。

リアの他にフラルもいた。

フラル
（リ、リア様……これは……）

リア
（フラル、少し黙っててくれない……）

フラル
（……わかりました）

ザグランブラー
「……リア、今回呼んだ理由…わかってるな」

リア
「……」

ザグランブラー
「奴らは思っていたより強い……」

リア
「そう……ですね」

ザグランブラー
「これ以上ザコをやっても相手にならないだろう」

リア
「……私もそう思います」

ザグランブラー

「だから今回の任務は……」

リア
「……」

ザグランブラー
「リア……お前に任せる」

リア
「…ハッ……」

フラル
（リア様……）

こうなることはわかっていた。
だが、そうであってほしくないと心の中で思っていたリアがいた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

リア
「ふぅ……」

リアが自分の部屋に戻ってきた途端、溜め息を吐いた。

フラル
「リア様、よろしいのですか？」

リア
「何が？」

フラル
「このまま彼らのところに攻め込めば、おそらく……」

リア
「……ソナと逢わなきゃいけない……そうなったら戦わなきゃいけない……。
それは私だって嫌よ」

フラル
「でしたらなぜあのようなことを？」

リア
「ここで逆らって殺られるくらいなら、ソナに逢ってそれから殺られたほうが心残りが少なくてすむから」

フラル
「……これからどうするのですか？」

リア
「……メノスを何体か集めてくれない。　今すぐに」

フラル
「ハッ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ソナ
「……」

ソナは1人屋根にあがり夜空を眺めていた。

ソナ
「……リアお姉ちゃん……」

ソナは起きてからずっと“お姉ちゃん”と言って慕っていたリアのことを考えていた。
自分が生きていることを知ったら喜ぶだろう。　だが、もし逢うことになったらそれは悲しいものになるかもしれない――。
ソナはずっと自分にとって悪いことばかり考えていた。
だから、気分転換に屋根にあがり少しでも考えを変えようとしたが、結果は変わらなかった。

ソナ
「リアお姉ちゃん……あたし、どうしたらいいのかな?」

そんな彼女の問いに答えてくれる人はいなかった。

ソナ
「リアお姉ちゃん……」

???
「何してるの?」

ソナはハッとして振り返った。自分と同じくらいの年（見た目）の男の子がいた。

ソナ
「えと、あなたは……」

???

「あれ？　まだ自己紹介してなかったっけ？」

？？？

「マスター、まだ自己紹介はしてませんよ」

？？？

「そうだっけ？」

？？？

「そうなんです」

彼は、後ろから出てきた人形のような物体としゃべりはじめた。

ソナ

「あ、あの……」

？？？

「む……マスター、早く自己紹介してください。　私が話せなくなってしまいます」

？？？

「ちょ、そんなに急かすなよ」

小さいのに急かされたこともあり、男の子は1度咳払いをしてからソナを視た。

？？？

「俺、久本雅也っていうんだ。　よろしくな」

？？？

「それで私がマスターのユニゾンデバイスのメアリーです。よろしく」

ソナ

「は、はい……よろしくお願いします……」

これが2人（メアリーを含めると3人）の初めての会話であった。

そんな光景を遠くから見守っている人物がいた。

???

「……良いものだね、誰かのことを想えるなんて」

大きな鎌を持った死神の姿を思わせる女が呟く。

???

「私も生前にそんなふうに思える人がほしかったな……」

少し顔を俯かせて言う。

???

「でも、今は“茜”がいるしね」

とそこへ偵察係の幽霊がやってきた。

幽霊

「麗様、奴らは明日動くとのことです」

麗と呼ばれた人物は大鎌を構え直した。

麗

「そう……わかったわ。　引き続き偵察をお願いね」

幽霊

「ハッ……」

幽霊は返事をすると姿を消した。

麗

「それじゃ、明日に備えて早く休まなきゃね」

麗は大鎌を納めた。

麗

「……ここに来たのは優太（あいつ）のお願いじゃないからね。　他ならない茜のお願いだから仕方なく来ただけよ……。そう……仕方なくなんだからね……」

……。

そう独り言を言った後、麗も夜の暗闇に姿を消したのだった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月

「というわけで、今回の後書きコーナーは前書きの続きとなりまし

た」

雅也
「で、ここで何を話せと？」

メアリー
「それはフェイトさんが用意しているらしい」

ヴィヴィオ
「……そうなの？　フェイトママ」

フェイト
「うん、ちょっと気になってたことがあったの」

雅也
「？　何ですか？」

フェイト
「この作品に登場させる予定の作品って、どれくらいあるのかってこと」

雅・皐・ヴィ・メ
「「「「あぁ～……」」」」

フェイト
「リニューアルに伴って掲載できる作品の数が減っちゃったでしょ？だからこの場を借りてやったほうがいいんじゃないかなって」

メアリー
「確かにその通りですね」

皐月
「やって損することはないからね」

雅也
「異議なし」

ヴィヴィオ
「というわけで、現在のところの出演作品を紹介します」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　出演予定作品一覧　～

・魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ
・ＢＬＥＡＣＨ
・銀魂
・星のカービィ
・ＮＥＥＤＬＥＳＳ
・ティアーズ・トゥ・ティアラ
・恋姫†無双

・戦場のヴァルキュリア

・神曲奏界ポリフォニカ　グリムゾンＳ

・アスラクライン

・ＣＨＡＯＳ；ＨＥＡＤ

※作者からひとこと

・あと１つ、２つくらい作品を出したいのですが（特に学園関係のアニメを出したいな）。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

雅也・皐月・メアリー

「「「あ～……」」」

フェイト・ヴィヴィオ

「「う～ん……」」

……。

……。

ヴィヴィオ

「えーと……こ、今回はこの辺で終わらせようと思います」

フェイト

「“作者のひとこと”を無視してもいいので、感想などよろしくお

願いします」

プツン……。

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第8話：想い……（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第9話：あのキャラ登場（前書き）

※今回は少し変えてみました。

第9話：あのキャラ登場

皐月
「前書き質問コーナー！！」

ワァーーー！！

メアリー
「そういえば、いろいろな作品があるらしいな」

雅也
「いきなり何の話をしてるんだよ」

メアリー
「何って……スイーツのことだが」

雅也
「今さらかよ……」

皐月
「グラヴィティ・プレス！！」

グシャッ！！

雅也
「いきなり攻撃するな！
しかも、今のでセットが壊れまくったし」

皐月

「乙女の好物のスイーツをバカにしたからよ」

雅也
「そんなに怒ることかよ」

皐月
「もちろん」

雅也
「そういうものなのか？」

ゴオオオオオ！！

ヴィヴィオ
「……もちろんだよ」

雅也
「ヴィ、ヴィヴィオ……」

ヴィヴィオ
「雅也くん、スイーツをバカにしたらスイーツオバケが出るんだよ」

雅也
「んなもんでるわけないだろ」

ナオ・リマ
「「そうなの……？」」

雅也
「突然出てこないでください。

あと、今の話を信じないでください！」

ナオ
「信じるなって言われても……」

リマ
「ほら……雅也さんの後ろに……」

雅也
「へ？」

スイーツオバケ
「……」

雅也
「……」

スイーツオバケ
「……」

雅也
「……」

ヴィヴィオ
「ほら、雅也くん。
出たよ、出たよ、スイーツオバケ」

……。

雅也

「ほんとに出てくるなー！！」

～しばらくお待ち下さい～

……。

……。

……。

…。

雅也
「はぁ…はぁ……」

ヴィヴィオ
「雅也くん、大丈夫？」

雅也
「ある意味大丈夫じゃないけど」

皐月
「まさかほんとに出るなんてね。
正直言って驚いたわ」

雅也
「……皐月、もしかしておまえが言ったのか？」

皐月
「え、えぇ……。
冗談で言ったつもりだったんだけど」

雅也
「お～ま～え～な～……」

皐月
「わ、私じゃないわよ。
あんなもの出せるわけないじゃない」

雅也
「ま、そうだな。
皐月があんなもの出せるわけないしな」

皐月
「……雅也、アンタにそこまで全否定されると、ちょっと虚しいわね」

雅也
「それじゃあ、いったい何だったんだろうな」

皐月
「そうねぇ……これは後で調べなきゃね」

雅也
「今じゃないのかよ」

皐月
「今は質問に答えないとね」

雅也
「あっそ……」

皐月
「そんな呆れたような顔して見ないでよ」

雅也
「いや、呆れてるんじゃない、哀れだと思ってるだけだ」

皐月
「そっちのほうが余計嫌だわ！」

ヴィヴィオ
「えーと、それじゃあお便りを紹介します」

雅也・皐月
「「……」」

メアリー
「ここで天然が出てくるとはな」

ヴィヴィオ
「？？」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ヴィヴィオ
「とにかく読むね。
ペンネーム・……これ、名前ないよ？」

皐月
「だったら名無しにするしかないわね」

ヴィヴィオ
「えーと、ペンネーム・名無しさん。
『前回、フェイトのエロチックなシーンがありましたが、もう少し詳しくやってみては？
たとえば、……とか○○とかはどうでしょう？』」

フェイト
「……バルディッシュ」

バルディッシュ
『Ｇｅｔ　ｓｅｔ』

雅也
「フェイトさん、ここで真・ソニックフォームにならないでください！
あと、急に出てきてスタジオを壊さないでください！」

フェイト
「そんなの関係ないよ。
今はあのお便りを書いた人をここに連れてきて……するんだから」

雅也
「フェイトさんがダークサイドに落ちたー！！」

フェイト
「……それじゃ」

ヒュンッ！

ドガシャーン！！

雅也
「あぁ……スタジオの天井が……」

皐月
「ものの見事に壊していったわね」

ヴィヴィオ
「えぇと、あの、その…」

メアリー
「まぁ、スタッフが何とかしてくれるだろう、次のお便りに行くぞ。
ペンネーム・烈火竜さん。
『キャラのツッコミのところは“銀魂”ぐらいのものにしないと』
……これは質問というより提案や改善点に近いものでは？」

雅也
「そうだな、貴重な意見だから参考にさせてもらうらしいぞ」

皐月
「それじゃあ、最後に……」

雅也
「な、なんで俺を見る？」

皐月
「ん？　さっきの続き」

雅也

「まだ言うかー！！」

ダダダダ……。

皐月
「あ、逃げるなー！！」

タタタタ……。

ヴィヴィオ
「あ、あはは……それでは本編をどうぞ」

皐月
「待ちなさ～い！！」

雅也
「いやだ～～～！！」

メアリー
「マスター……頑張れ」

雅也
「見てないで助けてくれ～～！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　新・機動六課　～

世界を巻き込んで起こった『世界大戦争』――。
この出来事を教訓として時空管理局で新しく設立されたのが、この新・機動六課なのである。

主に機動六課時と同じ古代遺失物――レリックの問題専門部隊であるが、他の仕事も行っている。
人命救助・絶滅危惧種の動植物の保護・時空管理――などなど。

そのため、陸・海・空の魔導師が集まっており、５００人以上という大規模に及んでいる。

――で、その新・機動六課を仕切っているのが……。

？？？

「みんな、お疲れさま」

局員

「「お疲れさまです、八神はやて隊長！！」」

はやて

「な、なんかその呼ばれ方、今だに慣れないんやけどなー」

と少し笑い気味に言っている彼女、八神はやてである。
しかし、はやてだけでは大人数をまとめるのは一苦労する。
ということで、はやてと共に仕切ることになったのが……。

？？？
「はいはーい、ごめんねごめんねー♪」
と言いながらやってきたのは、はやてと同じ茶色の長い髪をツインテールにし、さらに緑の長いリボンを髪に巻いている女性だった。
瞳は翡翠と瑠璃色のオッドアイである。

局員
「こ、これはファウニル・ローゼ隊長ではありませんか。
いったいどうされたのですか？」

ファウニル・ローゼ――彼女は隊長でもあり、戦後の時空管理局に設立を支援・援助してくれた1人でもある。
役職は執務官であり、彼女には相当な実力を持っているのだが、二尉扱いとされている。

ファウニル
「いやいや、ちょっと会議に必要な資料とか、提出しなきゃいけない書類を忘れちゃってね」

局員
「そ、そうでしたか」

ファウニル
「毎回ちゃんと確認してるんだけどねー、アハハ♪」

そう――彼女がなぜ二尉なのか。
それは、管理局での彼女の評判である。

会議に遅れる、書類などを大事なものを期日までに提出しない……。
といった悪いイメージが局員や上に定着しているため、彼女の扱いはこんな感じになってしまったのである。

ファウニル
「それじゃ、あとはよろしくね～♪」

そう言って、書類と資料を手にし出ていった。

辺りは資料やら何やらが散らばったままだった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　会議室　～

???
「……」

トントン……。

???
「……」

トントントン……。

???
「……」

トントントントン……。

室内には、足音を鳴らす音が響いていた。

その原点は、茶色のセミロングの髪を後ろで束ねている人だった。

瞳の色は紅と紫である。

その人は椅子に座っていた。

ガタンッ！

？？？

「遅いっ！　あの人は何をやってるんだ。

隊長同士の会議に遅れるなんて」

はやて

「まぁまぁ、そんなに怒らなくても」

？？？

「八神隊長はローゼ隊長に大して甘すぎます」

はやて

「そう言われてもなぁ……ローゼ隊長は、ああ見えて結構やってくれてるし……」

ガチャ。

ファウニル

「スミマセ～ン、遅れちゃいました～♪」

？？？

「ローゼ隊長、遅いにも程度ってものがあります」

ファウニル　　・・

「え～、まだ5分しか過ぎてないよ～」

？？？　　・

「……5分も過ぎてしまったんですよ、貴女のせいで」

はやて

「まぁまぁ、それくらいで許してあげて～な、マイアル・ナーゼ隊長」

マイアル

「……」

マイアル・ナーゼ――この人も助力してくれた1人である。

役職は執務官で、階級は三佐扱いとなっている。

性格は真面目なのだが、こう見えてファウニルとマイアルは母親の違う異母姉妹なのである。

実際、そう言われても信じられない者が多いそうな。

――ちなみに、ファウニルが姉でマイマルが妹である。

なぜローゼとナーゼで違うのかは後程話すということで……。

ファウニル

「昔は遅れても何も文句ひとつ言わなかったのにぃ～」

マイアル

「貴女という人は……自分の立場というものを考えてください」

ファウニル
「だってぇ～…」

マイアル
「だってじゃありません」

はやて
「あの～…」

マイアル
「何ですか？」

はやて
「そろそろ話し、始めたいんやけど」

マイアル
「こ、これは失礼しました」

2人は椅子に座り、はやては深呼吸した。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

はやて
「今日は大事な話があって集まってもらいました」

マイアル
「それは、この資料に書かれていた……」

と、マイアルは渡されていた資料をパラパラとめくった。

はやて
「そうです、今回は上層部で隠していた極秘任務についてです」

ファウニル
「でもそれって、テスタロッサ執務官が調べているのでは？
私たちは今、別の任務で忙しいんですけど」

ファウニルの口調が変わった。いつもはふざけているように見えるのだが、それは
・・
本当の彼女を知らない人の前だけで、親族などの前ではこんな感じになるのである。

マイアル
「……口調変わりすぎですって」

はやて
「せやな、ローゼ隊長が今“ＸＶ（１５）機関”っていう謎の組織のことについて調べてるのはわかってる。
それを踏まえたうえで今回ここに呼んだんよ」

ファウニル
「……どういう、ことですか？」

はやて
「実はな、匿名である情報が入ってきたんよ」

ファウニル
「……何と？」

はやて
「……今度、〇〇での特別講演で動く……てな」

ファウニル
「それは、確かなんですか？」

はやて
「最も信頼できる情報屋の人やからな、間違いないやろ」

ファウニル
「……」

ガタン……。

ファウニルは立ち上がり、ドアに向かった。

マイアル
「ローゼ隊長、どこへ？」

ファウニル
「あら、この口調の時ぐらい“ファウニル姉さん”て呼んでよね」

マイアル
「……ファウニル姉さん、どこへ？」

ファウニル

「どこって……隊に戻って指示するのよ、その組織――“シメオン製薬”、だっけ？
それを見張るようにってね」

ファウニルはそう言うと部屋を出ていった。

マイアル
「……スミマセン…ファウニル姉さんがあの状態になると、私でも止められません」

はやて
「まぁ、彼女の場合こうなることはわかってたからな、彼女にはアレだけ話そうと思ってたし」

マイアル
「それで……私にはどんな話があるんですか？」

はやて
「察しが早いみたいで……、実はな、さっき話してたことの続きになるんやけど
その講演会場には“彼ら”が来るみたいなんよ」

マイアル
「彼ら…と言いますと？」

はやて
「……管理局の上層部の人たちや」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

マイアル
「……ということは」

はやて
「ローゼ隊長とは別件てことで上層部を見張っててほしいんよ」

マイアル
「……もちろんです。
私の隊の担当は“管理局の不正調査”ですから」

はやて
「スマンな、こないなことさせて」

マイアル
「あの人がああですから」

はやて
「そっか」

話が終わり、マイアルが部屋を出ていった。

はやて　・・・
「……で、アンタはどないするつもりなん？」

パサ……という音とともに天井から誰かが降りてきた。
そう、その人物は優太であった。

優太

「そっちが今回みたいに依頼してくるなら、ね」

はやて
「ほっほぅ……そかそか。
で、どうするん？　一緒に行くんか？」

優太
「あっちは彼女に任せたからね、こっちは遠くから見物でもしてるよ」

はやて
「自分だけ高みの見物かいな」

優太
「ま、危なくなったら……ね……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

管理局の訓練場――そこに彼女、高町なのははいた。

なのは
「ふぅ……それじゃ、今日はここまで！」

「ありがとうございましたっ！」

なのははコンソールを動かしている。

「お、やってんな」

と言いながら、ヴィータがなのはのところにやってきた。

なのは
「ヴィータちゃん、どうしたの？」

ヴィータ
「今日のことについてちょっとな」

なのはの訓練にヴィータも参加していたのである。

なのは
「何か問題点でもあったの？」

ヴィータ
「ああ……」

なのは
「？？」

ヴィータ
「なのは、最近疲れてるんじゃねえのか？」

なのは
「にゃはは、大丈夫だよ。ちゃんと休んでるから」

？？？
「そんな感じには見えませんね。　むしろ無理しているのでは？」

なのは
「ふぇ！？」

ヴィータ
「あぁ、アンタから見てもそう思うか」

？？？
「えぇ、もちろん」

なのは
「え、えーと……綾華さんですよね？」

綾華
「はい♪」

なのは
「なぜここにいるんですか？」

綾華
「優太がはやてさんに頼まれてた用事を済ませるのについて来ちゃいました♪」

なのは
「そ、そうですか……」

綾華
「で、話を戻すと……なのはさんは少し無理してますね」

なのは
「無理なんて……」

綾華
「ここ1週間、訓練生のためのプランを明け方までしてましたね、しかも休息もせずに」

なのは
「そ、それは……」

ヴィータ
「それ、本当なのか？」

綾華
「はい、1日中――特に夜は目を離さないようにってフェイトさんに言われてますからね」

なのは
「フェイトちゃんが？」

綾華
「はい、フェイトさんに依頼されたんですよ、『なのはが無理しないように監視をしてください』ってね」

なのは
「も～……フェイトちゃんたら」

綾華
「まぁ、生徒のために一生懸命になるのもいいですけど、無理は禁

物ですよ」

なのは
「は、はい……」

綾華
「というわけで」

カタン……。

綾華
「フェイトさん、あとはよろしくお願いしますね」

フェイト
『スミマセン、なのはが迷惑をかけて』

そこには、モニター画面にフェイトの姿が映し出されていた。

なのは
「え……え……？」

ヴィータ
「どうやら、今までのこと全部通信機で聞かれてたみたいだぞ」

なのは
「えぇ～～～！？」

ヴィータ
「ま、頑張んな、あたしは先にあがってるから」

綾華
「私も失礼しますね」

なのは
「ちょ、ちょっと……」

フェイト
『なのは……ちょっといいかな？』

なのは
「あ、あの……弁解の余地は？」

フェイト
『な・し♪』

なのは
「ぁぅ……」

その後、フェイトの長い長いお話が始まったのである……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

フェイト
「……ってことだから、今後は無理しないように」

なのは
『にゃはは……はい…』

フェイト
「それじゃ……」

フェイトが通信を切ろうとした。

なのは
『フェイトちゃん！』

フェイト
「何？」

なのは
『フェイトちゃんも無理しないでね』

フェイト
「……うん」

なのは
『それじゃあ、また！』

ピッ……。

フェイト
「……なのは……」

通信が終わった後もなのはのことを心配しているフェイトがいた……。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月

「あとがき呼び出しコーナー！！」

雅也
「と、その前に……前書きに出てきたあのオバケ、いったい誰が呼び出したんだ？」

麗
「私ですが……何か？」

皐月
「麗さんがなぜ？」

麗
「ヴィヴィオさんの希望を叶えようと思ったので」

ヴィヴィオ
「あ、ありがとうございます……」

メアリー
「ヴィヴィオ、そこは礼を言うところではないぞ」

ヴィヴィオ
「そ、そうなの？」

皐月
「……ま、とりあえず、今回の呼び出しゲストを紹介するわよ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月

「それでは今回のゲストの紹介です」

ヴィヴィオ
「『魔法少女リリカルなのは　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　ｗｉｔｈ』のオリキャラ、ウィズさんです！」

ワァーーー！！

よっ！　待ってましたー！

最弱キャラ再び！

頑張れー負けんなー！

力のかぎーりー！

ウィズ
「やかましいわっ！」

アテナ
『まぁ、本当のことですから』

ウィズ
「ほんとのことって言うなーっ！」

ヴィヴィオ
「えーと、今回は……」

麗
「単刀直入に言えば、ウィズさんへの文句ですね」

ヴィヴィオ
「そんなんじゃないです！」

ウィズ
「でも、なんで文句なんか……」

麗
「別に、ただ私の鬱憤を晴らすためです」

ウィズ
「ひでーよ、それ」

麗
「まず、ウィズさんは最弱といっておきながらなかなか良い勝負をしている」

ウィズ
「そ、それが？」

麗
「幽霊たちを使って、あなたと勝負したいですね」

ウィズ
「何で！？」

麗
「最弱キャラをより最弱にする企画です」

ウィズ

「謹んでお断わりします！」

麗・アテナ
「『拒否権なし』」

ウィズ
「そんなーーー！！」

雅也
「えと……こんな感じでいいのか？」

メアリー
「良いと思います」

皐月
「いいんじゃない、本人も結構楽しんでるみたいだし」

ヴィヴィオ
「そうかな～？」

皐月
「ま、それはともかく……今回はここまでにしましょっか」

雅也
「ま、この企画を通せるのかってこともあるしな」

ヴィヴィオ
「それでは、次回もよろしくお願いします」

プツン……。

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第9話：あのキャラ登場（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。
希望などでもかまいません。

第１０話：破面　ｖｓ　幽霊＆死神代行（前書き）

※今回の戦闘シーンは、かなり頑張ってみました。

第１０話：破面　ｖｓ　幽霊＆死神代行

皐月
「え～、いつもならここで前書き質問コーナーなんですけど、今回はお知らせがあります」

雅也
「お、皐月からお知らせがあるだなんて珍しいな」

皐月
「いいでしょ、私が説明したって。　それとも私じゃ不満なの？」

雅也
「い～や～、べっつにぃ～」

皐月
「（ムカッ…！）ま、まぁ、こんな奴のことは無視して……さっそくお知らせの方に移ります。

まず、私たちに敵対する悪の組織がいることがわかりました」

ヴィヴィオ
「えっ！？　そうなの？」

皐月
「この前、フェイトさんのことについての質問があったでしょ？
そのお詫びに情報提供してもらってるの」

メアリー

「そうなのか、どおりで最近メッセージ数が多いのか」

皐月
「情報提供者の烈火竜さん、メッセージありがとうございます。
これからも感想を書いてもらえるとうれしいです」

フェイト
「もう少しいい描写が良いのかな？」

雅・皐・ヴ・メ
「えっ……？」

フェイト
「な、なんでもないよ、なんでも……」

皐月
「と……とにかく、謎の組織の登場は『ＢＬＥＡＣＨ』の世界での戦いが終わる辺りからになるみたいだから。
それまで楽しみにしててね」

ヴィヴィオ
「今、作者さんが考えてる設定に、悪の組織が加わるんだね。
なんかすごいなぁ～」

メアリー
「そうだな、何しろ悪の組織は今はまだ２つだけみたいだからな」

雅也
「そんなネタばらししてどうするんだよっ」

メアリー
「別にいいではありませんか」

雅也
「また口調変わったな……」

パァァァ。

メアリー
「この氷の刃を見ても言えますか？」

雅也
「わ、わかったよ。　しかも、俺の首に近づけるな」

メアリー
「わかればいいんです、わかれば」

雅也
（メアリーの奴、最近俺に厳しいような気がするんだけど……気のせいか？）

ヴィヴィオ
「ちなみに人気投票はまだ受け付けています」

皐月
「それじゃ、本編を楽しんでね」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

リア
「……」

リアは空座町を見渡せる場所から町を眺めている。

フラル
「リア様、準備が整いました」

リア
「そう…ご苦労さま」

フラル
「リア様、本当になさるおつもりですか？」

リアは黙っていたのでフラルがさらに聞く。

フラル
「ここから先は私がやります。　ですから……」

リア
「フラル……私のこれまでの人生に悔いはないわ。
ただ、ソナを1人にしてしまうことが心残りよ。
だから……私に、こんな酷なことを言わせないで…」

それから2人の会話はなくなり、目的の場所へと向かった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ソナ
「ッ！！！」

雅也
「ど、どうしたんだ？」

ソナ
「……」

ソナは無言のまま出ていった。

雅也
「あ、おい！」

雅也がソナを追い掛けようと外に出た。

雅也
「い、いない……」

皐月
「雅也！」

雅也
「皐月、ちょうどいいとこに……」

皐月
「早く来て！」

雅也
「ど、どうかしたのか？」

皐月
「奴らが……向こうから仕掛けてきたの！」

雅也
「なっ……！」

皐月
「それでアンタに連絡入れたのに何にも反応なかったから来たってわけ」

そこで皐月は気付いた。

皐月
「そういえば、あの子は？」

雅也
「えっ、えーと……」

皐月
「？？」

～　ただいま説明中　～

皐月
「い、いなくなったぁ！？」

雅也
「あ、あぁ……」

皐月はハァ～と溜め息を吐いた。

皐月
「アンタがついていながら何やってるのよ」

雅也
「そんなこと言われても……」

皐月
「そっちはカービィにでも任せて、アンタはこっちに来なさい。いいわね？」

雅也
「けど……」

皐月
「いいから早くっ！」

雅也
「お、おいっ！」

皐月は雅也の手を引いて出ていった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

リア
「……」

リアは今の光景を見ていた。

メノスたちが黒崎一護たちを攻撃している。

だが、そのメノスたちもあっという間に倒されていく。

リア
（やっぱり私には無理ね、彼らを倒すのは。

だったら……）

フラル
「リア様、死神代行の黒崎一護がこちらに向かってきています」

リア
「メノスとホロウをもっと行かせて。　あと、あなたも一緒に行きなさい。
死なない程度にやってきて」

フラル
「ですが、それではこちら側が手薄に」

リア
「いいから早く…！」

フラル
「……ハッ」

リア
「……」

……。

リア
「もう出てきてもいいんじゃない？　死神さん、それとも……」

？？？
「なーんだ、気付いてたのね」

そう言ってリアの目の前に声の主が現れた。

リア
「あなた……何者ですか？」

？？？
「あら、自己紹介がまだだったわね」

？？？
「天野麗……ただの通りすがりの幽霊よ」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

リア
「その通りすがりの幽霊が何の用？」

麗
「ある人からの指示でね、あなたを倒しにきたの」

リア
「あら、私を倒す？」

麗
「えぇ、そうよ」

リア
「……生憎、まだここで死ぬわけにはいかないの」

麗
「こっちも、あなたを倒すのは本意ではありませんが、あなたを実の姉のように慕っているソナさんのためにも……」

リア
「ッ！！　なぜそのことを？」

麗
「禁則事項なので教えられません」

リア
「そう、だったら……」

リアは鞘から斬魄刀を抜いた。

リア
「全力で聞き出すだけよ！」

麗
「ハァ……やっぱりこうなるわけね」

麗は大きな大きな鎌を手にした。

麗
「天野麗、これより目標（あなた）を駆逐します」

リア
「駆逐？　やれるものならやってみなさいよ！」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カービィ
「はあっ！！」

『ビーム』をコピーしたカービィが、ビーム波動でホロウを蹴散らしていく。

イヴ
「ドッペルゲンガー！！」

ホロウ
「ウガァァァァ！！」

イヴのドリルがホロウの身体を貫く。

イヴ
「何で僕までこんなザコを……」

カービィ
「とにかく、やられないようにして」

イヴ
「はいはい」

シュン！

その時、何かがカービィの横を通り過ぎていった。

カービィ
「？　今、何かが横切ったような……」

しかし、辺りを見回しても誰もいない。

イヴ
「カービィ、そっちに行ったぞ」

ホロウ
「ウガガガ～～！！」

カービィ
「おわっと……！」

カービィは向かってくるホロウに再びビーム波動を放った。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

フェイト
「ッ！？」

メノスを相手にしていたフェイトがカービィの横を通り過ぎる人影を見た。

フェイト
「あの容姿……もしかして……」

ヴィヴィオ
「フェイトママ、どうしたの？」

フェイト
「ヴィヴィオ、ちょっとここお願いできるかな？」

ヴィヴィオ
「うん、別にいいけど……」

フェイト
「ゴメンね」

フェイトはそう言って人影の跡を追った。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ガキン！　ガキン！

リア
「あなた…なかなかやるわね」

麗
「それはどうも……っと！」

ガキャアン！

リア
「くっ……！」

麗

「ちょっと、こんな攻撃で悲鳴あげるなんて……」

麗が大振りした大鎌を担いだ。

麗

「あ～あ、こんなんじゃもう勝敗は目に見えてるわね」

リア

「そんなに私の本気が見たいの？」

麗

・・

「えぇ、あなたの覚悟を見ない限り、こっちが困るからね」

リア

「そう……わかったわ」

リアは斬魄刀を前に出した。

リア

「映せ……万華鏡（カレイドスコーピオ）」

リアがそう言うと、彼女の腕が万華鏡のような形になった。

麗

「へぇ……それでどう攻撃するつもりなの？」

リア

「……」

麗

（あの落ち着いた感じ……先に仕掛ける気はないってこと？　だったら……）

麗
（こっちから仕掛けるまでよ！）

麗は間合いを詰めると、大鎌を思いっきり振った。

ガキィン！

麗
「なっ……！」

麗は確かに大鎌を振った。そして、相手は攻撃の構えをとっていなかった。

なのに今、目の前で大鎌が受け止められている。
しかも麗と同じ大鎌によって……。

麗
「な、なぜ……？」

リア
「……」

リアは無言のまま大鎌を動かし弾いた後、刃を麗に向けた。

麗
「……ッ！！」

麗はリアから離れると、大鎌をギュッと強く握った。

リア
「驚いた？　これが私の力よ」

麗
「そ、それが……？」

リア
「そんなに驚いてるんだったら本気出しただけはあるわね」

麗が改めて見ると、リアの右腕は大鎌になっていた。

リア
「これこそ、私の帰刃（レスレクシオン）――万華鏡よ」

麗
「……」

リア
「これはね、相手の武器を写し取って自分の力にすることができるの、今みたいにね」

麗
「……」

リア

「ま、1度でも写し取ったものは何回でも使うことはできるんだけどね」

麗
「……」

リア
「さっきから黙り込んじゃって……そんなに驚いて口に出ないの？」

麗
「……」

リア
「そう……何も言わないのね」

麗
「……」

リア
「それなら……自分の武器で逝っちゃいなさい！！」

今度はリアが近づいてきた。

リア
「はあぁぁぁ……！」

麗
「……」

リア
「あぁぁぁぁ……！」

麗
「……」

リアと麗との間の距離は、残り5、4、3、2、1……。

麗
「……ま、こんなものだと思ってたわよ、最初からね」

リア
「ッ？！」

麗の言葉に一瞬動きを止めた。

麗
「あなた……私が最初にしたこと、覚えてる？」

リア
「最初にしたことって、その大鎌で攻撃したことでしょ？」

麗
「ブッブ～、残念でした～」

リア
「えっ？！」

麗
「正解は……、

『貴方の腕に抱かれて眠るようにして術をかけたこと』でした～」

リア
「何、今の台詞？　完璧にパクッてるとこ、あるわよね？」

麗
「そうだったとしても、そんなことを気にしてる暇はないわよ」

リア
「何ですって？」

麗
「ほーぅら、身体がだんだん痺れてこない？」

リア
「ふんっ、そんなはずあるわけ……」

ビリッ！

リア
「ッ？！」

麗
「あらあら、そのリアクションからだと痺れを感じるようになったみたいね」

リアの身体は、まるで（けいれん）したかのようにピクピク動いている。

リア

「な、何を……した……の？」

麗

「簡単なことよ。　最初の一撃の時にマヒ効果のある術を瞬時にかけただけ。
ま、あなたには今頃になって効き目が現れはじめたみたいだけど」

リア

「ひ、卑怯（ひきょう）な……」

麗

「卑怯？　これくらいで卑怯とかって言ってるようじゃまだまだ青いわね」

麗は動けないリアの身体を容赦なく斬る。

リア

「ぐあっ！！」

麗の攻撃が止むことはなかった。
何回も何回もリアの身体を傷つけていく。

そして、麗はリアの喉元に大鎌の刃を近付ける。

麗

「私よりも残酷な人がいるんだからね」

麗はピッタリと喉元にくっつけた。

リア
「う……あ……」

麗
「さようなら……名も知らないアランカルさん……」

リア
「……ッ！！」

……。

……。

リア
「……？」

リアは死ぬことを覚悟していたが、いつまで経っても攻撃してこない。

というか麗は大鎌を仕舞った。

麗
「……ま、今回はあの子に免じて殺らないでおいてあげる」
・・・
麗はリアの後ろの方を見て言った。
リアはマヒした身体で後ろを見ると……、
リア
「あ……あ……！」
そこにはリアが会いたがっていたソナの姿があった。
リア
「ソ、ソナ……なの？」
ソナ
「リア…お姉ちゃん……」
麗
（さてと……それじゃ私も……）
と思い麗が立ち去ろうとした。
？？？
「哀れだな、リア」
リア
「！！？」

リアは声がした方を見た。
麗もつられるようにリアと同じところを見ていた。

リア
「……ザグランブラー…」

ザグランブラー
「感動の再会のところ、悪いんだけどね……君には消えてもらうよ」

リア
「！！！！」

奴は一瞬でリアとの距離を詰めた。

ザグランブラー
「……死にな」

麗
「ちっ……」

麗はリアを――姉妹を助けにいこうとした。
が、このままでは間に合わない……。

ソナ
「リアお姉ちゃん！！」

ガキィン！

ザグランブラー

「……」

麗
「なっ……！」

リア
「え……？」

ソナ
「あ……」

ザグランブラーの刀を寸で受け止めている一護の姿があった。

一護
「何とか間に合ったみたいだな」

ザグランブラー
「黒崎……一護」

一護
「テメェか、この世界を壊そうとしてるって奴はよ」

ギギギ……

ザグランブラー
「……ならば、どうするというのだ？」

ガキァン！！

一護はザグランブラーの刀を弾き飛ばした。

一護
「決まってんだろ……」

サ……

一護は斬月をザグランブラーに向けた。

一護
「テメェを潰すだけだ」

ザグランブラー
「……そうか、ならば……」

ゴオオオオ!!

一護
「っ!?」

ザグランブラーの身体から大量の霊圧が溢れ出ていた。

ザグランブラー
「死神代行よ……いいとこに来たな……貴様を潰したくてウズウズしてたとこだったからな。
楽しみに待ってろ……自分の死をな」

そして、ザグランブラーの下半身は獅子のようになり、右にはトライデント、左には盾を持っていた。

麗

（こ、これは……ライオン……）

ザグランブラー
「さて……始めようか、死のゲームをな……」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

フェイト
（向こうにも連絡したし、もう少しで……ッ！！）

フェイトはその場に立ち止まった。

フェイト
「こ、これは……」

フェイトは目の前の光景にただ唖然としていた。

一護がライオンのような人物――ザクランブラーと戦っていた。

だが、それは一方的だった。

一護は攻撃を防ぐ一方、向こうはトライデントで容赦なく攻撃してくる。

ザグランブラー
「どうした、そいつらを守ってると自分がやられちまうぞ！」

一護
「くそ……！」

フェイトが一護の後ろを見ると、２人――リアとソナを守るようにして攻撃を防いでいた。

ザグランブラー
「おら……おらおらぁぁあああぁ！！」

？？？
「……刈るよ……死神之黒大鎌（ブラック・デスサイズ）」

フェイト
「え……」

フェイトはその声のした方を向こうとしたが、彼女の横を猛スピードで通り過ぎ……。

ザシュッ！！

ザグランブラー
「ッ！？」

ザグランブラーの獅子の身体を斬り付けた。

ザグランブラー
「この身体に傷をつけるとは……貴様、いったい何者だ？」

？？？
「私？　私はただの通りすがりの幽霊……で、そこにいる姉妹の

友達の…麗よ」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

フェイト
「麗さん！？」

麗
「あら……そこにいるのはフェイトさんじゃない」

・

麗は今、フェイトに気付いたような言い方をした。

フェイト
「あなたこそ、どうしてここに？」

麗
「ま、それはあとで話すわ。　それよりも……」

麗はリアとソナを抱えると、フェイトのところに連れてきた。

麗
「この2人……とくに傷ついてる彼女の手当てをお願いね」

フェイト
「え……え？」

麗
「それじゃ♪」

フェイト
「あ……！」

フェイトが言い終わる前に、麗は再びザグランブラーの目の前に行ってしまった。

一護
「な、なんでアンタがここにいんだよ？」

麗
「ん？　ちょっと優太（アイツ）に頼まれちゃってね。
貴方たちの様子を見るつもりがこんなことになっちゃったの」

一護
「こんなって……」

麗
「ま、助けたのはあの時のことを思い出したのもあったんだけどね」

あの時――麗の言うあの時とは、一護と戦ったときのこと（前シリーズの第１０５話　を参照）だった。

麗
「あのとき、貴方に負けちゃったでしょ？
あのときから少し強くなったから、ちょっとその成果を見せたくてね」

一護
「アンタ……」

麗
「ま、これで貸し１つ…ってことで」

麗は少し頬笑んだ。

麗
「で、その貸しをこの戦いで返してもらおっかな」

一護
「……あぁ、いいぜ」

一護は卍解した上から虚化をした。

一護
「アンタには、あとで礼を言わせたい奴もいるしよ」

麗
「そ……」

ザグランブラー
「話は終わったか?」

一護
「ああ……」

ザグランブラー
「そうか……」

ダンッ!!

ザグランブラー

「だったら死ねェェェ～！！」

ガキィン！！

ザグランブラーの攻撃を麗が受け止めた。

麗

「貴方……まだわからないの？」

ザグランブラー

「な……何がだ？」

麗

「彼……もう貴方じゃ適わないわよ」

ザグランブラー

「何を言うか！　俺は奴よりも……」

麗

「強い？　んなわけないでしょ。

貴方みたいな誰かがやった後にしかやろうとしない奴に、彼が負けるわけない」

麗は大鎌を振ると、ザグランブラーは吹き飛ばされた。

麗

「あとは……軽く逝っちゃいましょっか……」

麗は大鎌を掲げた。

麗
「怯えなさい……恐怖の死神の鎌……」

ザン！！

麗が大鎌を斬り付けたが、傷ひとつ付いていない。

ザグランブラー
「はは……こんなの痛くもかゆくもないわ！」

麗
「そう思ってられるのも今のうちよ」

ザグランブラー
「何……？」

ドクン！

ザグランブラー
「うっ……！」

ザグランブラーは胸を押さえ、苦しそうな息遣いになっていた。

ザグランブラー
「ハアッ……ハアッ……き、貴様…な、何……を……した？」

麗
「あら？　何って、貴方の心臓を幽霊・死神の力で極限に弱くしたまでよ」

ザグランブラー
「何……？」

麗
「そう…“恐怖の死神の鎌”はね、斬った対象の命を極限まで縮める究極の技よ。そして、そんな状態で身体を動かしたら……待っているのは“死”のみよ」

ザグランブラー
「く……」

麗
「あとは……」

麗は奴の後ろにいる一護に目をやった。

一護
「悪ぃな、こんなやり方でよ」

一護は天鎖斬月を構えた。

一護
「月牙…天衝！！！」

黒い斬撃がザグランブラーに向かっていく。

ザグランブラー
「おのれ……おのれェェェ～～～！！！！」

ザグランブラーは一刀両断され塵になり、そして跡形もなく消えて

しまった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一護
「……」

麗
「……」

フェイト
（す、すごい……）

リアの治療をしているフェイトは、２人の姿を見て驚いていた。
あの２人にかかれば怖いものなしの強さだったからだ。

麗
「奴が死んで彼女が戦えない以上、戦う必要はないわ」

一護
「そうだな……」

麗
「……それじゃ、私はこれで…」

一護
「待てよ」

ピタ……

麗は足を止めた。

一護
「アンタ……何でここに来た？」

麗
「だ・か・ら、それはさっき……」

一護
「違うな、アンタがここに来たのはそんな理由じゃねえ。
アンタはそこの2人が心配で来た」

麗
「ッ！！？」

一護
「……ま、このことは他の奴らには黙っててやるよ。　だからさっさと行け。
アンタは早くここからいなくなったほうがいいんだろ？」

麗
「……」

一護
「……今度は皆の前にちゃんと出てこいよ」

麗
「……えぇ」

そして麗は姿を消した。

こうして破面・ザグランブラーとの戦いは幕を閉じた……。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

雅也
「終わったな……」

皐月
「終わったわね……」

メアリー
「終わらせてしまったな……」

ヴィヴィオ
「えぇ～と、次回で『ＢＬＥＡＣＨ』編は終わりになります」

フェイト
「そして、新たな世界での戦いが始まります」

ナオ
「ていうか、出番少なすぎ！」

リマ
「まぁまぁ、落ち着いて」

冬獅郎
「安心しろ、俺のほうが出番少なかった」

恋次
「つーか、俺活躍してねーよな？」

カービィ
「ちなみに、次の世界はどこにするか考えてません」

イヴ
「いい加減だなぁ」

銀時
「テメーが言うことかよ」

ティアナ
「ハァ～…バカばっか…」

チンク
「確かにそうだな」

雅也
「え、えーと……今更ですけど、今回の『あとがき呼び出しコーナー』はお休みです」

皐月
「ていうか、次の世界はどこにするのよ？」

雅也
「ど、どこでしょう……」

ヴィヴィオ
「次回までには発表できるようにします！」

メアリー
「というわけで今回はここで終わりだ」

皐月
「こんな感じでいいの？」

プツン……。

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第１０話：破面　ｖｓ　幽霊＆死神代行（後書き）

※もし、この世界の話が見たい・読みたい！というのがあれば、『感想を書く』かメッセージをください。
よろしくお願いします。

第１１話：２つの組織（前書き）

※今回は次回のための話ですので、要チェックです！！

第11話：2つの組織

皐月
「さーて、前書き質問コーナーのお時間になりました！」

雅也
「て言っても質問は2つしか来てないけどな」

皐月
「それでも来ないよりは来たほうがいいでしょ？」

雅也
「ん……ま、まぁな」

皐月
「わかればよろしい。
てことでヴィヴィオ、お願いね」

ヴィヴィオ
「え～とね……まず最初の質問はこれです。
『学園ものが出るということは、この小説でヴィヴィオたちの学園生活が見られる機会があるということですか？』」

メアリー
「確かに、一部を除いて考えてみると、ほとんど学園を舞台にした作品ばかりだな」

雅也
「それじゃ皐月たちのあの姿が見られるのか？

制服を着てる皐月とヴィヴィオの？」

皐月
「こらこら、まだ学園生活が描かれるって言ってないでしょ。勝手に決め付けて話を進めないでよ。……それで、作者さんはどうしたいの？　私たちの学園生活を書きたいの？」

作者
「それはですね……」

皐月
「それは……」

作者
「じ・つ・は……」

皐月
「……（ゴクン）」

作者
「ばっちしやります」

ドンガラガッシャーン！！

作者
「あれ？　何で派手に椅子から転げ落ちてるの？」

皐月
「へ、変な言い方した作者が悪いんでしょ。

何か息詰まってるみたいだったから、てっきりやらないと思ってたのに」

作者
「いやね、今回の小説のメインは雅也・皐月・ヴィヴィオ・リマ・ナオにしたいなあって考えててね。
ま、あとで増えるかもしれないけど」

雅也
「増やすんですか！？
これでいてまだ増やそうとしてるんですか！？」

作者
「烈火竜さんから提供してもらった悪の組織に、あともう1人くらい加えたいしね」

雅也
「そっちかぁぁぁぁ！！」

ヴィヴィオ
「私たち3人とナオさん・リマさんがメインになるのは分かるけど、悪の組織を増やしたいって考えたのは何で？」

作者
「別小説で出してる無口キャラが人気があってねー、ちょっとそのキャラも入れたいなぁ……なーんて考えちゃったんだ」

メアリー
「そんなキャラがいたら面白いだろうが、考えられるのか、今の状態の作者に？」

作者
「そ、それは考えられるよ……たぶん」

メアリー
「自信がない声を出さないでくれ」

作者
「そんなこと言われても……」

皐月
「はいはい、話が進まないから次の質問にいくわよ。

『作者さんは学園ものをもう1つ出したいと言っていましたが、どの作品にするのか決まったんですか？』

……それで、何にするか決めたの？」

作者
「いや、まだっていうか決めかねているっていうか……その……たくさんあるっていうか……」

雅也
「要するに、出したいものがたくさんありすぎて選べない……と」

作者
「簡単に言えばそうだね」

皐月
「それで、候補に何があるのよ？」

作者

「えーとね……」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　学園もの出展候補　～

・ハヤテのごとく！

・ロザリオとバンパイア

・めだかボックス

・けんぷファー

・１１ｅｙｅｓ

・生徒会の一存

・プリズム・アーク

・すももももも！！

・涼宮ハルヒの憂鬱

・らき☆すた

作者
「とまぁ……こんな感じかな」

雅也
「おいっ、最後の2つは書いてるときに思いついたやつだろ。
そんなもの採用させるわけにはいかないから」

ヴィヴィオ
「しかも、タイトルにあわせるとすると、ちょっとね」

皐月
「それに、『出演作品を新たに』とか言ってたのに、初めの2つは
前作にも出てたわよね？」

作者
「ま、まぁ、一応学園ものってことで候補にあげてみたんだけど…
……」

メアリー
「しかも、今はまだ漫画でしか出ていないものも出そうとしてるぞ」

作者
「こ、候補として……ね……」

全員
「候補あり過ぎ……」

皐月
「ま、この中から何にするかだったら……『１１ｅｙｅｓ』かな。
この作品のイメージにピッタリだし」

ヴィヴィオ
「私はどれでもいいよ。
作者さんが考えたものだったら大丈夫だよ」

作者
「いや……決めかねているからこうしてるんだけど」

メアリー
「『けんぷファー』というのは何なのだ？」

皐月
「それはね……」

〜　説明中　〜

メアリー
「きゃ、却下だ！　そのようなものぜーったいに却下だ！！」

皐月
「ま、デリケートなメアリーはそうなるわよね。
それに決めるのはメアリーじゃなくて作者だから」

雅也
「あの……」

皐月
「何よ、なんか悩み事？」

雅也
「俺が作品について発言は控えさせていただきます」

皐月
「あっそ……ま、それが懸命かもね」

ヴィヴィオ
「雅也くんはやさしいイメージを守ってもらいたいもん」

メアリー
「マスターを黒く染めたくはありませんからね。
発言を控えるのは当然です」

雅也
「……なんか、さり気なくひどいこと言われてるような気がするのは俺だけ？」

作者
「ま、まぁ、気にしたら負けだよ」

雅也
「何に！？」

メアリー

「で……結局何にするのだ？」

作者
「この小説のテーマは……１つは『復讐』。
そして、もう１つは……」

皐月
「もう１つは？」

作者
「まだ考えてない」

ガシャガシャガッシャーン！！

作者
「随分と物を散らかしますね」

皐月
「アンタがさせてるんでしょーがァ！！」

雅也
「早く決めちゃいなよ。
話が進まないって苦情が来るぞ」

作者
「そうだねぇ……。
それじゃ、やっぱり『１１ｅｙｅｓ』と『けんぷファー』にするよ」

皐月
「１つじゃなくて２つになったしね」

作者
「いやぁ～、最近観てるんだけど、前者は戦闘シーンがあってこの作品にあってそうな気がするし、後者はアレを書けそうな気がするからねぇ。
最終的にはどっちにするかで迷ったんだけど、両方にするよ」

雅也
「それでいいのか」

作者
「いいんです！」

雅也
「……」

メアリー
「作者、『やっぱり』ってどういうことだ？
まさか、最初から決めていたのでは？」

作者
「そんなわけないですよ。
これでもかなり、かなーり迷ったんですよー」

メアリー
「そんなふうには見えないのだがな」

作者
「ま、まぁ、それより本編の方に行きましょう」

雅也
「今回で『ＢＬＥＡＣＨ』編は終わります」

ヴィヴィオ
「そして次なる舞台となるところはいったい……」

皐月
「目が離せない今回の話に注目してね♪」

メアリー
「それではどうぞ」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一護
「……【まさか、アイツ（麗）があんなにやってるなんて思ってもなかったぜ。
それに、あの野郎（ザグランブラー）もやってたなんてよ】」

雅也
「……」

ソナ
「……」

皆は浦原商店に集まっていた。
麗に攻撃され、その後ザグランブラーに攻撃されたリアは死ぬ寸前のところまで来ていた。
その治療をするため、浦原商店に来たのだ。
そして、部屋から浦原が出てきた。

フェイト

「彼女の容態は？」

浦原
「幸い治療が早かったんで命に別状はありませんが、かなり傷を負ってたみたいですからねえ……目覚めるかどうか」

ナオ
「そ……そんな……！」

リマ
「何とかならないんですか？」

浦原
「そう言われましてもねぇ……手は尽くしたんで、あとは彼女次第かと……」

ソナ
「リアお姉ちゃん……！」

ソナはリアの眠っている部屋へと入っていった。
その後に続くようにして一護たちが入っていった。

夜一
「で、お主（ぬし）は行かないのか？」

人間姿の夜一が声をかけたのは、フラルであった。

フラル
「私は……リア様のことについて話します……いえ、話させてください」

夜一は『ほぅ……』と言うと、フラルの傍に座った。

フラル
「リア様は、この戦いを一刻も早く終わらせたかった……望んでないこんな戦いを……。
たとえ無茶をして自分の身が滅びようとも……」

夜一
「お主も奴の傍にいた者であり、身の安全を考えていたんじゃろ？」

フラル
「……」

フラルは俯き無言のままであったが、小さく頷いた。

夜一
「主たちは戦いを拒んでいた。　だが、アヤツはそれを考えていなかった。
『復讐』という名の邪悪なものに取り付かれ、空座町を自分のものにするために戦いたくない者を巻き込んでこのようなことになった」

フラル
「……」

夜一
「しかし、それでも反対したい……そう思っていた者も少なくはない……」

フラル
「……確かに、ザグランブラーの行動・考えに反対していた者もいました。
ですが……」

夜一
「皆……殺された……」

フラルは悲しい顔をして頷く。

フラル
「アランカルの頂点にいたザグランブラーは反乱者とみなして次々と消し去っていったのです。
その中に、リア様を慕っていたソナ様のご両親が……」

夜一
「それで、彼女を自分のところに？」

フラル
「……フラル様は後悔してました。
自分が何もしなかったからこうなったと……もっと自分自身に力があればこうならなかったと……」

夜一
「後悔……のぉ……」

フラル
「ですが、ソナ様はそのことを気にすることもなく、ただただリア様のことを母親のように……姉のように慕い……そして……反逆者の生き残りと知ったザグランブラーは……」

夜一
「殺そうとした……」

……。

フラル
「それからのことは、貴方たちの方がお分かりですよね？」

夜一
「ま、そうなるじゃろな」

夜一は、今だに目を覚まさない彼女の部屋の方を見た。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

1人の少女は、姉と慕っていた彼女の傍にいた。
そして、彼女の手をギュッと握り締めた。

まるで、妹が死にそうな姉が助かるのを祈るかのように……。

そんな中、少女の願いが通じたのだろうか、彼女の指がピクッと動いた。
少女は目を大きく見開くと、彼女の顔を見た。

そこには少女の期待に応えるかのようにして笑みをこぼす彼女の笑顔があった。

そして……少女は……彼女に泣き付きながらこう言った。

『よかった……ほんとによかった……！』と……。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

フェイト
「とまぁ……そんなわけで、こっちは解決したよ」

なのは
『そっか……大変だったんだね』

フェイトがなのはに通信の際、今までのことを話した。

フェイト
「でもこれから2人……いや……3人は幸せな時間（とき）を過ごすよ」

なのは
『そうだね……そうなるといいね』

フェイト
「そういえば、はやては？」

なのは
『あぁ、はやてちゃんならさっき呼ばれてたよ。
何でも急な話みたい』

フェイト
「そう……」

～新・機動六課　会議室～

はやて
「い、いま……なんて……？」

マイアル
「上層部が……ある組織を潰しにかかりました」

はやて
「ある組織って……？」

マイアル
「『竜の爪』……と言ってました」

はやて
「『竜の爪』？　聞いたことないなぁ。
で、何でそんなことを？」

マイアル
「理由はまだ何も……ただ……」

はやて
「ただ？」

マイアル
「ＸＶ機関とハラオウン執務官が調査している上層部の極秘任務の

件について関係しているみたいで……
『ギガロマニアックス』とか…『副葬処女（アスラマ・キーナ）』とかって言ってました」

はやて
「そか……」

マイアル
「あと、シメオン製薬についてですが……ローゼ隊長によると1人の神父を狙ってるとか」

はやて
「で……その名前は？」

マイアル
「『ブレイド』……『アダム・ブレイド』……」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？
「……」

黒いフードを被った人物が何かを見ていた。

？？？
「何をしてる？」

そこにもう1人、フードを被った人物が現れた。
声からすると男のようである。

？？？
「……あいつら、いったい何者だ？」

フードの人物が見据える先には、仮面を付け竜を象った黒い大鎌を担いだ人物がいた。

???

「さぁな。　だが、我々と目的が違うようだ」

???

「あぁ、たしかにそうだな」

???

「で、これからどうすんの？」

そこにまたもやフードを被った人物――声から女――がやってきた。

???

「貴様……ここで何をやってる？　『コーティカルテ』から目を離すなと言ったはずだ」

???

「え～～、ずーっと見張ってるのは疲れるよぉ～」

???

「おまえな……」

???

「で、こっちはどうなの？　もしかして、また失敗したの？」

???

「んなわけあるかぁ！」

？？？
「あらあら、怒っちゃった♪」
？？？
「てめぇ……！」
？？？
「そこまでにしておけ」
？？？
「けどよ……！」
？？？
「貴様はこのまま奴ら……『ギガロマニアックス』たちと『ニードレス』たちを見張ってろ。
せいぜい、あの仮面の奴に邪魔されないようにな」
？？？
「ちっ……わかったよ」
？？？
「おまえも『コーティカルテ』の見張りに戻れ。
他の奴らも見張りの仕事をしてるんだからな」
？？？
「はいはーい♪」
フードを被った人物たちは、それぞれの仕事に戻っていった。
ｇｏ　ｔｏ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ　……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「えーと……」

雅也
「今回は、なかなかの話で……」

ヴィヴィオ
「すごいよ、一気に悪の組織が出てきたよ」

メアリー
「すごい……というより、無理矢理……という部分があった気がするのだが」

雅也
「まぁ、そうだけどな。
それより、今回のあとがき呼び出しコーナーは……」

皐月
「あ、またお休みらしいわよ」

雅也
「……もうネタがなくなってきたのかよ」

ヴィヴィオ
「でも、次回辺りには出せるようになってるよ……たぶん」

メアリー
「たぶん……か」

皐月
「てなわけで、次の作品への伏線が３つできたわね」

雅也
「あぁ……『ＣＨＡＯＳ；ＨＥＡＤ』・『ＮＥＥＤＬＥＳＳ』・『神曲奏界ポリフォニカ・グリムゾンＳ』だな」

ヴィヴィオ
「イヴさんがいるから、『ＮＥＥＤＬＥＳＳ』かな？」

メアリー
「だが、『ＣＨＡＯＳ；ＨＥＡＤ』の単語が使われていた気がするが」

皐月
「全部ってこともあるかも」

雅也
「ま、これでどの作品が出るのか大体わかったからな」

皐月
「次回に期待しましょ」

ヴィヴィオ
「そうだね」

雅也
「てことで、今回のあとがきはここまでってことで」

メアリー
「次回もよろしく」

プツン……。

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第11話：2つの組織（後書き）

※えー……どれになるかは次回までのお楽しみということで、よろしくお願いします。

第１２話：次なる世界へ…（前書き）

※今回は『前書き』はありません。そのまま本編に入ります。

第12話：次なる世界へ…

～　???　～

???

「はぁ～……」

フードをかぶった――声からして女がため息を吐く。

???

「どうした、ため息なんかついて」

その横では、もう1人のフードの人物――声からして男が言う。

???

「ふぇ？　あ、あぁ、ちょっとね」

???

「……まぁいい、それよりおまえに話がある」

???

「話って何の？」

???

「“アレ”だ……」

???

「“アレ”って……“アレ”のこと？」

？？？

「そうだ……ついに“アレ”を出す」

？？？

「そっか……“アレ”が出るんだ……。それで、どこで――どの世界で出すの？」

？？？

「それはまだ決まってない……」

？？？

「え～～～、何で？」

？？？

「それは……奴らが活動してるからだ」

？？？

「奴ら？　どこのどいつよ、あたしたちの邪魔をするのは！」

？？？

「『竜の爪』……といえばわかるか？」

？？？

「なぁに、その『竜の爪』って？」

？？？

「わからん。

奴らはここ2、3年の間に影で活動をしていた組織で目的はわかっ

ていない」

？？？

「ふーん……それで、そいつらは今どこにいるの？」

？？？

「いろんなとこにいる。
この世界にもいるだろう」

？？？

「ふぇっ、そうなの？」

？？？

「で……話は変わるが、こっちで不審な動きはなかったか？」

？？？

「不審な動き？」

女はウ～ンと唸りながら思い出していた。

？？？

「特にこれといっては……あ！」

？？？

「何かあったのか？」

？？？

「いやぁ、大したことじゃないんだけど」

？？？

「いいから話してみろ」

？？？

「う、うん……」

女は1度深呼吸した。

？？？

「あたしがこっちに来てすぐなんだけどね……3人くらいこの世界にやってきたんだよね」

？？？

「そいつらはどんな格好をしてた？」

？？？

「う～んとね……」

女はまた唸りながら思い出していた。

？？？

「1人はピンクのポニーテールの女で……あ、青い獣もいたよ」

？？？

「獣……だと？」

？？？

「うん」

男は少し考えた後、話を進めるよう促した。

？？？
「えーとね、もう1人はね仮面とマントをつけててね、こーんなに小さかったよ」

女は仮面の人物の身長を、手で表現した。
だいたい５０センチくらいだろうか。　それくらい小さい人物だったのだ

？？？
「……なるほどな、それであと1人は？」

？？？
「うーんとね……とーってもきれいな女の人だったよ」

？？？
「ほぅ……」

彼女がフードをとった時の姿を見ていた男は、こいつが言うくらいきれいだったら1度会ってみたいものだ、と思った。

？？？
「その人ね、『今は妹たちと離れているけど、いつかは本当の姿で会いたい』って言ってたよ」

？？？
「“本当の姿”？　どういうことだ？」

？？？
「さすがにそこまでは聞かなかったよ。　プライベートなことには口を挟みたくないから」

？？？
「……こんなことをしてるのに、よくそんなことが言えるな」
？？？
「べ、別にいいでしょ！」
男はハイハイと言って話を切った。
？？？
「で、その女の特徴は？」
？？？
「特徴っていうと、あの人たぶん『戦闘機人』だよ」
？？？
「『戦闘機人』……だと？」
？？？
「うん、身体から魔力が溢れ出てたから間違いないよ」
？？？
「そうか……」
男は考え込んだ。
？？？
「ピンクのポニーテールの女に青い獣、マントと仮面をつけた小さい奴に戦闘機人の女……」

男は、今までの話からその人物を割り出そうとしていた。

そして……。

？？？

「……そうか……奴らか」

？？？

「え、何かわかったの？」

？？？

「あぁ、でもその前に……」

男は握り拳を作った後、女の頭にその拳を振り下ろした。

？？？

「痛ッ！！　何すんのよ！？」

？？？

「そういう小さいことでも報告しろと言ったはずだ」

？？？

「だってぇ……」

？？？

「お前がこの世界に入れた人物は、とんでもない奴らなんだからな」

？？？

「どういうこと？」

女は殴られたところをさすりながら尋ねた。

？？？

「そのままの意味だ。

……予定を変更しないといけないな。

それと、さっき言ってた“アレ”だが……今決めた」

？？？

「え、どこにするの？」

？？？

「ここだ」

？？？

「ふぇ？」

？？？

「この世界だ？」

？？？

「……ほんとに？」

？？？

「あぁ」

？？？

「……マジで？」

？？？

「マジだ」

？？？
「……そ、それじゃ、あたしはこれで……」
？？？
「待て」
がしっ！
？？？
「ふぇぇぇえ！？」
？？？
「逃げるな」
男は女のフードを掴んだ。
？？？
「だ……だってぇ……」
？？？
「お前がまいた種だ、お前がいなくてどうする？」
？？？
「ふぇぇ～……わ、わかったよぉ……」
女は半泣きしてるような声で答えた。
？？？
「さて……どうなることやら」

男は辺りを見回した。

――世界は、こんなにも汚れているのか……。

男は心の中でそう思った。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

はやて

「それで、そっちはどんな感じなん？」

はやてはモニターに映っている者と話していた。

『今のところ問題はありません』

その者はまさに騎士の甲冑を身に纏い、容姿鍛錬だった。

はやて

「こんな仕事させてもうて……ごめんな、シグナム」

そう……はやてと話していたのは、ヴォルケンリッターの1人、剣の騎士・シグナムだった。

はやて

「ほんとはフェイトちゃんに頼むつもりやったんやけど、ちょっと向こうも急がしそうやから」

シグナム
『いえ、主の頼みですから。　それにテスタロッサの事情も分かっていますから』

はやて
「……ところで、ザフィーラはどないしてる？」

シグナム
『この世界を探索しています』

はやて
「まさかやと思うけど、獣の姿じゃ……」

シグナム
『いえ、人の姿で行動してますからご安心を』

はやて
「そっか……それなら安心やな」

いやいや、別の意味で危ないのでは？

はやて
「……今、誰かの声がしたような……ま、気のせいやな」

シグナム

『しかし……』

はやて
「何か気になることでもあるん？」

シグナム
『いえ、ただ本当にこの世界に奴らが行動するのかと』

はやて
「せやな、でも確かやろな」

はやてがシグナムとザフィーラにある世界の調査を頼んだ。

理由は、ある情報屋からのものだった。

――奴ら……『竜の爪』と『ＸＶ機関』がある世界で活動する……と。

この情報は信頼できる人物からのものなので間違いない。
しかも、２つの組織がからんでくるとなれば管理局も黙っているわけにはいかない。　世界的に問題になっていることでもあるので、上層部に話す必要がある。

しかし……

『たとえその情報屋が信頼できるとしても、あくまで“情報”だ。
確固たる証拠がない以上、君たちが動くことは許可できない。
我々で調査を行うまで待機だ』

と、軽くあしらわれてしまった。

そのため、はやてたち隊長陣は動くことができない。

そこで、その世界に行くことになっていたシグナムとザフィーラに調査をお願いしたのだ。

はやて
「そや、あの子たち（元ナンバーズ）から連絡があってな、その世界にいるらしいんよ」

シグナム
『いる、というと、誰がですか？』

はやて
「……」▼▼▼

らない。
それどころか、本来の私の人格――人を殺すこと――が今にでも出てきそうだった。

???

「ドクター……」

『君がやりたいようにやればいいさ』

……そんな言葉が聞こえたような気がした。

???

「私がしたいこと……いったい何なのでしょうか」

私は誰もいない、この場所で言っていた。
誰も聞いてくれるわけではないのに……。

???

「探せばいい」

???

「え……」

私は振り返った。

そこには、小さい身体に仮面とマントを身につけた人（……人かしら?）がいた。

???

「……見つかるわけありません」

？？？
「なぜ、そんなふうに決め付けるんだ？」
？？？
「……昔、私はしてはいけないことをした……人を殺すといういけないことを……」
？？？
「……今は、どうなんだ？」
？？？
「今は……」
そこで言葉が詰まってしまった。
今ならあんなことをしないかもしれない。
だが、私の中に眠るものが覚めたら……するかもしれない。
でも、それがなくなれば……。
？？？
「……しない……はず」
？？？
「そうか……」
仮面の人はその言葉を聞くとマントを拡げた。
するとマントは翼になった。
？？？
「ならば、しないように心がけることだな」

？？？
「あ、あなたはいったい……」
？？？
「私か……私はメタナイトという」
？？？
「メタ…ナイト……」
メタナイト
「そうだが……そういう君は？」
？？？
「私？」
私は……
？？？
「ドゥーエ……ドクター・スカリエッティに造られた戦闘機人……ナンバーズ2番です」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
フェイト
「それ、本当なの？　ドゥーエがその世界にいるって」
突然、フェイトのもとに
はやて
『そや、でもなんか突然出ていったらしいんよ、行き先も伝えないで』

ドゥーエは先の大戦で保護され、更正プログラムを受講していた。
スカリエッティの影響が最も強い彼女とは思えない行動で、ドゥーエを知ってる姉妹はそれはそれは驚いていたそうだ。
そして更正プログラムを受講する理由が『妹たちの幸せのため』と言っていたそうだ。
妹想いといえ、かつては暗殺をしていた彼女がそこまでやれるだろうか。
そのことが管理局でも一時期話題になった。
そして更正プログラム受講後、姿を消した。

フェイト
「それじゃあ、どうして行き先が分かってるの？」

はやて
『それなんやけどな……』

チンク
「手紙が来てた……」

フェイトとはやては、やってきたチンクを見る。

フェイト
「手紙？」

チンク
「行き先が書かれた手紙……ドゥーエ姉さんは必ずその手紙を私たちに送ってくる」

フェイト

「それじゃあ、チンクにも……」

チンク
「はい、この通り」

そう言ってチンクは1通の手紙を取り出した。

フェイト
「それで、ドゥーエは今その世界のどこに？」

はやて
『それはまだ……』

チンク
「そうか……」

はやて
『あとはシグナムに任せてるから心配ないよ』

フェイト
「そう……」

はやて
『……それで、フェイトちゃんたちは今どこにいるん？』

フェイト
「えっと……」

突然、フェイトの顔が曇った。

はやて
『？　何か都合でも悪いことでも』

フェイト
「ううん、全然！」

はやて
『……まぁ、フェイトちゃんはフェイトちゃんにできることをやったらええよ』

フェイト
「うん、ありがと」

はやて
『それじゃあ、また』

ピッ…

フェイト
「……」

チンク
「……これからどうするんだ？」

フェイト
「どうするって言われても……」

チンク
「まぁ……知らなかったとはいえ、奴らと別行動で“そこ”に行こ

うとしていたのだからな」

フェイト
「そ、それは……」

チンク
「とにかくだ……」

フェイト
「……」

チンク
「行くのか？」

フェイト
「まぁ……その……うん」

チンク
「……わかった。
で、行くのは？」

フェイト
「私とティアナとチンク……あとは」

「私も行きます」

フェイト
「あなたは……？」

「夜一様に皆さんの警護を仰せ遣った『砕蜂（ソイフォン）』と言います」

フェイト
「え……あの人から？」

砕蜂
「はい」

チンク
「死神が何故？」

砕蜂
「夜一様が気になることがあると」

フェイト
「気になること……ですか？」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

砕蜂
「どうやらそこにホロウが出るらしい」

フェイト
「え？」

本来、ホロウはこの世界（『ＢＬＥＡＣＨ』の世界）にしかいない。
なのに他の世界にいるはずがない。

砕蜂
「それと、今回の件について総隊長殿から『協力するように』と」

フェイト

「は、はぁ……」

チンク
「……この人数で行くのか？」

フェイト
「えっと……あと1人くらい……」

「俺が行く……」

砕蜂
「日番谷隊長か」

砕蜂の後ろには、日番谷冬獅郎がいた。

冬獅郎
「何か問題でもあるのか？」

砕蜂
「……こっちのホロウはどうするつもりだ？」

冬獅郎
「……黒崎がなんとかするだろ」

砕蜂
「……」

沈黙……それは、フェイトとチンクにとってとても重いものになった。

フェイト
「そ、それじゃ、私はティアナに伝えてきますから……」

スタタタ……

チンク
「……逃げたな」

フェイト
「というわけで、ティアナは私たちと一緒に来てくれる？」

ティアナ
「もちろん。　ですが……何故その世界に？」

フェイト
「う、うん……ちょっと気になることがあって」

ティアナ
「はぁ……」

チンク
「とにかく、行けばわかる」

ティアナ
「そう……」

雅也
「フェイトさん、俺たちは？」

フェイト
「えっとね……お留守番」

ヴィヴィオ
「いつ戻ってくるの？」

フェイト
「それはまだ……」

皐月
「私たちも行くってことはできないんですか？」

フェイト
「ゴメンね」

ヴィヴィオ
「フェイトママ……」

フェイト
「うん？」

ヴィヴィオ
「気を付けてね」

フェイト
「うん……ありがと、ヴィヴィオ」

一護
「で、どこに行くんだ？」

フェイト
「……『東京・渋谷』」

ティアナ
「……そこで何が起きてるんですか？」

フェイト
「……」

チンク
「『渋谷ニュージェネレーションの狂気』といわれる事件が起きている……と言うとわかるか？」

ティアナ
「あ、それなら知ってます」

ティアナの話によると、その世界の渋谷で起きている不可解な連続事件の通称であり、非常に凄惨な犯行が多く、管理局でも今後のことについて話し合っているとか。

雅也
「えーっと……それってものすごくヤバいんじゃ……」

ティアナ
「そう、ヤバいことに変わりはないわ」

メアリー
「そこに行くのは危険では？」

フェイト
「でも行かなきゃいけないの……絶対に」

ヴィヴィオ
「やっぱり私、フェイトママたちと一緒に行く！
フェイトママのことが心配なんだもん！」

フェイト
「ヴィヴィオ……」

ヴィヴィオ
「だって……フェイトママには死んでほしくないもん……生きてて
ほしいんだもん……」

フェイト
「……何があるか分からないんだよ。
それでも一緒に来たいの？」

フェイトはそう言うとヴィヴィオの瞳を見つめる。

1度決めたことはかならず貫く――まさになのはと同じ眼差しだ。
さすが親子だね……自分の良いところもあったらいいな――そう思
うフェイト。
それもヴィヴィオは兼ね備えているだろう。
なにしろ、フェイトはヴィヴィオにとって今でも“もう1人のママ
”なのだから……。

フェイト
「……わかった、一緒にいこう」

ヴィヴィオ
「うん！」

ヴィヴィオは満面の笑みを浮かばせた。

雅也
「それじゃ、俺たちも……」

皐月
「行きましょ」

カービィ
「あの……僕は？」

フェイト
「……お留守番」

カービィ
「……」

イヴ
「ま、仕方ないな」

フェイト
「ナオとリマも留守番お願いね」

ナオ・リマ

「「はい！」」

フェイト
「それじゃあ、明日出発ってことで」

その後、フェイトたちは準備のため解散した。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

なのは
「はーい！　今日はここまで！」

『ありがとうございました！』

今日もなのはの魔導師たちの訓練が終わった。

なのは
「ふぅ……」

ヴィータ
「よ、今日もなかなかだったぞ」

なのは
「ありがとう、ヴィータちゃん」

ヴィータ
「そういや、なのは宛てに手紙を預かってんだ」

なのは
「私に？」

なのはは手紙を受け取り読み始めた。高町なのは様

突然のお手紙のことでさぞ驚いておられていることでしょう。

この度は、なのは様を御招待いたしたくお手紙を書かせていただきました。

つきましては、次の日時と場所で開催されます。

・日時：〇〇日△□時

・場所：××××

それでは、ご参加をお待ちしております。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ヴィータ
「なんだ、招待状か。
行けばいいんじゃねえか、ちょうどその日は休みだろ？」

なのは
「……」

ヴィータ

「どうしたんだよ、浮かない顔して」

なのは
「なんか……行っちゃいけないような気がする……」

ヴィータ
「でも、行かなきゃわかんねぇだろ」

なのは
「それはそうだけど……」

ヴィータ
「ま、久しぶりの休みだと思って行ってこい」

なのは
「う、うん……」

こうしてなのはは渋々だが行くことにしたのだった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

???
「さて、これで役者が揃ったな」

???
「よろしいので？」

???
「これくらいしないと来ないだろうしな」

そこには名簿があり、見覚えのある名前が書かれていた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

【招待客】

・高町なのは
・カービィ
・イヴ・ノイシュヴァンシュタイン
・黒崎一護
・坂田銀時
・夏目智春
・アダム・ブレイド

他多数……

【特別招待客】

・アダム・アークライト
・夏目直貴

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？
「この顔触れなら“奴ら”も来るだろ」
？？？
「では、さっそく準備の方に」
？？？
「あぁ……頼む」
そして、準備は着々と進められていくのだった……。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
皐月
「で……なんで私たち前書きが出れなくてここで出てくるわけ？」
雅也
「いやぁ……新しい世界へ向けてってことで」
メアリー
「こんな感じになってしまった……ということか」
ヴィヴィオ
「それにしても……2つもフラグが立っちゃったね」
皐月
「これからの展開考えてるのかしら？」
雅也

「さぁな、でもどうするつもりなんだろな」

ヴィヴィオ
「1つの話を進めた後、残ったほうの話を進めるのかな？」

メアリー
「あるいは、それぞれの話を1話ずつ進めるか」

雅也
「どっちにしても、話は進むから楽しみにしていてほしい」

ポンポン

皐月
「あ？　何？」

カンペ
【そろそろお時間です】

皐月
「そう……それじゃ、また次回ね」

プツン……。

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第１２話：次なる世界へ…（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第１３－Ａ話：来訪　ｃｏｍｉｎｇ

転移魔法の魔法陣が消えると、フェイトたちの姿があった。

フェイト
「着いたよ」

雅也
「ここが……渋谷？」

皐月
「ずいぶん暗いところね」

ヴィヴィオ
「そうなの？」

メアリー
「マスターたちがいた“渋谷”というところはどんな感じなのですか？」

雅也
「どんなって……結構賑やかで空が明るくて……そんな感じかな」

皐月
「あまり考えたこととかなかったからねぇ、そう言われても」

ティアナ
「はいはい、話はそこまで！」

ティアナが手をパンパンと叩いた。

ティアナ
「ここには調査も兼ねて来てるんだから、気を引き締めてね」

雅・皐・ヴ
「「「はいっ！」」」

チンク
「……」

フェイト
「チンク、どうかしたの？」

チンク
「いや、何でもない……」

そう言ってチンクは俯いたまま歩きだした。

雅也
（チンクさん、どうしたんですか？）

フェイト
（ちょっと、ね……）

雅也
（はぁ……）

フェイトはこの世界に来た理由を教えていなかった。　自らの好奇心から訪れたかったからなどと言えるわけがない。

また、チンクの姉にあたるドゥーエがこの世界にいることも教えていない。

そのため、雅也たちはチンクがなぜあんなに考え込んでいるのか分からなかったのだ。

フェイト
「それで……」

フェイトは雅也たちの後ろにいる冬獅郎と砕蜂を見る。

フェイト
「これからどうするんですか？」

砕蜂
「私は少しここを見てくる」

冬獅郎
「俺は……」

がしっ……

砕蜂
「一緒に来てもらうぞ」

砕蜂は冬獅郎の装束を掴んだ。

冬獅郎
「あのなぁ……」

砕蜂
「自分から来ると言っておいて手伝わない気か？」

冬獅郎
「ちっ……わかったよ」

フェイト
「それじゃあ、この場所でまた」

フェイトは自分たちがしばらくの間泊まる場所を書いた紙を渡した。

砕蜂
「では後ほど……」

砕蜂は冬獅郎を掴んだまま街の中へと消えていった。　死神の姿である今、普通の人には姿が見えない状態なので心配ないだろう。

フェイト
「それじゃあ、私たちも行こうか」

雅也たちの「はいっ！」という返事のあと、皆は移動を始めた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？

「何？　それは本当なのか？」

？？？

「うん、さっき転移魔法で誰か来たよ」

フードの人物がフェイトたちが来たことに気付き話し合っていた。

???

「こんな時に……」

???

「どうするの？」

???

「“アレ”の準備にはまだ時間が掛かりそうだからな。
この世界の奴らと“こいつ”で何とかしよう」

“こいつ”と言って呼び出したのは、大量のホロウであった。

???

「えーっと……あたしは？」

???

「やってきた奴らでも確認してこい。
ただし、手は出すなよ。
あとで厄介になるからな」

???

「はいはい、わかりました」

そう言ってフードの女はその場をあとにした。

???

「ほんとに分かってるのか、あいつは？」

？？？

「……さてと、ホロウだけじゃ足りないだろうし、コッソリ持ってきたこいつも使っちゃおーっと」

女はそう言うと黒い影を出した。

？？？

「あとは任せたよ……フレアシャドウ」

フレアシャドウと呼ばれたものはコクリと頷くと姿を消した……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方、フェイトたちは落ち合う場所へと向かっていた。

フェイト

（ティアナ、ちょっといいかな？）

突如、フェイトが念話で話し掛けてきた。

ティアナ

（あ、はい）

フェイト

（ティアナには話しておいたほうがいいと思ってね）

ティアナ
（何をですか？）

フェイト
（……この世界に来た“本当”の理由……）

～～　数分後　～～

フェイト
（……てことなんだ）

ティアナ
（……つまり、フェイトさんのちょっとした好奇心からこうなったと？）

フェイト
（ま、まぁ……そうなるかな）

ティアナ
（それで、こうやって話していると……）

フェイト
（こ、これはヴィヴィオたちに言わないでね）

ティアナ
（もちろん、というか……）

ティアナはヴィヴィオたちを見た。

ティアナ
（言えるわけないですよ）

フェイト
（あ、あはは……）

そのとき、チンクが話し掛けてきた。

チンク
「……2人とも、あれをどう見る？」

フェイト
「あれ……って……ッ！？」

フェイトたちの目の前には、たくさんのホロウがいる。

ティアナ
「こんな街中で！？」

雅也
「ここで魔法を使うのは……」

メアリー
「……マスター、少しいいか？」

雅也
「どうしたんだよ、メアリー？」

メアリー
「あっちにいるのは何だ？」

雅也
「何って……え？」

雅也が見たものは、黒い影だった。

皐月
「影……にしては変ね」

ヴィヴィオ
「もしかしてこの子……」

ヴィヴィオは黒い影から何か負のオーラを感じた。

皐月
「ヴィヴィオ……？」

ヴィヴィオ
「雅也くん、メアリー、その子から離れて！」

雅也
「ど、どうい……」

ボワッ！

雅也
「うおッ！？」

雅也に向けて火の粉を吹いてきた。

メアリー
「どうやら、あれも敵らしいな」

雅也
「だからって魔法が使えるってわけじゃ……」

その時！

ホロウ
「ウガアァァァ……！！」

突然、ホロウが苦しみだしたかと思うと灰も残さず次々と消えていく。

皐月
「ホロウが…消えてく……」

ヴィヴィオ
「ねぇ、あれ！」

ヴィヴィオが指差す先には、砕蜂がいた。

砕蜂
「こちらが騒がしくて来てみれば……」

跡を追うように冬獅郎がやってきた。

冬獅郎
「これか。で、状況は？」

砕蜂
「見れば分かるだろ」

冬獅郎
「……そうだな」

冬獅郎は斬魄刀・『氷輪丸』を持つ。

冬獅郎
「んじゃ、いくか」

砕蜂
「言われなくても……」

砕蜂は『雀蜂』を構えた。　そして、2人の死神はあっという間にホロウを倒していくのであった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

???ｓｉｄｅ

???
「な、何よ、あいつら……何なのよ」

あたしは魔導師たちから見えないところから様子をうかがっていた。

???
「魔導師の他に死神がいるなんて……」

あたしは2人の死神が次々とホロウを倒していくことに苛立った。

？？？
「何でこんな奴らが……ん？」
あたしは目を止めた。
？？？
「え……」
目を疑った。
視線の先にいる人物に見覚えがあったからだ。
？？？
「あ、あいつは……あの人は……」
見覚えがある……間違いない……あの人は……あの人は……
？？？
「なんで……あの人が……こんなところに……」
この姿を――自分がしていることを見せたくなかった……あの人だけには……
？？？
「だってあの人は……」
あの人は……あたしに接してくれた……あたしが悪いことをしたってわかってても……普通に接してくれた……

あたしを本当に1人の女として見てくれた……そして……あたしはあの人に恋をした……初めての恋だった……

???

「雅也くん……なんで……なんでこんなところにいるのよ……」

あたしの声は擦れていた。

そして、目から一滴の水が流れた……。

???ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

雅也

「ん……？」

メアリー

「マスター？」

雅也

「あ、いや、何でもない」

メアリー

「？？　それよりも早くこいつを片付けるぞ」

雅也

「もちろん……て、だから俺は魔法を使えないんだってば！」

メアリー
「お、そうだったな。
それなら……」

メアリーは指を鳴らした。

メアリー
「私が片付ける」

雅也
「そんな……おまえより大きい奴を相手にするなんて……」

メアリー
「……私も甘く見られたものだな」

メアリーがもう一度指を鳴らした。

すると、小さい影が一瞬にして凍り付いた。

メアリー
「これくらいのザコ……」

そして、メアリーは再び指を鳴らした。

すると、凍っていた小さい影が粉々に砕け散った。

メアリー
「雑作（ぞうさ）もない……」

雅也

「……」

皐月
「め、メアリーって……」

ヴィヴィオ
「ユニゾンしてなくても強い？」

メアリー
「今更ッ？！　今更気付いたのか！？」

2人はコクリと頷いた。

メアリー
「マ……マスターは分かっていてくれていたはず……」

雅也
「ゴメン…忘れてた」

メアリー
「そ、そんなぁ……」

メアリーが半分泣きそうだった、というよりもう完全に泣いている。

雅也たちがメアリーを宥めている間に、砕蜂と冬獅郎がホロウを粗方片付けた。

砕蜂
「ま、これくらいなら今のところ大丈夫だな」

冬獅郎
「にしてもだ、何でこんなとこに奴らが……」

砕蜂
「……」

フェイト
「あ、あの……」

冬獅郎
「何だ？」

フェイト
「あれ……」

フェイトが指差したほうには、こちらを見ている人たちがいた。

『何あの人……』

『変な装束を着てる……』

砕蜂
「まさか……」

冬獅郎
「俺たちの姿が見えてたってのか？」

『いたぞ、あそこだ！』

そのとき、警察がやってきた。

『情報通りだな……』

『奴らを捕まえろ！』

冬獅郎
「なっ……！」

砕蜂
「ここは一旦逃げるぞ」

冬獅郎
「言われなくても……」

2人は瞬歩で逃げた。

『消えた！？』

『探せ、まだこの辺りにいるはずだ』

タッタッタッ……

警察はその場から立ち去った。

フェイト
「どうして……」

雅也
「確か2人は死神で普通の人には見えないんですよね？」

フェイト
「うん、前に彼――優太が剣がない世界では死神は見えないって言ってたから」

ヴィヴィオ
「それじゃあ何で……」

皐月
「それで、これからどうするんですか？」

フェイト
「とりあえず、指定した場所に行くよ」

メアリー
「もしかしたら2人が来ているかもしれない……」

フェイト
「そう……それじゃあ、行くよ」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？ｓｉｄｅ

？？？

「……」

このままでいいのだろうか……

彼が――雅也くんがいるこの世界であたしの本当の姿を見せてもいいのだろうか？

きっと今のあたしの姿を見れば嫌われる……きっとそうだ……

だったら……

？？？ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　……

？？？

「どうだった？」

？？？

「……あいつら、強いわ」

？？？

「そうだろな、歴代の英雄がいるのだからな」

？？？

「……あとはアンタに任せていい？」

？？？

「おいおい、この世界を見張っていたのはお前だろ？　お前が始末するのは当然だろ？」

？？？
「そんなの……関係ない」
？？？
「は？」
？？？
「実績のあるアンタがやればあいつらもやれるってもんでしょ？」
？？？
「フ……ま、そうだろうな。
それじゃ、あとは俺が好きにしてもいいんだな？」
？？？
「……どうぞ、ご勝手に」
女はそう言うと姿を消した。
？？？
「さて……この世界をどうしよっかな……」
それから男はあれこれと策を考え始めたのだった……。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
？？？
「……」
女は懐から1枚の写真を取りだした。

それにはフードを取った女と雅也が写っていた。

???

「雅也くん……」

女は写真を仕舞うと今まで付けていたフードを取った。

???

「いま……あなたに会いに行きます……」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月

「ま～さ～や～…」

雅也

「お、俺は悪くないぞ。
言うんだったら作者に言え」

ヴィヴィオ

「えーと……ですね」

メアリー

「作者が二つの話を視点を変えて……つまり、『パーティー編』と『ＣＨＡＯＳ：ＨＥＡＤ編』で書いていくというのだ」

ヴィヴィオ

「そのため、話数のあとに『－A』とついています」

メアリー
「ちなみに、『CHAOS：HEAD』は“－A”，『パーティー編』は“－B”となっている」

雅也
「てことで……二つの話は同時に進行していきます」

皐月
「それで、なんで前書きがないわけ？」

雅也
「作者は気付いたらしい」

皐月
「何をよ？」

雅也
「『勝手に呼び出すのはよくない』と」

皐月
「だから、あとがきだけにするってこと？」

雅也
「いや、それは検討中らしい」

ヴィヴィオ
「1人でも呼び出しコーナーに対するお便りが来たら復活するんだって」

皐月
「作者って気分屋なの？」

雅也
「まぁ、面倒だっていうのもあるだろ」

メアリー
「というわけで、今後は作者が今まで答えていなかった質問に答えるらしいぞ」

雅也
「なんで質問に答えてないんだ？」

ヴィヴィオ
「このコーナーのネタにしたかったみたいだよ」

皐月
「……そんな理由？」

雅也
「えーと、まぁこんなわけで今回はここまでだ」

メアリー
「さて、この先どうなることやら……」

プツン……。

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第１３－Ａ話：来訪　ｃｏｍｉｎｇ（後書き）

※できるかぎりお答えしますので、よろしくお願いします。

第１３－Ｂ話：招待（前書き）

※カービィたちの話です。

第１３－Ｂ話：招待

カービィ
「ふぇ？　僕に手紙？」

ナオ
「うん、さっき届いてね……はい」

ナオはカービィに手紙を渡した。

カービィ
「……」

パクッ……

ナオ
「イヤ、食べるな食べるな」

カービィ
「アハハ、冗談だよ」

ナオ
「……冗談でやることじゃないよね」

カービィ
「……はい」

シュン……

ナオ
「いやいや、そこまで落ち込まなくていいから」

カービィ
「うん！」

ナオ
「（な、何て早い気持ちの切り替え）……とにかく、手紙には何て書いてあるの？」

カービィ
「えーとね……」

カービィは手紙を読んだ。

カービィ
「わぁ……これ僕への招待状だよ」

ナオ
「へぇ……で、会場は？」

カービィ
「えーとね……」▼▼▼

夜一
「ほぅ……」

一護
「何で俺にそんなものが？」

銀時
「あのぉ……」

リマ
「何ですか？」

銀時
「ちょっとお腹が痛くなったんで欠席します」

リマ
「え？　さっきまでいちごパフェを食べていたじゃないですか？」

銀時
「そ、それが今になって痛くなってきてな、イタタタ……」

リマ
「あ……これが銀時さんの手紙と一緒に入ってたんですけど」

リマは銀時に入っていたものを渡した。
それは銀時たちの世界のお金の札束であった。

銀時
「よーーーし、いくぞてめェらァァァァ！！」

……

『こいつ（この人）は何て単純なんだ……』

と皆は思ったのだった……。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そして、パーティー当日……。

招待されたカービィ・一護・銀時・イヴの他に、ストワール姉妹も来ていたのだ。

リマ

「あの……私たちも一緒に来てよかったんですか？」

銀時

「何言ってんだ、これに書いてあったろ、『お連れの方は1人までとさせていただきます』ってな」

ナオ

「それにしても……」

ナオは辺りをキョロキョロ見回す。

ナオ

「ここにいるのって人気がある超有名人ばっかりだよ」

リマ

「そこに私たちがいるなんて……ちょっと」

リマとナオのストワール姉妹はパーティーに似合うドレスを着ている。
色は姉が黒で妹はピンクである。そして髪は後ろで束ねている。

一方銀時は、いつもとは打って変わってスーツ姿である。

……ま、あんまり似合っていないような気がするんだけどね

銀時
「てんめェェェェ、今すぐ殴られてェのかァァァァァァァ！！」

リマ
「ぎ、銀時さん、落ち着いて！」

ナオ
「こんなとこでキレないで！」

ストワール姉妹が銀時を取り押さえている。

一護
「……で、なんでこうなってんだよ」

一護もパーティーにふさわしい服装をしている。

カービィ
「あの……」

ナオ
「ん？」

カービィ
「なんで僕は蝶ネクタイだけなの？」

ナオ
「えーと……カービィに似合う服がなくて……」

リマ
「ごめんね」

カービィ
「う～～～」

カービィが拗ねている。

ナオ
「あ、あそこに食べ物が……」

カービィ
「どこ、どこにあるの？」

ナオ
「……」

リマ
「あ、あはは……」

イヴ

「さすがに食い気はあるみたいだな」

？？？

「あの～……ちょっといいかな？」

ナオ

「あ、は……い？」

ナオは声をかけてきた人物を見て驚いた。

桃色のドレスにストレートに伸ばしている茶色い髪……まさに絶世の美女という言葉が似合う女性だった。

ナオ

「あ、あの……えと……」

？？？

「あ、驚いた？　これね、はやてちゃんとシャマルさんが選んでくれてたんだよ」

ナオ

「はやて……八神はやて隊長のことですか？」

？？？

「うん、そうだよ」

ナオ
「ということは……貴女は！」

リマ
「？　どうしたの、ナオ？」

そのとき、リマがナオのところにやってきた。

ナオ
「リマ姉！　あの、えと……」

？？？
「ナオ……リマ……てことは……フェイトちゃんが言ってた」

リマ
「は、はい……そうですけど……え、えっ？」

リマも『フェイトちゃん』という言葉で気付いた。

リマ
「あ、貴女は……高町なのは一等空尉！」

なのは
「……はい、大正解♪」

そう……目の前にいるのはなのはであった。▼▼▼

なのは
「うん、私も招待されたの♪　ちょうど仕事も休みだったから来ちゃったってわけ」

リマ
「そ、そうだったんですか……」

なのは
「2人がいるってことは、フェイトちゃんもいるの？」

ナオ
「そ、それは……」

なのは
「？？？」

～～～～～～～～～～～～

2人は、フェイトが別の世界に行っていることを説明した。

なのは
「そうなんだ……フェイトちゃん、いないんだ……」

ナオ
「あ、はい……」

リマ
（ちょっとナオ、なのはさんが落ち込んでるじゃない。　どうするのよ？）

ナオ
（どうするって言われても……）

なのは
「……ヴィヴィオも」

ナオ・リマ
「「ッ！！」」

なのは
「ヴィヴィオも……フェイトちゃんについていった……てことだよね？」

ナオ・リマ
「……（コクコク！！）」

2人は物凄い勢いで首を縦に振った。

なのは
「そう……」

ギュ……！

なのはは持っていたバックを強く握り締めた。

ナオ・リマ
（（こ、怖い……））

2人は脇でガタガタ震えていた。

なのは
「……うん……決めた」

リマ
「決めたって……何をです？」

なのは
「私も皆と……フェイトちゃんたちと一緒に行く」

ナオ
「……はい？」

なのは
「だ・か・ら！　これからはこっちで皆と一緒に行動するってこと！」

リマ
「あ、あの……教導は？」

なのは
「それならヴィータちゃんにやってもらうから大丈夫だよ」

リマ
「そういう問題じゃないような……」

なのは
「みんなから仕事のし過ぎだって言われてるから、たまには長期休暇取っても問題ないよ」

ナオ
（そうかなぁ……）

リマ
（そんなわけないでしょ！　それと、ナオも真剣に考えない！）

ナオ
（でも……）

リマ
（あぁ、もう……）

リマは呆れるようにしてなのはに聞いた。

リマ
「仮にそれができたとしてですよ、誰に話すんですか？」

なのは
「え？　誰って……」

「あ、いたいた」

と、そこへどこからか声が聞こえてきた。

「ここにおったんやな」

なのは
「うん」

ナオとリマは開いた口がふさがらなかった。
なぜなら、目の前にいる人物が……

ナオ・リマ
「「や……八神はやて隊長!!」」

はやて
「お、2人も来てたんやな」

ナオ
「はい、付き添いですが……」

リマ
「でも、どうして八神隊長が？」

はやて
「なのはちゃんについてきてほしい言われてな、それで」

リマ
「ついてきた……てことですか？」

はやて
「ま、そういうことやな」

なのは
「あのね、はやてちゃん」

はやて
「わかってる……さっきなのはちゃんから念話で聞いたから」

なのは
「あ、そうだね」

はやて
「それにしても……」

はやては溜め息を吐いた。

はやて
「ヴィータにこのこと言ったら何て言うかな」

なのは
「にゃはは……ヴィータちゃんなら『行け』て言いそうだけどね」

はやて
「ま、それは置いといてやな……」

はやては辺りをキョロキョロ見回した。

はやて
「一緒に来た人たちはどうしたん？」

ナオ・リマ
「「え？」」

2人は辺りを見回した。

なんと、２人の近くには一護以外誰もいないのだ。

リマ
「一護くん、他の人たちは？」

一護
「あ、あぁ……他の奴らなら……」

そう言って一護が指し示したほうは……

ナオ
「……」

リマ
「……何してるの、あれ？」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「……」

ヴィヴィオ
「え～と……こっち側（『パーティー編』）には登場していない４人でお送りするあとがきコーナーです」

雅也
「なんでそんなに不機嫌そうな顔するんだよ」

皐月

「だって、あとがきコーナーって言ってもやることは質問に対する回答でしょ？」

雅也
「まぁ、そうなるな」

皐月
「誰か呼んだりしないの？」

雅也
「今のところはないんじゃ……」

皐月
「……もういいわ、さっさと今回の質問に行きなさい」

雅也
「聞いたのは皐月だろ」

ヴィヴィオ
「まあまあ、２人とも落ち着いて」

メアリー
「今回の質問は私が読もう。
ペンネーム・烈火竜さん、
『青いタヌキ（作者）さんは、カービィのようなマスコットキャラと人間のキャラと、どっちを書くほうが好きですか？』
というものだ。　作者さん、どっちが好きなんだ？」

作者
「やっぱりマスコットキャラかな。　人間だと容姿とかで色々考え

なきゃいけないから。
あと、マスコットキャラならいろんな発想ができるからね」

雅也
「で、今考えてるのが……それ？」

作者
「まぁ、これは『パーティー編』に出すんだけどね」

皐月
「ていうか、それマスコットじゃないわよね？」

作者
「うん、ある作品を真似て考えたからね」

メアリー
「そうなのか？」

作者
「あとはネタバレになっちゃうからここまでね」

ヴィヴィオ
「ちなみに、こちらのあとがきコーナーでは私たちや作者が答えるからね」

雅也
「……久しぶりにどこか別の小説に出たいな」

皐月
「まぁ、そのうち出られるから大丈夫よ」

ヴィヴィオ
「それじゃあ、今回のあとがきコーナーはここまでだよ」

メアリー
「次回も……」

作者
「よろしくお願いします」

メアリー
「私のセリフを言うなー！！」

プツン……。

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第１３－Ｂ話：招待（後書き）

※ちなみに、人気投票はまだやっています。
皆さんからの投票待ってます。

第１４－Ａ話：出逢い　ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ（前書き）

※今回やっと『ＣＨＡＯＳ；ＨＥＡＤ』のキャラを出せました。

第１４－Ａ話：出逢い　ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ

ドゥーエ
「……」

タッタッ……

メタナイト
「……」

カタッカタッ……

タッタッ……

カタッカタッ……

タッ……

カタ……

ドゥーエ
「あなた、どこまで付いてくる気ですか！」

メタナイト
「ついていってはいない……行く道が同じだけだ」

ドゥーエ

「……」

ドゥーエが歩く、その後ろをメタナイトが歩く……。
ドゥーエが立ち止まる、メタナイトも立ち止まる……。
そして再び歩きだす……。

さっきからこの繰り返しだ。

ドゥーエ
（いったい何なんですか、なんでアイツは私の後ろをついてくるんですか？）

そう考えながらドゥーエは歩いていると、前を警察が通り過ぎた。

『そっちは東の方を、残りは西の方を捜すぞ』

タタタタ……

ドゥーエ
「何やら騒がしいみたいですね」

メタナイト
「……そうだな」

……

ドゥーエ
「何かあったんでしょうか？」

メタナイト

「……そうだな」

……

ドゥーエ
「あなた、『そうだな』以外言えないんですか？」

メタナイト
「質問されたことにたいして『そうだな』としか言えなかっただけだが」

ドゥーエ
「ですが、他に言葉があったんじゃないんですか」

メタナイト
「それは、まぁ……」

ドゥーエは『ほら見なさい』という顔をしていた。

ドゥーエ
「それじゃ……」

ドゥーエの身体が光りだしたと思ったら、警察と同じ姿の茶髪の女性がメタナイトの目の前にいた。

ドゥーエ
「ふぅ……」

茶髪の女性――変身したドゥーエは髪を掻き分けていた。

メタナイト
「こ、これは……」

ドゥーエ
「あら……知りませんでした？　私には『偽りの仮面』【ライアーズ・マスク】という技能があるんですよ」

メタナイト
「そうだったのか……」

ドゥーエは警察が去っていったほうを見る。

ドゥーエ
「それでは少し探ってみましょうか」

ドゥーエが跡を追うように走りだした。

メタナイト
「お、おい」

メタナイトもドゥーエについていった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？
「はぁ……」

と溜め息を吐いて空を漂っている者がいた。

？？？
「知らない場所だし、お腹もすいたし……なんて運がないんだ」

と愚痴を撒き散らしているのは、ＵＦＯに乗っている“ばいきんまん”であった。

ばいきんまん
「ハァ～～～」

『おい、いたか？』

『いや、こっちにはいない』

ばいきんまん
『ん……なんだ』

辺りが騒がしくなったのでばいきんまんは双眼鏡から覗き込むと、せっせと動き回っている警察が目に入った。

ばいきんまん
「何してるんだ、あいつら」

状況が把握できないばいきんまんは、もう少し様子を見ることにした。

『情報にあった“死神”は見つかったか？』

『それが全然……』

『こっちは“ニュージェネ”の件があるっていうのに』

『それと“ギガロマニアックス”って奴らも捜さなきゃいけないんだろ？』

『上は何がしたいんだ？』

『俺たちみたいなのが解るわけないだろ』

『とにかく、今は“死神”の方を捜すぞ』

タタタタ……

ばいきんまん

「死神？　ギガロマニアックス？
あいつら一体何を話してたんだ？」

訳が分からないまま、ばいきんまんは空を徘徊するのだった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

フェイト

「ここがこの世界にいるときの住まいよ」

フェイトたちは高級マンションの前にいた。

雅也

「はぁ……」

皐月

「ここが……」

ヴィヴィオ
「おっきいね……」

メアリー
「ああ……」

フェイト
「あれ、仕事でこういうところに滞在したりしてない？」

雅也
「まぁ、してるっていえばしてるんですけど…」

メアリー
「私たちに配給される宿泊費などは少ないので、ここまでのところには……」

フェイト
「ふぅーん……」

バキッ！！

突然近くにあった木の枝が折れた。

皐月
「ふぇ、フェイト…さん？」

フェイト
「ヴィヴィオ、仕事費用を管理してる人の名前は？」

ヴィヴィオ

「えーとね、その人はま……」

雅也
「ヴィヴィオ、言うな！」

雅也がヴィヴィオの口を塞いだ。

ヴィヴィオ
「んん～～んんん～～！」

皐月
「言ったらその人がフェイトさんに殺られちゃう！」

メアリー
「フェイトさん、どうか殺さない程度で」

フェイト
「殺らない程度だったらいいんだね？」

メアリー
「いや、そういうわけでは」

フェイト
「いいよ、だいたい見当はついてるから」

雅・皐・メ
「「「……（……怖い）」」」

ヴィヴィオ以外はフェイトから出ている黒いオーラを感じたのだった。

？？？
「あ、あの……」
と誰かが声をかけてきたので雅也たちが振り向いた。
そこには雅也と同じくらいの年の女の子が立っていた。
雅也
「えーと……何ですか？」
？？？
「あなた……久本雅也くん、ですよね？」
雅也は驚いた。
自分の名前を知ってる人はこの世界にはいない。
それなのに自分の名前を知ってる……明らかにおかしい……
雅也
「あなた一体……」
？？？
「えっ、覚えてないの！？」
彼女は信じられないという顔をして雅也を見つめていた。
？？？

「ほら、一緒に炊き込みご飯食べたり、街で買い物したりしたじゃない」

雅也
「そんなことあったっけ？」

雅也の視線はメアリーのほうにいった。

メアリー
「ちょっと待ってください」

メアリーはキャリバーンに記憶されているデータを読み込みはじめた。

……

……

…

メアリー
「読み込み、完了しました」

雅也
「うん、それで記憶にあった？」

メアリー
「……」

雅也

「ん、どうかしたのか？」

メアリー
「マスター、いつの間にあの子と……」

どうやら、メアリーは彼女が言っていることは正しいとわかったみたいだ。
だが、メアリーの様子がおかしい。

メアリー
「で、でで……で……」

雅也
「で？」

メアリー
「彼女と……で、デートをしたのですか！？」

ヴ・皐
「「――――ッ！！？」」

雅也
「んなっ？！」

メアリー
「キャリバーンの記憶にあったのです。
私がまだ起動して間もない頃、マスターが彼女と街でデートしている姿が」

雅也

「メアリーが生まれてすぐ……街……あっ！」

ようやく雅也は思い出したようだ。

雅也
「あぁ、あのときの……確か……名前は」

「マーブル……マーブル・リ・シュエだよ」

雅也
「マーブル……」

マーブル
「久しぶり、雅也くん♪」

笑顔の彼女――マーブルが栗毛の長い髪を掻き分けた。

雅也
「まさかこの世界にいるなんてな、驚いたよ」

マーブル
「あたしも最初、街で雅也くんの姿を見たとき驚いたもん」

雅也
「そっか」

ワイワイ……ガヤガヤ……

皐月
「……メアリー」

ヴィヴィオ
「あの子……誰？」

フェイト
「まさか……」

メアリー
「とりあえず彼女に害はない。
だから……」

メアリーはフェイトを見た。

メアリー
「フェイトさん、バルディッシュを下ろしてもらえませんか？」

バルディッシュをハーケンフォームにしていたフェイトに下ろすよう促した。

フェイト
「……」

フェイトは不服ながらもバルディッシュを待機状態に戻した。

メアリー
「もうどこから話していいものか……」

メアリーはキャリバーンの中にあった記憶を頼りに彼女のことを話しはじめた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

（※ここからしばらくの間、メアリーが語り手となります）

マスターがキャリバーンの制御ができるようになって私が起動しはじめた頃、ある街に訪れました。

その街は高層ビルなどが建っていましたが、マスターは路地裏を歩いてました。

その頃のマスターは、辞めていたとはいえ管理局から指名手配されてました。

理由は……キャリバーンの強奪です。

そのため人前に出られず、路地裏をうろついていました。

いつもなら2、3日で街を離れますが、起動して間もなかったためか私が体調を崩してしまい、長期滞在することになってしまったのです。

そんなある日、マスターがいつものように路地裏を歩いていると、1人の女性が倒れてました。

そう――彼女こそマーブル・リ・シュエだったのです。

マスターか話を聞くと、彼女が持っていた大切なものを暴力団に取られたようで

マスターは悩んだみたいです。

私の身体の具合と彼女の大切なもの――どちらを優先するべきか

そしてマスターの決断は……

『両方やる』というものだった。

……

まぁ、そこがマスターのいい面だといえるわけだが

そして、暴力団から彼女の大切なものを取り戻し、それを彼女に手渡した

彼女は、きょとん顔で雅也を見て感謝した。

とても、とても……

マスターが街を離れる前日、彼女はマスターと買い物がしたいと言っていろいろな店に行った。

そのとき、マスターは彼女とのツーショット写真を撮った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

メアリー

「以上がその時の記憶だ」

皐月・ヴィヴィオ

「「……」」

フェイト

「結局、その子は何者だったの？」

メアリー

「それがマスターが何度聞いても口にしようとしなかったみたいで。

しかも、その大切なものが何だったのかも分からず……」

フェイト
「そう……」

フェイトが2人の方を見た。

とても明るい子だ
こんな子が……彼が認めた女の子が悪い人間ではない
フェイトはそう願っていた……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ドゥーエ
「そう、わかったわ」

ドゥーエは他の警察官に話を聞き、この状況を把握した。

ドゥーエ
「死神の出現……ニュージェネという不可解な事件……そして……
ギガロマニアックスという妄想を現実にする者……なかなか興味深
いですね」

メタナイト
「どうするつもりだ？」

ドゥーエ
「決まってます。
その者たちがやってきそうな場所に向かうだけです」

メタナイト
「……それだったら心当たりがある」

予想外の答えにドゥーエの口は開いたままだった。

ドゥーエ
「……」

メタナイト
「たまたまこの街に来たときに聞いたところがある。
私はそこが怪しいと思った」

ドゥーエ
「それは何故ですか？」

メタナイト
「事件が起こり始めたのがそこでの研究のせいらしい」

ドゥーエ
「研究内容はともかく、その場所は？」

メタナイト
「……希（のぞみ）グループの研究・開発を担う会社」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

シグナムは今、ザフィーラとある会社の前にいた。
そこはメタナイトが言っていた“希グループ”の研究・開発を担っている“希テクノロジー”だった。

ザフィーラ
「ここだ」

シグナム
「ほぅ…以外と大きいな」

ザフィーラ
「いろいろな事業で活動しているようだからな」

シグナム
「で、ほんとに此処なんだろうな」

シグナムは横をちらっと見た。

「もちろん！　あたしが調べた情報に間違いなんてないもん！」

と言ったのは、優太に情報提供する自称“お兄ちゃんの妹”の絢だった。

シグナム
「自信満々だな」

絢
「もっちろん！　お兄ちゃんに頼まれたことだもん！
これくらいは自信あるもん！」

シグナム
「……（やはりこいつについていけそうにない）」

ザフィーラ
（安心しろ、俺もついていけない）

シグナム
「……」

絢
「どうしたの？」

シグナム
「いや、何でもない」

絢
「そう……それじゃ、あたしはこれで。
これからお兄ちゃんとご飯一緒に食べる約束してるの♪」

絢はニコニコさせながら去っていった。

シグナム
「……」

ザフィーラ
「どうした？」

シグナム
「あいつも、いろいろ苦労してるのだな」

ザフィーラ
「……そうだな」

去っていく絢の後ろ姿を見ながら2人はそう思うのであった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ドゥーエ
「ここですね」

そのころ、ドゥーエたちも“希テクノロジー”に到着したところだった。

メタナイト
「確固たる証拠もないのに入るのか？」

ドゥーエ
「確固たる証拠、ですか」

ドゥーエは振り向いた。

ドゥーエ
「ありますよ、そこに」

メタナイト
「何？」

ドゥーエはマンホールを指した。

ドゥーエ
「この中に入ればわかるはずですよ」

メタナイト
「何故そう言える？」

ドゥーエ
「潜入・諜報活動をしていた元暗殺者の感です」

メタナイト
「感、か……」

ドゥーエがマンホールの蓋を開け中に入ろうとしていた。

ドゥーエ
「どうしますか？」

メタナイト
「……」

メタナイトはドゥーエのあとについていった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ばいきんまん
「ハァ～～」

ブゥゥン……

ばいきんまん
「暇だなぁ……」

ブブン……

ばいきんまん
「ん……」

とある高層ビルの前でＵＦＯを止めた。

ばいきんまん
「何だ此処？」

ばいきんまんがガラスを覗き込むと、中には桃色の髪の女の子が縛り付けられていた。

ばいきんまん
「……何だ、あれ？」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「う……うぅ……」

「ほぉ……ようやくお目覚めのようだな」

少女の目には年を取った男が立っていた。

「……あたしを捕まえてどうするつもり？」

「決まっている、奴を……覚醒した“西條拓巳”を誘い込むためだよ」

「くっ……そんなこと……させない！」

少女は必死に縛っているものを解こうとしている。

「今の貴様に何ができる？」

「できるよ……タクのためだったら何だってできる……！」

「そうか……それなら」

何者かが手をサッとあげる。

すると黒い塊が少女の前にやってきた。

「――――ッ！？」

「最近興味深い奴らがやってきたんでそれを拝借したんだよ」

「……あなたは鬼よ、悪魔よ」

「悪魔で結構……私は偉大な神なのだから」

（タク……！）

「ふふふふ……ハハハハハ！！」

「ちょっと待ったぁぁぁぁ！！」

ガシャーン！！

何者かがガラスを割って入ってきた。

「……何者だ？」

「俺か？　俺様ばいきんまん！　いつか世界征服する者の名前だ」

「……聞いたことがないな」

ばいきんまん

「ふんっ、だったら覚えておくんだな！」

「そうか……」

男は黒い塊を見る。

「さぁ……やってしまえ……ガードアーマー」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？

「ふっふっふ……」

フードの男はガードアーマーを見て笑っていた。

？？？

「ハートレス・ガードアーマー……なかなか使えるんだよなぁ、これが」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「では、君たちはそこで遊んでおくんだな」
男はそう言ってその場をあとにした。

ばいきんまん
「ハートレス、か……」

「……」

ばいきんまん
「ま、何とかなるだろ」

UFOからマジックハンドが出てくる。

「……なんで」

ばいきんまん
「ん？」

「なんで……あたしを助けたの？」

ばいきんまん
「か、勘違いするなっ。
俺様はただ通り過ぎただけだ。
おまえみたいなのを助けたいわけじゃない」

少し顔を赤くしたばいきんまんが言う。

「……そ」

ばいきんまん
「名前は？」

「え？」

ばいきんまん
「おまえの名前、まだ聞いてないぞ」

「……梨深……“咲畑（さきはた）　梨深（りみ）”」

ばいきんまん
「ふーん……」

ばいきんまんはマジックハンドで梨深を縛っていたものを解いた。

梨深
「意外と反応ないね」

ばいきんまん
「わ、悪かったな！」

梨深
「あはは、そういうわけじゃないよ」

ばいきんまん
「たく……」

……

ばいきんまん
「梨深……とか言ったな」

梨深
「な、何よ」

ばいきんまん
「ここは俺様に任せて早く行きな」

梨深
「で、でも……」

ばいきんまん
「こいつはおまえのような奴がかなうような相手じゃないぞ」

梨深
「……」

ばいきんまん
「さっさと行ってそいつを助けな」

梨深
「……」

ばいきんまん
「ただな……俺様が助けたってことは誰にも言うなよ」

梨深
「どうして？」

ばいきんまん
「は、恥ずかしいんだよ」

梨深
「何で？　いいことしたのに」

ばいきんまん
「とにかく！　言うなったらぜーったいに言うなよ！
わかったか！」

梨深
「……なかなか可愛いね（ボソッ）」

ばいきんまん
「何か言ったかぁ？」

梨深
「ううん、何も」

梨深はそう言うと男が出ていったところへむかった。
そして、梨深は立ち止まり振り返った。

梨深
「また、会えるよね？」

ばいきんまん
「……当たり前のようなことを言うな。

そっちも頑張れよ」

梨深
「もちろんだよ、ビシィッ！」

そう言って梨深は走って出ていった。

ばいきんまん
「とは言ったものの……もしかしたらやられるかも」

そう思っていると、

「悪の天才科学者が言う言葉か？」

ばいきんまん
「だ、誰だ！？」

目の前に現れたのは、チンクであった。

ばいきんまん
「おまえ、何故此処にいる？」

チンク
「ドゥーエ姉さんがいると聞いて来てみれば……この有様か」

ばいきんまん
「何しに来た！？」

チンク

「しつこい奴は嫌われるぞ」

ばいきんまん
「うぐ……」

チンク
「フェイトさんたちを呼んだ。
去るんだったら今のうちだぞ」

ばいきんまん
「余計なことを……」

チンク
「さぁ、どうするんだ？」

ばいきんまん
「く、くそ～～～覚えてろ！」

ばいきんまんはＵＦＯを駆って去っていった。

チンク
「……一気に行くぞ」

そして、チンクとガードアーマーとの戦いが始まる……。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

第１４－Ａ話：出逢い　ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ（後書き）

※チンクに言われ逃げ出したばいきんまん。
彼の行き着く先は……。

というのを1回やってみたかったのでやってみました。

次回もよろしくお願いします。

第１４－Ｂ話：大・大・大乱闘！　魔女ｖｓ悪魔ｖｓ契約者ｖｓニードレスｖｓ

※話も一部変更したので、よろしくお願いします。
あと、あとがきコーナーも追加されていますので、そちらのほうもよろしくお願いします。

カービィ
「ねぇねぇ、これ何？」

銀時
「何って、アレに決まってるだろ」

カービィ
「アレって？」

銀時
「アレっていうと……まぁ、アレだ」

カービィ
「だから、アレって何？」

～～～～～～～～～～～～～～～～

リマ
「……」

ナオ
「……何してるの、あれ？」

ナオが一護に説明要求した。

一護
「い、いや、あんたたちが話してるときに放送が入ってな。

危険な物質、ロスト……なんとかとして登録されてる『煉獄の魔導書』を一般公開するってよ……で、それを見に行ったってわけだ」

はやて
「煉獄の魔導書!?　確かにそう言ったんか！」

一護
「あ、ああ……」

はやて
「こりゃ大変なことになったな……」

一護
「何だ？　そんなにマズイもんなのかよ」

はやて
「マズイってレベルの話やない……あれはな……」

とそのとき、会場の照明が消えた。

『えー……それでは、これよりパーティーを始めさせていただきます』

というアナウンスが流れると、会場には拍手の音が鳴り響いた。

『まず最初に特別招待客の“アダム・アークライト”様からお言葉をもらいます』

そして、照明が当てられた人物――白い髪の男――その人物こそアダム・アークライトである。

アークライト
「今回はお招き頂きありがとうございます。
そして……この場にいる人たちに感謝します。
私は世界を変えるため奮闘しています……」
などと長い演説をしている間に、はやてが話の続きをし始めた。
はやて
「……煉獄之書はな、管理局で管理していたものでな、それがつい最近何者かに盗まれたんよ」
一護
「盗まれたって……んじゃ、あそこにあるやつは……」
はやて
「……盗まれたもんやろな」
一護
「……で、どうすんだよ？」
はやて
「そうやなぁ……」
はやてがどうしようか考えていると、
「くだらないな」
と誰かが言った。

アークライト
「……何？」

「そんなもん何になるってんだよ。
ただ人を苦しめてて何が正義だ！　何が神だ！」

アークライト
「……そうか、気に入ってもらえなかったか、
では……」

アークライトの右手があがると、その男は警備の者にどこかに連れていかれた。
そして……

「ギャアァァァ……」

男の絶叫が聞こえた。

アークライト
「さて、これで邪魔者呼ばわりする者は消えました。
話を続けさせてもらいます」

ナオ
「……っ！」

リマ
「ひ、ひどい……」

はやて
「残酷やって聞いてたけどここまでとはな」
なのは
「……」
その後、皆はアークライトの話を静に聞いていた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
そしてようやくアークライトの長い話は終わり、用事があるからと言って始まって早々退出した。
そして何事もなかったようにパーティーが始まった。
イヴ
「あいつが……アークライト……」
カービィ
「イヴさん?」
イヴ
「ん、何だ?」
カービィ
「あそこにいる人……」
イヴはカービィが指（?）刺す方を見た。
するとそこにはイヴが知っている人物がいた。

それは……小さい男の子だった……

イヴ
「お、山田じゃないか。
久しぶりだな」

山田（？）
「い、イヴさん！？」

カービィ
「……イヴさん、この人は？」

イヴ
「ああ、こいつは山田だ」

山田（？）
「山田じゃありません！　クルスですよ！」

カービィ
「山田さん、よろしくお願いします」

山田（？）
「だから違うんだってばーっ！」

～～～～～～～～～～～～

カービィ
「へぇ～、それじゃあクルスさんたちはイヴさんを捜してたんですか？」

その男の子ーークルスはカービィをずっと見ている。
小さいカービィがよっぽど珍しいのだろう。

クルス
「は、はい。　イヴさんが攫われて“シメオンビル”にむかっていたとき、神父さまに招待状が届いて……」

カービィ
「一緒についてきたってこと？」

クルスは頷いた。

イヴ
「おい山田、ブレイドは？」

クルス
「あ、神父さまならあっちに……」

と、クルスが神父・ブレイドの方を見ると……

……

イヴ
「おい、山田」

クルス

「何ですか？」

イヴ
「あれは誰だ？」

クルス
「誰って……神父さまですけ……」

イヴ
「うぉりゃあぁぁぁぁ！！」

ドガッ！！

クルス
「へぶっ！！」

クルスは蹴り飛ばされた。

イヴ
「なんでブレイドがあんな格好をしてるんだ！？」

クルス
「あれがパーティーにふさわしかと……」

イヴ
「んなわけあるかぁ！！」

ドカバキッ！

今度はパンチとキックを受けたクルス。

イヴ
「あんなのブレイドじゃない！」

クルス
「神父さまですって」

イヴ
「正直に言え～～～」

クルスの服を掴んで問いただすイヴ。

クルス
「ほんとですよ～～」

イヴ
「や～～ま～～だ～～～」

クルス
「う、うそついてないのにぃ～……」

カービィ
「……さてと、僕はお料理でも食べよっと」

クルス
「見捨てないでぇぇぇ～～～！」

ちなみに、ブレイドはサングラスを外していてタキシードを着ていた……。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「……はぁ」

1人の少年ーーー夏目智春が溜め息を吐く。

「どうしたの？」

と聞いてきたのは、彼の幼馴染の女の子ーーー水無神操緒（みなかみみさお）だ。

智春

「いや……兄さんが出るって聞いて来てみたけど、姿が見えないんだよ」

操緒

「そうなの？」

智春

「てか、何やってんだよ」

操緒

「何って……」

操緒は何かを持っていた。

操緒

「あそこにあった本だよ」

”あそこ“と言って操緒が指差したのは、“煉獄の魔導書”と書かれた札が張られていた。

智春

「何やってんだよ！」

操緒
「いいじゃん、ガラスケースから取ったって何も起こるわけじゃないんだからさ」

智春
「そうじゃなくて……」

？？？
「ねぇ……」

智春
「ッ！！？」

智春が振り返ると、そこには女の人が立っていた。

智春
「な、何ですか……？」

今、自分の手元にある本に疑問を持って尋ねてきたのだろうか……と思いつつ訊いた。

？？？
「その本……」

来たぁ……！
そう思った智春は土下座した。

智春

「スミマセン！　ほんっとーにスミマセン！！」

？？？

「……何で謝るの？」

智春

「え……この本を取ったことで怒ってるんじゃ……」

？？？

「誰がそう言ったの？　それはあなたの思い込みよ」

智春

「それじゃあ何で……」

？？？

「私はただその本を見せてもらいたかっただけよ」

智春

「そ、そうだったんですか……」

？？？

「それで、その本見せてくれない？」

智春

「え？　あ、はい」

智春は本を女に渡した。

？？？

「これが“煉獄の魔導書”……あの頃が懐かしいわ」

すると女は、本を胸に当てた。

？？？

「さぁさぁおいでなさい……我こそは魔女見習い・“エンジェ・ベアトリーチェ”……。

破門にされてはしまったけれど、かつて同じ同盟に所属し、私と遊んでくれた懐かしき“家具”よ……我が呼び掛けに答えよ……」

パァァァ……

急に辺りが明るくなった……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？

「あら、意外な人が来てたわね」

腰に二つの鞘を携え、若い東洋の龍をイメージさせたような仮面をつけた、

白いマントを羽織った――声から女だろう――人物が言う。

？？？

「……まだ子供だな」

？？？

「それでもあの力は必要でしょ？」

背中に竜を象った大鎌を担いだ、黒いマントを羽織った人物が溜め息を吐く。

？？？

「仕方ない……」

？？？

「うんうん」

？？？

「白天竜、おまえに任せる」

「うんうん……へ？」

“白天竜（はくてんりゅう）”と呼ばれた人物は頭にハテナマークを浮かべた。

？？？

「だから、あの“煉獄の魔導書”はおまえに任せると言った」

白天竜

「……」

？？？

「……」

ポク、ポク、ポク、チーン！

白天竜

「な、なんであたしなのよ！？」

？？？

「これは俺とおまえに与えられた任務だが、実行するのは“おまえ（白天竜）”とリーダーから言われてるんだ」

白天竜
「そ、そんなの……」

？？？
「とにかく！　今回はおまえ1人でやれ、いいな？」

白天竜
「うぅ……わ、わかったわよ。　でも……」

白天竜は人間の幽霊のようなものを出した。

白天竜
「同じ女としてあまり傷つけたくないから、これを使うわ」

？？？
「……怨魂（おんたま）か」

怨魂――戦場や戦争で巻き込まれて死んだ人間の魂を実体化させたもの。

白天竜
「あとは……あっちが何とかしてくれるはずよ」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？
「“煉獄の魔導書”の発動……だと？」

？？？
「おい、こんなのは想定外だぞ」

？？？
「ようやく我々が手に入れたものをこうも簡単に発動されてはな……」
？？？
「持ち主から奪う……」
？？？
「それしかないな……」
？？？
「では、さっそく……」

フードをかぶった人物はカーペットから黒い物体を出した。
さらに、悪魔のような怪物まで呼び寄せた。

？？？
「もらうぞ……魔女の力を……」

～～～～～～～～～～

ばいきんまん
「くそ……なんで俺様が逃げなきゃいけないんだ」

チンクの脅し（？）で逃げ出したばいきんまんがいた。

グゥ～～～

ばいきんまん
「俺様、お腹ペコペコ……」

ＢＢＢＢＢ！！！！

ばいきんまん
「ん……？」

ＵＦＯのレーダーが反応した。

～～～～～～～～～～～～

「ふぅ……」

女がひと息吐いた。

智春
「な、何だったんだ今の……！？」

智春は気付いた。
自分の目の前にいた女が、１人から８人に増えていたのだ。

操緒
「トモ……あれって……」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？
「……」

女――エンジェと呼んだ人物の目の前には、７人の女がいた。

茶髪ツインテールの女が言う……

「『色欲』の“アスモデウス”……」

金髪ツイン縦ロールの女が言う……

「『暴食』の“ベルゼブブ”……」

茶髪ロングヘアの女が言う……

「『強欲』の“マモン”……」

黒髪ポニーテールの女が言う……

「『怠惰』の“ベルフェゴール”……」

白髪縦ロールの女が言う……

「『憤怒』の“サタン”……」

緑髪ウェーブの女が言う……

「『嫉妬』の“レヴィアタン”……」

黒髪ロングヘアの女が言う……

「『傲慢』の“ルシファー”……」

「“煉獄の七姉妹”、ここに……」

エンジェ
「久しぶりね、煉獄の七姉妹たち」

マモン
「エンジェ様……私たち……」

エンジェ
「ごめんなさい」

「え……？」

エンジェ
「私が破門されてなかったら、この本を手放さなくてもよかったのに……あなたたちと別れなくてもよかったのに……」

マモン
「エンジェ様……」

？？？

「悪いが、お話はそこまでだ」

エンジェは、自分の後ろに立っていたフードの人物を見る。

エンジェ
「あなた……誰？」

？？？
「私は『ＸＶ機関』に所属する者……」

エンジェ
「ＸＶ機関…そう……あなたたちがこれを……」

？？？
「そうだと言ったら？」

エンジェ
「別に……ただ」

？？？
「ただ……何だ？」

エンジェ
「あなたたちに仲間になるよう誘われても、断らせてもらうけど」

？？？
「ほぅ……やはりその本の持ち主だけのことはあるな」

フードの人物は一歩下がった。

？？？
「私たちの誘いを断ったからには、ただでは済まない」

フードの人物が立っていたところに黒い物体が現れた。

？？？

「挨拶代わりにこいつがあなたの相手をする」

エンジェ

「あら？　あなたじゃないのね」

？？？

「いずれ相手になるよ」

黒い物体――その姿はガードアーマーによく似ていた。

だが、こちらの基調色は赤である。

？？？

「魔法などおまえの力で弾いてみろ、パワーアーマー」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

パワーアーマーがエンジェたちを攻撃目標として向かった。

？？？

「あら、貴方たちだけがその本を狙っているって思わないことね」

？？？

「だ、誰だ！？」

フードの人物がキョロキョロしていると、目の前に仮面をかけた人物――白天竜が現れた。

白天竜
「貴方たちのおかげでこっちがやりやすくなったわ」

？？？
「竜の仮面……そうか、貴様が『竜の爪』のメンバーか」

白天竜
「だったらどうするつもり？」

？？？
「私の手で倒す！」

そう言うと槍を手にした。

白天竜
「ハァ……やっぱりこうなるんだ」

白天竜は剣を構えた。

？？？
「ほぅ…二刀流とはな」

白天竜
「今からでも遅くないわ。
私と戦うのをやめてもらえないかな？」

？？？
「そんなことをするくらいなら最初から構えたりしない」

白天竜

「そう……」

ギリ……

???

「いざ、勝負！」

白天竜

「……」

フードの人物が動く。

だが、白天竜は動こうとしなかった。

～～～～～～～～～～～～

智春

「一体何か起きてんだよ？」

智春は状況を把握できずにいた。

操緒

「トモ、あれ！」

操緒はこちらにやってくる悪魔ーーー彼らの世界ではドーターと呼ばれている。

智春

「何で此処に？」

操緒

「トモ！」

操緒を見た智春は頷く。

そして、彼女の姿が消える。

智春

「来い、クロガネ！」

彼の目の前に、漆黒の魔神が現れた。

クロガネが悪魔を拳で吹き飛ばす。

壁にぶつかり、壁は一瞬にして破壊された。

外は暗かった。

クロガネは黒い塊を悪魔にぶつける。

悪魔はどんどん穴の開いた壁から外へ吹き飛んでいく。

智春

「大丈夫か？」

操緒

『このくらい平気だよ』

そう言ってる頃には、悪魔はいなくなっていた。

操緒

「何だったんだろうね、あれ」

クロガネが消え、操緒が姿を見せた。

智春

「……」

～～～～～～～～～～

はやて

「何や、この騒ぎは？」

ようやくこの騒動に気付いたはやてたちが来た。

なのは

「――――ッ！？」

なのはは目の前の光景に目を疑った。

８人の女が巨体の黒い物体と戦っている。

そして、少し離れたところにフードの人物が血を流して倒れている。

白天竜

「……」

白天竜は倒れているフードの人物を黙って見ていた。

一つの剣には血がついていた。

少年と少女と思われる2人の周りには動かない怪物がいた。

はやて
「ともかく、客の皆を非難させるんや！」

はやての一言でなのはたち他のメンバーがパーティー客を会場から非難させた。

～～　数分後　～～

はやて
「で……？」

パーティー客を非難させたはやては、会場を見回した。

はやて
「さっきより荒れてない？」

なのは
「にゃはは……」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

白天竜
「だからやりたくなかったのよ……」

目の前で血の海に横たわるフードの人物を見ながら言う。

？？？
「にしては容赦なかったが」

白天竜
「……黒鎌竜（こくれんりゅう）」

黒鎌竜と呼ばれた者が近づく。

？？？
「で、怨魂のほうは？」

白天竜
「……時間の問題よ」

？？？
「……“あっち”のか」

チャキ……

白天竜
「こんなときに下ネタ言う気？」

黒鎌竜の首に剣を突き刺した。

黒鎌竜
「……」

しかし、黒鎌竜は気にすることなく白天竜を見る。

白天竜

「どうやら、あの子には私たちが行かないといけないみたい」

黒鎌竜
「そうか……」

と黒鎌竜が大鎌を構えた。

？？？
「待ちな」

2人の前に現れたのは、死神代行の一護だった。

一護
「テメェラ、一体何者だ？」

黒鎌竜
「答える義理はないな」

一護
「何？」

？？？
「そいつは困るなぁ」

黒鎌竜
「ほぅ……」

一護の後ろに男が立っていた。

黒鎌竜

「アダム・ブレイドか……」

ブレイド
「だから何だ？」

黒鎌竜
「貴様の能力……相手の技を自分の物にする“ゼロ”にはリーダーも興味を持っている」

ブレイド
「……で、俺とやりあうつもりか？」

黒鎌竜
「あぁ、今すぐ貴様と闘いたいが……戻るように言われてるんでね」

白天竜
「それじゃあ、アレ（煉獄の魔導書）はどうするの？」

黒鎌竜
「……ここは諦めろ、だそうだ」

白天竜
「……わかったわよ」

2人の足元に魔法陣が現れる。

黒鎌竜
「またどこかで……」

一護
「待ちやがれ！」

手を伸ばすが、その手はただ虚しい風を作り出しただけであった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

エンジェ
「……」

一方、エンジェたちは怨魂を軽々と倒し、パワーアーマーが動きまくっていた。

パワーアーマー
「ウオォォォォ……！！」

パワーアーマーは両腕を床に叩きつけた。

エンジェ
「く……」

何度も何度も叩くので床に亀裂が入った。

マモン
「エンジェ様、床が……！」

パワーアーマー
「ウォォォォ！！！！」

今までで一番強く叩いた。

亀裂が大きくなり、床が崩れた。

エンジェ
「くっ！？」

エンジェが崩れた床から離れるために飛んだ。

だが、飛んだ方向は穴の空いた壁だった。

マモン
「エンジェ様！」

マモンが手を伸ばすが届かず、エンジェは落ちていく。

マモン
「エンジェ様！！」

エンジェ
（ここで終わるの？
私の人生、ここで終わるの？
まだ目的を果たしてないのに……）

エンジェは目を瞑った。

エンジェ
「……」

ヒュ～……

風の音がする。

なぜだろ……そう思い目を開けると、小さい生物と少女が2人いた。

エンジェ

「あなたたち……」

???

「貴女ね、私たちが助けに入ったからよかったけど、下手したら死んでたのよ！」

エンジェを抱いている女が叫んだ。

???

「皐月ちゃん、抑えて抑えて」

助けに入ったのは、たまたま通りかかった皐月・ヴィヴィオ、そしてワープスターに乗ったカービィであった。

カービィ

「まさか2人が此処に来るなんて」

皐月

「あぁ……チンクさんから呼び出しがかかってね、ある場所に向かってる最中に」

ヴィヴィオ

「この人が落ちていくのが見えたから」

カービィ
「まさに間一髪だったんだね」

皐月
「そういうこと。
ヴィヴィオが“ソニック・ムーブ”を使ってね」

皐月はエンジェをワープスターに乗せた。

皐月
「それじゃ、急ぐから」

ヴィヴィオ
「カーくん、またね」

2人はそう言うと飛んでいった。

カービィ
「戻ろっか」

エンジェ
「……」

エンジェは何も言わず、カービィはビルに戻って行った。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

その頃、七姉妹たちはパワーアーマーと対峙している。

パワーアーマー
「ウォォォォ！！」

サタン
「よくもエンジェ様を！」

怒りに満ちたサタンが胴体を攻撃する。
だが、胴体には傷ひとつ付いていない。

ベルフェゴール
「こいつ……」

ルシファー
「何なのよ……こいつ」

マモン
「エンジェ様……」

パワーアーマー
「ウォォォ……！！」

？？？
「……主人がいないと何もできないのか」

レヴィアタン
「何ですって！？」

何者かは七姉妹の頭の上を越えた。

サタン
「な……っ！」

？？？
「胴体がダメなら……」
バキッ！
何者かは左腕を攻撃した。
パワーアーマー
「グァァァァ！！！！」
アスモデウス
「効いてる……」
？？？
「他の場所を狙う……それくらい判る話だ」
何者かは続け様に右腕・左脚・右脚を攻撃した。
パワーアーマーの胴体は倒れた。
？？？
「蘇芳（あいつ）が招待されたから来てみれば、この有様だ」
ルシファー
「あなた一体……」
その時、国際警察がやってきた。
『ＢＫ２０１、そこから動くな！』
？？？

「もう来たのか……」

何者かはやってきた警察を殴り外に出ていった。

『くそ、追え！』

そして国際警察はその場を後にした。

『ターニャ、お前も来い』

ターニャ
「了解」

ターニャと呼ばれた少女もその場から離れようとしていた。

？？？
「ターニャ！」

ターニャ
「……蘇芳（スオウ）」

蘇芳
「もうやめて！　これ以上誰かを殺さないで！」

ターニャ
「……」

ターニャは目の色を変えず、ただ蘇芳を見ていた。

蘇芳

「ターニャ！」

ターニャ
「……」

ターニャは何も言わずその場を後にした。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カービィ
「到着～～っと……」

カービィは座っているエンジェをワープスター下ろした。

カービィ
「て、何か会場が変わりすぎてるような気がするんだけど……」

……

まぁ、そこは敢えてツッコまないでください。

銀時
「てりゃあァァァァァァ！！」

へぶっ！？

銀時
「語り手がンナ情けないこと言うんじゃねぇよ！」

だって～……

銀時

「だってもクソもあるかァァァ！！」

カービィ
「あれは構わなくていいから」

エンジェ
「そう……ならそうさせてもらうわ」

カービィは、落ちているビーム銃を吸い込んだ。

ゴックン！

カービィ
“ビーム”をコピーしたペポッ！」

カービィは杖を持ち、黄色い体にカラフルな帽子をかぶっている。

カービィ
「はぁぁぁ……」

杖の先に力を集中させ……

カービィ
「ビームはどう！！」

と言ったと同時に、杖の先からビームの塊が倒れているパワーアーマー目がけて飛んでいき……

ドォーン！！

という爆発音とともに消滅した。

カービィ
「ふぅ……」

エンジェ
「へぇ……」

それはまさに、エンジェがカービィに興味が湧いてきた瞬間だった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ばいきんまん
「やっとご馳走が食べられると思ったら……」

ばいきんまんは何とか侵入に成功したが、中にはなのはや銀時やカービィ……といった強力な顔触れが勢揃いしていた。

ばいきんまん
「そうだ！」

何やら悪いことを考えだしたようだ。

ばいきんまん
「なーに、ちょっとしたお遊び……ふふふ」

不気味な笑みを浮かべ、何かをし始めるばいきんまんであった……

～～～～～～～～～～～

？？？
「あいつがやられた……？」
？？？
「まさかこんなことになるとはな……」
？？？
「……上は何て言っている？」
？？？
「……本は諦めて戻ってこい……だってよ」
？？？
「まぁ、犠牲者が出てる以上仕方ないか」
？？？
「あと、戻る前に“アレ”のテストもやれ……ってことだ」
？？？
「“アレ”が役に立つのかよ」
？？？
「上の命令だ、素直に従っておけ」
？？？
「チッ……わかったよ」

フードの人物は、大きな斧を持った黒い大きな塊と、人間の姿をした黒い塊を呼び出した。

？？？

「それじゃ、さっさと行くか」

フードの人物たちも姿を消した……。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

『申し訳ありません、ＢＫ２０１　を逃がしました』

『くそっ！』

ターニャ

（スオウ……）

冷酷な目の彼女がかつての親友のことを考えていた。

『も、申し上げます！』

『何だ、騒々しい』

『た、たった今、パーティー会場に黒い塊の増援と思しき生物が現れたという報告が！』

『残っていた部隊は？』

『それが……』

『何だ、躊躇（ためら）わずにさっさと言え！』

『その増援の黒い塊と一緒に現れた“契約者”と思しき人物たちに

やられた、と……』

『何っ!?』

ターニャ
（他の契約者があそこにいた……？　そんなはず……）

『……ターニャ、お前は会場に戻れ。
契約者には契約者でだ、いいな？』

ターニャ
「了解」

ターニャは今来た道を戻って行った。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ベルゼブブ
「この料理、おいし～ね♪」

カービィ
「ほんとだね♪」

ルシファー
「あんたたち、よくこんなときに食べられるわねぇ」

ベルゼブブ
「だって～、ベルゼね、お腹が空いちゃうんだも～ん」

ベルフェゴール
「可愛く言っても説得力が……」

エンジェ
「そういえば、あなたの名前聞いてなかったわね」

カービィ
「んく……え、僕？」

料理をそのまま飲み込んだカービィが言う。

エンジェ
「ちなみに私はエンジェ、“右代宮　縁寿”よ」

カービィ
「ぼくカービィ！」

マモン
「それにしても……」

プニ……

頬に指をあてた。

カービィ
「ポヨ、くすぐったいペポ」

アスモデウス
「ポヨって可愛い声……」

レヴィアタン
「あのほっぺのプニプニ感……」

七姉妹
「触らせてーーー！」

カービィは七姉妹にいいように遊ばれた。

『ハ～ヒフ～ヘホ～！！』

カービィ
「い、今の声は……」

サタン
「ちょっとー、まだあたし触ってないんだから」

ベルフェゴール
「そんなサタン姉が一番触ってるよ」

サタン
「な……っ！」

と言っている傍から、機械竜が現れた。
そして、その頭部に乗っているのは、ばいきんまんであった。

ばいきんまん
「そこにある食物を全部よこせ！」

ベルゼブブ
「いやだ！　これベルゼのだもん！」

サタン
「あんたのもんじゃないわよ！」

ばいきんまん
「そういうんなら……」

ガチャ……

機械竜の口がひらいた。
そして、周りの空気と一緒に食物を口に運んでいく。

ばいきんまん
「ハ～～ハハハハッ！　これでぜーんぶ俺様のものだ！」

ベルゼブブ
「ベルゼの……返して！」

サタン
「まだ言うか！」

カービィ
「そうだ、僕の食物返せ！」

サタン
「あんたもかっ！」

カービィは“ボム”をコピーすると、手から出した爆弾を投げ付けた。

ばいきんまん
「何だそんなもの……」

スゥ〜……

ばいきんまん
「お返しだ！」

ボムッ！

ドッカーン！！

カービィは爆風に吹き飛ばされた。

ナオ
「どこに行ったかと思ったら……」

リマ
「こんなところにいたのね」

ばいきんまん
「何だ、おまえら？」

リマ
「時空管理局の者です」

ばいきんまん
「あっそ……だったら！」

機械竜の口からガジェットが出てきた。

ばいきんまん
「ＡＭＦ・ＥＣＭ搭載、バイキンガジェットだーっ！」

ナオ
「そう……」

リマ
「なんだ……」

２人は、すでにバリアジャケットを装着していた。
そして……

ナオ
「邪魔……」

リマ
「しないでくれる？」

と言うと、あっという間にバイキンガジェットを破壊した。

ばいきんまん
「そ、そんな……」

ナオ
「あっちで黒い塊を相手にしてきたのに……」

リマ
「こっちではガジェットを相手にしないといけないなんてね……」

銀時
「……テメェ、覚悟はいいだろーなァ？」

ばいきんまん
「ふ、ふん！　簡単にこいつを壊せるわけ……」

ブレイド
「バルカンショック・リトルボーイ！！」

ブレイドの炎を纏った拳が炸裂！

ブレイド
「判決！　死刑！！」

ドッゴーン！！

爆発音とともに胴体が粉々に砕け散った。

ばいきんまん
「そ、そんな……」

ばいきんまんのいたコックピットはまだ残っていた。

銀時
「ふっとべェェェェェェ～～～！！！！」

銀時の一振りで機械竜は破壊され、ばいきんまんは吹っ飛んだ。

ばいきんまん
「バイバイキ～ン！！」

キラーン☆

銀時
「たく……こんなときに来るんじゃねぇつーの」

そして、いちごショコラを食する銀時であった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ターニャ
「……」

ターニャが戻ってきた時に見たものは、警察と契約者と思われる人物たちの無残な姿であった。

ターニャ
「……」

『ターニャ、どうだ？』

ターニャ
「全滅しています。
おそらく彼女たち（管理局）が片付けてくれたんだと思います」

『そうか……他に変わったことはないか？』

ターニャ
「他は……ありません」

『そうか、なら戻ってこい』

ターニャ
「了解」

ターニャは通信を切った後、ある人物を見る。

ターニャ
「……」

だが、ターニャは気にすることなくその場から去った。

そんなターニャをスオウはずっと見ていた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「あとがき質問コーナーの時間よ！」

ヴィヴィオ
「前回のこの話を見た方でも楽しんでもらえるように話の内容を変えました」

雅也
「あと、今回は皆さんからの質問に答えていきます」

メアリー
「まぁ、質問の内容は期間限定で掲載したものと同じものが入っているがな」

雅也

「まぁ、新しい質問も入ってるけどな」

メアリー
「というわけで、最初の質問だ。

ペンネーム・烈火竜さん

『志村妙と八神はやて、一番腹黒くて強いのはどっちだと思いますか？』

これは作者に答えてもらうぞ」

作者
「そうだねぇ……料理の面では妙さんは別な意味ですごいし、はやてちゃんは女性の胸を……ね、するからすごいし……だけどどっちかって言ったら、はやてちゃんかな。
負のオーラを醸し出してるときのはやてちゃんに氷結魔法を使われたら一貫の終わりのような気がするよ」

皐月
「なるほどねぇ……」

ヴィヴィオ
「次の質問だよ。

ペンネーム・地水炎風陰雷さん

『作品・『アスラクライン』の智春と操緒と奏は、大体どの辺りの時間軸のところを舞台として出すんですか？』」

作者
「ま、簡単に言えば『一巡目の世界』ですね。
ちなみに、前の話では『一巡目の世界』に旅立つ前、『二巡目の世界』の２人を描いているよ」

雅也
「じゃあ、『二巡目の世界』が舞台にならないのか？」

作者
「あとはノーコメントでお願いします」

皐月
「それじゃあ、次の質問よ。

ペンネーム・烈火竜さん

『銀さんに質問です。
ナオに『ボリュームが足りない』と言ってましたが、どれくらい足りないんですか？』」

銀八
「はい、銀さんがいないので先生が答えます。
ズバリ！　超高級いちごパフェ５０杯分くらいだな」

ナオ
「どれぐらいだか解らないわーっ！」

作者
「なるほど、ナットク」

ナオ
「納得するなーっ！」

雅也
「それじゃあ、最後の質問な。

ペンネーム・烈火竜さん

『作者さんは『竜の爪』の中でお気に入りはいますか？』

こんな質問に答えていいのか？」

作者
「まぁ、ある程度までは大丈夫だよ。
え～……自分のお気に入りは……そうですねぇ、やっぱり“水”ですね。
“水”についての設定を多少変えるかもしれませんけど、メインキャラに絡ませていけたらなぁ……って考えてます」

皐月
「名前以外ネタバラしてるんじゃないの？」

作者
「大丈夫、大丈夫」

メアリー
「そうなのか？」

雅也

「ああ言ってるんだから大丈夫だろ」

ヴィヴィオ
「それじゃあ、今回のあとがきコーナーはここまでだよ」

皐月
「次回もよろしくね！」

第１４－Ｂ話：大・大・大乱闘！　魔女ｖｓ悪魔ｖｓ契約者ｖｓニードレスｖｓ

※話を変えていくうちに、前回の約2倍くらいの文字数になりました。

皆さんからのご意見・御感想を待ってます。

人気投票・発表！（前書き）

※タイトルどおりです♪

人気投票・発表！

雅也
「ついに……ついに、人気投票・発表も最後になったな」

皐月
「う～ん……あんまり票は集まらないわね」

ヴィヴィオ
「作者さん、どうするの？」

作者
「え～……と……一応、現時点（第１４話）までの登場キャラでやってみました。
ちなみに、こっちで決めた箇所が半分くらいだ」

皐月
「ほとんどあんたが決めてるんじゃない！」

メアリー
「さて……こっちではどうなることやら」

作者
「というわけで、さっそく第１０位から一気に発表です！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

第１０位

『コピー完了、ペポッ！』

コピー能力は無限大！
今回はどんな能力を見せてくれるのか……

小さき星の戦士

・カービィ
（星のカービィ）

第９位

『マスター、私はずっとマスターの傍にいます……』

火・雷・氷を操る頼れる
ユニゾンデバイス

小さくも大きくもなれる

・メアリー
（オリジナル）

第８位

『私を止められたる？』

グラヴィティ（重力）の魔法を使う魔導師
雅也の幼なじみ

・神代　皐月
（オリジナル）

第7位

『私もみんなのために頑張る！』

聖王の鎧を纏いし少女は
皆のために頑張る……

魔力はなのは以上の魔導師

・高町　ヴィヴィオ
（魔法少女リリカルなのはシリーズ）

・第6位

『私がここにいてもいいの……？』

迷える彼女に答えは出るのか……

戦闘機人・ナンバー2

・ドゥーエ
（魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ）

第４位

『あたしたちは知りたい……』

『なんでお母さんとお父さんが襲われたのかを……』

２人の姉妹は、その真実を知ることができるのか……

オーシャンブルーの髪が似合う
姉妹魔導師

・リマ・ストワール
（オリジナル）

・ナオ・ストワール
（オリジナル）

第３位

『俺のこの刀が届く範囲で……仲間に指一本触れさせやしない……』

いちご牛乳が大好き！

糖尿病直前！
銀髪パーマの侍

・坂田　銀時
（銀魂）

第2位

『キャリバーンの力で、俺はみんなを守る！』

現・嘱託魔導師
まだまだ成長するぞ！

また、彼のレンタル（貸し出し）をしているので、借りるときはメッセージをください。

・久本　雅也
（オリジナル）

第1位

『守りたいものがある……だから私は強くなる……みんなのために……』

金色の髪をなびかせて
空を舞う

心やさしき金の閃光

・フェイト・T・ハラオウン
（魔法少女リリカルなのはシリーズ）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

雅也
「おぉ……！」

皐月
「なんであんたが……」

ヴィヴィオ
「すごい、すごいよ！」

メアリー
「マスターが2位とはな、天候が荒れるな。
いや、荒れさせるか」

雅也
「サラッと変なこと言うな！」

作者
「というわけで、みごと第1位に輝いたフェイトさんにお越しいただきました！」

フェイト
「なんか恥ずかしいな……」

作者
「そんなことありません！
フェイトさんが1位になるなんてすごいですよ！」

フェイト
「そ、そうかな……？」

作者
「そうですよ！」

フェイト
「そっか……」

作者
「はいっ！　一段落したところで今回はここまでです！
ちなみに、雅也の貸し出ししているのでよろしく！」

雅也
「うぉいっ！　変なこと言うな！」

作者
「え？　今の真面目に言ってたつもりなんだけど。
というわけで、今回は以上です！」

雅也
「うお……」

プツン……

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第１５－Ａ話：護りたい人（前書き）

※ＣＨＡＯＳ；ＨＥＡＤ編、最後の話です。

第１５－Ａ話：護りたい人

ドゥーエ
「……それで、これは一体どういうことなんですか？」

メタナイト
「私に訊かれても困る」

ドゥーエ
「そう、ですよね……」

ドゥーエは自身の足元を見た。

そこにはピラニアに似た生物や水竜の仮面を被った奴らが切り裂かれていた。
正確に言うと、ピラニアたちがドゥーエたちを襲おうとしたので、切り裂いたのである。

ドゥーエ
（こんなところに人を襲うピラニア……ということは、この先にあるのは……）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

チンク
「はあっ！」

チンクは1人、ガードアーマーを相手にしていた。

チンク
「だいぶ魔力を消費したようだな」

チンクは片膝をついた。

ガードアーマー
「ウガァァァァ！！」

足元をドスンドスンとさせる。

チンク
「こいつ……まだやる気なのか？」

ガードアーマー
「ウガァァァァ！！」

右拳をチンクに向けた。

チンク
「ちっ……」

チンクは横に動いてかわそうとした……が……

チンク
「あっ……」

足がもつれ倒れてしまった。

チンク
「しまっ……」

すぐに動こうとするが、足が思ったように動かない。

ガードアーマー
「ウガァァァァ！！」

チンク
「……ッ！」

チンクは目を瞑った。

……

チンク
「……？」

いつまで経っても攻撃がこないので目をあけた。

そこには赤い髪をした雅也が剣ーーキャリバーンで右拳を防ぐようにして立っていた。

チンク
「お前……いつのまに……」

雅也
「ついさっきですよ。

皐月とヴィヴィオが先に行っちゃったんでユニゾンして飛ばしてきたんですけど……先に来ちゃったみたいで。
それにしても、チンクさんらしくないですね、あそこで倒けるなんて」

チンク
「お前……」

チンクの顔が怖いものになった。
しかも、ナイフを投げ付ける構えまでしている。

雅也
「スミマセン！　言い過ぎました！」

メアリー
『そうですよ、チンクさんに対して失礼です』

雅也
「そりゃそうだけど……」

という会話をしつつ、雅也は右拳を返した……奴の右足目がけて……。

ガードアーマー
「グァァァ！！！」

雅也
「っと……さっさと終わらせるか」

メアリー

『そうだ……そう、ですね』

雅也
（おいおい、そこ言い直す必要ないだろ？）

メアリー
（気分の問題なんです！）

雅也
（そ、そう……）

雅也は剣先をガードアーマーに向ける。

雅也
「1発で終わらせてやるからな」

メアリー
『覚悟しろっ……なのです』

雅也
「……」

もう雅也はツッコまなかった。

カードリッジを2発ロードすると、キャリバーンは赤く燃えはじめた。

雅也
「それじゃ、火力調整は任せるよ……」

メアリー
『言われなくても……』

雅也
「んじゃ……」

雅也は素早く動き、懐に飛び込んだ。

雅也
「いくぜっ！」

キャリバーンはさらに燃え上がった。

雅也
「炎撃……一刀両断！」

雅也はキャリバーンを思いっきり振った。

キャリバーンに斬られたところから炎が出現し、身体全体に広がり、最後には両脚・両腕に炎は移っていった。

ガードアーマー
「グガァァァァァ！！！！」

ガードアーマーは藻掻き苦しみながら倒れた。
炎の勢いは衰えることなく奴の身体を燃やし尽くせるまで燃やした。
そして、ガードアーマーは灰と化した。

雅也
「ふぅ……」

ユニゾンを解除し、雅也の髪の色は元に戻った。

メアリー
「マスター、お疲れさまです」

雅也
「メアリーもごくろうさま」

メアリー
「あ、はい……」

メアリーは顔を真っ赤にして俯いた。

雅也
「……？　どうかしたのか？」

メアリー
「い、いえ、なんでもないです！」

雅也
「でも顔が……」

メアリー
「なんでもないのですから大丈夫なんだです！」

雅也
「そ、そうか……それならいいけど」

チンク

（ハァ……またこいつは……）

チンクは気付いている、メアリーは雅也に言われて赤くなったのだと、そして言葉も変になったのだと。

「ま・さ・や・く～～～ん！」

そこにマーブルがやってきた。

そして……

むぎゅ～～～

雅也
「ちょっ、こ、こんなとこ皐月たちに見られたら……」

マーブル
「別にいいじゃない、あたしがうれしいんだから♪」

雅也
「理由になってねぇ！」

チンク
（……あとで少しやったほうがいいな……）

と思っていると、後ろから自分とは違う、それも殺気に近い気配を感じた。

チンクは振り返った。

チンク
（お、おぉ……）

その光景を見たチンクはそろーりと身を退いた。

雅也
「頼むから離れてくれ。
じゃないと皐月とヴィヴィオが……」

「私たちが、何だって？」

ギクッ！

雅也
「……」

雅也はゆっ……くりと振り返った。

雅也
「や、やぁ……皐月、ヴィヴィオ」

皐月
「ふぅ～ん……あんたってそういう子がタイプだったんだ……」

ヴィヴィオ
「雅也くん……ひどいね」

雅也

「ち、ちがっ、これは……メアリー、2人に説明……」

メアリー
「嫌だ」

雅也
「な、何でだよ？」

メアリー
「……フンッ」

メアリーはそっぽをむいた。

皐月
「それじゃあ、雅也……」

ヴィヴィオ
「頭、冷やそうか……」

2人はモードチェンジさせたデバイスを向ける。
マーブルは雅也から離れている。

雅也
「ま、待て……俺の話を……」

皐月・ヴィヴィオ
「聞くもんかぁぁぁ！！／聞きたくないもん！！」

雅也
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

2人の攻撃は、建物全体を揺るがすほどのものだった。

チンク
「……哀れだな」

そして遅れてきたフェイトとティアナが目にしたのは、黒焦げの雅也だった。

フェイト
「ねぇ……一体何があったの？」

チンク
「……」

フェイトとティアナに先程の出来事を話すと、

フェイト
「ふぅーん……」

と言ってデバイスを気絶中の雅也に向けた。

ティアナ
「フェイトさん、それだけはやめてください！」

とティアナに止められ、仕方なくデバイスをおろした。

フェイト
「でも……雅也はヴィヴィオたちに持ててるんだね」

と優しい顔をして言った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

梨深
「はぁ……はぁ……はぁ……」

一方、梨深は地下へと続くらせん階段にいた。

梨深
「タク……待っててね……すぐ行くから……」

階段は梨深の足音しか聞こえない……はずだった。

「ウガァァァ！！」

梨深
「っ！？」

梨深の頭上から叫び声が聞こえた。

梨深
「な、何……？」

梨深が見たものは翼を生やした竜であった。

「ウガァァァ……」

竜が大きな口をあけて梨深に目がけて飛んでくる。

梨深
「こんなところで止まってる場合じゃないのに……」

梨深はディソードを手にした。

梨深
「はあぁぁぁ！」

梨深が竜を斬り付けると、たちまち竜は姿を消した。

梨深
「よし、これくらいの相手なら……」

「ウガァァァ……」

梨深
「え……」

梨深は見上げた先には、さっきの竜が何十匹もいた。

梨深
「あんなにたくさん相手にしてたらタクが……」

？？？

「テメェが相手にする必要はねぇ」

という声が聞こえたかと思うと、何匹もの竜が一瞬にして凍り付いた。

？？？

「上は彼女たちがやってくれるはずだ」

梨深の目線には、男性と女性が映っていた。

梨深

「あ、あなたたちは……」

？？？

「ただの通りすがりの死神だ、気にすることはねぇ」

梨深

「は、はぁ……」

？？？

「つーか、テメェは早く行け」

梨深

「で、でも……」

？？？

「大事なモンを護りに行くんだろ？」

梨深

「……」

梨深はディソードを握り締めた。

梨深
「ありがとうございます……」
梨深はお礼を言って下におりていった。

？？？
「……行ったな」
男は梨深がいなくなったことを確認する。
？？？
「日番谷隊長にしてはカッコつけすぎではないのか？」
そう……梨深を助けたのは冬獅郎と砕蜂であったのだ。
冬獅郎
「う、うるさい……」
砕蜂
「それにしても……」
砕蜂にはある疑問があった。
砕蜂
「ホロウといい竜といい、この世界にいないモノがいる、これは一

体どういうことだ？」

冬獅郎
「考えられるとしたら……」

砕蜂
「誰かが連れてきた、とかか？」

冬獅郎
「……それ以外に考えられねぇ」

砕蜂
「だとしても一体誰が……」

そう話しているうちに、いつのまにか竜は全部片付けられた。

冬獅郎
「んで……これからどうするんだ？」

砕蜂
「そうだな……」

1、上に行ってみるか

2、下に行ってみるか

冬獅郎
「……とりあえず、選択肢にするのはやめろ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ドゥーエ
「ふぅ……何とか出ましたね」

ドゥーエたちは地下水路から抜け出た。
そこには大きな機械がそびえ立っていた。

メタナイト
「……」

ドゥーエ
「どうしたんです？」

メタナイト
「誰かの殺気を感じる……」

ドゥーエ
「え？」

？？？
「これはこれは、まさか西條拓巳より早く来る者がいるなんてね」

ドゥーエ

「誰ですか！？」

？？？

「君たちの目の前にいる者だよ」

ドゥーエ

「目の前……？」

2人は目の前にある巨大な機械の方を見た。
そこには1人の男性が立っていた。

？？？

「君らは私の邪魔をしに来たのだね？」

メタナイト

「何のことだ？」

？？？

「ほぅ……とぼけるつもりか」

ドゥーエ

「とぼけてなどいません、私たちは本当に何のことだか……」

？？？

「……そこまで言うのなら仕方ない、君らから始末しよう」

男は剣を出現させ握り締める。

ドゥーエ

「……」

メタナイト
「……」

？？？
「どうした？　驚いて声も出せないのか？」

ドゥーエ
「いえ、そんなことはありません。ただ……」

？？？
「ただ……何だ？」

メタナイト
「いくら後ろにある機械を駆使しても勝てないだろうと思ってな」

？？？
「そんなことはやってみないと分からん」

ドゥーエ
「そうですか……それでしたら……」

ドゥーエの中にある何かのスイッチが入った。

ドゥーエ
「全力で殺るまでです」

――ドクター、やはり私はこっちがやりたいみたいです

メタナイト

「殺るのは彼じゃない」

ドゥーエ
「……え？」

メタナイト
「後ろの機械をやるんだ」

ドゥーエ
「機械を？　彼でなく？」

メタナイト
「あぁ……」

ドゥーエ
「……ま、貴方を信じてみることにしますよ」

そしてドゥーエは動いた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？
「おぅおぅ、さっそくやってるじゃん」

フードの男はドゥーエたちの戦いを見ている。

？？？
「西條拓巳はここには来れねぇんだよ、オッサン」

？？？

「ていうか、その前に……」

???

「オッサンは死んじゃうんだからさ……フフフ……アハハハハ……！！」

男はそう言うと黒い物体を出した。

???

「さぁ……あの妄想使いのオッサンをやってきな」

黒い物体は小さく頷くと消えた。

???

「これでおもしろくなるってもんだ……」

男はそういうと建物から姿を消した。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

シグナム

「……」

ザフィーラ

「どうした？」

シグナム

「いや、なんでもない」

ザフィーラ
「そうか」

シグナム
「……」

建物の上階と地下から魔力反応が感じられる。　が、それはザフィーラも分かっているはずだ。
では、何を気にしているのか？
それは……

「ウギャアァァァ！！」

シグナム
「何だ、今のは？」

ザフィーラ
「下の方から聞こえてきたな」

シグナム
「……」

ザフィーラ
「どうした？　行かないのか？」

シグナム

「なぜか、行かないほうがいい気がしてならない」

ザフィーラ
「珍しいな、そんなことを言うとは」

シグナム
「自分でもそう思ってる」

ザフィーラ
「ならば、ここから一旦出るか」

シグナム
「……あぁ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

メタナイト
「……」

ドゥーエ
「これは一体……」

2人が目にしているのは、黒い生物にグチャグチャにされた、さっきまで戦っていた男の哀れな姿だった。

そして、その後ろにあった機械も破壊されている。

「グギャアァァァ！！」

黒い生物は暴れだしあちこち破壊していく。

そして地下の天井が崩れはじめた。

メタナイト
「こっちも一旦退いたほうがいいな……」

ドゥーエ
「でも……ここからでは出口が」

メタナイト
「出口ならあそこに」

メタナイトは上を指した。
一ヶ所だけ穴があいているところがあった。

ドゥーエ
「どうやってあそこまで……」

メタナイト
「つかまれ」

ドゥーエ
「え……？」

メタナイト
「早くしろ」

ドゥーエは言われたとおり掴まった。

メタナイトはマントを翼にし飛び上がった。

梨深
「な……何？」

下へ降りていた梨深のところも崩壊がはじまった。

梨深
「早く行かないとタクが……」

ガラ……

突然、梨深が立っていたところが崩れた。

梨深
「あ……」

梨深は手を伸ばしたが届かず、落ちていく。

梨深
「……ッ！」

ばふっ

梨深
「え……」

梨深は誰かに抱えられた。

「たく……世話が焼ける奴だな」

それは、さっき梨深を助けた冬獅郎と砕蜂であった。

梨深
「あ、ありがとう、ございます……」

冬獅郎
「別にたいしたことはしてねぇよ」

砕蜂
「早くしないと崩れるぞ」

冬獅郎
「あぁ、そうだな」

冬獅郎は梨深を抱えたまま出口にむかっていった。

ドゥーエ
「あ……」

メタナイト
「どうした?」

ドゥーエ
「あそこに人が」

ドゥーエは縄で縛りつけられているカチューシャをつけた少女と少年を見つけた。

メタナイトに頼んでそこに下ろしてもらうと、少年を抱えた。

メタナイト
「どうするつもりだ？」

ドゥーエ
「こうするんです」

ドゥーエはメタナイトの姿になった。

ドゥーエ
「さっきので貴方の容姿を覚えたので」

メタナイト
「……」

メタナイトは少年を抱え、ドゥーエは少女を抱えた。

そして……そこから外へと出たのだった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？

「フフフ……ごくろうさまだったな、ブラックドラゴン」

ブラックドラゴン

「グギャアァァァ！！」

？？？

「よしよし……さっさとそのオッサンを食べちまいな、『ノア２』のデータもいただいたから早く行きたいんだ」

ブラックドラゴンは死んだ男を丸呑みすると姿を消した。

？？？

「じゃーな……この世界……」

男の足元が光ったかと思うと、いつのまにかいなくなっていた。

そして、その場には粉々に破壊された『ノア２』と呼ばれた機械の残骸しか残っていなかった。

竜の仮面を付けた者たちがその光景を見ていた。

？？？

「……」

？？？

「……やられたな」

？？？

「まさかあんな手を使ってくるなんてね」

？？？
「それで、これからどうするの？」
？？？
「あの残骸を回収する。
解析・改修できれば使えるだろう」
？？？
「りょーかいっ！」
？？？
「了解……」

彼らは廃墟と化した地下で回収作業に入った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

フェイト
「……」

フェイトたちは崩壊したビルを見ていた。

皐月
「なんで急に崩壊なんか……」

雅也
「皐月とヴィヴィオがあんな攻撃したからじゃ……」

皐月・ヴィヴィオ
「「……」」

雅也
「言い過ぎました……」

マーブル
「雅也くんは悪くないよ、悪くない！」

メアリー
「マスター……」

チンク
「……ん？」

ティアナ
「どうしたの？」

チンク
「あそこ……」

チンクが指したのは、小さい穴であった。

ティアナ
「あの穴がどうかしたの？」

チンク
「何かが来る気配がした」

ティアナ
「気配ってど……」

ドゴーン！！

一同は音がした……穴の方に目を向ける。

そこには、梨深を抱えた冬獅郎・砕蜂と、少年少女を抱えたメタナイトとドゥーエがいた。

フェイト
「え……」

ティアナ
「どうして2人が……」

チンク
「……」

チンクは向かっていった。
自分の姉……ドゥーエの方に向かって

チンク
「ドゥーエ姉さん……」

ドゥーエは最初驚いた顔をしたが、しだいに穏やかになっていった。

ドゥーエ
「チンクがこの世界にいるなんて……驚いたわ」

チンク

「なぜだ……姉さんはなぜ急にいなくなってしまったんだ……」

ドゥーエ
「……」

チンク
「答えてくれ、姉さん！」

ドゥーエ
「ごめんね、今はまだ……」

チンク
「そうか……」

チンクは少し俯いた。

チンク
「約束してくれ……いつかかならず話すと……」

ドゥーエ
「ええ……ごめんね」

チンク
「いえ……」

ドゥーエは少女を下ろすと魔法陣を展開した。

ドゥーエ
「また手紙書くから……」

チンク
「あぁ……」

ドゥーエ
「いつか、いつかかならず貴方たちのところに帰るから……」

チンク
「……あぁ」

ドゥーエ
「貴方はどうします？」

ドゥーエはメタナイトを見る。

メタナイト
「……」

フェイト
「えっと……なぜあなたがここに？」

メタナイト
「偶然ここに立ち寄った、それだけです」

フェイト
「……」

メタナイト
「……」

メタナイトはドゥーエのもとに歩いていく。

メタナイト
「彼女と少し一緒にいて気付いたことがある」

フェイト
「……何にですか？」

メタナイト
「彼女は1人にさせてはいけない、ということ」

ドゥーエ
「……」

メタナイト
「彼女の悩み事は相当深いもので、それで思い詰めたりするのだろう」

チンク
「……」

メタナイト
「しばらくは彼女と旅をさせてもらう」

ドゥーエ
「そういうこと……それじゃあ皆によろしくね」

チンク
「姉さん……」

ドゥーエ

「何？」

チンク
「いつか……いつか、自分達と一緒に……」

ドゥーエ
「えぇ……もちろん……」

そう言ってドゥーエとメタナイトはいなくなった。

チンク
「姉さん……」

フェイト
「チンク……」

ティアナ
「チンクさん……」

少しの間、チンクはドゥーエが立っていたところを見つめていた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

はやて
「それで……結局は分からずじまいやったってことか？」

シグナム
「すみません……」

はやて
「しかも、フェイトちゃんたちまで行ってたなんてな」

フェイト
『その……ちょっと言いにくくなって……』

はやて
「ほっほぅ……」

フェイト
『えっと……ごめん』

はやて
「あはは、気にしてないって」

フェイト
『それより、さっきの話だけど……』

はやて
「ん？　あぁ、なのはちゃんのこと？」

フェイト
『その……こっちに来るって』

はやて
「うん、さっき届けも出したから……」

フェイト
『そう、なんだ……』

シグナム
「気になることでもあるのか？」

フェイト
『それはないんだけど……』

はやて
「なのはちゃんの身体のことやな」

フェイト
『最近無理してるみたいだし、ちょっと気になって』

はやて
「せやな……」

シグナム
「そこはテスタロッサが見てるしかないだろうな」

フェイト
『……』

はやて
「ヴィータも言ったみたいやけど、たぶん……」

フェイト
『……』

はやて
「そ、それじゃあ、なのはちゃんが行ったら連絡ちょうだいな」

フェイト
『うん、わかった……』

プツン……

はやて
「『無理するな』って言っても無理するタイプやらかなぁ……なのはちゃんは」

と、心配をするはやてであった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「あとがきコーナー！！」

一同
「わぁーーー！！」

メアリー
「……こんな感じでいいのか？」

雅也
「まぁ、作者はこんなに話が原作とかけ離れるだなんて予想もしてなかったみたいだからな」

皐月
「それにしても話が途中からメチャクチャになってるんだけど」

ヴィヴィオ
「そうかなぁ？」

雅也
「うーん……」

メアリー
「マスター、物は相談なのだが、作者がある人物を呼びたいらしいのだが……」

雅也
「いきなりかよ……で、誰なんだ？」

メアリー
「この方です」

【人物・作品を確認中…】

雅也
「……」

メアリー
「……マスター、どうするんだ？」

雅也
「あ～……皐月たちにも相談していいか？」

メアリー
「もちろんです」

雅也
「てわけで、2人に話したいことがある」

皐月
「……最初から嫌な予感がするんだけど」

ヴィヴィオ
「でも、雅也くんの頼みだから」

皐月
「そうね……」

雅也
「実は……」

【2人に説明中……】

皐・ヴ
「「……」」

雅也
「どう思う？」

皐・ヴ
「「それっていいの？」」

雅也
「まぁ……そういう反応だよな」

メアリー

「私もそう思ってしまいましたからね、あれを見たときは」

【カンペ】

メアリー
「何々……『もう終わりにして、ていうか終わってください』、だそうだ」

雅也
「そうか、それじゃあ俺は交渉に行ってくる」

皐月
「頑張んなさいよ」

ヴィヴィオ
「ファイト、だよ」

メアリー
「マスター、私も一緒に……」

雅也
「あぁ……」

皐月
「てことで、今から作者からメッセージが届いた人は、作者さんからの出演依頼だと思ってくださいね」

ヴィヴィオ
「それじゃあ今回のあとがきコーナーはここまで！」

一同
「まったね～～～」

第１５－Ａ話：護りたい人（後書き）

※メチャクチャな感じになってしまいましたが、暖かい目でこれからもよろしくお願いします。

第１５－Ｂ話：ライバル登場？（前書き）

※タイトルどおりです。

第１５－Ｂ話：ライバル登場？

ガードアーマーの大暴れ、ばいきんまんの食料強奪によってパーティーは継続不能となった。
現在、魔導師たちによって片付けが行われている。

はやて
「ハァ……せっかく休みで来たんにこんなことに巻き込まれるなんてな」

なのは
「にゃはは、そんなに落ち込むことないって」

はやて
「せやけど……」

？？？
「頼もーっ！」

銀時
「んぁ？　誰だ、こんなときに変な声出した奴は？」

？？？
「ここだ、ここ」

キョロキョロ見回すが見当たらない。

銀時
「なーんだ、いねーのか」

？？？
「おまえの目の前だ！」
銀時
「目の前？」
……
銀時
「いねーじゃねぇか」
？？？
「下を見ろ、下を」
銀時が下を向くと、そこにいた。
いたが、そいつはカービィと同じくらいの大きさであった。
銀時
「……」
？？？
「……」
銀時
「スイマセーン、ここに迷子の子供がいまーす」
？？？
「迷子じゃないし！

しかも誰が子供だー！」

銀時
「んじゃ、何だってんだよ？」

？？？
「フッフッフッ……俺は泣く子も黙るガキ大将のコアッパだ！」

銀時
「……スイマセーン、やっぱ子供がいるんで連れてってくださーい」

コアッパ
「人の話を聞けーっ！」

銀時
「テメェは人じゃねーだろ」

銀時はコアッパというガキを見る。

その姿は、二足立ちのヒヨコそのものであった。
たとえて言うなら、コワッパの殻をなくしたような姿である。

コアッパ
「それがどうしたっ！
これでも俺は強いんだぞー」

銀時
「この辺りでの話だろ？
んなもんに興味はねぇよ」

コアッパ
「あんたになくても……」

コアッパは、ビシッ！っとカービィに指（？）を向けた。

コアッパ
「こいつに用があるんだ！」

カービィ
「ボヨ？」

残った食料を頬張っていたカービィがこちらを向いた。

コアッパ
「勝負だ！！」

カービィ
「え、えっ！？」

コアッパ
「うおりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

コアッパがカービィに突進する。

カービィ
「ぼふっ！」

カービィは衝撃でボールのように壁に当たりまくった。

コアッパ
「うお～～～～！！
どうだっ、これが俺の力だ！」

ナオ
「カービィ！」

ベルゼブブ
「もふもふっ（チビピンク）！」

エンジェ
「……」

サタン
「こらっ！　口に入れたまま言うんじゃない！」

ドンッ！

ベルゼブブ
「ふぐぅ！？」

サタンに背中を叩かれ喉に詰まらせるベルゼブブ。

コアッパ
「どうだ、俺は強いんだぞーっ」

カービィ
「イタタ……いきなり体当たりしてきてそれって……」

銀時
「卑怯……っていうんだぞ」

コアッパ
「卑怯じゃない、実力だ！」

銀時
「はいはい、勝手に言ってろ」

不機嫌そうな顔をしていたコアッパだが、カービィを見ると顔が笑っていた。

コアッパ
「もう一度いくぞ～～～！」

コアッパが再び突進してきた。

カービィ
「……」

黙ったままカービィは赤いハチマキを巻いた。

コアッパ
「うおりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～！！」

カービィ
「……」

コアッパとの距離は１０メートルになり……みるみるうちに縮まっ

ていく……

コアッパ
「くらえぇぇぇぇぇ～～～～～！！」

カービィ
「……」

がしっ

コアッパ
「うおっ？！」

カービィはコアッパを掴んだ。
必死に藻掻くがぎっちりと掴んだ手が離れない。

カービィ
「……ハァァァァ！！」

コアッパを掴んだまま身体を後ろに反らした。

カービィ
「はあっ！！」

その瞬間、掴んでいた手を手を離した。

コアッパ
「うおぉぉぉぉぉ……！！」

ゴォ～～ンッ！！

という壁にぶつかる音がしてコアッパは倒れた。

カービィ
「“ファイター”の『ともえなげ』……だよ」

エンジェ
（へぇ……）

カービィのコピー技を見てさらに興味を持つエンジェ。
そこにマモンが声をかける。

マモン
「エンジェ様？」

エンジェ
「何？」

マモン
「そろそろ行かないと……」

見回すと、周りには魔導師でいっぱいになっている。

エンジェ
「ねぇ、ワープとかってできるの？」

レヴィアタン
「エンジェ様がそうしたいのでしたら……」

エンジェ

「そう……」

目を瞑ってしばらくすると足元から赤紫色の光を放たれた。

エンジェ
「カービィ……また会えるといいわね……」

ベルゼブブ
「もぐもぐ……」

ルシファー
「いつまでも食べてないの」

サタン
「どれだけ食べれば気が済むのよ！」

エンジェ
「（やっぱりいいな……この生活……）……それじゃあまたね、ピンクの勇者さん……」

カービィに聞こえないように言ったエンジェは姿を消した……。

コアッパ
「ハッ……！」

コアッパが目を覚ましたときにはすでにカービィたちは帰ったあとだった。

コアッパ
「くっそぉ……今度は絶対、ぜーーーったいに勝ってやる！」

コアッパ
「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ～～～～～！！
覚えてろぉぉぉぉぉぉぉぉぉ～～～～～！！」

そう叫びながら突っ走っていくコアッパであった。
そしてこの騒動が彼……コアッパとの最初の戦いであった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

数日後、手続きを終わらせフェイトたちと合流するために待ち合わせの場所に向かっているなのはの姿があった。

なのは
「フェイトちゃんにヴィヴィオ、元気にしてるかな……」

久し振りに会える親友・わが子に胸を躍らせているなのは。

そして、待ち合わせの場所に到着した。

なのは
「おまた……せ……」

なのはが目にしたのは、フェイト・ヴィヴィオ・皐月・メアリー、
そして見知らぬ女の子(マーブル)に抱かれている雅也であった。
フェイト・マーブル以外は顔が歪んでいた。

なのは
「……」

フェイト
「な、なのは、久し振り……」

なのは
「うん、久し振り……（フェイトちゃん、これってどういうこと？）」

挨拶をしたあとすぐさま念話で話し掛けるなのは。

フェイト
（えっと……どこから話せばいいかな？）

なのは
（最初から全部……）

フェイト
（そう、だよね……）

なのはの顔が“白い悪魔”という別名にふさわしいものになっていた。
そのとき、フェイトは思った。

――ご愁傷さま、雅也……――と……

その後、話を聞いたなのはが有無を言わさず雅也にディバインバスターをたたき込んだのは言うまでもない……。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「あとがきコーナー！！」

ワァーーー！！

皐月
「今回は久し振りにゲストを呼んでるわよ」

雅也
「おぉ……」

メアリー
「本当に久し振りだな」

ヴィヴィオ
「楽しみだね♪」

皐月

「それじゃあ、さっそく登場していただきます！
『ツバサ　～砂漠の国の姫君と仮面の戦士～』の主人公、翔道翼さんです！」

……

皐月
「あれ？」

雅也
「……来ない」

メアリー
「さっきの打ち合せではいたのにな」

♪……♪……

ヴィヴィオ
「あれ……？」

雅也
「こんな曲流れる予定あったか？」

皐月
「そんなのなかったはず……」

「とおっ！」

雅也
「わっ！！」

ヴ・皐
「きゃっ！！」

メアリー
「翼さん、こんな登場の仕方をしないはずでは？」

翼
「ふっ、こんな登場がしたくなってな」

メアリー
「まったく、勝手すぎるのも困るのだが……」

翼
「あぁ、今度からは気を付ける……ようにする」

雅也
「……えっと、ゲストも来てくださったところで、今回は質問に答えていただきます」

皐月
「……それじゃあ、最初の質問にいくわよ。

『翼さんの好きなものは何ですか？』」

翼
「色々ある。　食べ物ではリンゴを使った料理だな。
バイオリンを弾いたりもする」

雅也

「へぇ～、楽器が使えるんだ～」

メアリー
「地水さんによると、ある名器を所有していて、たびたび弾いているそうだ」

ヴィヴィオ
「ねぇねぇ、他にはないの？」

翼
「他には俺の世界の方で出会った士郎やセイバーたち、今まで一緒に旅をした奴らとの思い出だな」

皐月
「そうなんだ……。
さてと、次の質問にいくわよ。

『翼さんには好きな人はいますか？』」

翼
「う～ん……いるといえばいるな」

皐月
「だ、誰なんですか！？」

ヴィヴィオ
「教えてください！」

メアリー
「ぜひ、教えていただきたい！」

翼
「ああ、サクラだろ、小狼だろ、士郎にセイバーに……」

雅也
「あぁ……そっちでの好きってことか……。
こっちは『恋愛』とか『愛している』とかの方の好きだと思うけど」

翼
「あ、そっちか、う～ん……う～ん……」

一同
「要するに、いないってことだね」

翼
「う～ん……そういうことになるな」

一同
「……」

優太
「……次の質問にいくか…」

雅也
「優太さん?!　どうしてここに?」

優太
「あ～、作者から急に来てほしいってことだったからな、次の質問は俺が読むぞ。

『雅也・皐月・ヴィヴィオ・優太の4人の中で誰と戦いたいですか？』」

翼
「え～と……ヴィヴィオ以外の3人となら戦ってもいい」

雅也
「……なぜヴィヴィオだけ？」

翼
「ヴィヴィオっていうと、義理ではあるがなのはやフェイトの……」

皐月
「そうよ、それが何？」

翼
「2人のことを思い出すと……うう……」

メアリー
「つらい思い出なのだな」

優太
「ふ～ん……俺と戦うことになったら全力で来い、女・子供には手加減するが、
男のお前なら気を抜いたら一瞬で終わるぞ」

翼
「ご忠告、どうも。
だが、俺だってすごいぜ」

優太
「ま、そのときが来たら覚悟しておけよ」

翼
「上等だ……」

ヴィヴィオ
「ううう……なんで私だけ……ううう……」

優太
「それじゃあ、俺はこれで」

シュン！

翼
「なんだよ、慌てて行っちまうなんて」

雅也
「あ、あの……」

翼
「ん、何だ？」

皐月
「それって多分……」

メアリー
「あなたの後ろにいる人のせいだろうな」

翼
「後ろ……」

なのは
「……」

フェイト
「……」

翼
「……」

なのは
「ヴィヴィオが泣いてるんだけど……」

フェイト
「泣いてる原因はこれ、なんだね……」

翼
「あ、あの、えっと、その……」

なのは・フェイト
「「少し付き合ってくれる？」」

ガシッ！

翼
「すみませんでしたっ！

お願い、見逃して！」

なのは・フェイト
「「やーだっ♪」」

ズルズル……

ギィ……バタン……

翼
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

雅也
「おお……頑張れ」

皐月
「時間が掛かりそうだから翼さんが活躍するお話を、作者（青いタヌキ）がＰＲしてくれるって」

メアリー
「そうか、ではＰＲスタートだ……」

なのは・フェイト
「「さぁ、あなたの罪を数えなさい……！！」」

翼
「うぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

一同
「……南無」
▼▼▼

「頑張ったほうね」

メアリー
「というか……」

ヴィヴィオ
「こっちのほうがかっこいい」

一同
「なぜ自分の小説で今のようなことをやらない？」

作者
「そ、それは……あぁ！
そうだ、用事があったんだ、それじゃ！」

シュタッ！

雅也
「逃げたな……」

翼
「ううう……ひどい目にあった」

メアリー
「お詫びといってはなんだが、綾華……優太の彼女が作ったアップルパイをお土産にどうぞ」

翼
「おお、すまないな」

皐月
「というわけで、今回のゲスト、翔道翼さんでしたー！！」

パチパチ……！！

雅也
「久し振りの呼び出しだったな」

皐月
「やっぱり呼び出しコーナーを復活させるわよ！」

メアリー
「まぁ、いつも今回みたいな感じでいけばいいのだがな」

ヴィヴィオ
「参加希望者、待ってるよ」

雅也
「それじゃあ、今回はこれで……」

一同
「次回もよろしく（ね）！」

プツン……。

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』か

ら書いてお送りください。

第１５－Ｂ話：ライバル登場？（後書き）

※小さいことでもいいので、感想があったらお願いします。

緊急アンケート！（追加．ｖｅｒ）（前書き）

※前回の“アンケート！”を修正しました。

緊急アンケート！（追加．ｖｅｒ）

皐月
「はい、みんなで声を出すわよ、せーの……」

スタッフ一同
「わーー……」

皐月
「声が小さい！」

スタッフ一同
「ワァーーー！！」

雅也
「皐月、何させてんだよ？」

皐月
「ん？　掛け声の練習」

雅也
「スタッフ全員でか？」

皐月
「そうよ（ニッコリ）」

雅也
「そんな清々しい顔して言うことか！」

皐月
「別にいいじゃない」

雅也
「……」

ヴィヴィオ
「えっと……いつも可愛いヴィヴィオです」

雅也
「……いきなり出てきてそれ？
しかもなぜ自己紹介？」

ヴィヴィオ
「え、えっと……こっちのほうがいいかな……って」

メアリー
「ナイス天然」

ヴィヴィオ
「？」

雅也
「ていうか、このコーナーって終わったんじゃないのか？」

皐月
「それがね、作者が『やっぱりこのコーナーをやりたいっ！』ってことで、また始まるらしいわよ」

雅也

「やりたいって……またかよ」

ヴィヴィオ
「それじゃあ、さっそく最初の質問だよ。

ペンネーム・烈火竜さん

『予定にないアニメも出ていませんでしたか？』」

雅也
「出てたな……」

皐月
「出てたわね……」

メアリー
「出ていたぞ……」

ヴィヴィオ
「えっと、具体的には次の作品とキャラクターが出てました」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

※掲載の順番は次のようになっています

・作品名→キャラクター名

※ここから先が予定に乗せていなかった作品とキャラです。

・ＤＡＲＫＥＲ　ＴＨＡＮ　ＢＬＡＣＫ　～　流星の双子　～

黒（ヘイ）
スオウ
ターニャ

・うみねこなく頃に

縁寿（えんじぇ）
ルシファー
レヴィアタン
サタン
ベルフェゴール
マモン
ベルゼブブ
アスモデウス

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「ちなみに、後述の作品は準レギュラー化作品にするらしいわよ」

雅也
「準レギュラーって、それじゃあ、また出てくるってことか？」

皐月
「ま、いつ出すのかは未定みたいだけどね」

メアリー
「カービィとの絡みがあったからな」

ヴィヴィオ
「それに本編で因縁みたいなことを言ってたよ」

皐月
「しかも、『煉獄の魔導書』なんてものまで考えちゃったしね」

雅也
「なぁ…この設定に参考にしたのって……まさか……」

メアリー
「……はやてさんの『夜天の魔導書』だ」

雅也・皐月
「「やっぱり……」」

ヴィヴィオ
「それじゃあ、お姉さんたち（※縁寿や煉獄の七姉妹）は魔法が使えるの？」

皐月
「原作に魔法が使えるって掲載されてないから、まだ検討中みたいよ。
ちなみに、今のところ8人以外のキャラの加入はないみたいよ」

雅也
「んじゃ、前述の作品は？」

皐月
「機会があったら出すみたいよ、原作の話とはかなり変わるみたい

だけどね」

ヴィヴィオ
「あ、そういえば、今回はアンケートがあるんだよ」

雅也
「アンケート？」

皐月
「あぁ、次の私たちが行く世界についての質問でしょ？」

メアリー
「それで今回、どの世界がいいのかを調査するということだ」

皐月
「候補にあがってるのは、次の作品よ」

・神曲奏界ポリフォニカＳ

・けんぷファー

・１１ｅｙｅｓ

・銀魂

・恋姫無双シリーズ

皐月

「希望は1人3つまでとさせていただきます」

メアリー
「なお、アンケート数が1つしかなかった場合、その1つの作品を採用します」

※と…ここまでは前回の（削除した）話と同じだが、ここから先は前回と違うところである。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「前回のアンケートで予想外の感想や希望をいただきました」

一同
「ありがとうございます！」

メアリー
「調子に乗った作者が、今度は前回の世界のあとの行き先として、6つ追加してアンケートを取ろうとしている」

雅也
「いいのかよ、それで……」

ヴィヴィオ
「というわけで、アンケートの対象になるのは次の作品です！」

・戦場のヴァルキュリア
・ＮＥＥＤＬＥＳＳ
・ティアーズ・トゥ・ティアラ
・アスラクライン
・廃墟の城＝ブラックキャッスル（オリジナル）
・アクマと妖精、精霊の住んでいる＝ファンタジータウン（オリジナル）

※ちなみに、前述のオリジナル世界はある作品をモチーフにして名前をつけました。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

雅也
「て、なんで作者オリジナルの世界が入ってんだよ！」

皐月
「いいじゃない、オリジナルの世界は作者がやってみたいって思ってる世界みたいだし」

雅也

「まさか、他にもあるとかって言わないよな」

皐月
「さぁ～ね、もしかしたらあるかもしれないよ」

ヴィヴィオ
「こちらも1人3つまでとさせていただきます」

メアリー
「あ、そういえば、私たちの（いちおう）出身の世界の『魔法少女リリカルなのはシリーズ』が載ってないぞ」

雅也
「な、なんでだよ！」

パラリ……

皐月
「あ、作者からのメッセージよ。
『なのはさんたちの世界は最後らへんということで……よろしくね♪

※理由：楽しみはあとにしておいたほうがいいから』」

雅也
「そんな理由かよ！」

メアリー
「……で、どうするのだ？」

雅也
「……ここまでやったんだったらやるしかないだろ」

メアリー
「皆さん、作者が勝手ですみません」

ヴィヴィオ
「というわけで、アンケートの追加版はここまで！」

皐月
「皆さんからのメッセージ……」

一同
「待ってまーす！！」

第１６話：戦国の世へ（前書き）

※新世界へ突入です！

第１６話：戦国の世へ

〜　廃棄物処理工場　〜

廃棄物処理工場ーーーそこは日用品の他に、先の大戦で大破したＭＳ・ナイトメアなどをも処理している。
そんな処理されるはずものの中にまだ活動できるものがあった。

？？？

「……」

ウゥゥゥゥ……

ピッ…

ガコン…

？？？

「ピピピ……組ミ込マレタプログラムノ活動ヲ開始シマス……」

ガコガコッ……

？？？

「故障部位発見……部品ヲ交換シマス……」

ガタガタ……

？？？

「チェック……メインシステム異常ナシ……各部位モ異常ナシ……。世界地図モ修正ナシ……」

ウゥゥゥゥ……

？？？

「ワープホール……展開……目的場所ヲ指定……」

ガガガ……

？？？

「目的場所ハ、“遺伝子研究所”……」

パァァァ……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　某室内にて…　～

銀時と一護、そして恋次と冬獅郎はフェイトに呼ばれた。

銀時

「で、俺たちに何の用だ？」

フェイト

「うん、実はね次に行く世界のことなんだけどね」

……

一護
「カニの化け物？」

フェイト
「そう……こっち（管理局）で調べたら、その世界にはいないはずのカニの化け物と呼ばれているものがいるみたいなんです」

冬獅郎
「俺たちにどうしろと？」

フェイト
「まず、その世界にいてはならない……カニの化け物を退治してもらいたいんです」

恋次
「それだったらそっちの得意分野じゃねぇのか？」

フェイト
「まぁ、それはそうなんだけど……」

フェイトは少し間を置いてから言った。

フェイト
「その世界に行けるに制限がついちゃったんです」

一護

「制限って……なんで？」

フェイト
「わからない……だけどそれのせいでみんなが行くのに申請しなくちゃいけなくて、少し時間がかかっちゃうみたいなんです。そこで……私たち全員が一緒に行くんじゃなくて、制限人数ギリギリの5人で行ってもらいたいんです」

銀時
「5人って、1人いねぇぞ」

フェイト
「1人は既にその世界に到着しています」

銀時
「俺たち待ちってことか……」

フェイト
「はい……」

フェイトは申し訳なさそうな顔をした。

一護
「いいぜ、そこに困ってる人がいんだろ？だったら助けてやるのが筋ってもんだろ」

恋次
「ま、そういうことなら報告に戻った砕蜂隊長の代わりにせいぜい頑張るか」

冬獅郎
「……はぁ、世話のかかる奴らだ」

銀時
「しょうがねぇなぁ……んじゃ、ひと暴れするとしますか」

それから4人は目的の世界に送られた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ティアナ
「あの、フェイトさん？
4人が行った世界はいったい……」

フェイト
「あぁ……あの世界はね、なのはと私がいた……地球での歴史上の人たちがいるんだよ。
でもね、その世界には“女性”としてその人たちがいるんだって」

ティアナ
「そうなんですか……」

と

なのは
「フェイトちゃん、なんで銀さんたちを先に送ったの？」

フェイト
「え？　それはその世界の服装にあってるから……」

なのは
「そうじゃないよね」

ティアナ
「えっ！？」

フェイト
「……」

なのは
「フェイトちゃん、もう1回聞くよ……なんで銀さんたちを先に行かせたの？」

フェイト
「……なのははわかったんだね」

なのは
「うん。　でも、フェイトちゃんの口から聞きたいから」

ティアナ
「ど、どういうことですか？　制限とかの話は嘘だったんですか？」

なのは
「ううん、ティアナ、そういうことじゃないんだよ」

ティアナ
「それじゃあ、どういう……」

フェイト

「……」

なのは
「フェイトちゃん、話してくれるよね？」

フェイト
「……さっき、その世界に1人もう着いてるって言ったよね？」

ティアナ
「あ、はい……」

フェイト
「その人はね……姉さんなの」

ティアナ
「フェイトさんのお姉さんって……」

フェイト
「“アリシア・テスタロッサ”……1度は死んでしまった私の姉さん……」

なのは
「……どうして？
なかなか会えなかったんだよね、なのに……」

先の大戦で蘇ったフェイトの姉・アリシアは、その後管理局による監視が厳重になされていて、会う機会がほとんどなかった。
だが、最近になって、管理局でなく、彼女の妹のフェイトの保護観察という形で
会えるようになった。

今回は、そんな2人が会う最初の機会であり、2人で行う最初の仕事でもあるのだ。

フェイト
「怖かった……のかな」

ティアナ
「え……？」

フェイト
「姉さんに会えるのはうれしい。　だけど……」

チンク
「死んでしまったはずの姉に会うのが怖かった……どう接していいのか分からず……てところか」

フェイト
「……」

チンク
「会わないと分からないこともある……そう思うがな」

フェイト
「……そうだね」

なのは
「それじゃあ、早く手続きしよっか」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

〜　遺伝子研究所　〜

先の大戦後、コーディネイターの遺伝子技術を有効に利用するために建設された施設ーーーそれが遺伝子研究所である。

研究所では最近、契約者と呼ばれている人物について研究を行っている。

そして、その研究にはかつて時間を渡ったときに採取した契約者の女性の血液のＤＮＡ　を使用していた。

――男のものだと少々やりにくい――

というのが彼ら研究員たちの見解らしい。

『さて……この配列を確認できたらこの研究も最終段階に入るぞ』

研究員が遺伝子配列を確認する。

『変わったところはないか……ん？』

『どうした？』

『いや、ちょっと気になることがあって』

『というと？』

『はい、ここの配列が……』

『どれどれ……こ、これは！』

その時、警報機が鳴り出した。

『ど、どうした？』

『そ、それが研究所内部に侵入者が……』

『ちっ……で、侵入者の現在地は？』

『えっと……そ、そこの研究室にむかっています！』

『何っ！？』

ドッゴーン！！

部屋の壁が砕かれる。

『な、何者だ！？』

？？？

「ギギギ……コレヨリ契約者・コードネーム、『アンバー』・『シン』ノＤＮＡ　ノ回収ヲ行ウ……」

『な、なぜそのことを……』

？？？

「貴様ラガ知ルコトハナイ」

ガチャ……

『なっ……！』

？？？

「バキューム……オン」

ギュィィィィ……

『くぅ……っ』

スポッ……

『あっ……！』

ガコン…！

？？？

「『アンバー』ノＤＮＡ　ノ回収、完了……アトハ……」

？？？は、室内に保存されていたもう１つの契約者・『シン』という札がつけられた試験官を吸い込んだ。

？？？

「目的達成……アトハ破壊スルノミ」

『な、何を……』

ガチャン……

???
「マグナムキラー……発射」
『やーーーー』
ドゴォ……ン
???
「アトハ“再生マシン”ト“タイムふろしき”ヲ使ウトスルカ……」
???は、ワープホールを開いた。
???
「デハ行コウカ……戦国ノ世界ヘ……」
パァァァ……
室内は火が回り、機材などが燃え上がっていた。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
銀時
「んで……これからどうすんだ？」
一護
「どうするって言われても……」
フェイトが言うには、銀時たちがいる辺りにカニの化け物は現れる

らしい。

恋次
「つーかよ、人に聞きゃいい話じゃねえか」

冬獅郎
「怪物に怯えてる奴らが俺たちを見たらどう思うだろうな」

恋次
「そ、それは……」

ブゥン……

4人
「ッ!?」

4人の目の前に大きな穴が現れたかと思うと、突如メカが現れた。

???

「“再生マシン”、9割、起動……コレヨリ“タイムふろしき”ヲカケル……」

恋次
「な、なんだこいつぁ……」

一護
「おい、こいつは……」

冬獅郎
「黒崎、知ってるのか?」

一護
「ああ……前に何度かな」

一護は気付いた。
目の前にいるメカが、先の大戦で使われていた“ヘビーロブスター・マークⅡ”であると……。

銀時
「んじゃ、あとはそっちに任せて……」

テテテテ……

がしっ！

一護・恋次
「「あんたも手伝え！」」

逃げようとした銀時を掴む2人。

銀時
「チッ……たく、しょーがねぇーなぁ……」

銀時はいやいやながら木刀を握る。
一護たちも斬魄刀を握って待機している。

銀時
「そんじゃ……行くか」

サッ……

銀時
「カニもどき狩りじゃあァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

恋次
「……て、いつもよりなんかすごくねぇか？」

一護・冬獅郎
「……」

恋次の言葉に、そうだな……と思う2人だった。

マークII
「カウントダウン開始……。
『アンバー』ト『シン』ノ蘇生マデ、アト5分……」

？？？

「ん……あそこにいるのって……」

金髪のストレートにしたフェイトに瓜二つの女性が銀時たちを見つけた。

？？？

「フェイトが来ないと思ってたらあの４人が来てたのね……まったく」

彼女……“アリシア・テスタロッサ”は４人の方に向かっていった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

雅也

「あとがきコーナー！！」

ワァァァ……

皐月

「今回は質問がないのでここま……」

雅也

「待て待てぇぇぇぇ！！

始まって早々、いきなり終了勧告してんじゃねえ！」

皐月
「え～～、だって質問のお便りが届いてないのは事実でしょ？
それに今のところゲスト出演してほしいっていうメッセージもないし……」

雅也
「だったらそこを何とかしようとかって思わないのかよ」

皐月
「う～ん……某組織に入るとか」

雅也
「某組織って何よ？」

皐月
「ＬＶでのあの組織のことよ……それとも違う世界でつくろ～かなぁ～」

雅也
「悪役思考になるな！
お前はそんなキャラじゃないだろっ！」

皐月
「何よ、何か考えろっていうから考えたんでしょ。
冗談に決まってるでしょ」

メアリー
「冗談でそこまで思いつくことなのか？」

ヴィヴィオ

「皐月ちゃん、すごいね」

皐月
「それほどでも（照）」

雅也
「そこで照れるなよ……」

ヴィヴィオ
「あ、今回の本編で出てきた『アンバー』と『シン』について説明しますね」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

※1、アンバー

『ＤＡＲＫＥＲ　ＴＨＡＮ　ＢＬＡＣＫ　～　黒の契約者　～』に登場

・ライトグリーンの長髪と琥珀色の瞳が特徴的な女性。
契約者でありながら黒（ヘイ）に愛情を抱き、涙を流すような特異な存在。
契約者であり、能力は『時間制御』。　時間を止めたり、逆行させたりすることが可能。
契約対価は『若返ること』。　そのため使用制限がある。
原作では、力の使い過ぎて対価により消滅する。
本作品では、研究室に保管されていたＤＮＡ　をマークＩＩによって奪取され、『再生マシン』によって蘇生される。
ちなみに、彼女の契約対価による『若返ること』は、マークＩＩが所持していた“タイムふろしき”によって制御できるようになった。

※2、シン
『ＤＡＲＫＥＲ　ＴＨＡＮ　ＢＬＡＣＫ　～　黒の契約者　～』に登場

・黒（ヘイ）の妹で契約者。
黒（ヘイ）は『ＢＫ　２０１』と言われているが、彼女が本来の『ＢＫ２０１』である。

契約能力は『物質の変容をともなう電撃』、契約対価は『睡眠』。
原作では、黒（ヘイ）と一体化する。
本作品では、研究室に保管されていたＤＮＡをマークＩＩによって奪取され、『再生マシン』によって蘇生される。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ヴィヴィオ
「以上が今回の補足説明です」

雅也
「って……サイトの情報そのまんまだよ」

皐月
「いいじゃない、これぐらい」

メアリー
「マスター、そろそろお時間です」

雅也
「そっか……それじゃあ、今回はここまでってことで……」

一同
「次回もよろしく（ね）！」

プツン……。

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第17話：対決、出会い、登場（前書き）

※やっと書き終えました。

内容はかなり濃いです。

第17話：対決、出会い、登場

マークII
「排除……排除……ハイジョ……」

マークIIが両方のアームを開く。

マークII
「マグナムキラー……発射」

ドゴォ……ン

銀時
「て、でかすぎだろーがァァァァ!!」

一護
「んなこと言ってる場合か!」

一護が斬月を構える。

一護
「月牙、天衝!!」

ザンッ!!

マグナムキラーは真っ二つに裂けて爆発。

マークII

「ギギギ……再生可動率９８パーセント……ガガガ」

恋次
「お、おい、なんかヤバくねえか？」

マークＩＩの様子がおかしい。

マークＩＩ
「ギギガガ……アン……シ……再生カ……ン……リョ…ウ……」

冬獅郎
「こいつ……」

壊れている――そのことは誰にでも分かった。

それもそうだ……廃棄処分されるはずの機械が壊れていないはずがない。

少なくとも、動力部に破損ヶ所があったのだろう……言語も曖昧になってきている。

ガシャン……

マークＩＩがアームを上に傾ける。

恋次
「今度は何する気だ？」

ピコピコ……という電子音が聞こえた。

マークＩＩ

「ハッ…シャ……」

ボフン！　ボフン！

カプセルのようなものが２つ空に向かって発射されたかと思うと、
空間の切れ目が出現し、中に入った。
と同時に、切れ目が消えた。

一護
「な、なんだ……今の？」

マークＩＩ
「サイセイプロジェクト、実行……。
ハイジョ対象……イマダニ健在……コレヨリ、デリートプロジェクトニウツル……」

マークＩＩはアームを一護たちに向けた。

一護
「今度こそこっち狙いかよ……」

一護が斬月を構えた。

恋次
「一護、俺にやらせろ！」

そう言って恋次はマークＩＩに　向かっていく。

一護
「待て、恋次！」

一護が呼び止めるのも聞かず、恋次が斬魄刀・蛇尾丸を振り上げた。

恋次
「咆えろ、蛇尾丸！」

伸びた蛇尾丸がマークＩＩに斬り掛かる。

マークＩＩ
「ギガガガギ……プロテクション」

ガキィン！！

マークＩＩのボディのまわりに薄い膜のようなものが張られた。

恋次
「なっ……！」

マークＩＩは恋次にアームを向け、大きく広げた。

マークＩＩ
「……ボンバー」

恋次
「っ！！？」

ドゴォォォ……ン……

爆発音とともに土煙がたち、その衝撃でまわりの木々がいくつか倒れ、葉っぱが舞い散った。

一護
「恋次っ！！」

一護が声を張り上げて叫ぶ。

銀時
「南無……」

チーン……

銀時は合掌していた…。

ザッ！！

恋次
「人を勝手に死なすなーっ！」

なんと、銀時の前に恋次が姿を現したのだ。

銀時
「チッ……、てめぇ無事でよかった、よかったなぁ（棒読み）」

恋次
「てめぇ、今舌打ちしたろ！　しかも、なんだその言い方は！」

銀時
「べっつにぃ～～……。
ただ、今の攻撃でやられちまったら、おまえみたいなバカな奴にはいい御灸だと思っただけだ」

恋次
「死んじまえば御灸にもなんねえっつーの！」

銀時
「ま、それはそのとき考えればいいってことで、いくね？」

恋次
「いいわけねぇだろうが……」

恋次が怖い顔で銀時を睨む。

冬獅郎
「いっそのこと凍り付けにして谷底に落とすか」

銀時
「お、それいいね～」

恋次
「さっきよりもひどいっすよ！？」

冬獅郎
「安心しろ、今のは冗談だ」

恋次
「……冗談キツいっすよ、それは……」

冬獅郎
「……そうだな」

そのとき、一護が冬獅郎の顔を覗き込んできた。

冬獅郎
「……なんだ？」

一護
「いや……冬獅郎がボケたの、初めて見たなぁ～って」

恋次もそれに頷いた。

冬獅郎
「別に俺がボケたっていいだろ」

冬獅郎は顔を赤くし、俯いた。

一護
「そ、そりゃそうだけどよ……」

と話してる間に銀時が動いた。

銀時
「そんじゃ、その間に……」

銀時は洞爺湖をマークＩＩがいた方に向ける。

銀時
「カニもどきの相手をするか……」

土煙が晴れると、そこにはボロボロになったマークＩＩがいた。

銀時
「自分が爆発してまで倒そうとするかよ、普通は」

マークＩＩ
「ギギ……ギギ……ガガ…ガ…ガガ……」

銀時
「カニもどきさんよぉ……」

銀時がマークＩＩに近づく。

銀時
「てめぇみたいなゴツイのが……」

マークＩＩ
「ガガ……キラー…マシンガン……」

ガガガガ！！

アームからキラーを次から次へと撃ってくる。

しかし……

銀時
「こんなとこにいると……」

サッ！！

バシィン！！

ドォーン！！

銀時はそれを洞爺湖で落としたりかわしたりしながら、なおも近づいてくる。

マークＩＩ
「ガガ……フレイム……バス…ター……」

アームを大きくひらき、銀時に向けて火炎放射を放った。

ゴァァァァ！！

銀時
「無償に……」

ダッ……

銀時は地を蹴った……。

火炎放射をジャンプしてかわしたのだ。

そして……

ガシャラン……

銀時はマークＩＩの上に乗り、洞爺湖を下に向けた。

銀時
「腹が立つんだよォォォォォォォォォォ！！！！」

ドガシャン！！

銀時は洞爺湖をマークＩＩに突き刺した。

マークＩＩ
「ギギッ！？！？」

バチバチッ……

マークＩＩのボディからは火花が飛び散っていた。

マークＩＩ
「ギギギ……ガ、ガガ……ガガ……」

銀時はマークＩＩから降りた。

銀時
「うおりゃあアアアアアアア！！！」

銀時は木刀をおもいっきり振った。

バシィィィィン！！

マークＩＩ
「ギギャッ……！！」

マークＩＩは吹っ飛んだ。

損傷が激しく、さらに火花がバチバチいっている。

マークＩＩ
「コ、コレ……デ、終ワリ……ナノ…カ……ム……無ネ…」

ドゴォォォォン！！！！

マークＩＩは粉々に砕け散った。

銀時
「ふぅ……カニもどき狩り…終わった終わったぁ……」

銀時は懐から苺牛乳を取出し、飲みはじめた。

銀時
「んっ……んっ……ぷはぁぁぁ……！　仕事終わりの一杯はうめぇなぁ……」

それを唖然と見ていた一護たちが言う。

一護
「てか、勝手に終わらせてるし……」

恋次
「なんなんだよ、こいつは……」

冬獅郎
「……（阿呆に見えるが今のを見たかぎりじゃ……できる奴だ…

…）」

？？？

「お～い……」

一護

「ん？」

恋次

「どうした？　一護」

一護

「いま、女の声が聞こえたような……」

？？？

「おーい！！」

一護

「だ、誰だ！？」

？？？

「こっちだよ、こっち」

一護

「こっち…って……どっちだよ」

？？？

「アンタの真上だよ」

一護

「上って……」

一護たちは見上げると、金髪のストレートの髪をなびかせ、黒いマントを羽織った女がそこにいた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ここから先の話は数分前に遡(さかのぼ)る……

アリシア　ｓｉｄｅ

あたしが彼らと合流しようかなって思ったんだけど……

「ん？」

カニの姿をした機械ーーー

確か、ヘビーロブスターとかって名前だったかな？

そいつがミサイルのようなものを撃った

「へぇ……結構でかいの撃つわねぇ」

なんかでかい大砲の弾だったけど……

次の瞬間、オレンジ髪の男が魔力の塊……みたいなものを放って真っ二つにしちゃった

これにはあたしもびっくり！！

「これだったら様子見しちゃお～っと」

その場で止まってあたしは様子を見ることにしたの

「おお～……ふ～ん……へぇ～……」

あたしは彼らの戦いーーーっていっても銀髪パーマの人だけ戦ってたけどーーーを見させてもらったわ

「これは……ちょっと……」

すごいとしか言えなかったわ……

「普通あそこまでする？」

あんな我流であそこまでいくなんてねぇ……

「まっ、フェイトが見込んだ人物（ひとたち）だからね～」

これ、もしかしたら面白くなるかも……

「とと……そんなこと言ってる場合じゃないわ。そろそろ合流しないとね」

あたしは彼らのもとに降り立った……

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一護
「てめぇ……何者だ？」

アリシア
「あら……妹から聞いてないの？」

一護
「妹って……」

アリシア
「フェイトって名前よ」

銀時
「フェイト……って、アンタ……」

アリシア
「フェイトの姉のアリシアです。
いつも妹がお世話になってます」

ペコリ

とアリシアがお辞儀をする。

銀時
「いやいや……こっちこそフェイトのお姉さんがこんなにきれいな人なんて」

銀時もお辞儀をすると自己紹介をし、一護たちも自己紹介をした。

その後、冬獅郎がアリシアに尋ねる。

冬獅郎
「で、先に来ていたのってアンタか？」

アリシア
「そうよ」

恋次
「つーことは、例のカニの化け物はさっきの奴じゃ……」

アリシア
「それは違うわよ」

アリシアは即答した。

冬獅郎
「どういうことた？」

アリシア
「あたしがこの近くの村に立ち寄ったとき、カニの化け物が出たもの」

一護
「ほんとか！？」

アリシア
「嘘なんて吐かないわよ」

冬獅郎

「で、その村って何処なんだ？」

アリシア
「あっちよ……あ、瞬歩とか使ったりしないでよ。
あたしはフェイトみたいに空を飛んだりデバイスを使ったりしかで
きないから」

銀時
「あっそ。
ちなみに俺は使えないから関係ねーな」

アリシア
「そうだったわね。
それじゃあ、村に案内するから着いてきて」

アリシアが森の方に歩きだしたので、４人も後に付いていく。

恋次
「おい、大丈夫なのか？
あいつ」

突然、恋次が一護に尋ねてきた。

一護
「何がだよ」

恋次
「信用できるのかってことだ」

一護

「あぁ、そのことか……」

一護は前の大戦（前作）にも出ていたので分かる。

彼女はーーーアリシアはようやく妹に会えた。

そんなアリシアは、ああ見えて妹想いである。

そして、妹のフェイトにとってもそうだ。

あの時の2人は、誰も邪魔できないものだったから

それに……。

一護も会いたいと思っていた人がいる。

その人は今何処にいるか分からないが、いつかまた会えることを信じて……。

だからというわけではないが、アリシアは信用できる……。

屁理屈のようなものに近いかもしれないが、一護はそう思っている。

一護

「俺は信用してもいい相手だと思ってる」

恋次

「ほぅ……一護がそう言うってことは……」

一護

「つーか、いちいち俺に聞いてくるんじゃねえ。

自分の頭で考えろ」

恋次
「なんだとォ！」

その直後、２人の口喧嘩が始まった。

冬獅郎
「ったく、２人して何やってんだか……」

銀時
「ほんと、見てるこっちの気にもなれっての」

アリシア
「……」

２人の喧嘩を気にすることなく、アリシアは銀時をじぃ～っと見ていた。

銀時
「どうかしたか？」

アリシア
「えっ！？　な、なんでもないよ」

アリシアは急に銀時に声をかけられ動揺している。

アリシア
（な、なんでこの銀髪天然パーマに声かけられて動揺してんのよ？！）

ハッ！

そのとき、アリシアの脳裏にある言葉がよぎった。

アリシア
（ま、まさか……いやいやそんなことあるわけない、うん、絶対ない……もしかしたらあるかも……
でもそんなことは……
ううん！　さっきの戦い、すごかったし、有り得るかも……）

頭を横にブンブン振ったり、縦に振ったりを繰り返している。

そして、ようやくその言葉を頭の中に出した。

アリシア
（もしかして……これって……こ、ここ、……恋？）

……

……

…

はい？

アリシア
「……」

アリシアは、無言でデバイスのバルディッシュ・セカンドをザンバ

ーモードにした。

アリシア
「語り手（あんた）……1度地獄に逝っちゃえーーーーー！！」

ギャアァァァ……！！

……

……

…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

・XV機関　side

???1
「で、これからどうするつもりだ？」

???2
「どうするって？」

???1
「あの5人のこともあるが、“奴”が任務を放棄してまで向こうについたのはなぜか、わかるか？」

???2
「分かんないわねぇ、あたしはあの子じゃないんだからさ」

???1
「それはそうだが……」

???2
「そういうアンタはわかってるんでしょーねぇ…」

???1
「むっ……それは」

???3
「ハイハイ、そこまでにしておきなさい」

???2
「……何のつもりよ?
サンダナ」

サンダナと呼ばれた人物はフードをとった。

黄色の髪を髪留めで纏めていて、金色の瞳の女性だ。

サンダナ
「あら、そういうスイレーヌも、最近は失敗ばかりしていたんじゃなくて?」

スイレーヌ
「なんですって!!」

スイレーヌもフードをとりサンダナに近づいた。

スイレーヌ
「サンダナが“ホロウ”とか“ハートレス”を使いまくっちゃったのがそもそもの原因でしょ！」

サンダナ
「そっちだって、“妖精”に“ドーター”も捕まえられなかったくせに！」

スイレーヌ
「言ったわね！」

スイレーヌはリングの形をした武器を出すと水球を作り出した。

サンダナ
「やる気ィ？」

サンダナはダガーに似せた武器を出すと、電撃を纏わせた。

？？？1
「……なんでこうなるんだか」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

・竜の爪　ｓｉｄｅ

白天竜
「これからどうすんですか？」

黒鎌竜
「……『恋姫・無双』の世界にいく」

白天竜
「たしか、かなり強い人たちがいるんじゃないんですか？」

黒鎌竜
「……彼女たちの力量を見てこいとのことだ。
あの世界には大したものはないと判断したみたいだ」

白天竜
「意外とありそうな気がするけど……上からの指示だし、黒鎌竜もそれでいいんだったら……」

２人が行こうとしたそのとき！

？？？
「待ちたまえ」

２人の前にガーゴイルの仮面を付けた人物が現れた。

？？？
「僕も一緒に行ってもいいかい？」

白天竜
「なんでアンタまでついてくるのよ？」

？？？
「決まってるだろ」

そいつは、見たものは引きそうなくらいピッカピカに光るマントを翻した。

？？？

「彼女達……関羽や張飛、劉備たちと握手したり、彼ら……黒崎一護や坂田銀時にサインをもらいたいからね」

白天竜

「結局それが目的かァ！」

バシィィン！！

？？？

「どおぶっ！？」

白天竜はどこからともなくハリセンを取出し、そいつの頭をひっぱたいた。

白天竜

「よくそんなことしてて此処にいられるわねぇ」

？？？

「あはは……」

白天竜

「でも残念ねぇ、この仕事はね……」

黒鎌竜

「……いいだろう」

白天竜
「ええっ！！？」

？？？
「さすが、話が分かるねぇ黒鎌竜さんは」

黒鎌竜
「上からも連れていくように言われていたところだ」

白天竜は顔を膨らませ、そいつを睨み付けた。
しかし、黒鎌竜の言ったことだから仕方がないと思う白天竜であった。

？？？
「そんじゃ、行きましょうか」

扇子を広げ『楽しみですねぇ』と喜びの言葉を漏らした。

？？？
「光翔竜、あなた方に会いに行くため、馳せ参じますでそうろう」

白天竜
「そんな言葉ばっか使わないの」

白天竜のハリセンがもう一発炸裂した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

なのは
「これでようやく行けるね」

フェイト
「そうだね」

手続きも終わり、一安心する2人。

管理局員1
「た、大変です！」

そこに管理局員の一人が慌ててやってきた。

管理局員2
「どうした？」

管理局員1
「それが……」

ごにょごにょ……

管理局員2
「何！？　それは本当か」

管理局員が慌てだす。

それを見ていたなのはが気になったので尋ねた。

なのは

「あの……どうかしたんですか？」

管理局員２
「こ、これは高町一等空尉！！」

局員は思わず敬礼する。

なのは
「そこまでしなくてもいいですよ。
それで、一体何があったんですか？」

管理局員２
「それが、たった今『遺伝子研究所』でテロと思われる騒動があったとの報告がありまして……」

局員はコンソールを動かし、その時の映像を見せた。

管理局員２
「これがテロリストを映し出した映像です……」

そして、なのはが見たのはマークＩＩであった。

なのは
「ひどい……」

管理局員１
「研究所のサンプルが盗まれたうえ、多大な被害もうけたと」

いつのまにかフェイトもやってきて話を聞いていた。

管理局員1
「空間の乱れから移動場所が特定できました。
場所は『恋姫・無双』の世界です」

なのは&フェイト
「「ッ！！？」」

2人は驚愕した。

その世界は銀時たちが行っている世界だったからである。

それにアリシアもその世界にいるのだ。

フェイト
「なのは！」

フェイトがなのはを見ると、なはは頷いた。

なのは
「フェイトちゃん、急ごう」

2人は他のメンバーへ連絡すると、転送ポートにむかって駆けていった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

第17話：対決、出会い、登場（後書き）

雅也
「てオイ、なんでこの枠に俺たちがいるんだよ！」

メアリー
「都合上の理由らしい」

皐月
「さてと……どこかにお呼ばれしたいなぁ」

※……出演依頼などのメッセージ、待ってま～す

第１８話：物語のタイトルは決めづらいものだと思っていい！（前書き）

※タイトルどおりです……（話には関係ありませんが）

第18話：物語のタイトルは決めづらいものだと思っていい！

タタタタ……

「はぁ……はぁ……」

ザザザザ……

『逃がさないよ……』

タタタタ……

「はぁ……はぁ……」

ガッ…！

「キャ……ッ！」

ドサッ……

『フフフ……』

「う……あ……」

『フフフ……もう逃げられないよ』

「い、いや……お願い……助けて……！」

『いやだね』

ザッ……

「キャ～～～ッ！！！」

……

……

……

……

『これであと1人だ……あと1人で……』

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

白天竜

「……」

黒鎌竜

「……という作戦でいく」

光翔竜

「う～ん、なんかちょっとやる気が出ないなぁ」

白天竜

「……」

黒鎌竜

「……」

光翔竜
「あれ？　いつもだったらここで白天竜さんが『そんなこと言わないでやりなさい！』とかって言うはずなのに」

黒鎌竜
「……」

黒鎌竜が彼女の肩に手を置いた

白天竜
「はっ……！」

黒鎌竜
「どうした？　顔色が悪いようだが」

白天竜
「な、なんでもないです、なんでも……」

黒鎌竜
「……」

黒鎌竜は肩から手を離した。

黒鎌竜
「白天竜」

白天竜
「はい」

黒鎌竜

「今回の作戦、参加するな」

白天竜
「え……」

光翔竜
「ちょっと、さっきと言ってることが……」

黒鎌竜は光翔竜を見る

彼の瞳は、誰もが動けなくなるような冷たいものだった。

光翔竜はそれから何も言わなかったーーー言えなかった

黒鎌竜
「お前に“あんなこと”があったとはいえ、“この（『恋姫・無双』の）世界の出身”ということもあったから上は連れていけと言った」

白天竜
「……」

彼女は俯いたまま何も言わない

黒鎌竜
「だが、俺は反対だった。そのことがお前を縛りつけていると思ったからだ」

白天竜
「……」

黒鎌竜
「とにかくお前は今回の作戦に参加するな。それだけだ」

黒鎌竜はマントを翻した

黒鎌竜
「……光翔竜、行くぞ。　今回の作戦はお前が主軸になるのだからな」

光翔竜
「はいは～い」

そう言って2人は彼女から離れていった

白天竜
「……」

白天竜は手をぎゅっと強く握り締めていた

光翔竜
「ちょっと、あんなこと言っちゃっていいんですか？」

白天竜から少し離れたところで光翔竜が尋ねる

黒鎌竜
「……あいつなら俺が言いたいことはわかってるはずだ」

光翔竜
「そ、そう……」

そして2人は目的のものを手に入れるためにある場所に向かったのだった

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

白天竜
「……」

ダメだな、私……

昔のことばっかり気にしちゃって

……

黒鎌竜様が言った通り、私は『恋姫・無双』の世界出身だけど前に“あんなこと”があってからはこの世界にいられなくなったの

そんな私に手を差し伸べてくれたのが黒鎌竜様たちだった

……

“あんなこと”があったせいで、この世界に来ると聞いたときから色々なことを思い出してしまう

白天竜
「ああ言われても仕方ないよね……」

白天竜は周りに誰もいないことを確かめると、自分がしていた仮面

を外した

白天竜
「フゥ……」

そこには、紺色のロングヘアに銀色の瞳を顕にした白天竜の素顔があった

白天竜は髪に手をあてた

顔にあたる風……風でなびく髪……そして草や木々からの匂い……

白天竜
「これからどうしたらいいのかな……」

白天竜の悲しい声は風に流されていった

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

スイレーヌ
「はぁ……はぁ……」

サンダナ
「たく、水は電気と相性が悪いことくらい知ってるでしょ」

スイレーヌ
「ま、まだ……よ……」

？？？
「もうその辺にしておけ」

サンダナ
「そうね、こんなに弱ってるのを殺っちゃうのも性に合わないしね」

スイレーヌ
「くっ……！」

？？？
「でも、スイレーヌはあっちの方でもいろいろ体力使ってたんだ。
今はまだ何もしていないサンダナに負けるに決まっている」

スイレーヌ
「……知ってたんだ」

？？？
「俺が組織内の情報を知らないとでも？」

スイレーヌ
「『業火の貴公子』と呼ばれてるアンタには言われたくないわ、フレイム」

フレイム
「……で、あとどれくらいなんだ？」

スイレーヌ
「あと1人、ってところでしょ。あの子も本気みたいだし」

フレイム

「手に入れられるのか、あの宝剣に並ぶという宝刀が」

スイレーヌ
「もちろん♪」

スイレーヌは自信ありげに言う

フレイム
「せいぜい頑張れよ」

そう言って彼は自分の仕事があると言って行ってしまった

スイレーヌ
「さてと、アンタはどうするの？」

サンダナの勝ち誇った顔が歪んでいた

サンダナ
「……少し様子を見てくる」

スイレーヌ
「ふーん、せいぜい頑張ってね」

サンダナはチッと軽く舌打ちをして去っていった

スイレーヌ
「頑張ってね……クラブマスター」

スイレーヌもその場を去った……

銀時
「で、どこまで行くんだ？」

アリシア
「もうちょっとで着くから」

アリシアのあとを付いていってから、銀時たちは歩いて、歩いて、歩きっぱなしである。
辺りはだんだん日が沈んできている。

一護
「ほんとにこんなので着くのか？」

アリシア
「大丈夫よ、もう見えたから」

恋次
「見えたって何がだよ？」

アリシア
「アレよ」

アリシアが指差したのは村だった。

アリシア
「あそこの村でカニの化け物が出るの」

一護
「あそこにか？」

恋次
「ただの村にしか見えねえぞ」

アリシア
「それがね……」

「た、大変だ！　また村の女子（おなご）が化け物にやられた！」

アリシア
「……て感じなの」

アリシアは村の方を見ていた身体を銀時たちに向けた。

アリシア
「あの村では若い女性が次々とやられてるみたいなの」

冬獅郎
「1ついいか？」

アリシア
「なに？」

冬獅郎
「なんであの村の奴らは化け物の仕業だってわかったんだ？」

アリシア
「ああ、それね。
村人が発見したとき、身体中が泡まみれになってるの。普通だったらありえないでしょ？　他に死因につながるような外傷はなかったし」

銀時
「……」

いつのまにかジャンプを読んでいる銀時の手が一瞬とまった。

アリシア
「だから村人は『化け物の祟りだ』とか言って恐れてるの」

恋次
「そこまでの騒ぎになっててそいつらは何もしないのかよ。つーか、なんでアンタがそいつをやらなかったんだ？」

アリシア
「村人は何人もの化け物退治を依頼したみたいなんだけど……」

冬獅郎
「やられたってことか……」

アリシアはコクンと頷いた。

アリシア
「そんな相手に1人で挑む人っていると思う？」

アリシアの金色の髪がなびく。

アリシア
「だから、独自で調査をしているフェイトたちに任されたってわけ」

銀時

「……」

パタン……

銀時
「そんじゃ、行ってみるか」

一護
「行くってどこに？」

銀時
「決まってんだろ、村だよ村。」

アリシア
「何するつもり？」

銀時
「要するに、俺たちがその化け物を倒せばいいだけの話だろ？
だったら俺たちが化け物退治に名乗り出りゃいいだけの話だ。
そうすりゃ退治仕事だってやりやすくなるだろーよ」

冬獅郎
「確かに……やりやすいに越したことはねぇ」

アリシア
「でも、フェイトたちが来てないのにそんな勝手な……」

銀時
「それじゃあ遅せーんだよ……死んでる人がいるんだったらよ」

アリシア
「それは……」

銀時の言うとおりだ。

死んでる人がいるのに悠長なことを言ってるんだーーー自分を少し恥ずかしく思ったアリシアだった。

銀時
「んじゃ、改めて行くとしますか」

銀時が村へ向かって歩くとそのあとをアリシアたちが追い掛けるように歩いていった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

第１９話：女性フラグが立ったときには誰かが災難にあうものだ（前書き）

※タイトルどおりです…。

第19話：女性フラグが立ったときには誰かが災難にあうものだ

銀時はとある民家の前で立ち止まった。

銀時
「すいませーん、どなたかいらっしゃいませんかー？　いないんだったら勝手に入っちまうぞ、コラ」

アリシア
「いやいや、勝手に入っちゃダメでしょ」

銀時
「いーんだよ、入っちまえばなんとでもなるだろ」

一護
「逆に怪しまれるだけだろ」

銀時
「てゆーことで、お邪魔しまーす」

恋次
「だから勝手に入るなって！　それにどういうことかわかんねーての」

銀時はそんなのはお構いなしに中に入っていった。

銀時
「お、なかなかひろ……」

銀時が手を挙げた。

ぷに……

銀時
「いな？」

銀時の手に何かあたった。

銀時
「……なんだ？」

銀時がのばしている腕を目で追っていった。

そこには女の人がいて、銀時の手が彼女の胸に触れている。

女性
「……」

銀時
「え……えーと……」

そこで手を離せばいいものを銀時はその手に思わず力を入れてしまった。

ぷにぷに……

銀時
「あ」

胸を触られた彼女は顔を真っ赤にする。

そして……

女性
「きゃあぁぁぁ～～～！！！！」

がしゃ――ん！

女性の叫び声が響いたかと思うと、銀時の頭は木の床を突き抜けた。

どたどた……！

アリシア
「ちょっと何、今の！？」

一護
「どうした……」

さっきの叫び声と音に一同は駆け付けると、顔を真っ赤にしている女性と床に『こんにちは』をしている銀時がいた。

一同
「……」

銀時
「だ……誰か、助けて……くれ……」

冬獅郎
「……ハァ……」

アリシア
「……バカ」

しばらくの間、銀時はそのままにさせられた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「そういえば、愛紗はどうしたのだ？」

「怪しい人が入ってこないように待機してますよ」

「愛紗もくればよかったのに……」

「劉備さんもいたかったんですか？」

「い、いえ！　あの……その……」

「ほほぅ……劉備殿にそんな趣味が」

「ち、違いますから！　全然、まったく、これっぽっちもそんなこと考えてませんから！」

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

アリシア
「ごめんなさいね、さっきはこの“天然パーマ”の“アホ”で“マヌケ”が無断で入ってしまった挙げ句、大事なところを触ってしまって」

女性
「い、いえ……」

銀時
「……」

銀時の頭には、きれいにタンコブが４つ出来上がっていた。

アリシア
「私たちこの村に来たばかりで……話を聞こうとしてたんです。そこで“天然パーマ”が……」

銀時
「さっきから何回俺のことを天然パーマって言うつもりだ」

アリシア
「女の大事なところを揉んだ人が何言ってるのよ」

恋次
「サイテーだな」

一護
「救いようもねぇな」

銀時
「いやあれはな不可抗力であってな……」

冬獅郎
「事実だろ？」

銀時
「……はい…」

女性
「え、えーと……」

アリシア
「この“変態天然パーマ”のことは気にしなくていいから」

銀時
「オイ、さっきよりも一言増えてね？」

アリシア
「気にしない、気にしない」

銀時
「気にするなってほうが無理だろーがっ！」

一護
「そういや、まだアンタの名前聞いてねーな」

一護の一言でアリシアは女性に視線を向けた。

アリシア
「そうね……失礼ですがお名前は？」

女性はアリシアの質問に答えた。

女性

「ンン……！　わが姓は“関”、名は“羽”、字は“雲張”」

銀時
「姓？　名？　なんだそりゃ？」

アリシア
「ここに来る前に少し調べたんだけど、銀時たちの世界で言う“みょうじ”と“名前”みたいなものよ」

ふーん……と銀時は感心しながらウンウンと頷く。

アリシア
「それでは改めて……この村で起こったことを教えてもらえますか？」

関羽
「えぇ……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方、なのは・フェイトたちはというと……、

チンク
「こちら側に来てすぐの任務が残骸処理とはな……」

銀時たちが相手をしたマークＩＩの残骸処理を行っていた。

ナオ
「それにしてもこれ……何の残骸なんですか？」

残骸を見ていたナオがそう尋ねた。

ティアナ
「この形状とフェイトさんたちが聞いた報告から考えると、マークⅡじゃないかと」

フェイト
「やっぱり……」

なのは
「でもなんで……」

リマ
「えっと…ちょっといいですが？」

チンク
「何だ？」

リマ
「マークⅡって確か前の大戦のときの敵の機体ですよね？」

チンク
「あぁ、そうだが……それがどうかしたか？」

マークⅡの残骸をカービィはぺちぺちと叩いている。

リマ
「あ、いえ、確かそれって処分されたんですよね？
それがなんで今動いたんでしょうか？」

ティアナ
「……言われてみればそうね」

フェイト
「それに……」

フェイトはアリシアが送ってきた映像……銀時がマークＩＩと戦っているときの映像を観る。

フェイト
「ここ……ここで２つ、カプセルみたいなのを出してる……」

そう……その場面はマーク２が問題のカプセルを発射したところである。

ティアナ
「ということは、今回の研究所での騒動はこのカプセルに関係が？」

フェイト
「たぶん……」

チンク
「ん？　そういえばあの４人の姿が見えないが？」

チンクは見回していて４人（雅也たち）がいないことに気付く。

なのは
「あぁ、ヴィヴィオたちなら……」

～～～～～～～～～～～～

雅也
「……」

ヴィヴィオ
「♪～」

皐月
「さてと……雅也♪」

マーブル
「せっかく来たんだから楽しもう、ねっ♪」

雅也
「……なんでこんなことに」

メアリー
「自業自得というものですよ、マスター」

雅也
「うぅ……」

雅也たち４人――いや５人はとあるチケットを手にしていた。

――マクロスＦの世界で人気絶頂の歌手　ランカ・リーの特別コンサート――

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ナオ

「私、今行ってくる！！」

リマ
「わ、私も……！」

2人はすぐさま転移していった。

チンク
「お前たち……」

その姿を見たチンクはグッと拳を握った。

フェイト
「まあまあ……今こっちの世界でも人気のある歌手だし。　それになかなかチケットが手に入らないみたいだよ」

ティアナ
「そういえば、スバルが『手に入らなかったよー』って泣きながら通信してきたっけ」

チンク
「……」

なのは
「2人はチケットは持ってるみたいだし、こっちは大丈夫だよ。たぶん……」

チンク
「そこで『多分』と言ったら説得力が無くなるぞ」

なのは
「にゃはは……」

フェイト
「それじゃあ、あとは他の魔導師に引継ぎしてもらって……」

なのは
「合流しに行こっか」

ティアナ
「はい！」

チンク
「了解……」

こうして、なのはたちは引継ぎをしたあと、銀時たちのいる村へと急いでいった……。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カンペ
【３……２……１……】

ナオ
「あとがきコーナー！」

リマ
「始まります！」

ファーーー！！

ナオ
「はいっ、今回はナオ・ストワールと！」

リマ
「リマ・ストワールが！」

ナオ
「特別にこのコーナーを担当することになりました！」

リマ
「この小説の主軸になるはずの私たち2人の活躍が少ないのでは？
という意見に作者がお答えするため、このような形で出ることになりました」

ナオ
「それじゃあさっそく……」

サッ……

ナオ
「ん？　何？」

カンペ
【そろそろ本題の方に……】

ナオ
「今から入ろうとしてたところよ！」

リマ
「まあまあ、ナオ落ち着いて」

ナオ
「フンッ……それじゃあ質問に１つ答えます」

リマ
「『竜の爪』と『ＸＶ機関』の全面戦争ってあるんですか？」

ナオ
「えーと……『あると思います。　というかそんな感じにできたらしたいですね。　ｂｙ作者』、だって」

リマ
「全面戦争ってそんなことさせて大丈夫なの？」

ナオ
「大丈夫じゃないの、作者だったらなんとでもできると思うし」

リマ
「……わが妹ながらなんて発言をすることやら」

ナオ
「というところで、今回のあとがきコーナーはここまでです！」

リマ
「次回もよろしくお願いしますね！」

～～～～～～～～～～～～～～

――収録後――

雅也
「って、何で勝手にはじめて勝手に終わってるんだ！」

メアリー
「私たちの出番が減ってしまうではないか！」

皐月
「ま、次回辺りにその理由が分かるでしょ」

ヴィヴィオ
「ということで、次回もよろしくお願いします！」

第１９話：女性フラグが立ったときには誰かが災難にあうものだ（後書き）

※次回は少々展開を変えるつもりです。

小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第２０話：コンサートで大騒ぎ！（前編）（前書き）

※雅也たちの話（コンサート側の）を書いてみました。

第２０話：コンサートで大騒ぎ！（前編）

皐月
「さすが雅也ね、やるときはやるじゃない！」

ヴィヴィオ
「♪～♪～」

マーブル
「フフフ～ン♪」

メアリー
「……」

皐月は左の、ヴィヴィオは右の腕にしがみついている。周りから見れば二股をかけている男にしか見えない。そして周りの目線が痛い……。

一方、マーブルは好物だというチョコレートを食べながら鼻歌を歌っている。メアリーはミニサイズになり、雅也の肩にちょこんと座っている。

雅也
「……」

なぜだ……なぜこんなことになった？　考えろ……考えてみるんだ、雅也（じぶん）。

確かアレはあいつ――マーブルが来て、事情を聞いて……そのあとにアレがあったんだよな……。思えばほんの数時間前の出来事なんだよな。～～～　数時間前　～～～

皐月
「……」

ヴィヴィオ
「……」

雅也
「あ、あの……ちょっといいか？」

皐月・ヴィヴィオ
「フンッ」

雅也
「ハァ……まだ怒ってるのかよ」

皐月
「雅也の話なんて聞きたくない」

ヴィヴィオ
「私たちにだってあんまり抱いてくれないのに、あの子だけ……
……」

雅也
「そ、それはなマーブルが抱きついてきたのであって俺がやりたくてやったわけじゃ……」

皐月・ヴィヴィオ

「フンッ」

雅也
「ハァ〜……」

雅也は頭を抱えてしまう。
なぜなら雅也の言葉に2人は聞く耳を持たないからである。

……まぁ、原因はマーブルがしでかした――雅也に抱きついたせいなのだが……。

雅也
「どうしたら俺の話を聞いてくれるんだよ？」

皐月
「……どぉーーーしても話を聞いてほしいの？」

雅也
「そんな怒ったままの2人の姿、見たくないからな」

皐月・ヴィヴィオ
「――――ッ！？！？」

ビクンッ！

2人の身体は大きく揺れ、顔はトマトのように真っ赤になった。

皐月
「ど、どーしても話を聞いてほしいの？」

皐月は横目で雅也の方を見る。

雅也はコクンと頷いた。

皐月
「そうねー……どーしよっかなぁ……」

と言っていると、偶然モニターのＣＭ（宣伝）が目に入った。

『ただ今人気絶頂中の【マクロスＦ】の世界の歌手、“ランカ・リー”さんが、なんと！　今回はこちらの世界で特別にコンサートを行うことになりました！
コンサートの詳細はこちらまで！
皆さんもこの機会にぜひ！』

皐月はニヤリと不適な笑みを浮かべた。

皐月
「ねぇ、雅也……もう一度聞くけど、どーしても話を聞いてほしいのよね？」

雅也はもう一度頷いた。

皐月
「私の言うこと、なんでも１つ聞いてくれる？」

コクコク

雅也は２回頷いた。

皐月
「それじゃあねぇ……」

びしっ！

皐月
「あのコンサートチケットを買ってくれたらいいわよ」

雅也
「……え？」

雅也は皐月の指差しているモニターに目をやった。

そして雅也は皐月が視たのと同じＣＭを視た。

……

しばしの静寂のあと、ようやくのことで雅也は一言だけ口にした。

雅也
「……はい？」

皐月
「あのコンサートのチケットを買ってほしいの。
私とヴィヴィオとあの子……マーブルだっけ？　あと雅也の４人分」

雅也
「はいぃぃぃ～～～！？」

皐月

「そうじゃないと話を聞かないってだけじゃなくて、アンタと一生口も聞かないから」

雅也
「そ、そんな無茶苦茶な！
あのチケット、1枚買うだけで1万もするんだぞ？　それを4人分も買ったら……」

皐月
「あれぇ～、さっき私の言うことを聞いてくれるって言ったわよねぇ？」

雅也
「そ、それはそうだけど……」

皐月
「それじゃ、よろしくね～♪」

雅也
「……」

雅也が唖然としていると、メアリーが近づいてきてポン……と雅也の肩に手をのせた。

メアリー
「マスター、ご愁傷さまです」

雅也
「ハァ～～～……」

雅也は今日一番の深いため息を吐いた。雅也
「……」

ああ……思い出しただけで何でこんなに情けなくなるんだ……

メアリー
「どこかのヘタレ体質に感染したのでは？」

雅也
「それかなり失礼なこと言ってるから！？　しかもなに勝手に人の心の中を読んでんだよ！？」

メアリー
「マスターの顔にそう書いてますよ」

雅也
「んなわけあるかッ！」

メアリー
「ちっ……」

雅也
「そこで舌打ちするかよ、普通」

ちなみに2人は皐月たちに頼まれてジュースを買いに行って、今は戻っている最中である。

メアリー
「……そういえば、よくこのコンサートのチケットとれましたね。私が調べたときにはすでに完売間近だったはずですが？」

雅也
「あぁ、そのことか」

雅也は先ほど売店で買った炭酸ソーダの入った紙コップを少し飲んだ。

雅也
「なのはさんとフェイトさんに相談したんだ、そしたら……」

～～～～　回想　～～～～

フェイト
『あはは……皐月もちょっと厳しいお願いをしたんだね。　どうする、なのは？』

なのは
『そうだね……それじゃあ、私の名義でチケットを買っちゃうってのはどうかな？』

雅也
『んなッ！？』

フェイト
『な、なのは！？　それって普通に買ってる人に悪いよ！』

なのは
『大丈夫だよ、ちょうどその関係者さんの番号も知ってるしね』

フェイト

『そういう問題じゃ……』

なのは
『大丈夫だよ、心配しなくても。　すぐに終わることだしね』

フェイト
『……』

なのは
『にゃはは♪』

雅也
『あはは……』

～～～　回想終了　～～～……

雅也
「そのときのなのはさんの姿が“白い悪魔”に見えたよ……」

メアリー
「……想像しただけで背筋がゾクゾクする……しますね」

雅也
「ま、そのおかげでこうしてチケットが手に入ったわけだし、なのはさんに感謝してるよ」

メアリー
「……ですね」

2人は改めてなのはに感謝するのだった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

雅也が戻ると、3人は少し膨れていた。

皐月
「雅也、ちょっと遅かったんじゃないの？」

雅也
「コンサートを観に来た人で混んでいるっていうのに、売店まで買いに行って戻ってくるのにも時間がかかるのは当然だろーが」

ヴィヴィオ
「それにしてもちょっと遅かったよね？」

マーブル
「そうだね……」

雅也
「と、とりあえず、はい……」

雅也は3人に頼まれたものを渡した。

皐月
「あ、ピーチジュースあったんだ」

雅也
「探すのに一番苦労したよ……」

ヴィヴィオ

「わーい、オレンジジュースだー♪」

マーブル
「メロンソーダ、ありがとう」

雅也
「あ、あぁ……」

そのとき、雅也は何かの視線を感じた。

メアリー
「じぃ……」

それはメアリーが雅也を凝視しているものであった。

雅也
「ど、どうしたんだよ……」

メアリー
「マスター……私の苺ジュースは？」

雅也
「あ……」

メアリー
「まさか……忘れたわけでありませんよね？」

雅也
「ゴメン……忘れてた」

わなわな……

メアリーの身体が震える。

そして……

メアリー

「マスターのバカ――ッ！！」

と叫び雅也をポカポカ叩くのだった。

雅也

「あだだ……わ、悪かった、悪かった！　代わりに俺のをあげるから」

4人

「「「「ッ！！？」」」」

雅也

「あ……！」

雅也は自分がフラグを立てたことに気付いた。

メアリー

「そ、そんな……マスターとか、かかか、間接キスなんて……」

ボンッ！！

メアリーの顔が真っ赤になり煙が吹き出ている。

雅也
「おまっ、そこまで考えてたのか！？」

皐月
「ふぅ～ん……雅也、あんた自分のデバイスをおとそうとしてたわけ？」

雅也
「んなわけあるかぁ！！」

ヴィヴィオ
「でも……」

マーブル
「メアリーの顔、真っ赤だよ」

雅也
「そ、それはメアリーの想像が行きすぎてるだけだ！」

皐月
「それじゃあ、私たちと間接キスしても大丈夫だよね？」

雅也
「今の話でなんでそこまで発想できるんだよ！？」

皐月
「ほらほら、幼なじみが仕方なくオレンジ飲ませてあげますよー」

雅也
「さっきの発言のあとで誰が受け取るかっ！」

ヴィヴィオ
「皐月ちゃんズルい！
私も雅也くんにジュースあげる！」

マーブル
「あたしだって！」

雅也
「なんでこうなるんだーーー！！」

メアリー
「……」

ちゅー……

雅也たちが騒いでいる間、メアリーは顔を真っ赤にしたまま1人雅也の飲んでた炭酸ソーダをすするのだった。ばいきんまん
「ハァ……」

ばいきんまんは1人ユーフォーに乗ってある場所に向かっていた。

ばいきんまん
「なんで俺様があんなことをしなくちゃいけないんだ……」

それは遡ること数時間前の出来事である……

～～～　回想　～～～

ドキンちゃん

「ばいきんまん、ちょっとこれを見てよ」

ばいきんまん
「んあ？」

あの騒動のあと、バイキン城に戻ったばいきんまんは新メカの開発の真っ最中だった。

そんななか、ドキンちゃんに呼ばれモニターに映し出された人物を見る。
その人物はまさしくランカ・リーであった。

ばいきんまん
「この子がどうかしたの？」

ドキンちゃん
「今すぐこの子を連れてきて」

ばいきんまん
「な、なんで俺様がそんなことを？」

ドキンちゃん
「だってこの子のコンサートのチケットはもう売ってないっていうし、行くのも面倒だし……」

ばいきんまん
「あのね、俺様はそんな暇ないの。
チンクたち（あいつら）を『あっ！』と言わせるようなメカを作らなきゃいけないの。　だからそれはまた今度ね」

ばいきんまんがそう言って戻ろうとした。が……

ゴゴゴゴ……

後ろから物凄い殺気を感じたので、ばいきんまんはおそるおそる振り返る。

ドキンちゃん
「ばいきんまん……」

そこにはフライパンを持ったドキンちゃんがいた。

ばいきんまん
「ハ、ハヒ……」

ばいきんまんは一歩後ろに引いた。

ドキンちゃん
「いいから早く行ってきなさーい！！」

ばいきんまん
「ハヒーーー！！」

ばいきんまんはすぐさまユーフォーにのりバイキン城を出たのである……。

～～～　回想終了　～～～ばいきんまん
「ハァ……」

こうして、ドキンちゃんのわがまま――――お願いで仕方なくばいきんまんが行くのだった。

そして、コンサート会場の上空についた。

ばいきんまん
「連れてくるっていったって警備とかすごそうだし……」

ばいきんまんは少し頭を悩ませたが、それはすぐに解決した。

ばいきんまん
「お、そうだ！」

ばいきんまんはスプレー缶を取り出した。

ばいきんまん
「これを使えば……グフフ」

ばいきんまんは不適な笑みを浮かべるのだった。？？？
「ほんとにここで大丈夫なの？」

３０センチくらいのピンク色の妖精の姿をした子が作業員に向かって言う。

作業員
「安心しろ、ここには管理局の人間が数人来ている。
そいつらに助けを求めればなんとかなるはずだ」

？？？
「そんな勝手な……」

作業員
「試作型とはいえ、量産型よりはかなり使えるのだからな。　あいつらに悪用されるよりはいいだろ」

？？？
「……こんなことしてくれてありがとう」

作業員
「なーに、今度あったときにこっちを助けてくれればそれでいいさ」

作業員はその子に背を向けると、用意していた転移ボートにのった。

作業員
「それじゃあな……試作品０１６号、ミニキュリア……」

作業員はそう言って姿を消した。

ミニキュリア
「……さてと…早く管理局の人に会わないとね」

ミニキュリアはその場をあとにした。

～～～～～～～～～～～～

コアッパ
「うおぉぉぉぉぉおおお～～～～～～～～！！」

警備員１
「な、なんだ？」

警備員２
「と、とまれ！」

コアッパ
「邪魔だぁぁぁぁあああぁぁぁぁあ～～～～！！」

ドカッ！　バキッ！

警備員１・２
「うわぁぁぁぁ！！」

コアッパ
「カービィ～～～～！！　どこだぁぁぁぁあああぁぁ～～～～！！」

と叫びながら警備員を跳ねとばし、１人のガキ大将――――コアッパはコンサート会場に入って行った……いないカービィを捜し求めて……。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

【後書きコーナー・スタジオ】

リマ
「雅也くん……やるわね」

ナオ
「だって一気に４人にフラグを立てちゃうんだもん」

？？？
「ほんと、どっかのヘタレに似てきたわね」

ナオ
「だ、誰っ！？」

？？？
「いまさら？」

雅也
「こらこら、勝手に話を進めるな！
あと、あなたはゲストなんですから紹介するまで出ないでほしかったんですけど？」

？？？
「出ちゃったものは仕方ないでしょ？」

雅也
「それはそうですけど……ん？」

ピピピ！

雅也
「出演許可の手続き済んだみたいだから……メアリー、紹介の方をよろしく」

メアリー
「はい……それではご紹介します。　～魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　２ｎｄ　～にご出演の神崎ユリアさんです」

ユリア
「どうも～」

ヴィヴィオ
「あ、ウィズくんの……」

皐月
「……（結構いい子じゃない）」

雅也
「ど、どうしたんだよ、出てきて早々黙り込んじゃって」

皐月
「な、なんでもないわよ」

ユリア
「そういえば、ウィズがこっちのゲストに出てたんでしょ？」

メアリー
「もちろんです。　ですがそれが何か？」

ユリア
「ウィズっていっつもあんな感じだからちょっと心配で……」

雅也
（ユリアさんって……ブラコン？）

メアリー
（マスター、それは絶対違います）

雅也
（何で？）

メアリー
（すぐに分かりますよ。
では、リマさんとナオさんもいることですし、お2人に言ってもらいましょう）

リマ
（え……？）

ナオ
（もちろんっ！）

リマ
（ちょっ……ナオ！？）

ナオ
（はいはい、それじゃあいくよ……せーの！）

ナオ
「ゲストさんへの……」

リマ・ナオ
「質問コーナー！！」

ワァーーー！！

ナオ

「作者が事前に質問で送った内容にご本人にお答えいただくコーナーです」

リマ
「って、答えてもらってるんだったら本人じゃなくてもいいんじゃない？」

雅也
「あ～……」

皐月
「それを言ったらダメでしょ……」

メアリー
「そ、それでは最初の質問にいきます」

1、ユリアさんの好きなものは？

ユリア
「うーん……詳しいことはまだ決めてないみたいだけど、基本的には和菓子ね」

雅也
「和菓子かぁ……和菓子は用意してなかったなぁ」

優太
「心配するな」

雅也
「うおっ！？」

メアリー
「優太さん……綾華さん……」

ナオ
「なんでここに？」

綾華
「実はね、こんなこともあろうかと和菓子をひとつ作っておいたの」

カタン……

皐月
「これって……」

ヴィヴィオ
「ドラ焼き？」

リマ
「あの～……なんでまたドラ焼きなんですか？」

綾華
「優太と作者が好きなの。」

ユリア以外
「なるほどね……」

綾華
「それじゃあ、ユリアちゃんゆっくりしてってね♪」

優太
「この子がウィズのお母さんのクローンだなんて……ウィズには勿体ないな」

ユリア
「は、はぁ……」

綾華
「それじゃあ私たちはスタジオの外にいるから」

優太
「帰りに洋菓子と和菓子のおみやげを受け取ってくれ」

ユリア
「はい」

優太
「それじゃあ……」

ガチャ……バタン

リマ
「それでは次の質問に……」

もぐもぐ……

ユリア
「このドラ焼き……まあまあね」

皐月

「さっそく食べてるし……」

ヴィヴィオ
「それでは、次の質問に行きます」

2、ユリアさんから見たウィズのヘタレっぷりは？

ユリア
「そうねぇ……特にこれといってないわね」

雅也
「それじゃあやっぱり……」

ユリア
「あぁ、違う違う。
その……なんて言えばいいのかな。
さっきも言ったけどウィズがちょっと心配っていうか……そんな感じ」

雅也
「？？」

メアリー
（要するに、ユリアさんはウィズのお母さんのクローンなので、母性が少しあるということです）

雅也
（あぁ……納得）

ユリア

「ていうか、『やっぱり』って？」

雅也
「な、なんでもない！　なんでもないぞ、うん」

ユリア
「？？」

ナオ
「それじゃあ最後に意気込みとかを一言……」

ユリア
「そうねぇ……これから精一杯ウィズを守ります」

ヴィヴィオ
「というわけで、今回のゲストの神崎ユリアさんでした！」

ワァーーー！！

～～　撮影終了後　～～

雅也
「ユリアさん、すごいなぁ……」

皐月
「ほんとね……」

ヴィヴィオ
「私も誰かを守れるかな？」

綾華
「ヴィヴィオちゃんならできるよ、絶対」

メアリー
「そういえば、洋菓子・和菓子の他に包みを渡していたみたいだが……」

優太
「あぁ、あれはウィズへのハッピー・バレンタインの贈り物だ。中身はホワイトチョコが2つだ」

雅也
「なんだ、案外まともだな」

優太
「1つはわさびをたっぷり混ぜ込んでいる『わさび入りホワイトチョコ』だ」

雅也
「うおいっ！！」

ナオ
「やりすぎだよ、それは……」

リマ
「そ、そうね……」

優太
「ではまた次回！」

プツン……

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第２１話：対決！クラブマスター！！（前書き）

※今回は後書きコーナーはお休みです（スミマセン……）

第２１話：対決！クラブマスター！！

雅也が（ある意味）ひどい目にあっているなか、アリシアたちは座って関羽から村のことを聞いていた。

関羽は仲間とこの村を訪れ噂を聞き退治に向かおうとしたが見えない壁のようなものに遮られて入れなかったそうだ。

アリシア
「なるほどねぇ……」

一護
「って感心してる場合かっ！　早くその中にいる奴を倒さねぇと！」

冬獅郎
「何か策はあるのか？」

一護
「う……」

恋次
「何も対策しないでいこうとするなんてな」

一護
「だったら何か思いついたのか？」

恋次
「そ、それは……」

銀時
「……」

がたん……

突然銀時が立ち上がった。

銀時
「んで、その場所って何処だ？」

関羽
「あぁ、それならここから」

関羽は場所を教えた。

銀時
「それじゃ」

銀時はそう言うと出ていこうとした。

一護
「ちょっと待てよ。まさかアンタ……」

銀時
「破り方が分かんねぇからってただ手を拱(こまね)いているなんてことしてたらいつまで経っても解決できるもんもできなくなっちまうぞ」

関羽
「ですが我々でも破れなかったものをどうやって？」

銀時
「それはだな……」

がらり……

銀時
「こいつらとも話して決めるさ」

銀時が戸を開けた。そこには苦笑いをしているなのはとフェイトがいた。
チンクとティアナはハァ…と溜息を吐いた。
カービィはなぜかシャボン玉で遊んでいた。

なぜだ……？

……まぁ、それは置いといて…

一護
「いっ……いつからそこにいたんだ？」

チンク
「話のはじめからだ」

恋次
「だったらすぐ入ればいいじゃねえか」

ティアナ
「そうしたかったんだけどなのはさんとフェイトさんが……」

フェイト
「あぅ……」

なのは
「にゃはは……」

まぁフェイトは分かるとして、なぜなのはまで入りたがらなかったんだ？

……

……

……

2人は入りだからなかった理由は聞かず、冬獅郎がこう話をきりだした。

冬獅郎
「それであいつはああ言ってるが、これからどうするつもりだ？」

フェイト
「どうするって……」

なのは
「それは早い対処のほうが良いけど」

銀時
「そんじゃ、軽く行ってきますか」

銀時は外に出ていった。

アリシア
「ま、どっちにしてもそこに行かなきゃいけないんだしね」

アリシアも外に出た。

フェイト
「……」

なのは
「えっと……」

カービィ
「それじゃあみんなで行こう！」

一護
「そうだな」

恋次
「あいつにばっか良いとこ持っていかれたくねえしな」

チンク
「だ、そうだが？」

ティアナ
「……」

なのは
「……そうだね、行かなきゃ何も分かんないしね」

ティアナ
「関羽さん、でしたね？」

関羽
「あ、はい……」

ティアナ
「その場所まで案内してくれませんか？」

関羽
「ええ……」

こうして皆で行くことになった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　？？？　～

スイレーヌ
「へぇ～、この場所なら気付かれてもなかなか入ってこれないわね」

お寺の境内――ここなら結界が張れるし、“アレ”を手に入れるのにちょうどいいしね

クラブマスター
『スイレーヌ様のためならなんでも……』

スイレーヌ
「あら、またそんなこと言っちゃって」

クラブマスター

『ですが、もし管理局の奴らが来たら……』

スイレーヌ
「来たってあなたなら大丈夫よね？」

クラブマスター
『管理局のエースがいなければ――』

カタカタ

スイレーヌ
「あら……誰か来たんじゃない？」

クラブマスター
『では自分は……』

スイレーヌ
「フフッ、頑張ってね」

――――――――――――

銀時
「で、ここがその場所だと」

関羽
「はい……」

カービィ
「おっきいお寺だね～」

関羽
「なんでも、昔ここを治めていた偉い御方がこのお寺にたいそう高価な剣をお納めになったとか」

カービィ
「へぇ～」

恋次
「見た感じじゃあ何ともなさそうだが……」

チンク
「……」

ティアナ
「……どうかしたの？」

チンク
「いや、試しに投げてみてもいいか？」

フェイト
「う、うん」

チンク
「では……」

チンクがナイフを作り出し投げてみた。
するとナイフはカキィンという音を立てて弾かれた。
なのは

「うーん……どうしよっか？」

カービィ
「そうだね～……」

ポワワワ～ン

銀時
「つーかなんでおまえはシャボン玉作って遊んでんだよ」

カービィ
「だってぇ、相手が泡を使ってくるっていうから――」

恋次
「それで対抗しようってのか？」

カービィ
「うん！」

……

カービィ
「あれ？　僕、何か変なこと言った？」

一護
「自覚なしかよ……」

チンク
「……」

ティアナ
「あ……でも泡って吸い込んだらできるの？」

カービィ
「できるって、コピーのこと？」

ティアナ
「そうそう……できるの？」

カービィ
「もっちろん！」

恋次
「マジかよ？」

銀時
「それだったらアレを吸い込んでみせろ」

一同
「え？」

一同はそいつを見た。

そいつはまさにカニの化け物――クラブマスターであった。
色は黒く、胸には『ハートレス』を示すマークがついていた。

銀時
「ほうほう、わざわざ敵さんの方からおいでくださったわけだ」

クラブマスター

『やかましい。　管理局のエースがいなければいくらおまえたちでも……』

そこで言葉がとまった。
それもそうだろう、管理局のエースと呼ばれている人物が、しかも2人いるのだから。

なのは
「ふーん……」

フェイト
「私たちがどうかしたの？」

2人はにっこり笑っていたがどす黒いオーラを醸し出していた。

クラブマスター
『な、なぜ……ここに？』

なのは
「そんなの関係ないじゃない」

フェイト
「1つだけ言えるのは……」

なのは・フェイト
「「ここで私たちが倒すってこと」」

クラブマスター
『クッ……』

ティアナ
（なのはさんもフェイトさんもいつもより黒い気が……）

チンク
（そ、そうだな……）

つんつん……

クラブマスター
『ん？』

カービィ
「ねぇねぇこの先に何があるの？」

なんと、カービィが近づいて足をつついたのだ！

恋次
「何やってんだ、あいつは！」

冬獅郎
「――――」

クラブマスター
『……知りたいか？』

カービィ
「うん！」

クラブマスター
『それはな……』

カービィ
「うんうん」

がしっ！

カービィ
「ポヨ？」

クラブマスター
『泡に入れたあとにじっくり教えてやる』

カービィを大きなハサミでつかんだのだ。

しかし、誰もその場から動こうとしなかった。

関羽
「な、何してるんですか！
仲間が掴まったんですよ！」

関羽がそう言っても誰も動こうとしなかった。

関羽
「……皆さんがそうなのでしたら」

関羽が助けにいこうと前に出た。が、

銀時
「まぁ、待てって」

銀時が関羽の腕を掴み引っ張った。

関羽
「放してください！　早くしないと……」

銀時
「誰も“助けない”、“助からない”って言ってねぇよ」

関羽
「え……？」

クラブマスター
『フフフ……泡で苦しんでしまいな』

クラブマスターの出した泡がカービィに近づく。

クラブマスター
『フフフ……』

カービィ
「そんなことないよ」

クラブマスター
『なに？』

カービィ
「だって――」

カービィは口を開けた。

スゥゥ〜〜〜！！

クラブマスター
『く……なっ……！』

カービィは泡を吸い込み、そして飲み込んだ。

ゴックン☆

カービィ
「わーい♪　『バブル』をコピーしちゃったー♪」

カービィはシャンプーハットのようなものをかぶり、手にストローのようなものを持っていた。

クラブマスター
『な、なにっ！？』

カービィ
「くらえ！　バブルシャワー！！」

ポワポワポワ……

無数のシャボン玉がクラブマスターにあたる。

クラブマスター
『フッ！　そんな小さな泡ごときで……！』

カービィ

「そうじゃないんだよね～」

クラブマスター
『何？』

クラブマスターは自分についた泡をよく見てみた。

クラブマスター
『なっ――――!?』

なんと！　くっついた泡が他の泡とくっついていき、奴を包み込むことができるくらいの大きな泡になったのだ！
そして、クラブマスターを泡の中に入れてしまったのだ！

カービィ
「ねぇねぇ、このカニさん、このまま割っちゃってもいい？」

カービィは銀時たちに尋ねた。

銀時
「そうだなぁ……」

なのは
「ほんとはディバインバスターで丸焦げにしたかったんだけどなぁ～」

フェイト
「切り刻んで跡形もなくなくしたいけど……」

一護

「おいおい」

ティアナ
「あいかわらずというか……アリシアさんも何か言ってください」

アリシア
「そうねぇ……うーん……」

……

アリシア
「いっそのこと茹でちゃえば？」

冬獅郎
「言う言葉が違うだろっ！」

思わずツッコミを入れてしまった。

カービィ
「それじゃあねぇ……」

……

カービィ
「ひとりで食べちゃいます」

カービィは“がんばりすいこみ”をした。

スゥゥゥ～～～！！

ゴックン☆

カービィ
「ぷはぁ～～～おいしかった♪」

……

カービィ
「あれ？」

カービィは銀時たちの後ろに立っている1人の人物に目がいった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

スイレーヌ
「な、なな――――」

？？？
「不様だな……」

スイレーヌ
「だ、誰だ！？」

？？？
「これは失礼した……」

奴は畏まったあとこう言った。

「『竜の爪』のメンバーの黒鎌竜だ」

to be continued.....

これからの詳細について（前書き）

※今回はタイトルどおりの話です。

これからの詳細について

作者
「さーて、今回はこれからの小説に登場する作品の再構成をしようと思います！」

雅也
「って、こんな中途半端なときにそんなことやる？」

メアリー
「作者の小説の進み具合が悪いせいだな」

作者
「それを言われると何にも言えない……」

皐月
「で……何をどう変えるわけ？」

作者
「あーそうそう、実はね、サイドストーリーとしてもう一つ書こうかなって」

ヴィヴィオ
「えっと……それってどういうことですか？」

作者
「ああ、はっきり言うと、メタナイトとドゥーエの2人から見た世界観を描いてみたくなったんだよね。
それで、本編に出そうと思ってた作品を少々そっちに回そうかなっ

て」

雅也
「またそんなこと言って……」

メアリー
「今月は某サイトのゲームにハマって話も進んでないみたいですし……」

皐月
「大丈夫なの？」

作者
「うん、ちょっと落ち着いてきたから大丈夫」

ヴィヴィオ
「あの……それでどんな作品を出すつもりなんですか？」

作者
「うーん、ちょっとは決まってるんだけど……」

マーブル
「どんな感じなの？」

ちゃ…

作者
「そ、それは……二刀流だけは止めて」

マーブル以外

「弱っ！」

作者
「それでは、これから仲間になるキャラの作品をドドーンと紹介するよ！」

全員
「切り替え早っ！？」〇共通作品

・魔法少女リリカルなのはシリーズ（なのは・フェイト、ドゥーエ）
・星のカービィ（カービィ、メタナイト）

〇管理局サイド
・銀魂
・ＢＬＥＡＣＨ
・ＮＥＥＤＬＥＳＳ
・ハートキャッチ☆プリキュア
・オリジナル

〇メタナイト&ドゥーエサイド
・絶対可憐チルドレン（中学生編）
・カオスヘッド
・オリジナル

ａｎｄ　ｍｏｒｅ　……

～～～～～～～～～～～～

作者
「次に、これから登場する（現段階で確定の）作品の紹介だ！」

～～～

「そ、そこはまだ検討中で……」

ヴィヴィオ
「えっと、作者さんにも色々都合があるんだよ」

マーブル
「ま、それなら仕方ないわね」

作者
「楽しみにしている皆さん、ほんと～にスミマセン！！」

ヴィヴィオ
「あ、ちょっと質問してもいいですか？」

作者
「ハイハイ、何かな」

ヴィヴィオ
「どうしてプリキュアを出そうと思ったんですか？」

作者
「それはね、ハート“レス”とハート“キャッチ”で失った心をキャッチするというニュアンスから出したいって考えたんだ」

ヴィヴィオ
「はあ……なるほどぉ…」

作者
「というわけで、今回はお知らせで終わらせていただきます。」

マーブル
「次回の投稿まで待っててね」

これからの詳細について（後書き）

※皆さんからのご意見・御感想、待ってます！

第２２話：竜の爪とＸＶ機関（前書き）

※前回までのあらすじ

カービィがクラブマスターを倒した頃、『竜の爪』のメンバーの黒鎌竜とＸＶ機関のスイレーヌが出会った。そして……。

第２２話：竜の爪とＸＶ機関

黒鎌竜
「……」

スイレーヌ
「……」

２人は対峙したまま動かない。

すると、黒鎌竜が口を開いた。

黒鎌竜
「……ずいぶんと騒ぎを大きくしてくれたものだな」

スイレーヌ
「あら、私たちがしてることをご存じで？」

黒鎌竜
「……死者の魂を糧にする伝説の剣――“呪霊剣”を手に入れること…」

スイレーヌ
「そうよ。だけど、それがわかったところで何もできないわよ。もうすぐ手に入るんだから」

黒鎌竜
「……そうか。だったらもうここには用はないな」

そう言うと、黒鎌竜はマントを翻し敵であるスイレーヌに背を向けた。

スイレーヌ
「ど、どういうことよ？」

黒鎌竜
「……我々が狙っていたものと違った。それだけだ。ちなみに、さっきの話――貴女たちの目的を知っているというのはウソだ。そうしないと我々の狙っていたものが知られてしまうからな」

スイレーヌ
「なっ……！？」

黒鎌竜
「……あと1つだけ言っておこう。その剣はすでに我々が手に入れている。残念だったな」

スイレーヌ
「ッ！！？」

黒鎌竜
「……まさか、我々が流した情報にのってくるとは思ってなかったな。
その分こちらもやりやすかったが」

スイレーヌ
「くっ……」

黒鎌竜

「……本当は今すぐ貴女と戦いたいが、場所が悪い。今回だけは見逃してやろう」

黒鎌竜の姿は、すでに薄くなっていた。

黒鎌竜
（……白天竜の出身地を我の手で汚したくないからな）

小声でそう言って黒鎌竜は姿を消した。

黒鎌竜が消えた直後、スイレーヌは地面に膝をついた。

スイレーヌ
「……結局、向こうのほうが上手だったってことね」

スイレーヌの中で、悔しさが込み上げてきた瞬間だった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カービィ
「ねーねー、オジサン誰？」

「お、オジサンなんて失礼ですねぇ」

カービィ
「オジサンじゃないんならだーれ？」

「んんッ……僕――――自分は『竜の爪』メンバーの光翔竜と言います。以後、お見知りおきを」

なのは

「竜の……」

フェイト
「爪……」

アリシア
「聞いてはいたけど、この人が」

光翔竜
「ほ、ほ……」

一護
「ほ？」

光翔竜
「本物ですぅ……」

銀時
「は？」

光翔竜
「あ、ああ、握手してください！」

銀時
「あ、ああ……」

光翔竜は銀時たちと握手を交わした。

光翔竜
「あ、あと！サインもください！　皆さんの！」

アリシア
「は、はあ……」

……。

……。

……。

光翔竜
「あ、あ、ありがとうございます！　自分は今とっても幸せです！！」

関羽
「い、いえ……」

アリシア
（フェイト……どう思う？）

フェイト
（うん、悪い人には見えないけど）

光翔竜
「あの人から攻撃しろって言われてましたけど、フェイトさん……いや、フェイト様の前でそのようなことは今回はできません！」

銀時

「今回はって……今度会ったときはどーすんだ？」

光翔竜
「フェイト様がいれば攻撃しません！」

なのは
（えーと……）

チンク
（それでいいのか？）

ティアナ
（かなり変わってるわね、この人）

光翔竜はフェイトのほうを見ると、にこっと笑った。

フェイトはそれに苦笑いで応じた。

光翔竜
「それでは皆さん！　またお会いできる日を楽しみにしてます！！」

光翔竜はそう言うと消えてしまった。

恋次
「なんだったんだ、あいつ？」

一護
「さあな」

冬獅郎

「……」

一護
「どうした？」

冬獅郎
「捕まえなくてよかったのか？」

「あっ……」と声を発し、なのはたちは顔を見合わせた。

なのは
「忘れてた……なの」

フェイト
「うん、なんかこう雰囲気が、ね？」

アリシア
「尋常じゃなかったよね」

ティアナ
「それに私たちを見る目が違ってたし……」

チンク
「あれなら誰でも忘れるだろう」

カービィ
「そうだね。そう思っていたいよね」

……。

カービィ
「あれ？　みんな何で黙ってるの？」

銀時
「カービィや……」

一護
「言葉には気を付けたほうがいいぜ」

カービィの頭に手を乗せて言う2人をよそに、カービィは首を傾げるのだった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

黒鎌竜
「……サインをもらって満足したからという理由で見逃したのか」

光翔竜
「いいじゃないですか。また今度会ったらやりますから。……たぶん」

黒鎌竜
「たぶんって……」

とそこに白天竜がやってきた。

白天竜
「もう終わったのですか？」

黒鎌竜
「……」

黒鎌竜が言いそうにないので、代わりに光翔竜が言った。

光翔竜
「そうですよ、今回は簡単な任務でしたから大丈夫でした」

黒鎌竜
「……何もしてないだろ？」

光翔竜
「でも、それを手に入れるくらいの時間は稼いだんですよ。もうちょっと感謝してほしいです」

黒鎌竜はあるものを握っていた。

光翔竜
「白天竜さんの故郷というだけあって竜兵たちも苦労せずに探せたみたいです」

白天竜
「そ、それは……」

黒鎌竜
「……」

さっ……

白天竜
「え……？」

黒鎌竜はそれを白天竜に握らせた。

黒鎌竜
「……先に戻っている」

そう言うとすぐに姿を消してしまった。

光翔竜
「黒鎌竜さんも恥ずかしがることないはずですよ。
素直に白天竜さんの忘れ形見を取りに来たとおっしゃればよかったのに…。
では、自分もこれで……」

光翔竜も消え、白天竜1人が残された。

白天竜はそれを見て泣いた……。

それはかつてこの世界にいたとき――白天竜が過ごしていたときに持っていた、お守りだった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

白天竜には姉がいたが、産まれが朝廷の霊帝の娘だったため苦しい日々を過ごしていた。
だが、そんななかで姉とは仲が良かった。
そんな姉が突然姿を消してしまったのだ。

大好きな姉を失った白天竜は姉からもらったお守りを大事に持っていたが、どこかでなくしてしまった。

それからというもの、白天竜は苦労の連続だった。

そんなときに救ってくれたのが黒鎌竜だった。

黒鎌竜は白天竜が持っていた家宝、『四聖獣剣』ごと白天竜を連れていった。

そして白天竜は誓った……自分を救ってくれた恩に報いるために……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

白天竜
「う……うぅ……」

白天竜はぎゅっとお守りを握り締めていた。
そして、再び誓った……これからもずっと黒鎌竜についていくと……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

銀時
「で……これからどうすんだ？　騒ぎが落ち着いたんだったらここにいる必要もねーだろ」

なのは
「そうだね」

フェイト
「あ……アリシアはどうするの？」

アリシア
「うーん、そうねぇ……仕事が終わったら休暇とってフェイトた

ちの手伝いするつもりだったから、一緒にいくね」

ティアナ
「休暇までとる必要はないんじゃ……」

アリシア
「フェイトがいるんだったら大丈夫」

チンク
「問題はそこではないような気が……」

カービィ
「それじゃあ……ハイッ！」

さっ

銀時
「なんだ、それ？」

カービィ
「コンサート会場のフリーパスポート」

一護
「そんなもんいつから持ってたんだ？」

なのは
「フフッ〓」

銀時
「あんたかーッ！！」

一護
「しかも何げにハートマーク入れてるし！」

恋次
「入れる必要あるのかよ！」

フェイト
「と、とりあえず、コンサート観に行くの？」

なのは
「うん〓」

……。

こうして、なのはたちもコンサート会場に向かうのだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「春ねぇ……」

ヴィヴィオ
「春だねぇ……」

リマ
「春ですねぇ……」

ナオ
「スタジオで花見できるなんてねぇ……」

雅也
「そんななかであとがきコーナーできるなんてなぁ」

メアリー
「というか、よく桜の木をスタジオまで運べたものですね」

雅也
「スタッフが頑張ったみたいだからな、スタッフに感謝しなきゃな」

メアリー
「そうですね」

リマ
「今回は雑談で終わりそうね」

皐月
「とゆーか、リマさんたちはいつから後書きコーナーに普通に出るようになったんですか？」

ナオ
「ん？　そんなこと気にしない、気にしない」

皐月
「気になるから聞いてるんですけど……」

ヴィヴィオ
「まあまあ、せっかくのお花見だから気にしたらダメだよ」

皐月

「う……ヴィヴィオがそう言うんだったら仕方ないわね」

メアリー
「そういえば、このあと、どんなストーリー展開にしていくのでしょう？」

雅也
「ああ、確かコンサート編が終わったあと、サイドストーリーをやるみたいだな」

リマ
「結局、主演級の私たちはまだメインで出ないんだね」

ナオ
「それはそれで悲しいね」

メアリー
「そ、それは、花見でもしてスッキリすればいいですよ、ね、マスター」

雅也
「そ、そうそう！　今は出れなくてもこれから出れるから！」

皐月・ヴィヴィオ
（な、何とも言えない……）

メアリー
「そ、それでは今回はこの辺で！
次回もよろしくお願いします！」

リマ・ナオ
「ハァ～……」

雅也
「な、なんで？」

第２２話：竜の爪とＸＶ機関（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第２３話：劉備、騎士に助けられるのこと（前書き）

※今回は前書き・後書きコーナーがあります。

第２３話：劉備、騎士に助けられるのこと

皐月
「前書きコーナー、ふっかーつ！」

雅也
「って、今まで本編優先だったからなかっただけじゃ……」

カンペ
【ただ作者が忘れていただけです】

マーブル
「……」

メアリー
「まあ、いつものことだからな、仕方あるまい」

ヴィヴィオ
「それに、作者が某雑誌のなのは×Ｆａｔｅのコラボを読んでとても喜んでいます。
それもあって……」

雅也
「今回は前書きと、この話にした、と……」

マーブル
「まったく……あきれてしまうわね」

ヴィヴィオ

「にゃはは……」

皐月
「……復活したかと思ったら、そーゆーことね」

カンペ
【すみません……。あと、もうそろそろ本編に】

皐月
「わかったわよ……それじゃ本編の」

全員
「はじまりはじまり～！！」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？
「……」

がさっ

？？？
「……」

がさがさっ

？？？
「……誰だ？」

がさっ……

？？？

「ウウ……」

？？？

「屍が……動いている？」

？？？

「オマエ……」

？？？

「ッ！？」

？？？

「オマエ……ツヨイチカラノニオイガスル……ダカラ」

？？？

「だから……私を」

？？？

「ウウ……ヨコセ……」

？？？

「……」

？？？

「ヨコセーッ！」

？？？

「……くだらないですね」

ざんっ

？？？
「ギャアアァァァ！！」
？？？
「私に挑んできたことが――――」
ざんっ
？？？
「間違いでしたね」
？？？
「マ、マダダ……マダヤラレ……」
どさっ…
……
……
？？？
「ふぅ……」
さっ…
？？？
「武者修行に来た地でこういうことに巡り合うというのは……何か不吉ですね」

動かなくなった屍を見てそう言った金髪の女性――セイバーは先を進むのだった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

なのはたちが去ってからしばらく経ったころ、元気な声が響き渡った。

???

「ただいまなのだー！」

???

「ただいま戻りました」

小さい赤毛の張飛、そのあとに続いて諸葛亮が戻ってきた。

関羽

「遅かったではないか」

???

「いろいろあってな」

関羽

「星！　今までどこにいたんだ」

趙雲

「い、いろいろとな」

星――趙雲はしどろもどろに答えた。

関羽

《さては道に迷ったな》

ハァ……とため息をつきながらそんなことを考えた。

関羽
「あ、そういえば姉上は？」

張飛
「あれ？　帰ってくるときは一緒にいたのだ」

諸葛亮
「もしかして……はわわ！」

関羽
「迷子、か……」

再びため息をつく関羽であった。

～～～～～～～～～～～～

？？？
「屍兵がやられるとは……」

？？？
「また調整しないといけませんね」

？？？
「そうだな」

ざざっ▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

セイバー
「……」

セイバーは甲冑姿で歩いていた。道中で山賊に襲われかねないからである。

セイバー
「それにしても……」

セイバーは横に目を向けた。
そこにはピンク髪の女性――劉備がいた。

セイバー
「なぜこのようなところで迷子になるのですか？
こんなに道が整っているところで」

劉備
「あはは……」

セイバー
「もうすぐ着きますよ」

劉備
「ありがとうございます」

迷子になっていた劉備を連れて関羽たちのいる村に着く、まさにそのときだった。

「ウガアァァァ！！」

セイバー
「っ！？」

目の前にセイバーが倒したはずの屍兵が現れた。
しかも、今度は大勢で。

セイバー
「1人ではかなわないから今度は仲間をつれてきた、というわけですか」

屍兵
「ウウ……」

セイバー
「仕方ありませんね。
すみませんが少し下がっていてもらえませんか？」

劉備
「は、はい」

屍兵
「ヒトリデ…コレダケノカズヲ……」

セイバー
「……それがどうかしましたか。まさか無駄だ、なんて思っていたり？」

屍兵
「ウガァ……」

セイバー
「はぁ……私も甘く見られたものですね」

屍兵
「ウガァァァ！！」

屍兵が剣をセイバーに振り下ろした。

セイバー
「……」

がきぃん！

セイバーは振り下ろされた剣を受けとめた。

屍兵
「ウ……ガ……？」

セイバー
「このままいきます……」

がきぃん！

屍兵
「ウガッ！？」

屍兵の剣を弾き飛ばした。

セイバー
「ハァァァ……」

屍兵
「ウガガ……」

セイバー
「約束された（エクス）……」

屍兵
「ウガーッ！！」

セイバー
「勝利の剣（カリバー）！！！！！」

それはまさに一瞬のできごとだった。
セイバーが繰り出した技から放たれたまばゆい光とともに屍兵は塵となり消滅した。

セイバーは、ふぅ……と安堵のため息を吐いた。

セイバー
「久しぶりに使いましたね……」

劉備
「あ、あの……あの方たちは一体…」

セイバー
「何でしょうね、私にもわかりません」

劉備
「そうですか…」

セイバー
「では、私はこれで…」

劉備
「あっ……あの！お名前は？」

セイバー
「私は……セイバーと申します」

劉備
「私は劉備です」

セイバー
「劉備……それでは」

……

……

劉備
「ありがとうございます、セイバーさん……」

そして劉備は関羽たちのもとへと向かったのであった。

……

？？？

「……」

そんなやりとりを遠くから見ていたのは……

???

「白天竜、いいのか？
劉備というのは……」

白天竜
「自分の……大切な友です。ですがそのようなお気遣いはかまいません、黒鎌竜様」

黒鎌竜
「だが……」

白天竜
「いいのです。今の私では桃花に会うことはできません」

黒鎌竜
「……ほんとうに良いんだな？」

白天竜
「はい」

黒鎌竜
「そうか、ではいくぞ。光翔竜は先に戻っているのだからな」

白天竜
「はい……」

……

……

白天竜
《桃香……この戦いが終わったら絶対会いに来ます。そのときまで……また……》

白天竜は心の中でそう誓ったのである。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そのころ、旅をしているメタナイトとドゥーエはというと……

メタナイト
「ん……？」

ドゥーエ
「どうしました？」

メタナイト
「誰かが倒れている……」

ドゥーエ
「えっ？」

倒れていたのはセイバーだった。

話によると、力を使いすぎてお腹が空き、倒れてしまったとか。

メタナイト

「……」

ドゥーエ
「……」

セイバー
「な、なにか食べ物を……」

メタナイト
「……わかった」

※セイバーが仲間になった

ドゥーエ
「……いいのでしょうか、このような終わり方で」

go to next stage ……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

皐月
「いいわけないでしょーが！」

メアリー
「そーだそーだ！」

マーブル
「これじゃあ何のために私が来たのかわからないわよ」

雅也
「いやいや！　それとこれとは話が違うから！」

ヴィヴィオ
「あ、それと次回のお話は……」

カンペ
【それはまだ言わないでください、まだ作者が決めかねているんですから】

ナオ
「と、いうことは……」

リマ
「次回はコンサートか、サイドストーリーかはまだ決めてないってこと？」

カンペ
【はい……】

雅也
「うーん……」

ヴィヴィオ
「どっちにするのかなー」

メアリー
「どっちだろうな」

皐月
「ヴィヴィオとカービィが活躍すれば、まずはいいんだけどね」

リマ

「私たちが活躍できたら……」

ナオ
「いいのに……」

マーブル
「サイドストーリーも見てみたい……」

全員
「う～ん……」

カンペ
【皆さんが悩んでいるみたいなので今回はここまで！
まったね～！！】

第２３話：劉備、騎士に助けられるのこと（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第２４話：コンサートで大騒ぎ！（後編）（前書き）

※もうメチャクチャですね。

第２４話：コンサートで大騒ぎ！（後編）

～　コンサート会場　～

ワァーーー！！という大歓声が会場に響き渡った。

観客の目線は一点に集中していた。

その先にはランカがいる。

ランカ

『みんなー、今日はわたしのコンサートに来てくれてありがとー』

ワァーーー！！

ランカ

『次の曲で最後になるけど、盛り上がっていこうねー！！』

ウォーーー！！！

最後の曲、それは『星間飛行』である。

ランカ

『みんな抱き締めて、銀河の果てまで！！』

ウォーーー！！！！

会場には今まであがったなかで一番の歓声が聞こえた。

そして、歌がはじまった……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ウォーーー！！！

ランカちゃーん！！！

サイコー！！！

歌が終わったあとは観客からの拍手喝采だった。

ランカ

『みんなー、ありがとー！』

これで彼女のライブコンサートは終わりだと思った。

そのとき……

がこん

？？？

『で、それで終わりなの？』

ランカ

『えっ？』

ステージ中央が開き、そこから誰かが出てきた。

出てきたのは……

ランカ
『シェリルさん！？』

シェリル
『あら、そんなに驚くことかしら』

ランカ
『だ、だって、今日のライブ観に行けないって……』

シェリル
『秘密にしておいてって言われたから。ごめんね』

ランカ
『はぁ……』

シェリル
『さーて、いくわよ～、みんなッ！！』

ウォーーー！！！

……

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

【ＸＶ機関】

戦闘員１
「で、これからどうするつもりだ？」

戦闘員２
「どうするって？」

戦闘員１
「ハートレスを使ってもうまくいかなかったのだから、別な奴らを使ってみるか」

戦闘員３
「そうだな、『竜の爪』の奴らが“あれ”を逃がしたみたいだし」

戦闘員２
「うーん……」

戦闘員３
「ま、あてになりそうな奴らはいないだろうがな」

戦闘員１
「それ言ったらダメだろ」

戦闘員３
「だが、事実だろ？」

戦闘員１
「む……だったらどうするつもりだ？」

戦闘員２
「俺に考えがある」

戦闘員１・３
「どんな？」

戦闘員２
「それはだな……」

……

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

【竜の爪】

竜兵１
「試作品０１６号を探せって言ったって……」

竜兵２
「こんなに広いコンサート会場にいるんだったら、なぁ？」

？？？

「愚痴を言う暇があるんだったら探しなさい」

竜兵１・２
「は、はっ！」

……

？？？
「まったく、誰かが逃がしてくれたせいでこんなことをする羽目になるなんて」

蛇の仮面を被り、紫のマントを羽織った人物が嘆いた。

竜兵３
「呪血竜様」

嘆いた人物は呪血竜と呼ばれた。

呪血竜
「どうした？」

竜兵３
「試作品０１６号を逃がしたことが『ＸＶ機関』にも知られた模様です」

呪血竜
「ふむ……」

竜兵３
「いかがなされますか？」

呪血竜
「向こうは上が出てくることはない。放っておいても大丈夫だろう。ひきつづき試作品を探せ」

竜兵3
「はっ！」

……

？？？
『ついでだ、コンサート会場にいるランカ・リーとシェリル・ノームの声を録音してくるのだ』

呪血竜の目の前にモニターが現れ、1人の人物が映し出された。

呪血竜
「し、真王竜様！」

その人物は真王竜と呼ばれた。

真王竜
『彼女達のバジュラを制御する力、それを解析できれば』

呪血竜
「バジュラを戦力に加えることができますね」

？？？
『ねーねー、お姉ちゃんたちの歌、まだ聴けないの？』

モニターの隅に映ったのは水蓮竜だった。

真王竜
『もう少し待っててくれないか。もーすこしで聴けるから』

水蓮竜
『わーい！』

呪血竜
「……」

竜兵
「……」

モニターを見ていた呪血竜と、近くにいた竜兵たちは言葉が出なかったのであった。

……結局あんたも歌のほうかよ▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ミニキュリア
「はぁ……はぁ……」

一方、竜兵たちの捜索を掻い潜ってミニキュリアはステージ脇まで来ていた。

竜兵1
「いたか？」

竜兵2
「いや、だがこっちに来たのは確かだな。わずかだが奴の気配が残っている」

ミニキュリア
「くっ……」

竜兵がすぐ近くまで来ている……
物陰に隠れていた彼女は、見つかるかの瀬戸際に立たされた。

ミニキュリア
「どうすれば、いいの……？」

竜兵１
「こっちだな」

ミニキュリア
「ッ！！」

竜兵がミニキュリアのほうに来た。

？？？
「うおぉぉぉ～～～～～～～～！！！」

竜兵２
「な、なんだ？」

竜兵１
「あいつは……コアッパだな」

竜兵２
「コアッパか……って、こっちに向かってくるぞ！」

コアッパ
「どけぇぇぇ～～～～～～！！！」

竜兵1
「く、来るなー！」

ドーン！

竜兵たち
「「ギャーーー！！」」

竜兵はコアッパにぶつかり吹っ飛んでいった。

コアッパ
「カービィはどこだぁ～～～～～～！！！」

コアッパはそう叫ぶとどこかに行ってしまった。

ミニキュリアはその光景をただ漠然と見ていた。

ミニキュリア
「……はっ、今のうちに」

我に返ったミニキュリアはすぐさま移動するのだった。

その頃、ステージではランカとシェリルが『ライオン』を熱唱していた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ウォーーー！！

ランカちゃーん！！

シェリルーーー！！

皐月
「う、うん、なかなかよかったわね」

雅也
「一緒に熱唱してたのはどこのどいつだ？」

皐月
「うっ、それは……」

ヴィヴィオ
「2人の歌、とーってもよかったね♪」

マーブル
「これで終わりっていうのが残念ね」

メアリー
「わ、私でも歌えるだろうか、あんなふうに？」

ヴィヴィオ
「歌えるよ！　メアリーだったら絶対に！」

メアリー
「そ、そうか、それならいいんだが」

マーブル
「……」

雅也
「ん？　どうかしたか？」

マーブル
「ううん、なんでもないよ！」

雅也
「あ、そ……」

マーブル
「……」

～～～～～～～～～～

アナウンサー
『ランカさん、そして、サプライズゲストのシェリルさんによるライブもこれにて終了です！』

ガヤガヤ…

マーブル
「……雅也くん」

雅也
【ここから先は念話でいいぞ】

何かを察した雅也は念話でそう伝えた。

マーブル

【う、うん。　実はね、ちょっと変な気配がするんだけど……】

雅也
【……何かいる、ってことだよな？】

マーブル
【あ、やっぱり？】

雅也
【それに、これくらいのものだったら、皐月にヴィヴィオ、メアリーも気付いてるはずだ】

マーブル
【えーと……これくらいのってどういう――】

ドゴォォォォォン！！！

雅・マ
「！！！」

「カービィ！どこだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～！！！」

コンクリを破りステージの下から現れたのはコアッパだった。

雅也
「警備員は何やってるんだよ」

皐月
「それだったら……」

皐月が目を向けたのは無残にも倒れている警備員の姿だった。

ヴィヴィオ
「かわいそう……」

メアリー
「あの馬鹿力は侮れないものだな」

雅也
「って言ってる場合じゃない！」

ギャオォォォォォォン！！！

皐月
「今度は何！？」

客席の後ろからはマイクの姿をした黒い巨体が現れた。

【ＸＶ機関】

戦闘員１
「サンダナ様からいただいたハートレス・マイクアーマーと、スナッキーで一気に畳み掛ける！」

戦闘員２
「これでもし失敗したら……」

戦闘員３
「お仕置き間違いなしだな」

戦闘員２
「ハァ～～～……」

戦闘員１
「ため息吐くなッ！」

～～～～～～～～～～

呪血竜
「……」

その光景を空から見ていた呪血竜は浮かない顔をしていた。今だに試作品０１６号――ミニキュリアが見つからないからである。

竜兵１
「いかがいたしましょう？」

呪血竜
「様子見したいところですけど……」

竜兵２
「呪血竜様！試作品０１６号を見つけました！他の竜兵たちが追っています！」

呪血竜
「わかった……。こっちも気になるところですが、今はそっちのほうにまわることにしましょう」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ナオ

「リマ姉……！」

リマ
「せっかくのライブをメチャクチャにしちゃって……許さないんだから！」

リマ・ナオはバリアジャケットを纏うと、リマはマイクアーマーに、ナオはコアッパに向かっていった。

リマ
「こんなところまで来て……」

バキンッ！

マイクアーマー
「ギャオッ？！」

ナオ
「邪魔するなぁーーーッ！！」

ドカッ！！

コアッパ
「ぎゃぼッ？！」

リマのデバイス――ナオと同じオーシャンブルーの杖――から放たれた魔法弾をマイクアーマーに打ち込み、ナオはコアッパを軽く薙ぎ払った。

マイクアーマー

「ギャオォォォ……！！」

コアッパ
「いてて……なにすんだよ！」

ナオ
「黙れッ！！」

コアッパはナオの剣幕に押されて一歩引いた。

ナオ
「カービィはここにはいない。だからさっさと帰れ」

コアッパ
「そ、そんな言い方ねぇだろ！」

リマ
「ライブの邪魔をしたからよ！」

コアッパ
「こ、怖ぇ……」

ナオ
「リマ姉、黒いのは？」

リマ
「『オーシャン・バスター』をお見舞いしたらあっけなく勝てたわよ」

ナオ

「あぁ……容赦なくやっちゃったと……敵ながらかわいそうに思っちゃったよ」

オーシャン・バスター――リマ・ナオが使う砲撃魔法では威力がトップクラスの魔法である。

ナオ

「ここで退いてくれないかな？　じゃないとコアッパ、あんたも同じ目に遭うから」

コアッパ

「う、う……うおぉぉぉぉ～～～～！！　今回は退いてやる！今度会ったときは退かないからな！」

コアッパは『うおぉぉぉ～～～～！！』と叫びながら去っていった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

戦闘員１

「ど、どうする？」

戦闘員２

「戻るしかないな」

戦闘員３

「こんなに簡単にやられるのってアリかよ…」

？？？

「おめおめと逃げるんじゃないよッ！」

戦闘員

「「「さ、サンダナ様！」」」

サンダナ
「まったくアンタたちは……心配で見に来てみればこの有様じゃない」

戦闘員
「「「申し訳ありません……」」」

サンダナの後ろからリマが倒したはずのマイクアーマーが現れた。

サンダナ
「フフフ、アンタたちは見ておきなさい。今度はあたしがやるから」

戦闘員
「「「はっ！！」」」

サンダナ
「スイレーヌも失敗したみたいだし……ここであたしがやるとしますか――」

雅也
「……」

ヴィヴィオ
「えーと……リマさんたちってすごいね」

皐月

「今までの沈黙のあとにその発言って……」

ヴィヴィオ
「ふえッ？！　私、何か変なことでも言っちゃったの！？」

メアリー
「しかも自覚なしとはな……」

雅也
「で……これからどうするんだ？」

皐月
「うーん……出番もないんじゃ帰るしかないわね」

どん！

雅也
「おっと……」

雅也の胸に何かがあたった。

？？？
「た、たすけて！」

？？？

雅也
「……はい？」

？？？
「助けてください！」

皐月
「知ってる子？」

雅也
「いや、全然」

ヴィヴィオ
「それじゃあ……」

マーブル
「……試作品０１６号…ミニキュリア……」

ミニキュリア
「な、なんでその名を！？」

マーブル
「えっ！？　えーと……」

？？？
「見つけましたよ、０１６号」

ミニキュリア
「ッ！？」

彼らは初めて出会った――『竜の爪』の幹部・呪血竜に……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～　コンサート会場前　～

カービィ
「ここなんだね」

なのは
「この辺でコンサートやってるのってここしかないから」

フェイト
「でもなんか……」

ティアナ
「様子が変ですね」

とその時！

コアッパ
「あっ、カービィ！」

カービィ
「ふえっ！？　またー！」

コアッパ
「うおぉぉぉ～～～～！！！！！」

カービィ
「……なーんてね♪」

カービィは“スープレックス”をコピーした。

カービィ
「よい……しょ！」

コアッパ
「うおっ！？」

コアッパを軽々と持ち上げると、そのまま遠くへと放り投げた。

コアッパ
「んなアホなぁ～～～！！！！」

キラーン☆

カービィ
「バイバ～イ」

一護
「あっけなかったな」

銀時
「つーかまだ懲りてねーのかよアイツ」

チンク
「……」

ティアナ
「どうかしたの？」

チンク
「いや、中から音が聞こえたような……」

ガシャン！

「ッ！！？」

呪血竜
「ようやく見つけましたよ、試作品０１６号。さぁ戻ってきなさい」

ミニキュリア
「うっさい！　あたしは戻らない。それにあたしにはミニキュリアって名前があるんだ！」

呪血竜
「そうですか、戻る気はありませんか。ならば……」

呪血竜がさっと手をあげると、竜兵たちが雅也たちを取り囲んだ。

呪血竜
「超強力ＡＭＦを仕掛けてますから変身は出来ませんよ」

皐月
「くっ……」

雅也
「俺が出来ないとでも？」

呪血竜
「……なに？」

雅也は甲冑姿にキャリバーンを手に持っていた。

雅也
「俺のレアスキルはな……」

斬！！

雅也
「どんなＡＭＦの影響を受けないことさ！」

雅也は竜兵たちを薙ぎ倒していく。

呪血竜
「ちぃ……！」

リマ
「ようやく現れたわね」

ナオ
「『竜の爪』……」

呪血竜
「なっ……！」

リマ・ナオ姉妹の杖が呪血竜をとらえていた。

ナオ
「父さんの……母さんの敵ッ！！」

ドンッ！！

２人の背後から何かが落ちてきた音がした。そして……

？？？

「ギャオォォォォン！！！」

という鳴き声がした。

リマ・ナオ

「「ッ！！！！」」

振り返った姉妹が目にしたのはメタリックな身体をした大きな竜だった。

呪血竜

「大竜兵よ……この者たちを始末しなさい！」

呪血竜は空へと舞い上がり消えてしまった。

リマ

「また逃げられた……」

ナオ

「くそっ……！」

大竜兵

「ギャオォォォ……！！」

雅也

（リマさんたちはあのでかいのに集中しなきゃいけなくて、こっちは数が多い。
なのにこっちは2人がデバイスが使えない……）

マーブル
「……」

竜兵1
「デバイスが使えなければこっちのもんだ！」

竜兵2
「相手は1人だ。一気に畳み掛けるぞ！」

残りの竜兵たちが雅也を襲う！

雅也
「こうなりゃ……？！」

急に雅也の身体が思うように動かなくなった。

雅也
（こんなときに魔力切れかよ……）

動けなくなった雅也に竜兵たちの剣が振り下ろされる。

メアリー
「マスター！！！」

皐月
「雅也ッ！！」

ヴィヴィオ
「雅也くん！！」

雅也は目を瞑った。

……

……

……

雅也
「……？」

雅也は目を開け自分の身体を触る。
身体からは血は出ていなかった。
雅也は顔を上げた――

目の前には竜兵たちが倒れていた。
そして、彼の目の前には黒いコートを身に纏い、ナイフを持ったマーブルが立っていた。

雅也
「マーブル……お前……」

マーブル
「……雅也くん、あたしは――」

「ナイフ使いのマーブル、人は彼女を『死を運ぶ女』って呼んでるわ」

マーブルはその声の主に聞き覚えがあった。

マーブル
「……サンダナ」

サンダナ
「久しぶりね、まさかあんたが『XV機関』を抜けるなんて思ってなかったわ」

雅也
「え……」

サンダナ
「この子はね、あたしたちと同類なの。人を苦しめてたの」

ヴィヴィオ
「そ、そんな……」

皐月
「……」

サンダナの後ろにはマイクアーマーが身構えていた。

サンダナ

「機関を抜けた理由がそいつがいたから？
くだらないわ、そんなことで抜けるほうがもっとバカよ」

マーブル
「……の」

サンダナ
「ん？」

マーブル
「そんなの……知ったことじゃない！
彼を見たとき初めて感じた、人にこれほど好意を寄せたのは……
彼を好きって思ったのは！」

雅也たちはその言葉を聞いて驚いた。
彼女が自分のところにいるのは自分を――雅也を好きになったため……

皐月
「一目惚れってアンタ……どれだけ罪な奴なのよ！」

雅也
「そんなこと言われたってよ！」

サンダナ
「あっそ……んじゃアンタの始末は……」

？？？

「さっさといっちまいな」

サンダナ
「ッ！？」

バシィーン！

サンダナ
「ちぃ……！」

サンダナはダガーで攻撃を防いだが、反動で後ろに大きく後退した。

雅・皐・メ・ヴ
「「「「銀さん！！」」」」

銀時
「魔法が使えねーんだったら……」

一護
「使わない奴が相手になればいいってことだよな」

恋次
「簡単に言うんじゃねぇよ」

カービィ
「わーい、マイクだー！」

冬獅郎
「……何で俺がこっちなんだ？」

銀時
「あー、ほら、ちっちゃい者同士で組んだほうがいいかなーって」

冬獅郎
「そんなことで組み合わせを決めるなっ！」

カービィ
「マイク、マイク♪」

サンダナ
「ってアンタ、なにコピーする気よ？」

カービィ
「マイク♪」

その瞬間だった、雅也たちの顔が青ざめたのは。

そして何も言わずに逃げるように会場を去っていった。もちろん、リマ・ナオ姉妹に大竜兵も……

竜兵
「そ、総員、退避～～～！！！！」

残りの竜兵たちも慌ててその場からいなくなった。

サンダナ
「？？？」

サンダナが首を傾げたあと、辺りを見渡すと誰もいなかった――――なんと、自分の味方さえもいなくなっていたのだ。

サンダナ

「なに？　これってどういう――」

そして……

ヘッドホンをして、マイクスタンドを持ったカービィが歌いはじめた……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

雅也
「ハァ、ハァ……」

一護
「俺たち、何のために、来たんだか……」

銀時
「あ、烈火竜さん、『ＤＯＲＡＧＯＮＮＥＩＲＵ～竜の爪～』連載おめでとう。
これからも頑張ってくれよ、作者も結構楽しみにしてるからよ」

雅也・皐月
「「こんなところで言うことかぁー！」」

銀時
「あべしっ！？」

なのは
「にゃはは……」

フェイト
「あっ、カービィはどうするの？」

メアリー
「そろそろ歌い終わるところだろう。戻ったほうがよいのではないか？」

フェイト
「そうだね」

～～～～～～～～～～～～

戻ってきた一同は目に入ってきたものにただ驚くだけだった。

サンダナ
「うっ、うぅ、うっ……いい歌だなぁ……」

なんと、カービィの歌を聴いたサンダナが感動して泣いていたのだ！

リマ
「え、えーと……」

ナオ
「これって……」

チンク
「理解不能だな」

サンダナ
「いい歌も聴いたし、帰るとでもしますか」

サンダナは黄色い光に包まれ、その場を去った。

一護・ティアナ
「「こんなのでいいの（かよ）？」」

？？？
「いいわけないだろーが！」

そこに現れたのは、ばいきんまんだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

雅也
「あれで終わりでいいじゃん」

皐月
「次回は作者が書きたかったのを書くんだって」

メアリー
「しかしなんだな、このコーナーもこんなに短くていいのかと思ってしまうな」

ヴィヴィオ
「今回、私たち出番なかったからね」

作者
「ではでは、また次回～」

第２４話：コンサートで大騒ぎ！（後編）（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第２５話：ハイジャンプでいこう！（前書き）

※何とか書けました……。

第25話：ハイジャンプでいこう！

チンク
「貴様、まだ懲りてなかったみたいだな」

ばいきんまん
「お前に言われたくない！」

なのは
「でも、悪戯はダメ、なんだからねっ♪」

……

なのは
「あ……あれぇ？」

ヴィヴィオ
「……なのはママ」

フェイト
「な、なのは……その……キャラがちょっと……」

なのは
「あ……」

銀時
「B―H―じゃなねーんだから、キャラ変わるんじゃねーぞ」

なのは

「中の人が同じだからってそれは言わないでよ！」

ばいきんまん
「……あの～」

ティアナ
「大丈夫よ、あたしたちは聞いてるから……それで、何でこんなところにいるのよ？」

ばいきんまん
「うっ……そ、それは……」

カービィ
「？」

～～～説明中～～～

チンク
「なるほどな」

皐月
「要するに、チケットが手に入らなかったからランカさんを連れてこいと」

ばいきんまん
「ハヒ……」

一護

「んなくだらないことしてないで、ここまで来て聴けばいいのにな」

ばいきんまん
「おっしゃるとおりです……って、なんで俺様が……」

チンク
「何か文句でもあるのか？」

ばいきんまん
「いえ……」

それからばいきんまんは説教されましたとさ

――　おしまい　――

……ではありませんので……ハイ、なぜかというと……

ばいきんまん
「あ、一つ忘れてた」

なのは
「何を忘れてたの？」

ばいきんまん
「俺様が作ったメカを」

銀時
「ただのガラクタだろ？　別に放っておいてもいいんだろーがよ」

ばいきんまん
「いや、その……」

リマ・ナオ
「？？」

―――――――――――――――

その頃、エンジェらが彼らのいるコンサート会場の外に来ていた。

エンジェ
「ふーん……ここにあの子がいるわけね」

マモン
『はい。ですがなぜエンジェ様はあのピンクの……カービィ、にこだわっているのですか？』

エンジェ
「なんとなくよ、なんとなく」

ベルゼブブ
『きっと、あの子が結構な食べっぷりだったからだよ』

ベルフェゴール
『いや、それはないな』

ルシファー

『ないわね』

サタン
『あるわけがない』

ベルゼブブ
『そんなことないもん！』

レヴィアタン
『明らかに言えることは、エンジェ様が考えてることは、アンタが考えてることじゃないってこと』

ベルゼブブ
『むー！』

エンジェ
「さて、と……ちょっと中に――」

？？？
「トオサン……」

エンジェ
「ん？」

キョロキョロ……

エンジェは辺りを見回した。自分たち以外は誰もいない。だが……

「ココハトオサナイゾ……」

確かに声が聞こえた。しかし、誰もいない。

マモン
『エンジェ様、どうかされましたか？』

エンジェ
「あ、何か声が聞こえたんだけど……」

マモン
『声、ですか？』

「トオサン……ココカラサキハダレモトオサナイ……」

マモン
「エンジェ様！」

エンジェ
「上、ね」

エンジェが見上げると、巨大な雲の塊があった。

エンジェ
「雲？」

――――――――――――

フェイト
「その雲がどうしたの？」

ばいきんまん

「その雲はこのスプレーで作ったんだ」
そう言ってスプレー缶を取り出した。

ばいきんまん
「このスプレーはイメージしたものを雲状にして出すんだ」

おぉ～、と皆は声をそろえて言った。

一護
「けどよ、それくらいのことで気にするよーなことなのか？」

ばいきんまん
「あれはカービィが相手をする……いや、カービィにしか倒せないんだ」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

エンジェ
「……」

？？？
「……」

エンジェ
「アンタ、雲のくせに生意気ね」

？？？
「雲ダカラトイッテ甘クミナイホウガイイゾ」

エンジェ
「へぇ～、どこがすごいのよ？」

？？？
「ダッタラ攻撃シテミロ」

エンジェ
「ふーん……それじゃ」

エンジェは魔法で雲にむかって攻撃した。

バチンッ！

あっけなく弾かれてしまった。

マモン
「エンジェ様の攻撃が！」

エンジェ
「まったく効果なし……てわけね……」

？？？
「オマエノ攻撃ハ通ジナイ……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

雅也
「どういうことだ？」

？？？
「それはこちらで説明させてもらいまーす！」

ヴィヴィオ
「ひゃう!?」

皐月
「み、緑さん!?」

緑
「はいはーい、みんな久しぶりだね。橋本緑だよー！」

メアリー
「それはわかっている。
なぜあなたがここにいるのかということだ」

緑
「あぁ、それはね優太に頼まれてきたんだよ。
カービィにこれを渡してほしいって」

緑が渡したのは、コピー能力入りのシャボン玉だった。

緑
「優太によると、その雲はカービィの世界のキャラを模して作られたみたいなの」

チンク
「そうなのか？」

ばいきんまん
「……あぁそうだよ、だけどそれだけじゃない。
カービィ以外の攻撃は効かないようにしたんだ」

カービィ
「なぜ僕だけ？」

ばいきんまん
「他の奴らだったら一発でやられるところを、カービィなら何回かダメージを与えないといけないからな」

――簡単に言うと、カービィのボス戦で考えた、ということだ。

銀時
「……テメー、ただのバカだろ？」

フェイト
「銀時に言われたら……」

緑
「おしまいだねっ」

ばいきんまん
「うるさーい！！」

緑
「そういう事だからカービィ、外に行ってあげてねっ」

カービィ
「うん、わかった！」

カービィはワープスターに乗り外に出ていった。

緑

（うーん、ここからちょっと面白い、かな？）▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

エンジェ
「雲のくせに生意気ね」

？？？
「……電磁砲（レールガン）」

雲からエンジェに向かって放たれた。

エンジェ
「っ……こうやってかわすことしかできないなんてね」

？？？
「フッ……」

ぐいん！

エンジェ
「ッ！？　電撃の向きがッ！？」

？？？
「電磁砲ハ貴様ヲ逃ガサナイ」

「とぅ！」

バチンッ！

？？？

「何ッ？！」

「こうやっちゃえば効果ないもんね」

？？？

「貴様ハ……カービィ」

カービィ

「ポヨ、僕のこと知ってるの？」

？？？

「メカクラッコノ恨ミ、“バイキン・メカクラッコ”ガ果タス。覚悟シロ！！」

カービィ

「僕だって、シャボンに入ってた“ハイジャンプ”をコピーしたから負けないよ！」

バイキンメカクラッコがあらわれた。

バイキン（Ｂ一）・メカクラッコの電撃攻撃！

カービィ

「とぅ！」

カービィは攻撃をかわした。

カービィのハイジャンプ攻撃。

B一メカクラッコ
「グハァ！」

B一メカクラッコにダメージを与えた。

エンジェ
「……て、なんでＲＰＧ風の解説になってるのよ」

あ、なんとなく……

こうして、両方の攻防が続いた。だが、ハイジャンプ中のカービィは無敵のため圧倒に有利である。

B一メカクラッコのあちこちから火花が散っていた。

カービィ
「とどめのハイジャンプだー！」

ドガッ！

B一メカクラッコ
「ム、ムムムム、ムネネネ、ネ……」

ドゴーン！

カービィ
「ふぅ～、これで終わりだね」

エンジェ
「……」

マモン
「エンジェ、様？」

カービィ
「大丈夫だった……て、あっ、この前の」

エンジェ
「……」

エンジェはさっきからカービィを見つめたまま何も言わない。

カービィ
「え、えと……」

エンジェ
「カービィ、だったわね」

カービィ
「う、うん」

エンジェ
「今日はありがと、助けてくれて。何かお礼したいんだけど……そんなに時間がないのよね」

エンジェは管理局に追われている身――なのはやフェイトたちに見つかるわけにはいかない。

あの約束を果たすためにも……

エンジェ
「今はこれしかないけど」

そう言ってカービィに一通の手紙を渡した。

エンジェ
「その手紙に私の名前を書いてくれたらいつでも話ができるから」

もしこれが管理局に知れたとしても、自分の居場所までは特定できないようにしている。

カービィ
「うん、わかった」

エンジェはカービィを撫でた。

昔、自分がしてもらったときのことを思い出した。

そしてカービィに「またね」と言ってその場をあとにしたのだった。

ｇｏ　ｔｏ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ　……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

雅也
「で、出番が……」

皐月
「少ない……」

ヴィヴィオ
「あぅ……」

メアリー
「少なすぎる……」

作者
「すみません（汗）」

緑
「と、いうわけで、次回もよろしくお願いしまーす！」

雅也・皐月
「「ネタないからって早すぎだー！！」」

第２５話：ハイジャンプでいこう！（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第２６話：聖王の秘宝・０１（前書き）

※一気に2話更新です♪

第２６話：聖王の秘宝・０１

青年たちよ

君たちに秘められたる力は無限大なのだ

その力を無駄にしてはならない

だから我々は君たちにこれを書き記すことにする

いずれおとずれるであろうこのことを

復讐という炎に燃えあがる戦場を……

【“遥かなるいにしえの古文書”より抜粋】

――――――――――――――

～　新・機動六課　～

はやて

「マイアル、これは？」

マイアル

「上層部を調査していたときに見つけたものです。

ところどころ破れていて読みにくくなってますが」

はやて
「それで今のところ読めたのがこれ、ってことやな」

マイアルは頷くとはやてに資料を渡す。

マイアル
「あと、さらに上層部を調査したところ、他にも隠していたことが山ほど出てきました」

はやて
「ロストロギア・『聖母の女神』、『イフリートの銃』、『超電磁砲のもと』、『ヴァルキュリアの聖杯』、その他もろもろと……」

マイアル
「各世界で『ＸＶ機関』、ならびに『竜の爪』が盗んでいるそうで」

はやて
「『風の笛』のことならミレイザさんから聞いてたけど……」

はやてはざっと資料に目を通す。

はやて
「まさか他にもあったなんてな」

マイアル
「それではやて……隊長にお願いしたいことが」

はやて

「ん？」

～～～

「はい！　喜んで！」

ギンガ
「ですが、わたしたちには別件が……」

はやて
「それならマイアルがやってくれるって」

スバル
「ねぇねぇ、行こうよギン姉」

「んもぅ……わかりました」

はやて
「頼むで、スバル、ギンガ」

スバル・ギンガ
「「はい！」」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

銀時
「んで？　狙われてるお宝を守るためにあっちに戻るってわけか」

フェイト
「うん、あっちにも優秀な魔導師がいるけど」

なのは
「この子たちのこともあるからね」

ミニキュリア

「……」

マーブル
「……」

冬獅郎
「こっちも今までのことを報告しに戻らないといけないから、別にかまわないが……」

カービィ
「あの、これはどうすれば……」

カービィはエンジェからもらった手紙を見せた。

なのは
「とりあえず、そのまま持っていても大丈夫だよ」

フェイト
「そのこともはやてに話さないとね」

リマ
「あ、わたしたちは寄るところがあるので……」

ナオ
「すみません……」

フェイト
「あ、うん、大丈夫だよ」

なのは

「こっちのことは心配しないでいいよ」

2人
「はい……」

銀時
「んじゃ俺は……」

フェイト
「銀時には一緒に来てもらうよ」

銀時
「な、なんで？」

フェイト
「万が一、襲撃者がＡＭＦを使ってきたら影響が少ない人が1人くらいはいないと」

なのは
「実力もあるしね」

銀時
「ヘイヘイ」

銀時は仕方なくついていくことにした。

チンク
「……」

ティアナ

「どうしたの？」

チンク

「……いや、なんでもない」

ティアナ

「そぅ……」

チンク

（今、誰かに見られていたような……）

魔導師組・銀時は機動六課に、一護たちとカービィは空座町に、リマとナオとある場所へ、それぞれむかったのだった。

……

……

……

……がさがさ

？？？1

「フッ……勘が鋭いといったほうがいいだろうな」

？？？2

「まったくだな」

？？？1

「『普通の人々』はどうしている？」

？？？２
「作戦どおりに行動している」
？？？１
「そうか……ならば」
かたん…
？？？１
「我らの真の恐ろしさ……思い知れ」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
雅也
「……」
皐月
「……」
ヴィヴィオ
「……」
マーブル
「……」
新・機動六課へ移動しているなか、４人は何も言わずただ俯いたまま。
メアリー
（まずいな……こんな空気ではあっさりとやられてしまう……なんとかしないと）

と思っていると、フェイトが話し掛ける。

フェイト
「えっと……マーブル？」

マーブル
「……何ですか？」

フェイト
「彼女が言ってたことってほんと？」

マーブル
「……（コクリ）」

フェイト
「そう、なんだ……」

なのは
「でも、雅也くんと出会って変わったんだよね」

マーブル
「……それまでは何のためいもなく人に手をかけていたんです。でも彼に……雅也くんに出会ってからはそれができなくなりました」

雅也
（あっ……）

あのとき、雅也はマーブルにやさしくした。見ず知らずの彼女に何のためらいもなく

おそらく、そのことが彼女を変えたのだろう……

雅也はそう思った

マーブル
「それからは人には手をかけていません」

なのは
「そうなんだ……」

皐月
【……雅也】

雅也
【な、なんだよ……】

皐月
【どれだけフラグたてるつもりよ】

雅也
【べ、別にそんなつもりじゃ……】

メアリー
【まぁ、マスターだからできることですがね】

雅也
【メアリーまで!?】

ヴィヴィオ

「……？」

1人何を話しているのか分からず頭を傾げるヴィヴィオだった。

～　新・機動六課　～

なのはたちはある部屋にいた。そして、はやても……

はやて
「……なるほどなぁ、そんなことが」

一通りの話を聞いたあと、はやては顎に手を当て少し考え込む。

はやて
「それやったらちょっと厄介かもしれんな」

なのは
「どういうこと？」

はやては様々な世界からロストロギアが盗まれていることを話した。

フェイト
「そんなことが……」

はやて
「それともうひとつ、『能力者狩り』って知ってるか？」

皐月

「いえ……」

ヴィヴィオ
「ありませんが……」

はやて
「そっちは今までと違う組織が動いてるみたいでな。局員を何人か向かわせようかと思ってるんやけど……」

？？？
「その役目、自分達に任せてもらえないか？」

はやて
「え？」

さっとはやてたちの前に現れた。その人物は……

皐月・ヴ・雅也・メ
「優太さん！！？」

優太
「や、久しぶり」

はやて
「……高みの見物をするんじゃなかったんか？」

優太
「状況が変わってね。そんなこと言ってられなくなっちゃったのさ。それに奴らがすることもわかったから」

はやて
「ほ、ホンマか！？」

優太
「あぁ……」

なのは
「す、すごいね……」

フェイト
「こっちでやっと把握できたのに…」

優太
「ま、一番の情報通の絢がいるからね」

絢
「もう、照れるじゃないのお兄ちゃん♪」

優太
「……いきなり出てきて照れるんじゃない」

絢
「はーい♪」

優太
「ハァ……相変わらず聞く耳なしか……」

優太は軽くため息を吐くと、はやてに言った。

優太

「ま、ここでアドバイスを1つ。聖王教会には『竜の爪』が来る……間違いなくな」

はやて
「そ、それってどういう……」

優太
「おっと、俺はこれで失礼させてもらう。せいぜい頑張ってくれ」

優太はそう言って去った。

絢
「あ、お兄ちゃん！
それじゃあ、あたしも失礼しますっ！」

……

……

はやて
「『竜の爪』が……」

フェイト
「……」

なのは
「……」

銀時は頭をくしゃくしゃさせ、こう言った。

銀時
「爪だか垢だか知らねーが、そいつらが来たら片付けりゃいいんだけの話だろ？」

ティアナ
「聞いてなかったの、相手は強敵なのよ」

銀時
「だからって戦う前から諦めたらそれまでだろーが。戦ってみねーとわからねーこともあるしな」

はやて
「それはそーやけど…」

フェイト
「危険すぎるよ」

銀時
「だったら、このままでいいってわけじゃねーだろ？」

なのは
「それは……」

銀時
「ハイハイ、そんじゃ行くぞ」

……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？1

「……」

？？？２

「……」

？？？１

「管理局はどうした？」

？？？２

「聖王教会に行った。
予定どおり計画は実行する」

？？？１

「そうか……あとは」

？？？２

「奴らがあれをうまくやってくれさえすれば……」

？？？１

「野望は果たされる……」

？？？２

「フフ……我らに栄光あれ……！」

～～～～～～～～～～

～　恋姫・無双の世界　～

とある森の中、工作員と思われる人物が機械をいじっていた。

???

「それで、いいのか？」

???

「ああ、スイッチも入れたし任務完了だ」

???

「うし、じゃあ引き上げるとするか」

タッタッタッ……

……

これが世界の行く末を決めることになろうとは、このとき誰も気付いていなかった……

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

第２６話：聖王の秘宝・０１（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第27話：動きだす影

悲しい……

悲しい……

なぜ……？

好きなものは何でも手に入れた……

好きなことは何でもした……

なのに……

なのに……

なぜ悲しいのだろうか……

ああ……そうか……

あれがないから……

そう、“あれ”がないからこんなに悲しいんだ……

だったら……

なんとしても……

手に入れるまでだ……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

【ＸＶ機関】

フレイム
「……」

フレイムはため息をつきながらスイレーヌ・サンダナがいる部屋に入ってきた。

スイレーヌ
「どうしたの？　そんな浮かない顔しちゃって」

スイレーヌが声をかけると、フレイムは

フレイム
「奴が動け、ってよ」

スイレーヌ
「奴……あぁ、あの男ね」

フレイム
「しかも自分も行くってさ」

スイレーヌ
「相変わらず彼が考えてることって理解できないわね」

フレイムは「まったくだ」と軽く頷くと、部屋の片隅にいるサンダナを見た

フレイム

「……」

サンダナ
「……」

フレイム
「……よ、よぉ……元気か？」

サンダナ
「……これが元気に見える？」

サンダナの顔のあちこちに青いあざができている

サンダナ
「失敗したからってお仕置きされたんじゃ、身体が持たないわよ」

フレイム
「失敗したってより……」

スイレーヌ
「相手の歌に感動したって感じね」

サンダナ
「しょ、しょうがないでしょ！　あのカービィの歌がよかったんだから！」

フレイム／スイレーヌ
「「あれがっ！？」」

サンダナ
「な、何よ」

フレイムとスイレーヌはふと思い出した。
そういえばサンダナは歌には弱いのだ。しかもなぜかカービィのような音痴な歌にはかなり……

フレイム
「……今度もいるみたいだし、俺たちだけで行くか」

スイレーヌ
「そ、そうね……」

サンダナ
「だっ、だったらカービィの相手をしなきゃいいだけのことじゃない！」

フレイム
「ま、まぁそうだけど」

そして仕方なくサンダナもついてくることになった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

???
「能力者狩りはうまくいっているのか、リーフ」

リーフ

「はい、それはもちろん」

リーフと呼ばれた緑の髪の男は返事をする。

???

「『竜の爪』にロストロギアを奪われるなか、１つだけ優位なものがある。
それが何か分かるか？」

リーフ
「はい、それはすでに準備ができています。マーシャル様」

マーシャル
「では変えるとしようか……すべての世界を」

【恋姫・無双の世界】

……

そこは怪しい奴らが何かを仕掛けた場所

そこには『ＣＨＡＯＳ：ＨＥＡＤ』で手に入れた『ノアＩＩ』のような装置があった

その装置から黒い物体が現れる

それは、ハートレスだった

そしてそこには黒い小さな球体が出現した

――――――――――

黒い球が現れしとき

戦国の世は破滅にむかわんとす

それをとめようとする者

黒き神の怒りにふれ

裁きを受けるであろう

【“遥かなるいにしえの古文書”より】▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～～【ＢＬＥＡＣＨの世界】～～

一護とカービィは浦原商店にいた。

冬獅郎たちが報告に戻っている間、浦原に今までの出来事を説明していた。

浦原

「そうですか、他の所でもいろいろ起きてるんですか」

一護
「ああ……」

浦原
「それでこれが来たってことなんですねぇ」

一護は頭のうえに?マークを浮かべている。

一護
「これって…何だよ?」

「これですよ、こーれ」と言って浦原が見せたのは一通の手紙だった。

そこにはこう書かれていた

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

最近、他世界で特別な力を持った人物を狙った事件、『能力者狩り』が多発しています。
そこで、事件の早期解決のために下記の場所で話し合いを行います。
つきましては黒崎一護さんにもご参加願いたく手紙を送らせていただきました。
ご参加のほどよろしくお願い申し上げます

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

一護

「……で、俺にどうしろってゆーんだよ」

浦原
「もちろん、黒崎さんには参加していただきます」

ばさっと扇子を広げて言う

一護
「あいつらはまだ戻ってきそうにねーしな……」

カービィ
「ねーねー、僕も行っていい？」

一護
「ん……あ、ああ…あと誰も行ける奴なんて……」

そのとき

がらがら…

戸が開く音がしたかと思うと、今度は襖が開いた。

浦原
「おや……もう来たんですかぁ？」

そこで2人は目をぱちくりさせた

2人の目の前には死神が身に纏(まと)う死覇装(しはくしょう)に、左耳の方に一つに束ねられたピンクの髪でブルーの瞳の女性がいた。

浦原
「よくここが分かりましたね～。現世は初めてじゃないんですか？」
？？？
「日番谷隊長から場所は聞いてたので」
浦原
「そうですかぁー、それはそれは――」
一護
「浦原さん、この女は？」
浦原は「お、そうでしたね～」と言うと彼女に自己紹介するよう促した。
彼女はンン…と咳払いをすると自己紹介しはじめた。
「えっと……護延十三隊十番隊、“森井　桜”です。“桜”と呼んでください」
一護
「お、おう……よろしくな、桜」
桜
「こちらこそ…」
浦原
「彼女はまだ新人さんみたいなんでよろしくお願いしますよ～、黒崎さん」

一護
「新人って……」

新人をよこす奴があるか、と思っているとカービィが桜に声をかける

カービィ
「おねーさん、とってもきれいだねっ」

桜
「え、あ、ありがとう……」

顔を赤くして礼を言う桜

一護はそれを気にすることなく浦原に尋ねる

一護
「……で、どこに行けばいいんだ？」

浦原
「それでしたら……あ、ここになりますねぇ」

一護は浦原が指差した所を見ると、それを読んだ

『場所：学園都市第三学区』

一護
「ハァ……んじゃ、行くとするか」

カービィ

「ポヨッ！」

桜
「はい」

「お気を付けて」と言う浦原に見送られて出発する3人であった▼
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

マーシャル
「……【恋姫・無双の世界】はどうなった？」

リーフ
「すでに三割は制圧しましたが、あの将たちに仕える者たちが厄介でして……完全に制圧するとなればかなり時間が掛かるかと……」

マーシャル
「……次元断層は？」

リーフ
「あと一時間もしないうちに展開できますが」

マーシャル
「そうか……準備ができ次第、作戦を実行する」

リーフ
「はっ！」

マーシャル
「ついに……黒き神が手に入る……フフフ……ハハハハ！！」

～～～

リマ
「親族としてではなく…師匠の弟子として伺いました……シャア・ストワール師匠」

シャア・ストワール――管理局では『蒼き彗星』の異名を持つほどの大魔導師である人物“だった”

“だった”というのは、今は管理局を辞め、リマ・ナオ姉妹の父親――わが息子の仇と『竜の爪』の捜索の旅をしている。

リマ
「……しばらくの間、修行をお願いしたいのです」

シャア
「……」

ナオ
「今のあたしたちじゃ皆の役に立てない……だから……！」

シャア
「もっと強くなりたい……と」

リマとナオは頷く

シャア
「……教え子が強くなることは嬉しいが……」

リマ・ナオ
「？？」

シャア
「お前たちに守りたいものはあるか……」

リマ
「守りたい……」

ナオ
「もの……」

2人は考えた……

自分達が守りたいもの……

リマ
「それは……」

ナオ
「それは……」

それは……

リマ・ナオ
「「仲間であり……妹（姉）である……」」

シャア
「そうか……」

彼はそう言うと水竜の象ったハルバード（槍）型『水槍竜』を手にする

シャア
「それがあるならまた鍛えることにしよう……」

リマ・ナオ
「「お願いします！！」」

こうして姉妹は師匠のもとで修行をはじめた……

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

第２７話：動きだす影（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第２８話：聖王の秘宝・０２

――【聖王教会前】――

銀時
「ふぃ～～～着いたなぁ～～～」

メアリー
「着いたって言ってもここまでは転移してきたんですから疲れたような言い方の意味が分かりません」

銀時
「分かんなくて結構だ」

そう言いつつも苺牛乳を口にしている。
ていうか、いつのまにそんなもん持ってたのよ

銀時
「いつだっていーだろーがこのクソナレーター」

あっ、バカにしたなー！

銀時
「バカにして何が悪いってんだよ」

出番少なくするぞ？

銀時
「すんませんでしたぁぁぁ

！」

地面にむかって思いっきり土下座をする銀時

……わかればいーんだ、わかれば

ティアナ

「さっきから何やってるんですか……」

ハァ……とため息をため息を吐くティアナ。

なのは・フェイトは苦笑いし、メアリー・チンクはやれやれ…といった顔をしている。

一方、雅也たちはというと……

雅也

「……」

ヴィヴィオ

「……」

皐月

「……」

マーブル

「……」

４人はずっと終始無言だった。

ミニキュリア

「えっと……あの４人ってどうかしたの？」

なのはたちについてきたミニキュリアが小声で尋ねる

メアリー

「い……いろいろとあってだな……」

どこからどう説明したらいいのか迷っているメアリー。

たとえ話したところでこの問題が解決するわけではない

実際、メアリーも雅也たちとは話しづらいらしく雅也から少し距離をとっている

なのは

「え、えっと、それじゃあ部隊を二つに分けようと思うんだけど……」

フェイト

「今のままじゃちょっと……ね？」

今の状況で分隊したら敵に攻められたときに倒されるだろう

チンク

「だが、このままではマズイのではないか？」

ティアナ

「二手に分かれたほうがやりやすいんだけど……」

銀時

「ハァ～……わーったよ」

そう言うと銀時は雅也の服をがしっと掴むと肩に担いだ

ヴ・皐・メ・マ
「「「「んなッ！！！」」」」

雅也
「な、何を!?」

銀時
「テメェ等がいつまでも黙り(だんま)してるからこの銀さんが何とかしてやろーとしてんじゃねーか。んで、俺はどこにいきゃあいーんだ?」

なのは
「え、えーと……」

フェイト
「教会の外だけど……」

銀時
「教会の外か……うし、んじゃ行くぞ」

雅也を担いだまま銀時は移動をはじめた。

ヴィヴィオ
「あっ！」

皐月
「ちょっとぉ！」

メアリー
「勝手にマスターを連れていくなっ！」

マーブル
「待ちなさいよ！銀髪パーマのオッサン！」

銀時
「誰がオッサンだ、誰が！」

担がれた雅也を追うようにして銀時についていくヴィヴィオ・皐月・メアリー。

ミニキュリア
「え～と……あたしは……」

なのは
「教会には私とフェイトちゃんにティアナ――」

フェイト
「あと、アリシアさんにスバルとギンガで警備しようと思ってるから……あとのことはよろしくね」

あとのこと――4人…いや…5人のことだろう
それと銀時が暴走しないようにって意味もあるのだろう。フェイトが心配な顔をしている

そのことを理解しているチンクは「了解した」と言って彼らのあとを追った。

アリシア
「それじゃあ私も……」

フェイト
「うん……」

なのは
「スバルたちを待たせてるし……」

フェイト
「行こっか……」

なのはたちも教会の中に入っていった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～【聖王教会　近辺】～

真王竜
「ほぅ……管理局の奴らが教会に」

竜騎士
「いかがいたしますか？」

真王竜
「作戦は変えずに行う。竜兵たちにも伝えておいてくれ」

竜騎士
「はっ！」

タッタッタッ……

呪血竜
「よろしいのですか？」

真王竜
「管理局が出てくることくらい分かっていた。それに……」

呪血竜
「それに？」

真王竜
「……いや、なんでもない」

呪血竜
「は、はぁ……」

呪血竜は彼が何を躊躇（ためら）ったのか気になったが大したことではないような気がしたので、あえて聞かなかった。

真王竜
「準備ができしだい作戦を開始する。ただし、教会の者たちは殺してはならない。いいな？」

呪血竜
「はっ！」

～～～～～～～～～～～～～～

スバル

「……」

どうしてだろ……
なんでこうなってからでもこの子は狙われるんだろ……
せっかく安心できる場所が見つかったのに
なんで……

ギンガ
「……聞いてる？」

スバル
「えっ、あ、ごめん……」

ギンガ
「もう……スバルがしっかりしないといけないんだから」

スバル
「うん……そうだね……」

スバルは別途で寝ている少女――イクスヴェリアを見る。

その寝顔はいつもと変わらない……変わることはない……
だが、見ているだけで安心する
――あぁ、今日も元気なんだなぁ――って……

スバル
「ギン姉……ありがと」

スバルがそう言うとギンガは安心したのかにこりと頬笑むのだった。

「久しぶりだね、スバル」

不意に声が聞こえてきた。この声は……そう思いながら2人は振り返った

そしてスバルの口から出た言葉は……

スバル
「お……お久しぶりです、なのはさん！」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

雅也
「……」

皐月
「……」

ヴィヴィオ
「……」

銀時
「たくよー、いい加減に無言はやめろよな。こっちが困るんだからよ」

メアリー
「そう言われてもだな、こちらにも色々と事情が」

銀時は「ハァ～～～」とため息を吐くとマーブルの傍まで行った

銀時
「テメーはどうなんだ？」

マーブル
「どうって……何がよ？」

銀時
「テメーのせいでこんなことになってんだから何か言えってんだよ」

マーブル
「そ、それはさっき『あたしが雅也くんが好きだから』ってことで解決したでしょ」

銀時
「だったら態度で示そーじゃねぇか」

マーブル
「……あたしに相手をさせるっていうの？」

銀時
「それくらいできるだろ」

マーブル
「わかったわよ……やればいいんでしょ、やればッ！」

マーブルは銀時たちから離れていく

チンク
「……言い過ぎではないのか？」

銀時
「で……テメェらはどうすんだ？あいつを放っておくのか？」

皐月
「そ、それは……」

雅也
「……決まってるだろ」

ヴィヴィオ
「雅也くん？」

雅也
「あそこまで怒るってことはアイツは本気で俺のために……だから俺はアイツを……マーブルを信じる！」

そう言うとマーブルが行った方へ向かっていった。

メアリー
「それでこそ私のマスターだ！　だから私はマスターが好きなのだ！」

銀時
「オイオイ、そこまではっきりと……」

皐月
「私だって！　私だって雅也が好きよ……あんな感じだから……」

ヴィヴィオ

「私も雅也くんのこと、好きだよ」

銀時
「オイィィィ！！　1人につられて言ってんじゃねェェェェェェェェ！！」

チンク
「銀時、落ち着け」

「ったく……」と言いながら頭を掻く銀時。

銀時
「だったらさっさと行くぞ」

皐・メ・ヴ
「もちろん！／ああ！／そうだね！」

三人は元気よく返事したのだった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

真王竜
「……」

竜騎士
「真王竜様、準備ができました」

真王竜
「そうか……」

彼は何かを思い詰めているような表情をしていたが、それはすぐに消えた。

真王竜
「皆、今回の任務が成功すれば我々の目的達成におおいに近づく。心してかかれ」

竜騎士たち
「はっ！」

真王竜
「では、いくぞ！」

竜騎士たち
「うぉぉぉぉー！！」

～～～～～～～～～～～～～～

茜
「はじまったね……」

黒美
「優太様の推測どおり、敵の親玉も出てきたな」

茜
「言われたとおり残っててよかったね」

黒美
「……そうだな」

茜
「それじゃあ……」

黒美
「ああ……」
茜と黒美は銀時たちの所に向かったのだった。
to be continued ……

第２８話：聖王の秘宝・０２（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第２９話：黒き神・０１（前書き）

※久しぶりに投稿しました

第２９話：黒き神・０１

誰だ……我の眠りを妨げんとするものは……

誰だ……我を従わせようとするものは……

誰だ……誰だ……誰だ……

～～～～～～～～～～

リーフ
「マーシャル様、黒き神が動きだしました」

マーシャル
「そうか……で、奴らはどうした？」

リーフ
「ハートレスだけでは足りなかったのでロボット兵も投入したところ、六割強を制圧しました。今は蜀、魏、呉の君主らが集い対策を講じている模様です」

マーシャル
「そうか……ならもうそろそろいいだろ。奴らに気付かれないようにな」

リーフ
「では……どこに？」

マーシャル

「……『学園都市第三学区・常盤台』だ」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

【学園都市第三学区・常盤台】

カービィ
「ポヨ～……」

一護
「ここだよな？」

桜
「そう、みたいね」

三人は唖然としていた。

目の前に建っている建物は高級感が溢れていて自分達がいるのが間違っているのではないかと思うくらいだ。

一護
「学校なのにこんな造りでいいのかよ」

カービィ
「そんなこと言ってないで中に入ろうよ～」

カービィは一護の服をクイクイと引張る。

一護

「わかった、わかったから」

……

……

一護
「……で、中に入ったのはいいが」

桜
「場所が分からない……」

カービィ
「ポヨ？」

一護
「こんな時、誰か来てくれたらなぁ……」

「私が案内しよう」

カービィ
「ポヨ？」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこには……

カービィ
「あっ、メタナイト！」

メタナイト
「久しぶりだな、カービィ。元気そうで何よりだ」

カービィ
「何でメタナイトがここに?」

メタナイト
「ふむ、それはだな……」

メタナイトは道中でこれまでのこと（M&

メタナイト
「……それについては見れば分かる」

メタナイトはドアノブを握ると、ゆっくりとドアを開けた。

カービィ
「ポヨ～」

カービィは口をぽか～んと開けた。

一護
「ここ、ほんとに学校かよ……」

そこはパーティー会場のように広かった。

桜
「さすが、お嬢様学校……」

一護
「それで納得するのかよ」

カービィ
「する！！」

一護
「するなよっ！」

一護の言葉を気にすることもなくカービィは言った。

カービィ

「えっと、さっきの質問なんだけど……」

メタナイトは「ああ、そのことか」と言うと、

メタナイト
「“アレ”をどう見る」

カービィたちはメタナイトが指差した“アレ”に目を向ける。

一護・桜
「……」

カービィ
「??」

メタナイト
「もう一度聞こう。“アレ”を見てどう思う?」

一護・桜
「……困ってる理由がわかるぜ／わかりますね」

メタナイトはハァ……とため息を吐く。

指差した先にいたのは、テーブルの上の食物を大量に平らげているセイバーの姿だった。

カービィ
「……」

カービィは羨ましそうにそれを見ていた。よだれを垂らしながら。

そして……

カービィ

「僕も食べる～～～！」

と言うと、カービィも食べ物に食い付くそうと……いや、吸い尽くそうとテーブルに向かった。

一護・メタナイト

「……」

桜

「……いつもこんな感じなんですか？」

一護

「あ、ああ……」

「彼女と張り合える大食いはカービィぐらいでしょうね」

一護たちの背後にはドゥーエが立っていた。

メタナイト

「……ドゥーエか、ここにいるということは終わったみたいだな」

ドゥーエ

「ええ、それでちょっと話しておきたいことがあるの、いいかしら？」

メタナイト

「……」

メタナイトは無言で頷く。

ドゥーエ
「それじゃ――――」

彼女の話の内容はこうだ。

今回の催し物は、バベルと風紀委員が『能力者狩り』の犯人を見つけるため企画したもの。そのことを考慮した上で双方でこれからの対応などについて話し合ってたとき、

目の前が黒い靄が掛かったようになった……

1回だけではない。何度も、何度も……その現象は起きた……

不審に思ったドゥーエは双方にそのことを尋ねたが、何も見なかったと言う。

ドゥーエ
「……どう思いますか？」

メタナイト
「……今のところは何も言えないな。実際にそれを見たわけではないからな。だが……何かが起きるかもしれない」

ドゥーエ
「何か、ですか……」

メタナイト
「まぁ、起きないに越したことはないが」

ドゥーエ
「そうですね。それはそれとして……」

もぐもぐ……

ごっくん！

がつがつ……

ドゥーエ
「そろそろ二人を止めたほうがいいみたいね」

メタナイト
「そうだな」

二人は今にも会場の食べ物を食べ尽くす勢いを持ったままのカービィ・セイバーを止めに入ったのだった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

とある教室にて彼女――美琴ちゃんと呼んだ女の子――がいた。彼女の目の前にはサングラスに黒服を着た、『普通の人々』の組織の一員だと思われる人物がいる。

？？？

「……」

「ようやく来たか、ずいぶん遅かったじゃないか」

？？？
「色々と心の準備があってね……」
「かつての友に逢いに来たのにそんなものが必要なのかい？」
ちゃき……
黒服の男の首にナイフを向ける
？？？
「……貴様に言われる筋合いはない」
「おー怖い怖い……でも、仕事はちゃんとやってもらいますからね、『怪盗ミナ』こと“御月（みつき）美菜（みな）”さん」
美菜
「ッ……」
美菜と呼ばれた女性は唇を強く噛み締めると、ナイフを下ろした。
「盗みの他に暗殺も請け負うっていうからな。こっちとしてはかなり期待してるんだからな」
美菜
「……わかっている」
「それじゃ、あとは頼んだぞ」
美菜

「貴様は……どうするつもりだ？」

「バベルの奴らに捕まりたくないからな、さっさと逃げるのさ」

美菜
「そう……それは残念だったわね」

「何……？」

ざっ！

突如二人を囲むようにして現れたのは、“風紀委員”の腕章を付けた人たち

「なっ……」

美菜
「その名前――怪盗ミナ――とか噂はあたしが流したウソ。それにそんな残酷なことはしない主義なの。
こんなことでひっかかるなんて、『普通の人々』も大したことないわね」

「くそっ！」

黒服の男はサバイバルナイフを取り出すと美菜に向かっていった、が……

美菜
「ハアッ！」

「！！！」

まさに一瞬の出来事

サバイバルナイフを持つ手を掴み男をそのまま地面に押しつけた

美菜

「これでも体術は学んでたの。ご愁傷さま♪（ニコッ）」

「くっ……！」

その後、男の身柄は風紀委員に引き渡された。

美菜

「それじゃ早速会いに行こうかな……」

～～～～～～～～～～

パーティ会場では招待された皆が楽しいときを過ごしていた。裏で起きていることを知らずに。

だが、ここに1人だけそのことに感づいている者がいた。

彼女の――美菜の友が

美琴

「……」

黒子

「……お姉様、どうかしまして？」

美琴
「え……」

黒子
「何か難しい顔をしていましたの」

美琴
「……あのね…いま誰かに呼ばれた気がするのよ」

黒子
「……誰にですの？」

美琴
「それが分かんないから考えてたのっ！」

黒子
「そうでしたの……それで、その相手は誰ですの？」

美琴
「……アンタねぇ…」

汝ら……なぜ我を求める……

美琴
「えっ……」

黒子
「お姉様……？」

――美琴（あたし）には聞こえてる……なのに黒子には聞こえない――なぜ……？――

汝らは……我の眠りを妨げた……

それは万死に値する……

よって……

我は汝らを討つ！

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

リーフ
「マーシャル様、黒き神が『学園都市』に！」

マーシャル
「そうか……予定通りに行うぞ……。
ハートレス、ホロウ、ドーター、ロボット兵、ＸＶ機関幹部を総動員させろ！何としてでも黒き神を我々のものにするぞ！！」

リーフ
「はっ！」

～～学園都市・上空～～～

「ねーねー、もうそろそろ入ろーよ」

「もう少しお待ちください。あなたを危険な目にあわせるわけにはいきませんので……」

「ブーブー、待てないよー」

「もう少し……もう少しだけ……お待ちください」

「ブー……」

（ハァ……あの方も人が悪い。私一人に任せっきりにするなんて……）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

とある場所……そこには三国志の格好をした女たちが立っていた。

「これはどういうことだ？」

黒髪の女――関羽が言う。

「鈴々にも分からないのだ」

虎の髪飾りをつけた少女――張飛が言う。

「うむ……どうやらここは我らの居た場所（ところ）とは違うみたいだな」

青髪の女性――趙雲が言う。

「そ、それってどういう……」

桃色の髪の女性――劉備が言う。

ざっ……

「……どうやら、先にやるべきことがあるみたいだな」

「……だな」

関羽と趙雲は手にしている武器をぎゅっと握る。

戦闘員１

「よくここまで」

彼女たちの目の前にはＸＶ機関の戦闘員がたくさんいる。

戦闘員１

「あちらさんが本気なら……そろそろいくか」

戦闘員２

「そうだな……ハートレスだけじゃ限りがあるからな」

戦闘員たちの後ろから巨人が出てきた。

両腕が堅いアームで覆われていて、ちょっとやそっとじゃ倒れなさそうだ。

戦闘員１

「魔獣・“アーマード”…こいつで貴様ら『蜀』を叩き潰す！」

関羽

「やれるものなら、な……」

ＸＶ機関が彼女たちと戦う、それが“彼”の、マーシャルの計画の１つであるということを『彼』は知っているのだろうか……

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……【あとがきコーナー・スタジオ】

雅也
「なあ…今気づいたんだけどさ、この話って物語の山場になってたりするのか？」

メアリー
「台本だとそうなっています」

皐月
「えっ、てことはどっちかの勢力が……ってことになっちゃったりするの？」

マーブル
「あり得る話ね」

ヴィヴィオ
「それじゃあ今後の話はどうなるの？」

メアリー
「だいたいの展開は決まっているみたいだが、ストーリー展開が激しくなりそうだとのことだ」

ヴィヴィオ
「そうなんだ」

皐月
「ま、作者のが駄文だったとしても応援してあげてね」

雅也
「お前が言うなよな……」

メアリー
「ではまた次回！」

M&

M&

メタナイトは懐から本を取出しパラパラとめくりはじめた。

ドゥーエ
「？　それは？」

メタナイト
「ん？　あぁ……これは青い死神――秋本優太からもらったものだ。他世界のことが色々書かれている」

ドゥーエは何故その本をもらったのかが気になっているようだ。眼がそのことを物語っていた。

メタナイト
「今まで1人で旅をしていたせいで移動した世界のことを調べる癖がついてしまったらしい」

ドゥーエ
「はぁ……」

説明を聞いたドゥーエはただ頷くだけだった。

ドゥーエ
「それで、何かわかりましたか？」

メタナイト
「それがこの世界には超能力が使える人々が大勢いるらしい」

ドゥーエ
「」

キャアアア！！

メタナイト・ドゥーエ
「ッ！！？」

２人の身体が悲鳴が聞こえたほうに反射的に動いた。

ドゥーエ
「今の悲鳴は……」

メタナイト
「……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～～～　路地裏　～～～

「な、何する……キャッ！」

女性が男に路地裏まで連れ込まれたかと思うと、男は彼女を突き飛ばした。

「うるせぇ！　ごちゃごちゃ言ってないで例のブツ、さっさとよこせ！」

「なんのことですか？」

「しらばっくれる気か？」

男はナイフを取り出した。

「ひっ……！」

「これでもブツは出さないってのか？」

「だ、だから、私は知らないんです、無関係なんです！」

「まだ言うか。　だったら……」

男が女性との距離を縮めていく。

「あ……あ、あ……」

彼女は足が金縛りにあったかのように動かなかった。

逃げようと必死に足を動かそうとする。

男はナイフをぎゅっと握り締め彼女の目前に立った。

「――――ッ」

彼女は目を瞑った。自分の死を覚悟して……

……

……

だが、いくら経っても何も起こらない。

「……？」

彼女は、おそるおそる目を開けた。

目の前にはメタナイトとドゥーエが立っていた。

メタナイトがギャラクシアで男のナイフを押していた。

「あん？　なんだてめぇら？」

メタナイト

「貴様こそ、なぜこんなことをしている？」

ドゥーエ

「こんなこと言える立場じゃないけどあなた、サイテーね」

「うるせぇ！　こいつがブツを持ってきてるはずなんだよ」

メタナイト

「ブツ？」

メタナイトは振り返り彼女に目線を向けた。

彼女はそれに気付いたようで首をブンブンと横に振った。

メタナイト
「……だそうだが？」

「嘘つくなッ！」

「嘘じゃないわよ。ここに来たのは初めてなの！」

ドゥーエ
「……」

メタナイト
「とりあえず、ここは退いてもらえないか？　そんなに焦っているのだったら人違いということも」

「ちっ……」

男はナイフを了うなりその場から立ち去った。

ドゥーエ
「大丈夫でしたか？」

「は、はい、ありがとうございます」

ドゥーエ
「一体何があったんですか？」

「それが……」

？？？

「そこまでだ！」

振り返ってみると、そこには警察の人たちがメタナイトたちを囲むようにして立っていた。

警察官
「おまえたち、ここで何をしている？」

一番偉そうな警察官が訊ねてきた。

メタナイト
「襲われそうになっていた女性がいたので助けたが」

警察官
「ほぅ……」

ドゥーエ
「……何か不満でも？」

警察官
「いや、なんでもない」

メタナイト
「……」

その後、また狙われるかもしれないということで女性は警察の人に送ってもらったのであった。

メタナイト
「……」

ドゥーエ
「……」

？？？
「あ、やっと見つけました。お二人とも早すぎますよ」

ドゥーエ
「……あなたが行く先々のお店で食べているんじゃないですか、セイバー」

セイバー
「主がいない今、姿を消すことができず維持するためには食べなければいけないのですから、仕方ないのです」

ドゥーエ
「それはそうかもしれませんが、そのおかげで財布の中は……」

からっぽ…

セイバー
「ですからこうして最低限の魔力消費にしているのです」

メタナイト
「……」

ドゥーエ
「はぁ……それはそうと、さっきのは何だったんでしょうね」

メタナイト
「……」

ドゥーエ
「調べてみますか？」

メタナイト
「……頼んでもいいか？」

ドゥーエ
「もちろん」

ドゥーエは人込みの中に消えていった。

メタナイト
「そろそろ…宿屋でも探さないとな」

セイバー
「あむあむ……」

メタナイト
「……できれば食べるのはそこまでにしておいてもらえないか？
宿代がなくなってしまうのは困る」

セイバー
「あむ……わかりました」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？

「……感付かれてはいないな」

？？？
「もちろん……いまは、バベルと風紀委員（ジャッジメント）が合同捜査することになったみたいだからな」
？？？
「屍兵では少し頼りないからな、こちらの世界の極稀なレアメタルを手に入れ、それを応用させた力を手に入れる――それが今回の目的だ」
？？？
「『竜の爪』や『ＸＶ機関』はどうするおつもりで？」
？？？
「今は『戦場のヴァルキュリア』の世界や、『ＮＥＥＤＬＥＳＳ』の世界で活動しているはずだから心配はいらない」
？？？
「では、そろそろ……」
？？？
「ああ……任せた」
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
～～～　宿屋　～～～
メタナイト
「……」

セイバー
「遅いですね」

ガチャ…

ドアが開き、ドゥーエが入ってきた。

メタナイト
「……それで？」

ドゥーエ
「最近、極稀なレアメタルが盗まれているみたいで……犯行や犯人像が見えず、警察も手を焼いているとか」

メタナイト
「ふむ……」

セイバー
「それでしたら超能力者（エスパー）がいるのですから簡単に調べられるのではないのですか？」

ドゥーエ
「それが、透（よ）視んでも痕跡が見つからないみたいです」

メタナイト
「……次に狙われそうなところは？」

ドゥーエはニヤッと笑い、

ドゥーエ

「……それはすでに調査済みです」

と言った。

セイバー
「さすが潜入等をしていただけのことはありますね」

ドゥーエ
「……ッ……む、昔の話です…」

メタナイト
「……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「……」

がさがさ……

「……」

キョロキョロ……

ニヤリ……

がたん！

「そこまでだ！」

「ッ！？」

「あたしたち、特務エスパーがいるかぎり！」

「ここで悪さは！」

「できないわよ！」

バベルの特務エスパーの薫、葵、紫穂がいた。

？？？

「ちぃ……！」

だっ……！

何者かは逃げ出した。

葵

「あ、ちょい待ち！」

紫穂

「薫ちゃん！」

薫

「おう！　サイキック……」

がんっ！

「おごおっ！！？」

薫

「超（スーパー）かかとおとしーっ！！！」

バタッ！

薫

「こんな相手、ちょろいちょろいっ！」

……

……

……

「バ、バベルが見張っていたなんて……」

？？？

「聞いていない、と？」

「なっ！？」

そこには、風紀委員（ジャッジメント）の“白井　黒子”がいた。

黒子

「風紀委員（ジャッジメント）ですの」

「ちぃ！」

バチッ！

「うおっ！？」

？？？

「まったく、こんなのに能力使うなんてね」

「とっ、常盤台の超電磁砲（レールガン）！」

そこに立っていたのは、『超電磁砲（レールガン）』の名を持つ“御坂　美琴”だった。

美琴

「おとなしく捕まったほうがいいわよ」

バチバチッ、と電撃を放っていた。

「う……くっ……！」

……

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

薫

「みーなーもーとーッ！！」

薫は“皆本　光一”に飛び付いた。

皆本
「こらこら、まだ仕事は終わってないんだぞ」

薫
「ここまで来たら終わったよーなもんじゃん」

葵
「あとは警察（あっち）のほうでやってくれるて」

紫穂
「そうね、むしろ皆本さんもうれしいって思ってるんでしょ？」

皆本
「そ、それは……！」

薫
「おやー、赤くなっちゃってー」

皆本
「お、大人をからかうなッ！」

黒子
「お疲れさまでした」

皆本
「お疲れさま、おかげで無事解決することができたよ」

黒子
「わたくしより、お姉様に言ってくださいまし」

美琴
「そんな、たいしたことしてないわよ」
……
……
……
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
???
「……」
???
「なぜだ……なぜ奴らが感付いたんだ?」
???
「それが…こちらの情報が漏れていたようで……」
???
「何…ッ!?」
???
「どこから漏れたのかはわかっていません」
???
「一体、誰の仕業だ?」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

メタナイト
「……」

セイバー
「これでよかったのでしょうか？」

ドゥーエ
「何か腑に落ちないことでも？」

セイバー
「自分達が情報提供をした結果、今回の犯人は捕まりました。ですが、本当にこれでよかったのでしょうか？」

ドゥーエ
「自分達ができることにも限界があるのですから。これがよかったんです」

セイバー
「ですが……」

ドゥーエ
「それに、これでしばらくの間、生活面で困りません」

セイバー
「それなら全然かまいませんね」

ドゥーエ

「……」

メタナイト
「……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

薫
「えっ、それホント？」

皆本
「今回の件で、上が各地で起きている事件の調査も兼ねて、彼らと行動をともにするようにとのことだ」

葵
「それじゃあ、学校は？」

皆本
「それなら『影チル』がやってくれるから問題ない」

紫穂
「へぇ～……そうの」

薫
「よっしゃー！　頑張るぞーッ！！」

こうして、皆本たちはメタナイトと一緒に行動することになったのである。

ｇｏ　ｔｏ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ　……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

～～～　おまけ　～～～

黒子
「これで終わりですの？
何か物足りない気が……、そうですわ……お姉様のあつーい肌と肌との触れ合いがありませんの。せめてここでそれをやらせて……
ふぎゃッ！？」

美琴
「やらなくていいッ！！」

M&

M&Dサイド02：能力者狩り（前書き）

※メタナイト・ドゥーエ側のお話です。

M&

「「……」」

セイバー
「あむあむ……それで、自分達は何をすれば？」

皆本
「あぁ、そうだったね」

軽く咳払いをしたあと、皆本は今までとは違う真剣な表情になった。

皆本
「現在、各地で特殊な力を持った人々が次々と襲われるという事件が起きてるんだ」

ドゥーエ
「『能力者狩り』、ですね？」

皆本
「……そこまで知ってるんですか」

ドゥーエ
「えぇ、それでしたらいくつか」

能力者狩り――薫や美琴をはじめとする超能力者（エスパー）、アダム・ブレイドなどが持っている能力の人たち（フラグメント）―ニードレスなど、特別な力を持つ人たちが無差別に襲われるという事件が色々な世界で多発している。

ドゥーエ
「被害件数は１０００以上だとか……」

皆本
「……被害が拡大していて、なおかつ原因がわからないから、合同捜査が行われることになったんだ。だが……」

メタナイト
「例のレアメタルの事件が起きた……」

皆本は頷く。

皆本
「自分はレアメタル強奪事件と能力者狩りはつながっていると見てるんです」

メタナイト
「と、言うと？」

皆本
「管理局で追っている2つの組織の他に動いている組織があるんです」

ドゥーエ
「では、『竜の爪』や『ＸＶ機関』以外の、その組織が今回の事件を引き起こしたと？」

皆本
「自分はそう思ってます。
その調査もするため、あなた方に同行し……」

メタナイト

「原因を追求する、というわけか……」

皆本
「葵のテレポートがありますが、行ける範囲が限られています」

ドゥーエ
「テレポートだけでは他の世界には行けませんからね」

メタナイト
「だが、行くといっても行き先は決まっているのか？」

皆本
「えぇ、風紀委員の人たちの協力で、『学園都市』で各世界の学生を集めて催し物をしてもらうことになっています」

メタナイト
「なるほど……」

ドゥーエ
「ではまずはそこ（学園都市）に行くということで」

皆本
「よろしくお願いします」

セイバー
「こちらこそ、よろしくお願いしますね」

――――――――――

？？？1

「奴らに感付かれたか…」

？？？２

「だが何もできまい」

？？？３

「我々、『普通の人々』がいるかぎり手も足も出まい」

？？？４

「これから先が見物だな」

――――――――――――▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

美琴

「……」

黒子

「お姉様、どうかされまして？」

美琴

「うん、ちょっとね」

御坂は１枚の写真を見る。

そこに映っていたのは２人の少女の姿だった。

美琴

（あの子、今はどうしてるのかな……）

――――――――――――

？？？

「……」

夜の街……誰もが近寄らない場所に1人の少女がいた。
髪の色は美琴と同じで、セミロングにしている髪に月の光があたって輝いている。

？？？

「美琴ちゃん……今、やっと約束を果たしに行くよ……」

彼女は夜の街へと消えていった……

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

第３０話：理解、そして介入

――聖王教会・周辺――

マーブル
「……」

なんで……いつもこんな感じになっちゃうのかな……

大切なことはいつも最初っから伝えなきゃいけないのに……そう思ってるのに伝えられなかった

そのせいで機関にいたときだって仲間と解りあえなかった……

だけど、今は……

雅也
「解りあえるさ……」

そう……彼が、雅也くんだけが、あたしのことを……

「マスターだけが解ってるなんて思わないでください」

「アンタが信じるなら私だって信じるんだからね」

「そうだよ、だって雅也くんが信じた人だから」

メアリー、皐月、ヴィヴィオが思い思いに言う。

……

ツゥー……

「あたし、あたし……！」

マーブルはようやくできたのだ、解りあえる友を……

銀時

「うーし、話がまとまったところでさっさと戻るぞ」

「「「「はいっ！！」」」」

4人の意思も固まった、まさにそのときだった。銀時の横で浮いていたミニキュリアが顔を歪めた。

ミニキュリア

「おい、あれって……何だ？」

あれ――そう言われて銀時たちが目線を向けた先にいたのは、竜の大群だった。先頭には仮面をかけた者――真王竜がいる。

雅也

「竜が……あんなにたくさん……」

メアリー

「！？　マスター、あの竜はミレイザさんからの報告のものと一致します！」

雅也

「ええっ！？」

ヴィヴィオ
「それじゃ、あの竜が……」

皐月
「竜の、爪……」

銀時
「ふーん……」

雅也
「メアリー、なのはさんたちには……」

メアリー
「さすがにあれだけの数だと分かりますよ。それに、強力な魔力も感じられますからそれでも気づかれるはず……！」

雅也
「そ、そっか……」

そこで雅也はホッとため息を漏らした

皐月
「何安心してるのよ、早く戻らないと……」

ザンッ！

一同
「「「「「「ッ！！？」」」」」」

雅也たちのに前に弓矢を持った竜が降りてきた。そして……

ヒュンヒュンヒュン！

彼ら目掛けて矢を放った。しかし……

ガガガガガキィィィィン！

それはすべて払い落とされた……

茜と黒美によって……

茜

「矢で近距離から攻撃っていうのは良くないよぉ」

ヴィヴィオ

「茜さん！！　黒美さん！！」

皐月

「どうしてここに……？」

黒美

「それは竜兵（こいつら）を倒してからにさせていただけると嬉しいのですが」

いつの間にか竜兵の大群が目の前にいた

竜兵１

「おい、さっさとやるぞ」

竜兵2
「ま、まて、あの赤と黒の奴は……」

竜兵3
「青い死神の仲間だぞ！」

ざわざわ……

あの青い死神の仲間か……

てことは相当強いんじゃ……

どうする……

黒美
「……私たちのことを知っているとは光栄ですね……ですが、あなた方じゃ私の相手になりませんね」

竜兵1
「な、何をー！　うりゃあ！！」

竜兵が黒美に剣を振り下ろす。だが黒美は素早くかわした

黒美
「……」

黒美は己の剣に手をかけ、体をわずかに揺れた。

ヒュン！

ザンッ！

竜兵１
「ガハァ！！」

黒美
「やる気だけはあるようですが、それだけでは私には勝てませんよ」

一同
「「「「「「……えっ？」」」」」」

まさに一瞬の出来事だった。黒美の体が揺れたかと思ったら、竜兵を斬っていたのだ。

黒美
「これぞ、優太様から教わった剣技の１つ……“瞬足斬（しゅんそくざん）”……」

雅也
「瞬足、斬……」

茜
「“瞬歩”の最中で相手を斬る技でね、目にも止まらぬ早さで斬っちゃうの」

竜兵たち
「「「……」」」

黒美
「私と戦いたい者は前へ、そうでないのなら立ち去りなさい」

竜兵たちの顔色が変わった。黒美の強さは今のを見ても明らかだ。
それを知っていてわざわざ死にに来る者はいないだろう

茜
「ちなみにあたしも瞬足斬使えるよ～」

茜の言葉にさらに竜兵たちの顔色が変わった。

黒美
「……来ないのならそれでもいい……」

「いいわけないですよ……」

竜兵2
「こ、光翔竜様……」

光翔竜
「せっかく『竜弓兵』で仕掛けたのに……」

黒美
「それは残念でしたね……竜の爪の幹部さん」

茜
「あらら、幹部の登場なんて、キツくない？」

黒美
「キツい？　そんなことないわよ。むしろ昔の自分を思い出して興奮してるわ」

茜

「昔って、まだそんな懐かしむくらいの時間は経ってないはずだけど……」

光翔竜
「……ンンッ！　そろそろ話を進めてもいいですか？貴女方の話に付き合ってる暇はないので」

黒美・茜
「「……ふーん…そう言うんだったら……」」

さっ……

ザシュザシュザシュ！！

黒美・茜
「「こうしちゃえばいいな（ね）」」

2人は光翔竜と竜弓兵以外の竜兵をすべて斬り倒した

光翔竜
「これはこれは……さすが“青い死神”に仕える者……お強いですね」

竜弓兵
「光翔竜様、いかがいたしますか？」

光翔竜
「そうですねぇ……本来の目的とは違うのでそろそろ退散します。
もとより最初の攻撃が通じなかった時点でこちらはかなり不利になりましたからね、こちらの力が万全の時に相手にします」

竜弓兵
「では……」

竜弓兵は一本の白矢を取り出して射た

ボンッ！

その白矢はたちまち白い煙をモクモクと出してきた

茜
「何これー！　ゲホッ……ゲホッ……」

黒美
「え、煙幕か……ゴホッ……ゴホッ……」

光翔竜
「ではまた、次の機会にお会いしましょう……」

光翔竜と竜弓兵は白い煙の中に消え、煙が晴れたときにはすでに消えたあとだった。

黒美
「くっ……逃がしたか」

茜
「てゆーか、まだ戦ってもないのに逃げたりするのかなー？」

黒美
「それはどういう……」

茜
「もう、それくらい考えられるはずだよぉ」

黒美
「……奴等の目的が果たされた……」

茜
「かもしれないね」

……

ゴチィン！

黒美
「痛っ？！」

茜
「ひゃう？！」

いきなり2人の頭に激痛が走る。

黒美
「いったい何を……」

銀時
「『いったい何を』、じゃねーだろ！　いきなり出てきたかと思えば戦闘始めやがって。しかも敵のお偉いさんまで相手にしちゃって。『いったい何を』って聞きたいのはこっちの方だってーのっ！」

黒美
「うっ……そ、それはそうですね」

茜
「実はね……」

2人は優太に言われて聖王教会に来たことを話した。

銀時
「なるほど……で、アンタらはここにいても大丈夫なわけ？　助けが必要なのは“なのはたち（あっち）”の方だと思うんだけど？」

黒美
「あちらのほうへの助けは不要だと優太様に言われたので」

ヴィヴィオ
「で、でも！　ママたちのほうが大変なんじゃ……」

茜
「だからだよ」

ヴィヴィオ
「えっ……」

茜
「雅也くんや皐月ちゃん、メアリーちゃん、ヴィヴィオちゃん……あと、マーブルちゃん…だっけ？　皆の方が彼らとの戦闘経験も儘ならないからって……」

黒美

「優太様のご配慮です」

雅也
「ご配慮って……」

黒美
「それに、助けに来たのは自分達だけではありません」

ヴィヴィオ
「え？」

皐月
「どういうことよ？」

茜
「それはね……」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

――　聖王教会前　――

ガキィン！

教会では竜騎士・竜兵らがなのは・スバル・ティアナ・ギンガと、フェイトは白天竜と、アリシアは竜剣兵と交戦している。

竜騎士
「怯むなーっ！相手は強者とはいえ四人だけだ。徹底的に攻撃するんだー！」

竜兵たち
「おぉー！！！！」

圧倒的な敵の数に押されるなのはたち。

フェイト
「くっ……！」

白天竜
「仲間のところに行かなくてもいいんですか？」

ガキィン！

フェイト
「この状況じゃ……ね……」

助けに行こうにも今は目の前の敵で手一杯である。

アリシア
「ハアッ！」

竜剣兵
「……」

さっ……

アリシアの攻撃をひたすらかわす竜剣兵

アリシア
「はぁ……はぁ……」

竜剣兵
「……」

アリシア
（こいつ……攻撃しないでただかわしてるだけ……何なの？）

そして、なのはたちにも少し疲れが見え始めた。

なのは
「さすがにこれはちょっと多すぎだね……」

ギンガ
「そう……ですね……」

スバル
「でも、この先にはイクスが……」

ティアナ
「だからこうやって頑張ってるんじゃないの」

しかし、『竜の爪』側にはまだ主力メンバーが残っている。このままだと間違いなく通ってしまう

～～～～～～～～～～～～

真王竜
「そうか……あと少しか」

呪血竜
「はい、相手の戦力はそろそろ落ちるものかと……」

竜兵
「た、大変です！」

呪血竜
「どうかしましたか？」

竜兵
「そ、それが……」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

竜兵１
「ぐはっ！」

バタッ

竜騎士１
「なん……だと……」

バタッ

フェイト
「え……」

スゥゥゥ……

竜兵たち
「ギャアァァァ！！」

ザシュ！

竜騎士２
「き、貴様らは……」

「奴に頼まれてきてみればこの有り様か……」

「あたしたちを退けた人たちがこんなんじゃねー」

「二人とも、それはなのはさんたちに失礼ですよ」

突如介入してきた三人……

なのは
「えーと……」

ギンガ
「……」

スバル
「ティア、あの三人って……」

ティアナ
「うっさい、少し黙ってて」

アリシア以外はその三人に見覚えがあった。

アリシア
「貴殿方はいったい……」

アリシアがそう尋ねると三人はこう答えた……

「俺はクロ・アスタリスク……」

「あたしはマイ・アスタリスク」

「ラミレ・ラヴレスです」

クロ
「奴……青い死神の頼みで加勢する」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

第３１話：それぞれの戦いの果てに……（前書き）

※久しぶりの投稿です！

第３１話：それぞれの戦いの果てに……

竜兵１
「お、おい、今あいつら何て言った？」

竜兵２
「たしか、クロって言ってたよな……」

竜兵３
「おいおい、クロっていったら、前の大戦で『ネオ・ダークミラー』にいた奴じゃ……」

竜兵４
「そいつらが何でここに……」

クロ
「……」

ギロリ……！

竜兵たち
「ッ！！！」

クロは鋭い目付きで睨み付けた。どうやらご機嫌斜めのようだ。

クロ
「……こっちは休日を潰されて怒ってるんだ、それ以上言ったら…」

ザン！

クロ
「こいつで斬るからな……」

―もう斬ってるだろっ！―と周りの竜兵たちは思ったがあえて言わなかった。言ったら自分が斬られると感じたからである。

マイ
「まあまあ、さっきクロも言ってたじゃない。あたしたちは彼に頼まれたからきたんだって。なのに何でそんなに怒ってるのかなー？」

マイは自分が造ったマーク・マイ式改（マーク：“ヘビーロブスター・マーク2”のことである。詳細は『世界大戦争』の第６４話で）に竜兵をスポスポ吸い込みながら言った。

クロ
「そ、それは……」

マイ
「そ・れ・にっ！こっちはこれだけじゃ足りないくらい助けてもらったんだから文句言わないの」

クロ
「うぅ……」

ラミレ
「クロ、ここはマイの言う通り大人しく手助けしたほうがいいですよ」

ラミレに言われてようやくクロは大人しく（？）なった。

なのは
「あ、あの～……」

フェイト
「味方……ですよね？」

クロ
「……ああ」

ラミレ
「間違いなく味方です。それに、私たちにはもう貴女方と敵対する理由はありませんし」

なのは
「そ、そうなんだ」

白天竜
「……それで、話は済みましたか？」

クロ
「ああ、とっくに済んだよ。だから……」

シュン！

クロ
「俺の相手になれ」

クロは一瞬にして白天竜との距離を縮めた。それは白天竜を攻撃範

囲内にとらえたことを意味している。

白天竜
「なっ……！？」

激しい爆音が鳴り響いた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

真王竜
「ほぅ……やつらが」

竜騎士
「はっ、はいっ」

呪血竜
「いかがいたしますか？」

真王竜
「……（これだったら狙うのは無理か……なら撤退させるしかないな）」

と真王竜が考えていたとき……

ごごごご！！

地が揺れはじめたのである……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

マーシャル
「ふっふっふ……ついにきた……こいつを使って現実にする！」

マーシャルはある機械を動かした。

『……メインプログラム、起動』

マーシャル
「いくぞ……」

ごごごご！！

『ノア3内蔵、スペクター・2、始動……』

【学園都市】

一護
「お、おい……」

カービィ
「なに、あれ？」

桜
「ただ事ではないですね」

ハートレス、ホロウ、ドーターを相手にしていた一護らが穴の空いた壁から外を見ると、空は黒い煙に包まれていた。

そこに、スペクター2に乗ったマーシャルが現れた。

マーシャル
「ついにこのときがきたのだ……」

「「「ッ！？」」」

マーシャル
「『過去』と『現在』、それぞれの世界を無理矢理つなげれば現れると思ったが、予想通りだな」

そう、『ノア2のデータを手に入れた』のも、『恋姫世界をつなげた』のも、すべては黒き神の力を手にいれるためだったのだ。

マーシャルはスペクター2の装備品の大鎌を煙に向かって降り下ろした。

すると、煙はたちまち消えてしまった。が、今度はスペクター2のボディが黒く染まった。

マーシャル
「さて、と……『すべての世界がつながった』今、手始めにお前たちにしようか……」

マーシャルは一護たちの方を見る。

マーシャル
「黒き神……『ブラック・ゴッド』の力を手にしたスペクター2の恐ろしさを！！」

ザンッ！

ガシャーン！

一護たちのいた建物は、跡形もなく消え去った。たった1回大鎌を振っただけで……

一護
「なっ……！」

桜
「なんてことを……」

カービィ
「食べ物がぁ……」

一護
「んなこと心配してる場合かっ！」

???1
「おやおや、大変なことになってるねー」

???2
「……、黒き神の正体って？」

???3
「黒き神は……『ダーク・デス・マスター』といいます」

???1
「ダーク・デス・マスター、ねぇ……ま、いつもみたいにやるか」

一護
「あ、アンタは……」

カービィ
「優太だー！」

そう……彼らの前に現れたのは、優太・綾華・光の三人だった。

優太
「いやいや、遅れてすまなかったねー。全世界が繋がった今、こいつは脅威だからさっさと倒させてもらう……綾華、光」

綾華
「いつでもいいよ」

光
「全力でいくよ…」

優太
「んじゃあ、俺は軽くいくか……紅（くれない）」

優太は紅をスペクター2に向けて一振りした。

ピキッ…

マーシャル
「なに……っ！！？」

優太

「所詮、闇の力を取り込んだだけの……」

ピキッ！！

優太
「ポンコツだろ？」

優太がそう言った瞬間、スペクター2は真っ二つになった。

マーシャル
「ば……バカな……！」

光
「ターゲット……ダーク・デス・マスター……暁（あかつき）、ホーリーショット」

暁
『ホーリーショット、発射』

暁から放たれた光り輝く魔法弾はダーク・デス・マスターに命中するとたちまち消滅した。

マーシャル
「う……うそだ……うそだぁーーー！！！！」

綾華
「残念ね……元・ネオダークミラー幹部のマーシャルさん？」

マーシャル
「なっ……なぜそれを……」

優太
「俺がアンタの……仕留め損ねた相手の顔を忘れるとでも思ったか？」

マーシャル
「くっ……」

マーシャルは大鎌を手にし、身構えた。

優太
「だが……テメェみてーな“雑魚”なんかじゃ俺の相手にならないってことを改めて実感したよ」

マーシャル
「な、なぜだ!?こっちは貴様よりも…」

優太
「強いってか？　んなわけねーだろ、闇の力とかスペクターとかに頼ってるテメェにはな。だから俺は手を出さない……テメェにとどめをさすのは……」

綾華
「私よ……」

マーシャル
「女ねぇ……俺が女にやられるわけ……」

マーシャルは大鎌を振り上げた。

マーシャル
「ねーだろーがぁーーー！！！！」

綾華
「バカな人ね……破刃……白百合……」

ザンッ！

綾華は素早くマーシャルの懐に飛び込み、白百合を横凪ぎした。

マーシャル
「ぐはぁ……！」

マーシャルはその場に倒れた。

綾華
「ふぅ……意外とあっさりだったわね」

優太
「まったくだ」

光
「うん……」

三人
「「「……」」」

絢
「おにーちゃーん！こっちも終わったよー！」

優太
「そっか、それじゃさっそくいくか……」

優太・綾華・光は動かなくなったマーシャルを連れて絢の呼ぶ方へと行ってしまった。

その場に残された三人は立ち尽くしていた……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

優太は、今回の事態をはやてに連絡を取り、説明していた。

はやて
『そうか……結局、「ＸＶ機関」のメンバーはなんとかなったけど、「竜の爪」には逃げられるし、上から今回のことを説明するようにって催促されるし……あんまりいいことはなかったなぁ』

優太
「仕方ないんじゃない。できることにも限界があるから」

はやて
『そうやな……で？　さっきの話をまとめるとどういうことになってるん？』

優太
「つまり、マーシャルが呼び出した奴のせいで世界が混ざりあっちゃってるってこと。何しろ、世界が混ざりあうことでしか現れない奴だったからね」

はやて

『ハァ……また厄介なことになってきたなぁ……それで、なのはちゃんたちは今度どこに行かせたらいいんかな？』

優太
「とりあえず……混ざりあっていそうな『アスラクライン』と『ポリフォニカ』、『けんぷファー』の世界あたりだな、あとは……」

……

……

～～～～～～～～～～

真王竜
「そうか……ＸＶ機関は潰れたか」

光翔竜
「こちらの計画はうまくいきませんでしたが、結果としては……」

真王竜
「結果はな……」

とそこに、何やら落ち着きのない氷刃竜がやってきた。

氷刃竜
「あ、あの……」

真王竜
「どうした？」

氷刃竜
「水蓮竜を見かけませんでしたか？」

真王竜
「いや、見てないが……」

光翔竜
「私も見てませんね」

氷刃竜
「そうですか……もう、どこに行ったのかな……」

そう言って氷刃竜はその場をあとにした。

真王竜は彼女の背中を心配そうに見つめていた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

【あとがきコーナー・収録スタジオ】

雅也
「……」

皐月
「なに……この終わり方……」

メアリー
「作者が考えたシナリオを忠実に再現した結果だそうだ」

ヴィヴィオ

「でも、あっという間だったねー」

マーブル
「マーシャル……あっけなさすぎ、すぐやられちゃうし」

皐月
「そーゆーマーブルは優太と戦ってやられない自信ある？」

マーブル
「うっ、それはちょっと……」

雅也
「で、次回からは新展開になるらしい」

皐月
「詳しいことはまだ未定だってことよ」

ヴィヴィオ
「決まり次第発表するそうです」

メアリー
「では、今回はここで……」

マーブル
「次回もよろしくねー♪」

第３１話：それぞれの戦いの果てに……（後書き）

※最後まで読んで下さりありがとうございます。小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』などから書いてお送りください。

第３２話：魔術と黄泉と紅桜（前編）（前書き）

※久しぶりの投稿です。

第３２話：魔術と黄泉と紅桜（前編）

『ＸＶ機関』による驚異は去った。かつて世界に戦争をしかけた男によって……

だが、それと同時に新たな闇が動こうとしていた……

「……」

「おやおや、これで終わりだなんて……『ＸＶ機関』は案外弱かったんだね」

「もう少し使えると思ってたんだが……」

「でも、もう使えるんだろ……“アレ”」

「ああ……」

「それじゃあ、はじめようか……黄泉と紅桜に花を咲かせるためにね……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一護

「……」

皆本

「……」

メタナイト
「……」

カービィ
「わーい、みんな揃ってるね」

フェイト
「えーとね、何て説明したらいいのかな……」

なのは
「にゃはは、ちょっと説明しづらいよね」

カービィ
「？」

ここにいる皆本や一護、カービィ以外のメンバー、なのはやフェイトは学園都市に転移してきたわけではない。ダーク・デス・マスターの影響で彼女たちはここにいるのである。

ちなみに、ここには御坂　美琴はいない。なぜなら、美菜と再会を果たしている。

クロ
「いいか？　ここにいなかった奴が転移とかなしにここにいるってことはないんだよ」

マイ
「ま、クロとかあたしとかはロブスター・マイ式（この子）がいる

から転移魔法とか必要ないんだけどねー」

ラミレ
「それにしても……」

優太
「ずいぶんと賑やかになったものだなー」

とそこに、優太・綾華・光がやってきた。

優太
「さっそくなんだが、今後のことについて……『カービィいいいい！！！！！どこだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』……また厄介なのが来たか」

～～～～～～～～～～～～

コアッパ
「しょうぶだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

？？？
「うるさいわ」

コアッパ
「へぶっ？！」

コアッパは足蹴りされるとその場に倒れた。そこにカービィたちがやってきた。そして、カービィが一言。

カービィ
「あ、エンジェだ」

エンジェ
「あら……あなたもここにいたの」

マモン
「エンジェ様、ここにいてはまずいのでは……」

エンジェ
「わかってるわ……管理局の人もいるしね……」

フェイト
「あなたが、煉獄の魔導書の持ち主の……」

エンジェ
「ええ……」

なのは
「一緒に来てくれたら嬉しいんだけど……そのつもりはないんだよね？」

エンジェ
「……そうね。いくら『ＸＶ機関』の連中が捕まったからってこっちにも事情があるから。それに……」

ざっ……

エンジェ

「煉獄の七姉妹（この子たち）を失いたくないから……もう二度と……」

？？？

「すごいね、『煉獄の魔導書』は主の意志が弱いと自分が支配されちゃうんだよ」

一同は声がした方を見る。

そこにいたのは、シスター姿の少女――――１０万３０００冊の魔導書を記憶している『インデックス』と、顔に噛みつかれた痕跡（あと）がある少年――――『上条当麻』だった。

エンジェ
「へぇ……この魔導書のこと知ってるのね」

インデックス
「そうだよ。それにそれはね、誰もが喉から手が出るほど欲しがっているものだからだよ」

エンジェ
「そうなの……ま、それでも渡さないけど」

当麻
「……話があるからここに来てほしいって言われたから来てみれば……」

そして、『不幸だ……』とお決まり（？）の台詞を呟く。

当麻

「あのー……ちょっと質問してもいいか？」

エンジェ
「……何かしら？」

当麻
「“あれ”って、あんたのこと狙ってねぇか？」

当麻が指差した方には、なのはたちやインデックスとは違う幾人もの魔導師とシスターであった。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

その光景を“水蓮竜”が心配そうに見ている。

彼女の横にいた“夜帝竜”が言う。

夜帝竜
「おー、こっちが手を出すまででもないみたいだな」

水蓮竜
「ねえねえ、あの人たちって悪い人なんだよね？」

夜帝竜
「あ、ああ……こっちの計画の邪魔ばっかりしてくるからな」

水蓮竜
「でも……」

夜帝竜
「でも？」

水蓮竜
「そんなに悪い人に見えないの」

夜帝竜は彼女の話を黙って聞いていた。

水蓮竜
「だって、お母さんたちとは違うけど、やろうとしてることは一緒だもんっ！」

夜帝竜
「……（確かにそうだな。あいつらもこの世界のことを考えてこっちとはやってる。だが今更否定することは出来ない……）」

それが出来ないでいるから人は意見の食い違いだけで争いを起こす――夜帝竜は思わずそう思った。

夜帝竜
（とりあえずはお手並み拝見と……）

そこで気づいた。傍にいたはずの水蓮竜がいないことに――▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

優太
（ほぅ……これは）

遅れてきた優太たちが見た光景は、魔導師・シスターに囲まれているエンジェたちだった。

エンジェ
「……何の用？」

魔導兵Ａ
「貴様の持っているものは我ら“魔導騎士団”がもらう」

優太
「魔導騎士団……」

綾華
「優太、魔導騎士団って……」

優太
「ああ……おい、貴様らはどこの者だ？」

魔導兵Ａ
「“エスタブール”の者だ」

優太
「エスタブール、ね……」

エスタブール――――『伝説の勇者の伝説』に出てくる国――――そんな奴等がいるってことは……

？？？
「ちょっと、そこのお前」

当麻
「あ、なんでしょ……ぶはあっ？！」

当麻は吹っ飛ばされた

？？？
「おいおい、ちょっとやりすぎじゃねーか？」
？？？
「うむ……声をかけただけなのだが……」
？？？
「剣（そいつ）で吹っ飛ばしといて言うことかよ……」

そこに現れたのは、“ライナ・リュート”と“フェリス・イリス”だった。

優太
（やっぱりか……）

優太は頭を抱えて、改めて世界が混ざりあっていることを確認したのである。

ライナ
「あ～～、めんどくせ……」

当麻
「ふ……不幸だ……」

～～ただいま　ライナたちに事情を説明＆交渉中～～

ライナ
「……つーことは、こいつらを倒したら元の世界に戻してくれるってことだな」

優太
「まぁ、そういうことだな。しかも団子食べ放題」

フェリス
「いいだろう……」

ライナ
「……フェリス、顔緩みすぎ」

フェリスは緩んだ顔を元に戻すと、ライナと一緒にエスタブール魔導兵に突っ込んでいった。
そして、あっという間に片付けてしまったのだった。

ライナ
「あ～～疲れた～～っと……」

ライナはごろんと横になって寝ようとした……

フェリス
「寝るな」

グァン！

が、フェリスに叩き起こされた。

優太

「おー、早い早い」

フェリス
「さ、早く団子を寄越せ」

ライナ
「そっちのためかよ！」

「まったく……上条当麻、お前のまわりにはいろんな奴がいるみたいだな」

そう言いながらシスターの群れから現れたのは、当麻が知っている人物だった。

当麻
「ステイルか、何のためにって……エスタブール魔導兵（こいつら）と同じ……」

ステイル
「少し違うが、そんな感じだな。イギリス清教は『“煉獄の魔導書”を危険物として早期に処分するように』という見解に至った」

当麻
「それって……あの人を処分しろってことか？」

ステイルは『そうだ』とだけ言った。

エンジェ
「そう……どこでも考えは一緒なのね」

カービィ
「エンジェ……」

マモン
「エンジェ様……」

ステイル
「ま、僕としてはそんなことするよりだったら早くこの場から去ってもらいたいんだけどね」

シスターA
「なっ……？！」

シスターB
「何をおっしゃっているのかわかっているのですか！」

シスターたちの驚きの声が飛び交うなか、一人の男が動いた……

「……」

「あ、あの……どうかしたのですか？」

シスターの一人がその男――銀時に尋ねる。そして、彼はこう答えた。

「桜がくるんだよ。二度とみたくない桜がな……」

と言ったと同時に木刀を振った

――ガキーン！！

銀時の目の前には、長い黒髪に紫色の着物を着た女がいた。しかも、彼女が手にしているのは木刀だった。

「……さすが、“白夜叉”と呼ばれているのは伊達じゃありませんね」

「くっ……」

「ですが、今のあなたでは私には勝てません。なぜなら……」

「あのときの“紅桜”とは違うのですから」

「！！！」

女は木刀を思いきり振った。

その様子を見ているなのはたちは驚いていた。銀時はメタナイトやセイバー、シグナムやフェイトに匹敵する――それ以上の実力を持っているからだ。

「あら、よそ見してる暇はないわよ」

「ッ！！」

ガキィーン！

「へぇ……あれを止めるなんてね……やるじゃない」

攻撃を受け止めたのは、さっきまで手当たり次第食べまくっていたセイバーだった。

「……ただ食べてばかりじゃいられませんので」

優太
「あれは……」
優太はセイバーが相手をしている人物を見た。
――はっきり言えば女だ、それも17歳くらいの。
優太
「……？　あの子、どこかで見たような……」
優太は人物大図書（キャラクター・ライブラリー）を使った。
優太
「……ほう」
そこから目の前にいる少女が判明した。

【プロフィール】

・諫山黄泉（いさやまよみ）

・登場作品名：喰霊―零―

優太

「なるほどね……それじゃあ、こっちも動くとしますか」

次の瞬間、今まで動かなかった彼の足が動いた。

そして……

優太
「上条当麻」

当麻
「あ、はい……」

優太
「黄泉(あいつ)の幻想を壊せ」

……

当麻
「……はい？」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

【あとがきコーナー・スタジオ】

雅也
「久しぶりだな……」

メアリー
「そうですね……」

皐月
「……なに和んでるのよ」

ヴィヴィオ
「だって、なかなか更新されてなかったから……」

マーブル
「こんな感じになりました」

スイレーヌ
「仕方ないんじゃない」

全員
「うわぁ！？」

スイレーヌ
「あら、驚いた？」

マーブル
「あ、あんた、ここで何やってるのよ？！」

スイレーヌ
「何って……」

マーブル
「あんなことしといてよく来れたわね【詳細は“ＤＲＡＧＯＮ　ＮＡＩＬ～竜の爪～”の『仕事は時に非常である』を参照】」

スイレーヌ
「あ、あれは！」

マーブル
「試験だとしても、ねぇ？」

シャープ
「仕方ないんだよ」

雅也
「あ、すぐに負けたやつ」

シャープ
「気にしてることをサラッと言うなぁ！」

フレイム
「てか、なんで俺たちがここに呼ばれたんだ？」

サンダナ
「質問の回答らしいぞ」

ゴゴゴゴゴ……！！

なのは

「ふっふっふ……」

シャープ
「ハッ……！！」

なのは
「あれが試験ねぇ……（怒）」

シャープ
「は、はい……すみませんでした」

なのは
「そうだったんだ……」

シャープ
「お、お許しを……」

なのは
「それだったら許すよ」

シャープ
（ホッ……）

なのは
「でもね……だからって攻撃しなくてもよかったよね？」

シャープ
「そこで怒るのっ？！」

なのは

「（裏声で）……ぶっ潰す！！！！」

シャープ
「ひいいいい……！！！！」

ダダダダ……

皐月
「自業自得ね」

フレイム
「てことは……」

フェイト
「（裏声で）……一撃で逝って」

フレイム
「やっぱそういうオチかぁーーーー！！」

ダダダダ……

メアリー
「……二人はひどい目に遭い、一人はあらぬ誤解をされた。そして……」

サンダナ

「……？」

ヴ・メ・マ・皐・雅

「……天然だった」

プツン……

第３２話：魔術と黄泉と紅桜（前編）（後書き）

※小説に関する質問や感想などがありましたら、『感想を書く』から書いてお送りください。

第３３話：魔術と黄泉と紅桜（後編）（前書き）

※前回の話の続きです。

第３３話：魔術と黄泉と紅桜（後編）

銀時
「テメェは……」

「あらぁ？　その様子じゃわかったみたいね」

着物姿の女は銀時から離れ、木刀を構え直した。

銀時
「何で……ここにいる？あのときテメェを“折った”はずだ」

「それがね、気がついたときにはこの姿だったのよ」

銀時
「……はぁ？」

思いもよらない答えが返ってきたが女は気にすることなく話を続ける。

「ま、こうなっちゃったらあたしには関係ないけど……久しぶりに始めましょう、“紅桜”のあたしと……」

～～～～～～～～～～～～

当麻
「あ……あのぉ、今何とおっしゃいましたか？」

優太

「ん？その右手で黄泉（あの子）の幻想を壊せって言ったけど？」

……

……

……

当麻
「無理むりムリッ！！あんな剣でズバズバやってくる奴相手に！！」

優太
「無理かどうかは……」

ジャキ……

優太
「やってみなきゃね」

綾華
「……やるの？」

優太
「ああ……“彼女”とも約束しちゃったしね」

綾華
「そう……それじゃ、5分でできる？」

優太
「2分もあれば終わる……セイバー、避けてくれないか？」

セイバー
「は……はい」

優太は黄泉と交戦していたセイバーを下がらせた。
その直後、優太は紅を黄泉に向けて降り下ろした。

ガキィン！

黄泉
「クッ？！」

優太
「おやおや、セイバーには余裕そうだったのに俺には苦戦してるんだね」

ガギィン！

ガギィーン！！

彼の連撃が黄泉を襲う

さっきまで――――セイバーと黄泉の戦いは両者互角に見えたが、今は違う

明らかに優太の方が勝っている……黄泉よりも……

黄泉

（な、なんだこの男は……それに……この暖かいものは……）

優太

「上条当麻！」

当麻

「は、はいッ！！」

優太

「奴の顔面を殴れ！！」

当麻

「え？いや、それはさすがにちょっと……」

優太

「いつもやってるだろーが！」

当麻

「いやでも……」

いつまで経ってもやろうとしない当麻を見て、優太は懐からムチを取り出すと、ムチを当麻の左腕に巻き付けた。

優太
「いいから……やれっ！！」

そのままムチ（当麻付き）を黄泉に目掛けて降り下ろした。

黄泉
「そんなもの……ッ！？」

優太
「そんなもので悪かったな……アンタもこいつで掴まえてるんだよ」

彼の左手には当麻、右手には黄泉を捉えたムチが握られていた。

そして……

当麻は黄泉の顔面を殴った。

その瞬間、黄泉の額から何か赤い物体が飛び出て砕け散った。

優太

「殺生石……破壊、完了っと……」

綾華
「まったく……いつも無茶ばっかりするんだから」

綾華は時計に目をやると、ジャスト2分で戦闘を終わらせたのだった。

紅桜
「あらあら……あっちは決着ついたみたいね」

紅桜は間合いをとると足元に魔方陣を展開した。

銀時
「テメェ……逃げるのか？」

紅桜
「逃げる？　とんでもないわ、体制を建て直すのよ。まだ本調子じゃないし」

銀時
「へっ、そうかよ……」

銀時は木刀を収めた。

紅桜
「……いいの？」

銀時
「今のテメェから悪い気がしねぇからな。さっさと行け、俺の気が変わらねぇうちに」

紅桜
「そう……それじゃ今回のは貸しってことにしとくわ」

銀時
「勝手にそう思ってろ」

そして、紅桜は銀時の前から消えたのだった……。

▼▼▼

夜帝竜がいなくなった水蓮竜を捜そうとしたとき、なのはたちに目をやると彼女が自己紹介していた。

夜帝竜
（こんな形であいつらに会わせたら二人がなんて言うか……）
「探してもいないと思ったらここにいたのか」

夜帝竜
「そうなんだよ、だからどうしようかと……って、えぇえぇぇ？！？！」

夜帝竜が振り返ると、そこにいたのは水蓮竜の親である魔炎竜と氷刃竜だった。

氷刃竜
「夜帝竜、これはどういうことだ？」

夜帝竜
「そ、それは……（汗）」

魔炎竜
「……自らの意思で行ったのか？」

夜帝竜
「あ、ああ……」

……

魔炎竜

「……戻るぞ」

しばらく経ってから彼の口から出てきた言葉に氷刃竜は耳を疑った。

氷刃竜
「な、何を言うんだ！　水蓮は……」

魔炎竜
「“竜の爪”の幹部の子……それを承知で向こうに行ったのだ。組織としては惜しいが親としては嬉しいことじゃないか、娘が成長していくのは」

氷刃竜
「それはそうだ……だがっ！」

魔炎竜
「夜帝竜、お前は先に戻ってこの事を真王竜様に伝えろ」

夜帝竜
「い、いいのか？」

魔炎竜
「いいから……行け」

夜帝竜は何も言わずにその場から消えた。

魔炎竜
「いくぞ……」

氷刃竜

「……」▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

なのはｓｉｄｅ

なのは
「……」

それから、私（高町なのは）は不思議な光景を目の当たりにした。

魔炎竜
「娘を……水蓮竜を頼む……」

竜の爪の幹部が私たちの前に現れて彼女（水蓮竜）を頼むといわれた。
何か複雑な気持ちだけど……頼まれちゃったからね……

なのは
「わかりました」

て言っちゃった。

フェイトちゃんには『なのは、本気なのっ?!』って言われちゃうし、他の人たちは怖い顔したり驚いていたり……

だけど……

あの人の、【竜の爪】の幹部の人の目を見たらちょっと……その

人の眼差しが彼女の親としてのものだったから……

フェイト
「……なのはらしいね」

なのは
「にゃはは……」

エンジェ
「……それで？私はどうすればいいんですか？」

なのは
「うーん……そうだねぇ……」

皆が見ているなか、私は考えた。そして……

なのは
「右代宮縁寿さん」

エンジェ
「……何かしら？」

なのは
「あなたの持つ【煉獄の魔導書】は危険なものには変わりません」

私かそう言った瞬間、彼女に仕えている煉獄の七姉妹が姿を現した。

マモン
「ですがっ！エンジェ様は私たちのことを大切にしてくださっています。そんな方は他に誰もいません……」

ベルゼブブ
「そうだよ！」

アスモデウス
「それに、この子だっていい子だよ！」

カービィ
「ポヨ？」

ベルフェゴール
「んんッ……話が逸れてしまいましたね」

レヴィアタン
「とにかくッ！エンジェ様は対丈夫です！絶対に！！」

この子たちの目は真剣だった……

なのは
「……メタナイトさん」

メタナイト
「……何ですか？」

なのは
「彼女……右代宮縁寿さんの監視役をお願いできますか？」

ルシファー
「なっ？！」

サタン
「あなたって人は！！」

優太
「正しい判断だな」

優太さん……

マモン
「な、何が正しいんですか！なぜ、エンジェ様が監視だなんて……」

優太
「考えてもみろ。魔導士、魔術師……様々な組織から目をつけられている本を持つ彼女が、たった一人でそんなやつらに対抗できるとでも思ってるのか？」

マモン
「そ、それじゃあ……」

優太

「彼女は君たちの……彼女の“幸せ”を思って言ったんだよ」

にゃはは……さすが優太くんだなぁ……私が考えていることなんてわかっちゃうんだね……

なのは
「にゃはは……」

綾華
「なのはさん……」

フェイト
「なのは……」

メタナイト
「……わかった。そういうことなら引き受けよう」

なのは
「ありがとうございます」

こうして、いろいろな問題は無事解決しました。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

コアッパ
「うおぉぉ～～～～！！！！！カービィ～～～～勝負だぁぁぁぁ～

～～～～～！！！！！」

美琴
「うるさいッ！！」

バチンッ！

コアッパは美琴の電撃で吹っ飛んだ。

コアッパ
「こんな扱いは酷すぎだぜーーー！！！！！」

キラーン☆

カービィ
「ポヨ？」

ｇｏ　ｔｏ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ　……

第３３話：魔術と黄泉と紅桜（後編）（後書き）

※皆さんからの感想をお待ちしています。（ｂｙ　ヴィヴィオ）

M&Dサイド03：復讐を誓ったシスター（前書き）

※『ＤＲＡＧＯＮ　ＮＡＩＬ』から生まれたキャラの登場です。

M&

セイバー
「ですが、それならばメタナイトでもできるのでは？」

メタナイト
「最近、新起動六課（向こう）からの任務や報酬が減っているんだ。今、その交渉をしにいかなければいけない」

セイバー
「まあ、経済難ですから」

一同
（いや、それだけじゃないと思う……）

どう見てもセイバーの暴食が原因だろ……と思っている人が大半である。現に、今もセイバーは目の前の大量の料理の品に手をつけている

ドゥーエ
「セイバー1人だと不安なので……私とエンジェさんが同行します」

エンジェ
「……別にいいわよ、暇だったし」

ドゥーエ
「それでは今すぐ行きますので」

メタナイトと他のメンバーは新機動六課に向かい、セイバー・ドゥーエ・エンジェは教会に向かったのだった。▼▼▼

【とある教会】

ドゥーエ
「……は？　今何て言いました？」

神父
「ですから、貴方たちの協力は不要となりました」

教会に来て出てきた神父から言われたのは……

『代わりの人が来たので、貴方たちの協力は不要となりました』、というものだった。

エンジェ
「あなた……ちょっと勝手すぎないかしら？　代わりがいればあとは要らないだなんて……」

神父
「申し訳ありませんが……」

セイバー
「……」

他の二人が抗議するなか、セイバーは神父の後ろにある扉をただ見ている。そして一言……

セイバー
「中にいる方と話をさせてください」

神父
「それは……」

ざっ……

セイバー
「力ずくで通ります」

セイバーは木刀を構えてそう言った。

ドゥーエ
「ちょ、ちょっとそれは強引なんじゃ……」

セイバー
「中にいる“女性”と話をするだけです。なのになぜ断るのかが気になってしまって」

神父
「で、ですが……」

「いいわよ神父様……」

ドゥーエたちが扉に目を向けると、中から紅いシスターの服を着た女性が出てきた。
灰色の少し長めの髪をしている。

セイバー

「あなたは……」

「はじめまして、私は“リリス・ソウル”といいます。聖王教会から派遣されてきました」

ドゥーエ
「リリス？　そんな名前、教会の所属者リストにはなかったわ」

リリス
「つい最近になってこちらに派遣されたので、名前がなかったものかと」

ドゥーエ
「そう……」

だが、ドゥーエは管理局や教会などのあらゆる情報に目を通している……それなのに彼女の名前がなかったことに疑問に思いつつも話を進めることにした。

ドゥーエ
「単刀直入に聞くわ。なぜ私たちは必要ないの？」

リリス
「あら、そんなの簡単なことじゃない。あなたたちより私の方が役に立つからよ」

ド・セ
「なっ……！？」

エンジェ

「……」

リリス
「これでも教会ではできる方なので」

エンジェ
「そう……だったらやってみる？」

そう言ってエンジェは煉獄の魔導書を取り出す。

リリス
「そうね、やりたいのは山々だけど……」

リリスは教会の中の方に目をやった。

リリス
「先に中の邪魔物を消してからでいい？」

エンジェ
「いいわよ、あなたの力もそいつらでみてあげるから」

リリス
「そう……」

リリスは十字架のペンダントを手にしたかと思うと、シスター服から紅い色のインナースーツをしたバリアジャケットに変わった。

リリス
「さぁ……あなたの罪を数えなさい……」

盗賊1
「や、やべぇ……」

盗賊2
「ぼ、首領……」

首領
「か、構わん！さっさとやっちまえ！！」

二人の盗賊がナイフを手にリリスに向かっていく。

先に盗賊2がリリスにナイフを突き出した。だが、リリスは横に動いてかわした。

リリス
「しかたないですね……ハアッ！！」

ドカッ！

盗賊2
「へぶしっ！！」

リリス
「はっ！！」

ドカッ！！

盗賊1
「ぐふっ！」

リリスの拳が盗賊の腹にヒットし、二人は気絶した。

エンジェ
「へぇ……なかなかやるじゃない」

セイバー
「はい……ですが彼女は本気でやっていませんね」

ドゥーエ
「……」

リリスの戦闘能力の高さにエンジェとセイバーは評価するが、ドゥーエだけは何も言わずに彼女を見続けている。

リリス
「何かこれだけじゃ物足りないわね」

首領
「な、何なんだ、てめぇは……」

リリス
「私？　私はね……」

ドカッ！

炎に包まれた拳を首領に一発お見舞いしたリリスはこう言った。

「“復讐”を誓ったシスターよ」、と……

▼▼▼

「――――っ！？」

エンジェ
「あの事件、って？」

ドゥーエ
「大地と自然を司る宗教『ガイア』の教会本部に攻めてきた『竜の爪』によってシスターや魔導士たちが惨殺された“ガイア事件”……その生き残りがいたとは知っていましたが、それがあなただったのね」

リリス
「……だから何？　私に同情するの？」

ドゥーエ
「いえ。ただ、“復讐”ということに囚われている貴女には成し遂げられないでしょうね。『兄の仇』を討つことはね」

リリス
「ッ！！」

ドゥーエの言ったことにリリスは驚いた。自分のことをそこまで調べた人がいたことに……

リリス
「……随分と詳しいのね」

ドゥーエ
「知り合いの情報屋が物知りなの」

リリスは『ふ～ん…じゃ、また会えるかもね。あなたたちに』と言うと、ドゥーエたちに背を向け立ち去った。

セイバー
「ドゥーエ、その情報屋とは……それになぜそのようなことを？」

ドゥーエ
「そう、あの子。青い死神（優太）を“お兄ちゃん”って呼んでる子。あの子、どこから情報を仕入れてるのかしら？」

ドゥーエは不思議に思いながらも『なぜ、その事件を知っているのか』に答える。

ドゥーエ
「世界の状況を把握するには最新の情報は常に取り入れ、詳細に把握する――それが鉄則だからよ」

セイバー
「はぁ……」

エンジェ
（復讐、ね……）

エンジェもかつて、『ＸＶ機関』に復讐しようとした。だが、優太によって壊滅した今となっては何も意味をなさない。

エンジェ
（ほんとに、どうしようかしら……）

マモン

（エンジェ様……）

エンジェの悩んでいる様子を見ていることしかできないのを悲痛に感じるマモン――煉獄の七姉妹だった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

メタナイト
「……では、このようにしていただければ」

はやて
「うん、なんとか掛け合ってみるな」

メタナイト一行は新機動六課で今後の活動について話し合っていたが、ようやく終わったようだ。

そこに、マイアル・ナーゼ執務官がやってきた。

マイアル
「八神隊長、ちょっとお話が」

はやて
「ん、何や？」

マイアル
「先程、ファウニル……ローゼ隊長からの報告なのですが、異世界でロストロギアの反応があったと」

はやて
「……危険度は？」

マイアルがそれに答えようとしたとき、ファウニル・ローゼ執務官が姿を見せた。

ファウニル
「トップクラスよ、それもかなりのね」

はやて
「そっか……ところで、なんでここにおるん？　“シメオン製薬”に調査に行ってたよね？」

ファウニル
「その調査先からの帰りの異世界で見たんです。紅い馬を……」

メタナイト
「紅い馬……それはもしや」

はやて
「何か知ってるんか？」

メタナイト
「うむ、風の噂程度なのだが――」

かつて、“武田信玄”の旗印の『風林火山』と『武田の騎馬隊』とを組み合わせた魔道具・『魔導騎馬』があったと。馬は４頭いて、それぞれ『風林火山』からつけられている。

“疾(と)きこと風の如く”の白い馬、白風

“徐(しず)かなること林の如く”の翠の馬、翠林

“侵(おか)し涼めること火の如く”の紅い馬、紅火

“動かざること山の如く”の黒い馬、黒山

しかし、その馬たちは強大な力をもつため、異世界に封印されているということらしい。

はやて
「それじゃあ、なぜ今になって出てきたんや？」

メタナイト
「おそらく、“黒き神(ダーク・デス・マスター)”の強大な力によって封印が解けたのだろう」

はやて
「黒き神……まったく、ややこしいことになったなぁ」

ファウニル
「八神隊長、これからどうするのですか？」

はやて
「なのはちゃんたちには別世界で動いてもらってるから、ファウニルは引き続き“シメオン製薬”の調査を、マイアルは上層部の調査をお願いな」

二人は『はい』と返事をするとその場をあとにした。

メタナイト
「では、こちらは……」

はやて
「その魔導騎馬と、他のロストロギア探索になるな。頼んでもエエか？」

メタナイトは、「無論だ」と答えるとその場をあとにした。

はやて
「ふぅ、やっと終わったなぁ……さて、そろそろウチもシグナムたちと一緒に調査に参加しないとな」

これからのことに頭を捻らせつつ、はやてもその場をあとにした。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

M&

第３４話：優太の怒りと本気（前書き）

※今回はあとがきコーナーはナシです……。

第３４話：優太の怒りと本気

スバル
「そ、それ、本当ですか！？」

綾華
「うん、優太なら彼女……イクスヴェリアのことを“起こす”ことができるかもしれないよ」

そう……優太が使う治癒術は死人にさえ効果があるものなのだ。実際、死人当然だった黄泉を治療したくらいだ。

ミニキュリア
「けど、その本人がいないんじゃ――」

光
「……意味がない」

スバル
「あぅ……」

ティアナ
「そうね……ところで、彼は今どこに？」

綾華
「優太なら治療した彼女を元の世界に送り届けに行きました」

なのは
「元の世界に、ですか？」

綾華は首を縦に動かす。

綾華
「彼女はその世界で不幸な運命を辿るはずだったんです」

なのは
「でも、なぜそこまで……」

綾華は少し下を俯いた後、顔を上げる。

綾華
「……優太は、困ってる子なら誰でも助けるんです。　とくに相手が女の子だったら」

フェイト
「そう……なんですか」

皐月
「そんなことされてて何とも思わないんですか？綾華さんと優太さんは恋人同士なんでしょ」

綾華
「最初の頃はちょっと嫉妬とかしたけど、優太がそうしてる理由が分かったから平気だよ」

雅也
「理由、ですか？」

綾華は小さく頷くと語り始めた。

綾華
「優太って世界中を旅してるって前に言ったことあるよね？」

ヴィヴィオ
「はい、自分を鍛えるためだって」

綾華
「そう……それって、その世界の過去にも行ってるってことでね……その先に待ってる悲しい出来事を少しでも避けたい、今を精一杯生きている人に生きてほしい――そんな想いで必死になってるんだ、って優太が言ってたの」

銀時
「つまり、奴は自分の欲求のために未来を変えてるってことか」

茜
「あーっ！そんなこと言っちゃダメだよ！」

黒美
「優太様も自分勝手であることを理解しています」

銀時
「なら、何で止めねーんだ？」

綾華
「それによって救われる人が必ずいるから……スバルさんたちのようにね」

かつて、優太が過去に介入したことでスバルとギンガの母――クイントは救われた。

クイントだけではない、スバルとギンガも彼によって救われたと言ってもいい。

綾華
「だからね、優太は困ってる人を助けるの。たとえそれが敵であっても」

メアリー
「そうなのか……」

綾華
「ま、敵の首謀者とか男の人には容赦ないけどねっ♪」

マーブル
「そう、なんですか……」

皐月
「それじゃあ雅也に合掌――」

雅也
「するんじゃねー！！」

ヴィヴィオ
「ま、雅也くんが灰になっても私が集めるから！」

雅也
「人を灰にするなー！！」

メアリー
「マスターのことは一生忘れない」

雅也
「勝手に死んだことにするなーっ！！」

マーブル
「大丈夫、雅也なら大丈夫よ！　絶対！！」

雅也
「その自信はどこからくるぅ！？」

絢
「あらら、とっても仲がいいんだね」

光
「……」

つんつん……

綾華
「ん……光、どうしたの？」

光
「優太の周りに黒い淀みが」

綾華
「黒い淀み……それって――」

光

「たぶん……」

綾華の表情が険しくなった。しかし、すぐいつもの表情に戻った。

綾華
「でも、優太なら大丈夫だよ。　だって――――」

綾華は穏やかな表情を浮かべる。

綾華
「裏世界で最強っていわれてた私が、唯一（ゆいいつ）全力で戦っても勝てなかった人だもの……」

【次元の狭間】

優太
「ふぅ……」

優太は黄泉を元の世界に返し、世界の次元の狭間の中を移動している。

優太
「さてと――これからどうするかだな……」

優太はこれからのことに迷っている最中、黒い淀みが彼の周りを囲むようにして現れた。

優太
「（これは、黒い淀み……）」

そして、彼の前に竜の仮面をした者が現れた。

優太
「ふーん……ついに『竜の爪』の幹部のお出ましか」

「違うな、こっちはその幹部に仕えている者だ」

『竜の爪』の幹部に仕えているという者が次元の狭間の出口を出現させる。

優太
「あっそ……じゃあ――」

優太は出口に移動してこう言った。

「さっさと連れてってもらおうか、俺が今から倒す相手にな」

優太

「ここは……」

優太が今いるのはジャングルの奥地の、大樹で覆われた砦――『地獄の大樹』。

「そうだ……喰樹竜様が貴様に会いたいとのことだ」

優太

「俺に……？」

わざわざ敵から招くことはありえない。ありえるとすれば1つしかない……

「さあ、中へ――」

仕えている者は優太を入口から入るよう促す。　だが、彼はその場から動こうとしない。　そして――

優太

「ここでいい」

と言った。

「な、何を言って――」

優太は大剣を入口に突き刺した。

――どさっ

優太

「まずはひとり……と」

何かが倒れる音がした後、そう言って砦の中に入っていった。

仕えているものは目の前の光景に目を疑った。

――なぜだ……作戦は完璧だったはず……そう思いながら入口に倒れている竜兵を呆然と見つめているのだった。

【地獄の大樹・内部】

優太

「……」

「見張りも役に立たねえじゃねーか、あとで指揮官を呼び出さねーとな」

《ぐちゃぐちゃ》

優太

「……あんたが喰樹竜か？」

喰樹竜

「ん？ああ、そうだが。てめえが『青い死神』か……とても強いとは思えないがな」

《ぐちゃぐちゃ》

優太
「……」

優太は、喰樹竜が人体の一部と思われるものを食しているのを見ている。

喰樹竜
「んあ？てめえも食べてーのか？」

優太
「……」

喰樹竜
「おい、何か答えろよ」

優太
「――した……」

喰樹竜
「あァ？」

優太
「どれだけの、どれだけの関係ない人間を殺した……」

優太の手に握られた紅【くれない】がギリギリと音をたてている。

喰樹竜
「どれだけ、か……んなこと知るか。ワシは殺したいだけ殺して

食したいだけ食す、それだけだ」

優太
「……そうか、そうかそうか……」

優太は紅をさらに強く握る。

喰樹竜
「で、どうだ？ワシと手を組まないか？てめえがいたら真王竜だなんて目じゃ――――」

「黙れ」

喰樹竜
「……いま、何つった？」

優太
「黙れ、この世界一――いんや、宇宙一のくそったれ野郎が！」

いつもの彼からは聞くことができない怒声が響いた。

優太
「テメェみてーな奴はな……テメェみてーな奴はな……俺がこの世で一番だいっきらいなんだよーーーーっ！！！」

喰樹竜
「な、なんだとゴラーッ！！」

喰樹竜の逆鱗に触れた優太は、すかさず喰樹竜から離れた。

喰樹竜
「てめぇみてーな奴をワシが雇ってやるって言ってるのにその態度かァ！」

喰樹竜は身体中から無数のツルを出し、優太に向かって降り下ろした。

《ズドーン！！！！》

喰樹竜
「ガッハッハッハ！！！！かつては世界を凌駕させた男がこの程度か！情け……」

優太
「んなわけあるか、馬鹿者」

喰樹竜が振り返ると、紅を軽々と担いでいる優太の姿があった。

喰樹竜
「な、なぜだ……さっき、てめぇに――――」

優太
「ツルを当てたってか？んなもんただ“ぶった切れば”いいだけだろ？」

その言葉に喰樹竜は驚愕した。

――――あれだけのツルを切るだと……んなことあの真王竜でもや

っとのことだったのに――――

優太
「ついでだから言っておくぞ。ここに来るまでにテメェの部下は全員殺した。まぁ、ウッドボディって奴とその部下たちがいなかったから殺れなかったけどな」

喰樹竜
「な、どうやって……」

優太
「テメェらが殺した人間にしてきたことと同じことをしたたげよ。塵も残さないほどにな」

喰樹竜
「く……クソがァァァァあ！！！！」

《ずぶり》

優太
「コピーできるだとか自己再生できるだとかなんてな……」

優太は紅を喰樹竜の心臓に突き刺し、右手に紫の炎を纏わせる。

優太
「そんなことする前にこうしちまえば何の問題もねーよなぁ？」

喰樹竜
「ば、バカな……ごふっ――このワシが、負ける……」

優太
「防御不能……効果無効……破壊力抜群……」
紫の炎が激しく燃えている――。
優太
「――アース、ブレイカー……」
《ズドーーーン！！！！》
今の攻撃で砦とその周辺の樹海は一瞬にして消し飛んだ。そこには喰樹竜の死骸は残っていなかった……。
優太
「覚えておけ……俺が“負の感情”で本気を出したらこうなるってことをな……」
優太は、“ヘイホー”が撮っているカメラ”に向かって言った。そう、今までの戦いの様子は『新起動六課』と『竜の爪』に流されていたのだった……。
しかも、その時の彼の瞳の色は黒ではなく、青い死神の名にふさわしい“蒼”だった……。

優太
「そして、これが元『ダークミラー』のボスの、“本気のひとつ”ってことをな……」

そう言って優太はその場を後にした……。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

第３５話：迷い、悩み、そして出会う……（前書き）

※今回は、あとがきコーナーあります！

第35話：迷い、悩み、そして出会う……

【『竜の爪』本部】

絢
「うわぁー、お兄ちゃんも派手にやっちゃったねぇ」

優太の事を“お兄ちゃん”と呼ぶ絢は、単身で『竜の爪』の幹部が集まっている場所にいた（彼女が侵入した時点で警備と彼女との実力の差が明らかである）。
絢の誰にも見つからない忍びの力量において優太・綾華以外に右に出るものはいない。ちなみに、絢が『竜の爪』の本部の場所を優太に教えたところ、

『今は誰にも言うな。それに情報収集には最高だしな』と高笑いしたそうな……。

絢
「それにしても、喰樹竜……だっけ？あの二人以外の人に葬式もしてもらえないなんてかわいそう」

敵のことをも考える――優太と共にいるようになってからはそんなことを考えるようになった。それまでは無かったことなのに……。
そこで絢は気持ちを切り換え、今聞いたことについて考える。

絢
「あと、なのはさんたちのいる部隊への攻撃、ねぇ……お兄ちゃんだったらあっという間に終わるのに」

圧倒的な戦力だったらひとたまりもないだろう……がその前に―
―どこまで優太に思い入れしてるんだ？

絢
「あたしの人生のすべてよ♪」

今のに答えるなっ！！

絢
「はいはい」

そう言うと絢は一瞬でその場から姿を消した。

その後、白天竜が見張りの竜兵が倒れているのに気づいたのであった……。

【とある次元空間】

リマ
「ハァ……ハァ……」

ナオ
「んっ……くっ……」

リマ・ナオ姉妹はシャア・ストワールの特訓を受けていた。

シャア
「どうした？　この程度なのか？」

リマ
「ま、まだ……大丈夫、です……」

ナオ
「もう一度、お願いします……」

シャア
「そうか。じゃあ、あとは彼に鍛えてもらおうか」

リマ・ナオ
「「え……？」」

？？？
「ほぅ……俺がいることに何時気づいた？」

シャア
「あなたがここに来たときからだよ、青い死神」

優太
「久しぶりたよ、『竜の爪』以外の人物でその名で呼ばれるのは」

リマ・ナオ姉妹の背後には、微笑みを浮かべて手を振る優太の姿があった。

リマ
「ゆ、優太さん！」

ナオ
「何でここに！？」

優太
「いやいや、こっちのほうがひと段落ついたからね。それと、気づいてると思うが……」

シャア
「世界が混ざりあっている、ということか？」

優太
「ご名答……それでこの空間にもいくつかの世界の住人が来ている」

シャア
「ほう……それで、我々にしてほしいことは何だい？」

優太
「話が早くて助かるよ。あなたにはその住人たちを“ここ”に連れて行ってほしい」

優太は“ある場所”を指定した。

シャア
「……わかった」

優太
「それじゃあ、彼女たちはこちらでお預かりしますね」

シャア
「ああ、よろしく頼む」

～～～～～～～～～～～～～～～～

「まったく……黄泉（やつ）の殺生石は壊されちゃうし、紅桜は白夜叉にかなわないし……」

「どうするつもりだ？」

「まぁ、まだ紅桜がこっちにいるからね。それに……」

ある人物は機械からハートレスたちを出した。

「マーシャルが残した『ハートレス生成マシン』と『ノア３・改』があるしね」

今、ＸＶ機関の後継者と呼ぶべき人物が組織を着々と動かしていくのであった……。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

【とある次元の狭間】

優太
「……」

優太はリマ・ナオ姉妹を連れ、『新起動六課』組のところへ戻ろうとしていた。その最中、彼はあることを考えていた。自分がこの手で亡き者にした喰樹竜の事である。彼は次元の狭間で帰路についていた絢に出会い、絢から話を聞いたのだ。

優太
（絢の話によると、あの映像をみた幹部の大半が奴の事を批判した……葬式も行ってもらえないのは一番辛いな）

優太はじっと自分の右手を見つめる。この手で、この手で奴を葬った。苦しんでいる人たちを救って『救世主だ』とまで言われた。そんな自分がその地位にふさわしいのか……

優太
「それに、あれはちょっと傷ついたなぁ……」

優太は絢から貰った映像を確認しているとき、魔炎竜が言った一言を思い出す。

【我々も奴のように倒すつもりか？】

その言葉について優太は考える。

優太
（俺は女と子供以外には容赦しないし、騒動の首謀者なら半殺しにして組織に渡す。だが、あいつに対してはそんな想いやりはなかった。いや、『あいつだけは殺らなければ』という想いが強かった――たったそれだけのことだ……）

それだけのことで生死を決める自分をおかしいな……と思いつつ、見つめていた右手をギュッと握った。

リマ
「あ、あの……」

優太
「ん……どうかしたか？」

リマ
「さっきからこの子たちが騒いでるんですけど」

優太の周りにいるヘイホーが慌ただしく動いている。

優太
「何があった？」

優太が動き回ってるヘイホーを引き留めて訊く。

優太
「ふむふむ……わかったお前たちは先に戻っていてくれ」

それを聞いたヘイホーは頷くとすぐさま仲間のもとに行った。

リマ
「あの……一体何があったんですか？」

優太
「あぁー、ちょうど赤い馬が来たらしい」

2人は訳が分からず首を傾げる。

優太
「馬っていうのはね……あれのことだよ」

優太が示した先にいたのは、伝説の騎馬・紅火だった。紅火は優太に近づいてきた。

優太
「……で、俺に何か用か？」

紅火
『なぜ、あなたは“あそこまで”相手を侵すのですか？』

優太
「……見てたのか、あの光景を」

紅火
『私たちは主を見極める必要がありますから、そのための監視と考えてください』

優太は「そうか」、と軽く返した。

優太
「なぜって言われてもな……今まで当たり前のようにしてきたことだし」

紅火
『では、その当たり前の事をするようになった理由は何ですか？

こちらの方が説明しやすいと思います』

優太
「そうだな……」

理由――それは1つしかない。

――家族を、友人を、皆を守りたい……ただ、それだけのことだ……

紅火
『そうですか……でしたら私はあなたを主としましょう』

優太
「いいのか？たったひとことで決めてしまって。それに俺は悪い組織のリーダーだった男だぞ」

紅火
『あなたの火の如き戦闘能力と人の事を思う清き心……それに私は

惹かれましたから』

優太
「変な奴だな」

紅火
『あなたほどではありませんよ』

優太
「フッ……言えてるな。馬にしておくには惜しいな。そうだな……そのうちヒューマノイドを用意するか」

こうして、紅火は優太について行くことになった。そして、優太は密かに紅火のヒューマン化を決めるのであった。

【あとがきコーナー】

リマ
「あとがきコーナー、はじまります！」

ワーーー！！

ナオ
「また伝説の騎馬がこっちの仲間になったね」

リマ
「そうね。優太さんの実力があったからだと思うけど」

ナオ
「ちなみに、この話での展開は3つあったの」

1、紅火が仲間になる（採用）

2、八神はやてがやってくる（※展開が早すぎると判断しボツに……）

3、優太のもとにオリキャラ来訪（※あまりキャラの方を考えていなかったのでボツに……）

リマ
「どれも捻りがないわね」

ナオ
「しかも3番は投げ出しちゃってるし」

リマ
「でも、私たちが再登場できたから良かったわ」

ナオ
「そうだね。私たち姉妹の活躍を……」

リマ・ナオ
「「楽しみにしていてください！！」」

雅也・皐月
「「勝手にコーナーの司会・進行するなーっ！！」」

ヴィヴィオ
「あはは……ではまた次回も」

メアリー
「よろしくお願いします」

雅・皐
「「勝手に終わらすなーっ！！」」

プツンッ……！！

第３６話：新たな動き（前書き）

※サブタイトルが思い付かない……

第３６話：新たな動き

【～～～某会議室～～～】

優太
「……で？ここに俺を呼び出した理由は何だ？」

優太が戻ってきて早々、なのはたちと合流したはやてに呼ばれて会議室に来た。

なのは
「あのね、前の事件でヴィヴィオたちが保護した芳佳ちゃんたちを元の世界に帰してあげたいなって」

フェイト
「だから、あなたの力をお借りしたいんです」

優太は溜め息を吐いた。

優太
「あのな、俺はどっかの便利屋じゃないぞ」

はやて
「いやな、ちょっと芳佳ちゃんたちの世界で気になることがあってな」

優太
「気になること？」

はやて
「話によるとな、彼女たちの世界にいる“ネウロイ”とかいう化け物の他に、謎の黒い物体が現れるそうや」

優太
「謎の黒い物体？写真とかはあるのか？」

フェイト
「向こうの世界にはあるみたいなんだけど……」

優太
「そうか、それなら……」

《トントン》

優太
「絢、いるんだろ？出てきたらワドルディのぬいぐるみをプレゼントだ」

《バサッ！》

絢
「ぬいぐるみーーーっ！！！」

床を軽く叩き、プレゼントの話をした矢先、絢がどこからともなく現れた。

なのは
「な、なんでいるって分かったの？」

優太
「絢は気配を消しているようで俺への雑念が多いからな。それを探れば簡単なことだ」

『いや、簡単じゃないと思うけど』

優太
「絢、謎の黒い物体の写真って持ってるか？」

絢
「あるよ。でも、映像記録もあるけど……」

優太
「カービィのぬいぐるみ、追加な」

絢
「喜んで提供しますッ！！」

優太は絢からもらった写真と映像をみた。彼にとっては見覚えのあるものだった。

優太
「あれは、ハートレスだな」

はやて

なのは
「ハートレスって、ＸＶ機関の部隊にいたよね？」

フェイト
「でも、ＸＶ機関の幹部は全員捕まったはずだよ」

はやて
「それがな、本局の方でな機関の首領を逃がしたらしいんよ」

なのは
「それじゃあ、その首領がまた……！」

優太
「それはないな」

フェイト
「何でそう言えるの？」

優太
「このハートレスの胸のマークを見てみろ」

優太が指し示したハートレスの胸のマークを見る。そのマークは、竜とハートが描かれていた。

はやて
「竜にハート……まさか！！」

優太
「『竜の爪』か、あるいは新たな組織……」

なのは
「新しい組織？」

優太
「ああ……それも、ＸＶ機関と竜の爪の技術を持ったな」

《ピピッ！！》

『八神隊長！！』

突然、はやてに通信が来た。相手はファウニルだった。

はやて
「ファウニル、どうかしたん？」

ファウニル
『ついさっき偵察部隊から連絡があって、シメオン製薬が動き出したの。見たこともない生物を連れて』

はやて
「何やて？！」

優太
「……ファウニル・ローゼ執務官。その映像、すぐに出せますか？」

ファウニル

『は、はい！』

映像に写し出されたのは、シメオン製薬の首領、アークライトがフードを被った人物と話しているのが見えた。その両側には黒い生物がいた。辺りを見回しているところから見ると、警備のものだろう。しかも、その警備の胸には先程話していた竜とハートのマークがあった。

なのは
「あのマークって、さっき話してたのだよね？」

優太
「……ファウニル執務官、今すぐ戻ってくるんだ。偵察部隊を連れて」

『えっ？』と驚いたなのはたちは理由を聞こうとしたが……

優太
「いいからすぐ戻ってこい！！」

ファウニル
『わ、わかりました……』

優太
「絢、悪いがすぐに彼女たちを連れてきてほしい。大至急だ」

絢
「う、うん。わかった」

通信し終わると、優太は絢に迎えを頼んだ。

はやて
「な、何もあんなに急がなくても……」

優太
「いや、急がせなきゃいけない。あの生物が周辺警備をしているということは、彼女の偵察部隊は……」

フェイト
「まさか……」

絢
「お兄ちゃん!!」

優太
「どうだった?」

絢
「お兄ちゃんのおかげだよ……」

迎えに行かせた絢がファウニルを連れて戻ってきた。しかし、偵察部隊は5人編成だったのだが、立っていたの2人だけで他の3人は重症だった。

絢
「他の人たちは倒れてたけど何とか連れて来た」

優太
「そうか……」

優太がそう言ったあと、はやてはファウニルたちを医務室へと行かせ、なのはとフェイトに部隊編成をするように指示を出した。

優太
「『ストライクウィッチーズ』に『ＮＥＥＤＬＥＳＳ（ニードレス）』の世界か……全く、厄介な世界なことで」

優太はそう言いながら対応策を考えていた。

【？？？】

「ふむ、ついにこのときが来たか」

「待ちに待った戦（いくさ）が」

「潰してやるよ、あの生意気なやつらを」

「そして、真王竜……」

「……やる、の？」

「もちろんだとも。何しろこれが……――」

――我らの悲願なのだからな……

to be continued ……

M&

M&

《ガチャ……》

メタナイトが宝剣・ギャラクシアを構える。

真王竜

「いい心構えだ。私も戦ってみたかったのだ。銀河最強の騎士――ギャラティック・ナイトを倒した剣の持ち主と……」

《カシャ……》

真王竜もダークレヴァンティンを構える。

……

……

《ザッ！》

「「はぁぁぁぁ！！」」

《ガキィン！！》

互いの剣がぶつかりあう。剣を弾き、互いに距離をとる。

真王竜は間合いをつめ、連撃を仕掛ける。

《ガギン！ガギン！》

真王竜の猛攻を防ぐメタナイト。

（さ、さすが異世界の剣の使い手と渡り合うだけの力の持ち主だ。私でもあと持つかどうか……）

メタナイトでも何とか攻撃を防ぎきれるといったところだ。他の者――優太や銀時を除く――が戦ったら1分と持たないだろう……

「はぁぁぁぁ！！」

連撃をし続けた真王竜が大きく振りかぶった。

それをメタナイトは何とか避ける。

攻撃が止(や)んだところを、メタナイトが攻める。

「ハアッ！！」

「くっ……」

メタナイトが放った渾身の一撃……それを防ごうとするが、完全には防ぎきれずある程度攻撃を受ける。

（さすが銀河戦士団の戦士……一筋縄(ひとすじなわ)ではいかんな）

そんな攻防が何時間にもわたり続いた……

「まったく、いつまで経っても戻ってこないなんて……」

「戻ったらＯＨＡＮＡＳＨＩが必要みたいですね」

「「あ……」」

「貴方は……白天竜」

「そういう貴方は、戦闘機人ＮＯ．２のドゥーエ……どうして此処に？」

「修行に行ってから戻ってこない人の様子を見に……」

「偶然ね。私も修行に行って戻ってこない人を連れ戻しに……」

……

「……どうやら、目的は同じってことで――」

「……ですね」

そんな会話を交わしていると、２人の目の前に飛び込んできたのは……

「はぁ、はぁ……」

「くっ、はぁ……」

息があがっているメタナイトと真王竜の姿だった。

「なぜ……貴方はそこまでして異世界に関与する？」

「……世界を、守るためだ」

「ならば、自分達と共に――」

「こちらには……こちらの考えがある……」

「そうですか……ならば」

「次で終わりに……」

「「待ちなさい！！」」

「ドゥ、ドゥーエか……」

「白天竜、どうして此処に？」

「「帰りが遅いので迎えに来ました。それに……」」

白天竜とドゥーエが辺りを見回す。

「「これ以上、修行場を荒らさないでください！」」

「「あっ……」」

ドゥーエたちに言われてようやく気付いた。自分達の戦いで修行場が原型をとどめていないことに……

「……では、今回のところは――」

「あぁ、此処までのようだな……」

その後、荒れていた修行場を元に戻した（大半は応援で駆けつけた優太がやったのだが……）。

「では、真王竜殿。いずれまた……」

「あぁ、次は必ず決着をつけよう……」

こうして、剣の使い手同士の約束が交わされたのであった……

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

【おまけ1】

【白天竜の部屋】

白天竜
「……」

白天竜は鏡に映った自分の身体を見る。そして……

ぷに……

自分の身体を摘まんだ。

ぷにぷに……

白天竜
「はぁ～……最近出番が少なかったせいか、少しお腹の回りが……」

光翔竜
「太ったという証拠ですね」

白天竜
「人の部屋に勝手に入ってきて身体を見るなーーーっ！！」

《バキッ！！》

光翔竜
「ぎゃぼっ！！」

【おまけ2】

優太

「ついに……ついに完成したぞ……紅火のヒューマノイドが……」

紅火は紅色の髪をポニーテールに纏めており、瞳の色も紅色、そして身長は綾華と同じくらいである。

紅火
「あ、あの……似合ってるでしょうか？」

優太
「もちろんだとも！こんなに紅の色が似合う女性はいないよ！！」

紅火
「は、はぁ……」

優太
「ふむ……そうだな、他の者にもヒューマン化を試みてみるか。そういえば……」

チラッ……

緑
「……はい？」

優太
「緑、お前は確か他生物のヒューマン化だったよな？」

緑
「はい。私と茜さん、黒美さんはヘイホーのヒューマン化なんですよ」

優太
「ほぅ……そういえばそうだったな。元の姿は何だったかな？」

緑
「ハイヘイホー（『スーパーマリオＲＰＧ』に登場）です」

優太
「ほうほう……茜と黒美は？」

茜
「あたしは普通のヘイホーだよ。赤いヘイホーだけに」

黒美
「自分はブラックヘイホーです」

優太
「……そーいえばそうだったな」

ミレイザ
「もしかして……」

光
「自分でやっておいて……」

綾華
「……忘れてたの？」

優太
「い、いやぁ～……忘れてなんか……」

茜・黒美・緑
（忘れてたね／忘れてましたね）

紅火
「ほんとに、この方が主であって良いのか不安になってきましたね」

優太
「だ、大丈夫、大丈夫だから！」

全員
（少し心配になってきたなぁ……）

【おまけ3】

雅也
「はぁ～……ひどい目に遭った」

皐月
「ほんとよ、馬にされたり戦闘機械にされたり……」

ヴィヴィオ
「にゃははは……お疲れさまだね」

マーブル
「そういえば、優太さんの魔導騎馬のヒューマン化ってうまくいったの？」

メアリー

「先程成功したとの報告があったぞ」

水蓮竜
「そうなんだ。よかったね」

竜侍
「よかったですね」

全員
「って、アンタ誰！？」

竜侍
「これは失礼しました。私は水蓮竜様の警護を任された竜侍といいます。以後お見知りおきを……」

水蓮竜
「よ、よろしくお願いします……」

全員
（竜ってもしかして『竜の爪』のメンバー！？）

一同は竜侍の登場に驚く。

全員
（でも、敵がここまで真っ正面から来る……わけないか）

こうして、竜侍は水蓮竜に無事合流したのであった。

ユリア
「竜侍も案外、大胆なんだな……」

夜帝竜
「いやいや、そういう問題じゃねーだろっ！」

【おまけ４】

優太
「人物図鑑（キャラクターライブラリー）、雷刃の襲撃者――レヴィ・ザ・スマッシャー！！星光の殲滅者――シュテル・ザ・デストラクター！！」

《パァァァ……》

レヴィ
「おおっ！ついに、ついに僕の出番か！！」

シュテル
「騒がしいですね。私たちに何の用ですか？」

※２人は、９歳のなのはたちの姿のままだった。

フェイト
「ほ、ほんとに出しちゃったよ」

アリシア
「それにしても……こっちは私とフェイト、こっちはなのはちゃん

によく似てるわねぇ」

レヴィ
「さあっ！僕たちの最初の仕事は何だい？」

シュテル
「まぁ、出来る限りのことならしますが」

なのは
「ふっふっふ……こいつを連れてきてほしいの」

なのはは、光翔竜の写真を見せた。

レヴィ
「こいつか……どう見ても変人だな。でも、なんで僕が君の言うことを――」

《がしっ！！》

優太・フェイト
『今の、魔王状態のなのは（さん）にそんなこと言わないで！！』

レヴィ
『で、でも……』

アリシア
『このままじゃ、貴女たちが消されるわよ』

シュテル
『それが懸命ですよ。この状況から察しなさい』

レヴィ
『うっ、出てきて早々消えるのは嫌だな……わかった、行ってくるよ！！』

シュテル
「それでは、頑張って連れてきてください」

レヴィ
「なんで僕だけぇ？！」

数分後、レヴィは即行で光翔竜を連れて戻ってきた。

光翔竜
「なんですか、私は3人のフェイト様を見るのに忙し……」

なのは
「ふっふっふ……」

光翔竜
「み、三十路（みそじ）の豚町なのは……」

《ぷっちん……》

光翔竜以外
「あっ……」

なのは
「フッフッフッ……悪の魔王とか豚とか三十路とか、よくも散々なことを言ったりしてくれたね？」

光翔竜
「い、いえ、それは……」

なのは
「カルクイッテキテミヨウカ？」

フェイト・アリシア
「「な、なのは（ちゃん）？！」」

優太
「完ぺきに魔王（あっち）に行ったな……」

なのは
「優太さんから教わった新技……」

優太
（この魔王には敵わないから仕方なく、な……）

ＲＨ
『ロ、ロード、カートリッジ』

《ガシャン×１０》

※ちなみに、なのはさんの健康状態には悪影響はありません。

なのは
「全力全開、防御不能……」

《シュウゥゥゥ……》

なのは
「スターライト・アース……ブレイカァァァァァァァァァァァァ！！！！！！」

光翔竜
「フェイト様バンザァァァァァァァァァァァイ！！！！！！」

光翔竜は、なのはの新必殺技を受けた。

フェイト
「あ、あはは……」

アリシア
「な、なのはちゃん、相変わらず容赦ないね」

レヴィ
「な、なぁ……あいつ強くなってないか？てか、前に会ったときよりも強くなってるよな！？」

シュテル
「さすがです。私のオリジナル、高町なのは……以前よりも強く

なりましたね」

レヴィ

「そこっ！感心してる場合じゃないよぉ！！」

こうして、なのはのＯＨＡＮＡＳＨＩは終わった……

【竜の爪・アジト】

真王竜

「さ、さすが、三十路の……」

白天竜・夜帝竜

「「それ以上言うな（言わないでください）っ！！」」

なのは

「フッフッフッ……」

３人

「「「ッ！！！！」」」

M&

M&Dサイド05：ドゥーエ（前書き）

※今回はドゥーエの過去話をお送りします……

M&

スバル
「へぇ〜……」

そこに、雅也たちがやってくる。

雅也
「あ、スバルさんにチンクさん」

チンク
「お前たちも訓練をしていたのか？」

皐月
「はい、いつ何があっても対応できるようにしないといけませんから」

チンク
「そうだな。まぁ、ドゥーエもそうだったからな」

ヴィヴィオ
「？それってどういうことですか？」

スバル
「それはね……」

スバルは、チンクからドゥーエのことを話した。

メアリー
「そうだったんですか」

ミニキュリア
「人って変われるものなんですね」

マーブル
「その人の事はあまり知らないけど、そこまで変われるの？」

チンク
「変われるさ、自分達がそうであったようにな……」

【～～某会議室～～】

一方その頃、メタナイトはドゥーエから調査結果の報告を聞いていた。

ドゥーエ
「……以上が今回の調査報告になります」

メタナイト
「そうか……いつもすまないな」

ドゥーエ
「いえ、私はこれが仕事なので」

セイバー
「そういえば、前々からお聞きしたかったのですが……なぜ、ドゥーエはこのようなことをしているのですか？」

ドゥーエ

「……？」

セイバー
「かつて、『ＪＳ事件』に関わったあなたがここまで変わったのが不思議で……」

ドゥーエ
「ああ、その事ね」

ドゥーエは語り始めた。自分が変わった経緯を……

【時空管理局　本部】

「……」

「こいつが、かつて『ＪＳ事件』に関与していた奴か」

「ああ、だからそのことで上が話し合っているらしい」

「それが終わるまでは入れておけとのことだ」

ドゥーエは『世界大戦争』終戦後、管理局に保護……というよりも逮捕されたみたいな形だった。彼女がしたことを考えるとそうなるからだ。

「……」

【その時、自分はもう妹たちに会えないまま終わってしまうと思い

ました。しかし……】

「おい……」

そこに、1人の男がやってきた。

「あぁ、何だ？」

「上からの命令だ……――」

――彼女を釈放しろ……

「なに……」

「何言ってんだよ！こいつは……！」

「上の連中が決めたことだ。俺はそれに従って彼女を引き取りに来た」

「で、出鱈目（でたらめ）なことを……」

「これを見てもか？」

【彼は上層部の決定した内容が書かれた報告書を見せたのです。私には見えませんでしたが、局員の顔色が変わったので間違いないと思いました】

「た、確かに……」

「では、引き取らせてもらうよ」

「あ、あぁ……」

「……」

「君、大丈夫かい？」

「ええ、なんとか……」

「そうかい……じゃ、会いに行こうか」

「……誰に、ですか？」

【彼は私に微笑んでこう言いました】

――君の妹たちに……

【妹たちに会ったあと、私は自分を変えたいと思いました。今こうして生きているのには理由がある……彼がそう言っていましたから――】

ドゥーエ

「そして、今の私がここにいるということです」

セイバー

「そうでしたか……」

メタナイト
「それで、彼は今……――」

ドゥーエ
「元気ですよ。今も私たちの近くで見ていることでしょう」

その言葉でメタナイトは、1人の男の名前が浮かんだ。

メタナイト
「ドゥーエ、その人は……もしや……――」

メタナイトが気づいたことに、ドゥーエは気にすることなく話を進める。

ドゥーエ
「たくさんの人に囲まれて自分の道を進んでいく、仲間想いの最強さんですよ」

そこでメタナイトは確信を持った。彼が今のドゥーエにしたのだと……。

ドゥーエ
「では、私は次のところに行きますので……」

そう言ってドゥーエは会議室を出た。

メタナイト
「……」

セイバー
「メタナイト、どうかしましたか？」

メタナイト
「いや、人は変われるものだなと、改めて実感していただけだ」

セイバー
「……そうですね」

ドゥーエ
「……」

ドゥーエは、首に掛けているペンダントを握った。

『あなたには感謝しているのですよ。あの残酷だった私をこんなにまで変えてくれたのですから……』

ドゥーエ
「……ありがとうございます。“――”……」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

M&

第３７－Ａ話：帰郷と交渉（前書き）

※これから先の話は、３つのパートに別れます。

第３７－Ａ話：帰郷と交渉

芳佳
「あの～……ありがとうございます。何から何まで」

優太
「いやいや、これくらい大したことはない」

優太は“宮藤芳佳”と、リーネこと“リネット・ビショップ”と共に行動している。２人を元の世界に帰すためである。なぜ、彼が１人なのかというと……

ファウニル・ローゼ率いる偵察部隊の件について、新機動六課が慎重になっているためである。そのため、優太は自分の部隊――というより、綾華たちを護衛につかせたのである。少なくとも、組織の人間よりは強い……。

リーネ
「でも、ほんとによかったんですか？」

優太
「ああ、綾華もいるから問題ない。そのかわりに、少し寄り道しても構わないか？」

２人は頷く。

優太

「よしっ、それじゃあ……」

優太たちは、ある場所へと向かった。

そこは、星空が見える野原――野原では少女が2人いた。

「ねぇ……聞いてもいい？」

「……何を、聞きたいの？」

「どうして、今も生きてるの？」

「あの人のお陰、かな……」

「あの人って、前に会ったあの男の人のこと？」

コクリと頷く。

「私が何の影響もなく生きているのは、彼がいたからなの。道を誤った私を正しい道に連れ戻してくれた……今こうして2人で話せる機会をつくってくれた……」

「そっか……それじゃあ、その人に恩返ししないとね」

「そうだね。だから――」

《ざっ……》

「あなたに恩返しがしたいんです……」

「そうか……わかった」

少女は、いつの間にかいた男に言うと、男は即答した。

「君はどうする？これから君のとこのお偉いさんに交渉しに行くところだが」

「私は……」

《ぎゅ……》

もう1人の少女は手をぎゅっと握りしめた。

「私は一緒にいたい……もう大切なものは失いたくない……！」

「そうか……」

男は羽織っていたマントを翻(ひるがえ)した。

「では、これからよろしく頼むぞ。諫山黄泉(いさやまよみ)さん、土宮神楽(つちみやかぐら)さん……」

黄泉

「はい……！！」

神楽
「よろしくお願いします！えっと……」

「俺は優太……秋本優太だ……――」

「……で、私にどうしろというんだい？」

優太
「諫山黄泉、土宮神楽……弐村剣輔（にむらけんすけ）の3名を預からせていただきたく――」

「あんた……嘗めてるのかい？」

優太は、神楽と黄泉が“勤めている”【環境省・自然環境局・超自然災害対策室】、通称・超災対策室に挨拶に来た。そこで彼は3人に手伝ってほしいと対策室の室長、峰不死子に願い出た。

優太
「あなた方も気づいているはずです。自分達で対応できない“モノ”がいることに……」

不死子
「……」

優太
「こちらが情報提供する代わりに彼女たち3人を連れて行かせてほしい……それだけの話ですよ」

不死子
「……」

局員
「室長！こんな男の言うことを聞く必要は……」

不死子
「いいだろう」

局員
「室長っ！！」

不死子
「考えてもみな、その情報で国民がどれだけ救えることか」

局員
「ですが……」

不死子
「責任は私がとる、それでいいだろ？」

室長に意見していた局員はその一言で口を閉ざした。

不死子
「まぁ、連絡係としてもう1人同行させる……この条件は呑んでもらえたらってことで」

優太
「もちろんですとも……」
こうして、対策室は事実上新機動六課に協力することになったのである。
「……」
「ターニャ！！もうやめよう！」
「……私は知りたかった……なぜスオウが能力者になっても感情を持ち続けるのか。私にもまだ感情が残っていたら、あんなことには……」
「ターニャ……後悔、してるの？」
「してると思う。でも、それがはっきりと分からないの。この能力を持ったときからずっと……」
「ターニャ……」
【ＤＡＲＫＥＲ　ＴＨＡＮ　ＢＬＡＣＫ】の世界……
そこではスオウとターニャが対峙していた。
【※アニメ第２期の８話辺りの話です】
「スオウ、あなたは……――――」
《パァーン！！》

銃声がターニャの言葉を遮った。

――――――――――――

「はぁ……ダメだね」

2人のやりとりを、スオウの双子の弟である“シオン・パプリチェンコ”が見ていた。

「スオウ、君には悪いけど、彼女は君の邪魔になる存在だ。だから……」

《ガチャ……》

「消えてもらうよ……」

シオンはライフルの照準をターニャに定めた。

そして……

《パァーン！！》

銃声が鳴り響いた……

――――――――――――

……

……

……

……アレ？

「えっと……これってどういう――」

「まったく、あのままだったら狙撃されてたんだぞ。少しは周りを気にしたらどうなんだ？」

「あ、はい……」

銃声が聞こえた。なのに怪我していない。

なぜだ……

自分が狙った少女――ターニャは生きている。

なぜだ……

答えは簡単だ

彼女の傍にいる人物が

彼女を狙っていた銃弾を

防いだからだ

「この世界に来た途端、“この展開”だったからな。間一髪ってとこだ」

「あの、それってどういうことですか？」

「ん、知りたいか？でも、今は此処を離れた方がいいぞ。また狙われるかもしれないからな」

「は、はい」

その人物はスオウとターニャの手を掴むと、どこかに行ってしまった。

「あいつは、まさか……」

シオンには心当たりがあった。『竜の爪』からその人物の話を聞いていたのである。

「ええい、まだ2人は見つからないのか！」

「み、美緒、落ち着いて！」

「これが落ち着いていられるかっ！」

怒声をあげているのは、芳佳の上官に当たる“坂本美緒（さかもとみお）”。芳佳と

リネットが何者かに連れていかれたことを聞き付けると、愛機のストライカーユニットである『Ｎ１Ｋ５－Ｊ紫電改五型』で捜しに行こうとしているのだ。

「まずは落ち着いて。話はそれからよ」

美緒が出るのを止めているのが“ミーナ・ディートリンデ・ウェルゲ”である。

「そうだぞ。そんなに取り乱していては、できることができなくなってしまうぞ！」

ミーナと一緒に美緒を抑えている“ゲルトルート・バルクホルン”が言う。

美緒
「だがッ！！」

《バシンッ！》

バルクホルン
「落ち着けと言ってるだろっ！！」

バルクホルンの手が美緒の頬を赤くした。

美緒
「バルクホルン……」

ミーナ
「トゥルーデ……」

《ピピッ！》

ミーナ
「こんなときに通信だなんて……」

バルクホルン
「私が抑えている。ミーナは……」

ミーナ
「ええ……お願いね」

ミーナはその場を離れ、通信室に向かった。

バルクホルン
「……少しは落ち着いたらどうだ？」

美緒
「あ、ああ……今ので少しな」

バルクホルン
「２人のことを心配しているのはミーナも同じだ」

美緒
「ああ……見ていてわかった」

バルクホルン
「なら――」

「大変よッ！！」

バルクホルンが言おうとしたとき、通信室に行ったミーナが戻ってきた。

美緒
「ミーナ、どうかしたのか？」

ミーナ
「そ、それが……」

――宮藤芳佳とリネット・ビショップの2名を保護して連れてきたって……

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

第３７－Ａ話：帰郷と交渉（後書き）

※感想等がありましたら書き込みをお願いします。

第３８－Ａ話：帰郷と交渉（後編）（前書き）

※前回の続きです。

第３８－Ａ話：帰郷と交渉（後編）

【ストライク・ウィッチーズの世界】

優太は芳佳・リーネと共に美緒たちが来るのを待っている。しかし、優太はなぜか仮面をつけている。それは、“青い死神”と呼ばれていた頃につけていたものである。

芳佳
「優太さん、その仮面は……」

優太
「ああ、少しやりたいことがあってな」

リーネ
「やりたいことっていうと……」

優太
「ちょっと彼女たちを試したい……ってところかな」

２人は首を傾げる。そこに美緒・ミーナ・バルクホルンがやってくる。２人の安否を確認したところで美緒が口を動かす。

美緒
「２人をここまで連れて来てもらったことに感謝する」

優太
「当然のことをしたまでです」

ミーナ
「そうですか。ところで、私たちと話をしたいということですが……」

優太
「はい、“この会話を《聞いている》上層部の方々に関わることですので”」

今の言葉にミーナの顔が僅かに動いたのを優太は見逃さなかった。

優太
「私のことを部外者だとか不審者などということで疑っているようですが、それは当人たちから聞けばわかることですし、それで信じてもらえなければ――」

《ドサッ》

優太
「今回の出来事を綴った資料を用意しているので確認してもらえば分かることです」

ミーナ
「……わかりました。あとで確認させてもらいます」

優太は『それで結構です』と言うと、咳払いをした。

優太
「ここからが本題なのですが、そちらでは対応ができない未確認生命体がいるみたいですが……いつ頃から出現するようになりましたか？」

ミーナ
「確か、2週間くらい前かと」

優太
（2週間前か……この世界での2週間前といえば、各世界が歪みはじめた頃だな）

バルクホルン
「それがどうしたというのだ」

優太
「いえ、少し気になることがありまして」

美緒
「気になること？」

優太
「未確認生命体（アンノーン）と戦った魔女（ウィッチ）はいますか？」

ミーナ
「は、はい。私たち3人は戦ったことがあります」

優太
「そのとき、何か気づいたことはありませんか？」

ミーナ
「気づいたこと、ですか？」

バルクホルン

「そういえば、奴らの行動は変だったような気がする」

優太
「変、というと？」

バルクホルン
「こちらの様子を窺っているようだった」

優太
（様子を窺う？　そんなことが実際にあるのか？　あったとしたら、奴らは誰かの指示で動いていたということになるが……）

《ピピピッ！！》

突然、優太の通信機が鳴り出した。通信元は緑からだった。

優太
「ちょっと失礼……もしもし――」

緑
『優太さんっ！　大変なのっ！』

優太
「いきなりどうしたんだ？　どういうことか説明してくれないか？」

緑
『それが……』

と、緑が何かを告げようとしたところに1人の隊員がやってきた。

隊員
「ミーナ中佐、上層部から連絡が入ってきています」

ミーナ
「こんなときに……？　それで……何て？」

隊員
「何でも、上空に新たな未確認生命体（アンノーン）が出現したとのことです」

優太
「未確認生命体（アンノーン）、だと？」

緑
『は、はい……』

優太
「……映像は出せるか？」

緑
『えーと、ちょっと待ってくださいね……っと、映像を出しますね』

優太は通信機についているモニターで確認した。

優太
「こいつは……」

芳佳
「あれは、何ですか……」

美緒
「……見たこともないな」

芳佳たちは、外に飛び出して上空の生命体（もの）を確認した。
見た目は雲なのだが、雲は黒くて目玉のようなものがついている。
厄介なことに、その生命体はネウロイと一緒にいるのだ。
そんな彼女たちに遅れて優太も外に出てきた。そして、謎の生命体を見て言った。

優太
「あれは、魔獣だな……」

芳佳
「魔獣って、前に聞いた……」

優太
「そうだ。だが、奴は今まで見たことのない魔獣だ」

芳佳
「そうなんですか？」

優太
「ああ……奴らはカービィという戦士でも苦戦した種族だ。魔女（ウィッチ）の力（ちから）でも苦戦するだろう」

リーネ
「じゃあ、どうすれば……」

優太は通信機で誰かと連絡をとった。

優太
「……ミーナ中佐、お願いがあります」

ミーナ
「……何かしら？」

優太
「他の魔女（ウィッチ）を出撃させないでいただきたい」

優太の発言にその場にいた皆が驚いた。

ミーナ
「理由を聞いても良いかしら？」

優太
「こちらで魔獣を相手するための人物を呼んだからです」

美緒
「……信用できるのか？」

優太
「ええ、かなりの腕の持ち主ですからね。ほら、さっそくあそこに……」

優太が示したところには、黒い雲と対峙する翼をつけた戦士と甲冑（かっちゅう）の剣士――メタナイトとセイバーがいた。

メタナイト
「ふむ……連絡を受けてきてみたが、少々厄介だな」

セイバー
「メタナイト、こいつは……」

メタナイト
「黒雲魔獣、ブラック・クラッコ……クラッコを黒くした奴だが、奴の雷の方が強力だ」

セイバーは『なるほど』と言うと、ネウロイに目を向ける。

セイバー
「それと、あのネウロイとかいうのは“コア”を破壊しないといけないそうだな」

メタナイト
「そっちの方はセイバーなら出来るんじゃないのか」

セイバー
「……何とかしてみましょう」

メタナイトは広げた翼を羽ばたかせ、セイバーは魔力で足場を作る。
そして、互いの相手のところへ向かった。

【メタナイト側】

メタナイトはブラック・クラッコを相手にする

メタナイト
「しかし、クラッコがなぜここに……」

と思っていると、雷をメタナイトに向けて放った。

メタナイト
「今は奴を倒すことに専念しよう」

速度を上げ、すぐさま懐(ふところ)に入った。

メタナイト
「はあっ！！」

《ザンッ！！》

ブラック・クラッコ
「グアァァァァア！！」

目玉を斬られてフラフラとしているブラック・クラッコに追い討ちをかけるようにして、メタナイトは斬った。

ブラック・クラッコ
「ギャアァァァァァァア！！」

その叫び声を最後に雲は散り散りとなり、跡形もなく消え去った。

メタナイト
（魔獣にしては攻撃が少なかった気がしたが……）

メタナイトは魔獣の行動に疑問を抱いた。

メタナイト
「この戦いが終わったあとに聞いてみることにしよう」

メタナイトは呟いたあと、優太のいるところに軌道を向けた。

【セイバー側】

セイバー
「……」

セイバーはネウロイを黙視する。

セイバー
（奴がこの世界での敵、といったところか）

そのネウロイは、１つの町を覆いつくせるほどの大きさだった。

セイバー
（コアを探すのだけで苦労しそうだな）

だが、そう言っているセイバーは苦労だとは思っていなかった。むしろ、自分達のようなサーヴァントよりも容易いと思った。なぜな

ら……

セイバー
「攻撃が少なく、弱点の場所も“はっきりと”分かる」

セイバーは“風王結界（インビシブル・エア）”でネウロイの頭部周辺を斬った。

セイバー
「……やはりそうか」

セイバーが目を向けた先には、ネウロイのコアらしき赤い物体があった。

セイバー
「ならば……」

セイバーは瞬時にネウロイのコアに近づいて破壊した。

セイバー
「これでは腹ごなしの運動にもならないな」

と呟くと、セイバーはメタナイトと合流するために足を進ませた。

バルクホルン
「な、んだと……？」

美緒
「あのネウロイを瞬殺、だと？」

ミーナ
「……頭が痛いわ」

メタナイト・セイバーの圧倒的な強さに驚きを隠せないバルクホルンと美緒。そして、ネウロイの迎撃の早さに頭を抱えるミーナ。

優太
「彼らのような強者が貴女方の見方となってくれれば……解りますよね？」

ミーナ
「……貴方の仲間になれ、と？」

優太
「さすが隊長だけのことはありますね」

ミーナはしばらく考えた後に優太に向かって言った。

ミーナ
「……わかりました。貴方の申し出を受け入れます」

優太
「それが懸命だと思いますよ」

こうして、優太は魔女（ウィッチ）をも仲間に率いれたのである。

go to next episode……

第３７－Ｂ話：神曲の世界にて……（前書き）

※新機動六課の他メンバーが訪れる世界は、タイトルどおりの世界です。

第３７－Ｂ話：神曲の世界にて……

それは、些細なことから始まった……

カービィ
「モグモグ……」

銀時
「なぁ……」

カービィ
「モグモグ……んっ、なに？」

銀時
「お前……太ったか？」

カービィ
「ポヨ？」

はやて
「えっ、太った？」

フェイト
「カービィが？」

なのは
「そんなふうには見えないけど……」

見たところ、カービィはいつも通りの姿である。

銀時
「考えてみろ。コイツは見た目はこんな丸いだけの奴だが、吸い込んでコピーすれば違うだろ？」

一護
「そりゃそうだけどよ」

恋次
「それで太ってるつーのはな」

コピーしたカービィは姿が変わるのは事実だが、それで太っているとは断定できない。

銀時
「だったら、実際に確かめたらどうだ？」

そう言って銀時は体重計を出した。

銀時
「それに乗ってみな」

カービィ
「うん、わかった」

そこでカービィの体重を量(はか)っておしまい、だったのだが……

《バリーン！！》

《メリメリ》

《ビヨヨ～ン》

「「「……」」」

カービィ
「ポペ！？」

はやて
「た、体重計が……」

フェイト
「壊れちゃった、ね……」

なのは
「カ、カー君……？」

銀時
「な、なあ……お前、空飛べるよな。ちょっと飛んでみせてくれよ」

カービィ
「ペポ！」

《バタバタバタ……》

《ずりずりずり……》

一護・恋次
「「ぜんぜん浮いてねーぞ！！」」

カービィ
「ポペペ……」

銀時
「こいつは重症だな……」

はやて
「う～ん……困ったなぁ、これから行くとこは“神曲奏界ポリフォニカ”の世界なのになぁ……」

【竜の爪・対策室】

竜騎兵
「なに……カービィが？」

竜兵1
「はい、空を飛べないくらい重くなったとか」

竜兵2
「しかも、体重計に乗れるようになるまで吸い込みはできないとか」

竜騎兵

「そうか……ならばこのことを聖唱竜様に報告しなければな」

「「ハッ！」」

～～～

～～～

カービィ
「それじゃ、ご飯を食べに――」

《ザンッ！》

フェリス
「貴様、その身体で食えると思ってるのか？」

カービィ
「え、えーと……」

ライナ
「コイツの相手は俺でも無理だ、だから諦めることだな」

カービィ
「そ、そんなぁ～～～」

「おい」

ライナ
「何だ、よ……」

「「「……」」」

新機動六課メンバーは声が出なかった。
なぜなら、声をかけてきたのは、竜兵だったのである。
新機動六課メンバーは身構える。
はやて

「……こんな人前で敵に声をかけるのはどーゆーことや？」

竜兵１
「この世界での我らの主が此処での戦闘をよく思っていないのでな」

竜兵２
「場所を変えたいのだが……」

一護
「なに……？」

はやて
「……そっちにも何かしらの事情があるってことやな」

フェイト
「こっちも一般人を巻き込みたくないって思ってるから」

なのは
「別に良いかな」

竜兵３
「では、こちらへ……」

なのは
「……あれ？」

フェイト

「どうかしたの？」

なのは

「カー君が見当たらないの」

フェイト

「あ……ホントだね」

なのは

「私、カー君を探してから行くね」

フェイト

「わかった」

――――――――――――――――――――

はやて

「こんな人気（ひとけ）のないなら思う存分戦えるな」

フェイト

「思う存分って……」

一護

「それは不味いんじゃねえか？」

はやてたちが話していると、この場にいる『竜の爪』をまとめている人物――聖唱竜が口を動かした。

聖唱竜
「お待ちしていました、新機動六課のメンバーの方々」

はやて
「あなたが『竜の爪』のメンバーの1人やね？」

聖唱竜
「そうですが……なにか？」

はやて
「あれだけ多くの兵士さんを相手にさせられるなんて思ってなかったからなぁ、そのお礼をしたいんやけど……」

聖唱竜
「そういうのは要らないのですが……」

はやて
「まあまあ、そう言わずに」

フェリス
「受けとるがいい」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

なのは
「カー君、どこに行ったんだろ……あっ」

町中の噴水広場……そこでは、神曲楽士たちが町の人のために音楽を奏でている。その中に見覚えのあるピンクボール――――カービィの姿があった。

カービィ
「ポヨ……」

なのは
「もうっ、こんなところにいた」

カービィ
「なのはさん……」

なのは
「どうしたの？」

カービィ
「僕……そんなに太ってるのかな？」

なのは
「うーん……見た目は変わんないけど、前にも同じようなことはなかった？」

カービィ
「あったよ」

それは、カービィが間違えて（？）隕石を飲み込んでしまったとき

だった。そのときも今のような状況になった。

なのは
「それじゃ、口の中のものを出してみたらどうかな？」

カービィ
「う、うん……」

カービィは人気のない場所に移動した。

そのとき、なのはは1人の少年と、彼の傍にいる1人の少女に目を向ける。

なのは
「あのふたりは……」

なのはは2人に声をかけた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

《ガキィーン！》

「くっ……」

「うおりゃあァァァァァ！！！！」

《ブォン！！》

「ハァ……ハァ……」

「なかなか、やるじゃねーか」

（雷牙ど互角……いや、それ以上の力を持っているというのか……！）

エレキギターで激しく弾く中で、ユリアは自身の敵である銀時の実力を改めて実感した。

銀時
「そんな電撃で俺をやろーてんなら……」

銀時の服は所々焦げている。雷牙の電撃を何度も受けているにも関わらず立っている。そして、洞爺湖を雷牙に向ける。

銀時
「何度でも立ち上がって相手になってやらぁ」

雷牙
「くっ……」

一護
「月牙、天衝ーッ！！」

竜兵たち
「「ギャーッ！！」」

一護
「ったく、こいつら……」

恋次
「数が多すぎだろ」

竜兵を斬る一護と恋次だが、相手が多すぎる。

ガードアーマーII
「グオォォーーーッ！！！！」

《ズズーン……》

フェイト
「ハアッ！！」

《ザンッ！！》

ライナ
「《求めるは雷鳴――――稲光》！！」

ガードアーマーII
「ギャオォォーーーッ！！」

元ＸＶ機関の幹部――スイレーヌやサンダナ――が提供した情報から作り出されたハートレスたちもいるため、かなり苦戦している。

フェリス
「つまらないな」

そんな中、フェリスだけは竜兵とハートレスを余裕をもって相手していた。

竜兵1
「つ、強い……」

ガードアーマーII
「グ、グォォォ……」

フェリス
「もっと強い奴はいないのか？」

マミヤ
「それでは……」

リン
「えと……」

フェリス
「ほぅ……2人して相手になってくれるのか？」

実際、フェリスの相手をするのは、マミヤとリンの精霊――ホワイトクロウと烈風である。

フェリス
「フッ、どこからでもかかってくればいい」

聖唱竜
「……」

レイラ
「……」

はやて
「……」

はやては聖唱竜とレイラの2人と対峙している。これは……

なのは
「修羅場っていうのかな？」

カービィ
「でも、傷は全然ないよ」

はやて
「そうやね……って、いつのまにいたんや！？」

なのは
「ついさっきだよ」

はやて
「さっきって……」

はやては気付く。カービィがフワフワ浮いているのである。

はやて
「……さっきまで飛べなかったよな？」

カービィ
「それね……えっとね……」

モジモジしているところをみると、恥ずかしいことなのだろう。はやては敢えて聞かないことにした。

はやて
「それより、なのはちゃんの後ろにいる子達は？」

なのは
「えっとね……私たちの手伝いをしてくれる子達を連れてきたの」

はやて
「その子達ってもしや……」

そこで聖唱竜は気付く。彼女たちに協力するこの世界の人物と言えば、1人――ここでは2人だろうが――しかいない。

なのは
「紹介するね。こちらは……」

なのはが紹介する人物に聖唱竜は驚愕することになる……

「はじめまして、“タタラ・フォロン”といいます」

「……コーティカルテだ」

to be continued……

第３７－Ｂ話：神曲の世界にて……（後書き）

※感想等がありましたら、書き込みをお願いします。

第３８－Ｂ話：神曲の世界にて（後編）（前書き）

※前回の続きですが話は短いです。なので今回はおまけ話付きです。

第３８－Ｂ話：神曲の世界にて（後編）

聖唱竜
（フォ、フォロン君！！それに、始祖精霊まで……）
なのはがはやてに話しているが、その言葉は聖唱竜の耳には入らなかった。

レイラ
「く、こうなれば……」

聖唱竜の動揺を察したレイラは剣を振りかぶった。
しかし、それはカービィのコピー技・ソードによって阻まれた。

カービィ
「話をしているときに攻撃したらダメだよ！」

レイラ
「今はそんなことは関係ないっ！！」

カービィの背後に回り込み攻撃を仕掛けるが、ジャンプされてかわされる。

レイラ
「戦いとは常に死と隣り合わせだ。私情や雑念を持っていると、いつかは死ぬぞ」

カービィ
「じゃあ、お姉さんの剣に感情が込もっているのは何？」

レイラ
「なに……？」

カービィ
「剣を交える者同士だから分かるの。お姉さんがあの仮面の人のことを気にして戦っていることに」

レイラ
「そ、それは……」

そのとき、僅かにレイラは気を緩めた。そこに、カービィが“ソードビーム”を放った。

レイラ
「くっ……」

間一髪のところで避けたが、足に擦り傷程度の傷口から血が流れ出る。

レイラ
「（聖唱竜の彼に対する動揺があまりにも大きすぎたか……）総員、ただちに撤退だ！」

レイラの号令のもと、竜兵たちはすぐさま撤退した。

なのは
「とりあえず、これでひと安心かな」

はやて

「せやな。でも、これからが大変やな」

フェイト
「そうだね……」

戦闘を終えたフェイトが苦い顔をしながら、なのは・はやてに相槌(あいづち)を打つ。

アリシア
「それじゃあ、戻って報告書でもつくりましょうか」

こうして、新機動六課メンバーは帰路についた。

ｇｏ　ｔｏ　ｎｅｘｔ　ｅｐｉｓｏｄｅ　……

【おまけ1】

はやて
「そういえば、カービィの太った原因は何だったんや？」

なのは
「それがね……」

カービィ
「口の中に“エアライド・マシン”が入ってたの」

フェイト
「エアライド……マシン？」

なのは
「カー君がワープスターみたいに乗ってるマシンなんだって」

アリシア
「なんでそんなものが口の中に？」

カービィ
「う～ん……何でかは分からないの」

はやて
「何でやろ～な～」

５人
「う～ん……」

……

……

優太
「ドラグーンにハイドラ……しっかり使ってくれたかね」

あんたの仕業かいっ！！（ｂｙ作者）

優太
「何か問題でも？」

……

【おまけ2】

フォロン
「えーと……」

コーティカルテ
「なんだ、フォロンは不満なのか？」

フォロン
「知らない人ばっかりだから……」

コーティカルテ
「私は不満なんかないぞ」

フォロン
「そう言ってるコーティの身体が震えているのは何？」

コーティカルテ
「そ、それはだな……」

なのは
（緊張、してるよね？）

フェイト
（してるね）

はやて
（してるな）

アリシア
（絶対してるね）

コーティカルテ
「これは、その……武者震いだ」

4人
（（（（（苦しい言い逃れだぁぁぁ！！））））））

【おまけ3】

ライナ
「なあ……」

銀時
「何だ？」

ライナ
「俺らの出番が少なかったような気がするんだけど」

一護
「少しでも出れただけでいいじゃねえか」

フェリス
「全く出番がなかった奴らよりもマシだからな」

ライナ
「そ、そうだな……」

カービィ
「今回の話はここ以外では出番ないよね」

４人
「それを言うなっ！！」

カービィ
「ポヨ？」

第３７－Ｃ話：シメオン製薬ビルにて（前書き）

※３つ目のパートです。

第37－C話：シメオン製薬ビルにて

綾華
「ここね……」

絢
「う、うん……」

綾華と絢は、シメオン製薬ビルの外にいた。

綾華
「警備が厳しいね」

絢
「管理局が監視していたことを嗅ぎ付けたみたいで」

そう、と綾華は軽く返す。

綾華
「それに、ただの様子見だから無理はしないわ」

絢
「それならいいんだけど……」

？？？

「アークライトよ、外にネズミが2匹いるようだが……いかがする

かな？」

アークライト
「別に良いではないか、これからのショーを見せるのには相応しい」

？？？

「では、我々の部隊で対応するとしよう」

アークライト
「ああ、こちらも彼女の部隊に動いてもらうことにするさ」

「アークライト様から“少女部隊”に指示が出されました」

楼閣寺離瑠（ろうかくじりる）直属の暗殺部隊である“少女部隊”に、アークライトからの指示が伝えられた。

離瑠
「『外部からの侵入者を抹殺せよ』とのことです。くれぐれも気を付けるようにしてください」

部隊員
「ハイッ！」

離瑠
「では各員、持ち場につきなさい！」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

胡桃
「侵入者って、セツナたちが逃がした子かもね」

セツナ
「なっ、何よ藪(やぶ)から棒に」

未央
「そんなことないよ！」

胡桃
「……どうかしらね」

梔(くちなし)
『どうもこうもないよ』

セツナ
「でも、もしそうだとしたら……」

梔
『必ず掴【×】捕【○】まえる』

未央
「んい！」

胡桃
「そうなることを期待しましょ」

【シメオン製薬ビル内】

綾華
「案外、部隊の人たちは大したことなかったわね」

絢
「いやいや！綾華お姉ちゃんが強すぎるんだよ！」

綾華の足元には、気を失っている少女部隊のメンバーの姿があった。

綾華
「それじゃあ、偵察始めに……」

【格納庫】

絢
「なぜ格納庫に？」

綾華
「敵の戦力を見るのに最適な場所だからよ」

絢
「なるほどぉ……」

2人は格納庫の品々を確認する。

シメオン製薬所有のロボット、テスタメント。ハートレスでは最下級クラスの敵キャラ、シャドウ。そして……

絢
「綾華お姉ちゃん、これは？」

綾華
「これは……」

綾華が目にしたのは、ハートレスのソルジャーとワイバーンを合わせたような生き物だった。しかも、その生き物は何体もいて、その胸には竜とハートのマークが刻まれている。

綾華
「ハートレスなのは確かね。でも気になることがあるの」

絢
「気になること？」

綾華
「なぜシメオン製薬は他の組織と手を組んだの？」

アークライトは、自身の力を持ってすれば向かうところ敵なしである。

しかし、彼は他の組織の部隊を引き連れている。

絢
「そういえば……」

綾華
「考えられることは……」

――他の組織の技術を我が物にして、その組織を潰す。

絢
「そ、そんなことが本当にあるの？」

綾華
「あるかもしれないってことは言えるわね」

絢
「そんなことになったら大変だね」

綾華
「そうね。とにかく、これは壊した方がいいわね」

綾華が百合を手に取り、ハートレスを容赦なく斬り倒す。そして、格納庫からハートレスの姿がなくなった。

綾華
「ふぅ……とりあえず、これでひと安心ね」

絢
「そうだね。次はどうするの？」

綾華
「管制室も見ておきたいけど警備が厳しいから、また今度にしまし

よ」

絢

「それじゃあ、出口に――」

「そう簡単に逃がすとでも思ってるのかしら？」

綾華

「あらあら……」

綾華たちの目の前に、離瑠と彼女の率いる少女部隊の姿があった。

綾華

「見逃してもらうってのはないの？」

離瑠

「それは無理ですね。アークライト様から貴女方を抹殺するようにと指示されているので」

綾華

「そう……」

絢

「綾華お姉ちゃん……」

綾華

「大丈夫だよ、無事に帰るって約束したんだから」

綾華は絢の手を握りしめ、百合を強く握った。

綾華
「少し手荒になるけど、我慢できる？」

絢
「うん……」

綾華は絢が小さく頷いたのを見ると、目を瞑った。

離瑠
「あら、さっきの威勢はどこに行ったのかしらね」

離瑠は、少女部隊を綾華たちを囲むようにして待機させている。

離瑠
「それじゃ……」

離瑠は自身の力――サイコキネシスで綾華たちを殺ろうしていた。
そのとき……

《ドサッ……》

離瑠
「え……」

綾華たちを囲んでいた少女部隊メンバーが次々と倒れていく。

離瑠
「貴女……何をしたの？」

綾華
「何って、ただ眠ってもらっただけですよ。あと、急所は外しているので心配ないです」

綾華の周辺には百合の花びらが落ちていた。

綾華
“百合の舞”……相手を眠らせる技です」

離瑠
「くっ……それならっ！」

離瑠は残りの少女部隊メンバーに攻撃命令を出した。

綾華
「仕方ないわね……」

綾華は百合を軽く振った。すると、百合から強い風が出て少女部隊メンバーを襲った。

綾華
「“疾風（はやて）”……」

疾風（はやて）――突風を吹かせて相手を攻撃する技……

綾華
「“百合の舞”のサービスをしたから、しばらくは起きないわ」

離瑠
「貴女……っ！！」

綾華
「あなたも少し休んでね……」

《スゥ……》

離瑠
「なっ……消え――」

《ザンッ！》

離瑠
「！？」

姿と共に気配が消えたかと思うと、百合が離瑠の身体を傷つけていた。

綾華
「――忍びの舞、気に入ってもらえましたか？」

離瑠
「気に入るもなに、も……」

斬られていないのに――と離瑠が言い切る前に身体に痺れを感じた。

離瑠
「な、なに、を……」

綾華
「忍の舞はね、相手に斬られたことを知ることなく痺れを感じる…

……そんな技なの」

離瑠
「くっ……」

綾華
「それじゃ、また会いましょ。シメオン四天王の1人、楼閣寺離瑠さん……」

綾華は絢と共にその場をあとにした。

その後、離瑠は戻ってこないことに不満を持ったセツナたちが来るまで、その場を動くことはなかった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

第３７－Ｃ話：シメオン製薬ビルにて（後書き）

※感想等がありましたら、書き込みをお願いします。

第３８－Ｃ話：〇〇マスター風にアレンジした話は面白いものだ（前書き）

※前回の話とは独立した内容となっています。

第３８－Ｃ話：〇〇マスター風にアレンジした話は面白いものだ

緑
「ふぅ～……やっと終わったぁ～」

何かの作業をしていたのがようやく終わったようで、緑はホッとしていた。
そこに、緑の先輩でもある茜が通りかかった。

茜
「そんな苦労したって言いたそうな顔しちゃって、どうしたの？」

緑
「あ、茜先輩。実はですね……」

緑の説明によると、『最近面白いものがないから作ってほしい』と言う優太からの要望で、ゲームを作っていたらしい。

茜
「それが今完成したってわけね」

緑
「そうです！そのゲーム名は、題してッ！！」

『“ドラゴンネイルマスター”』

茜
「……」

緑
「このゲームは、『竜の爪』メンバーの七魔竜をプレイヤーが操作して『カービィマスター』のように敵を倒していくゲームです」

茜
「……そのゲームの出来具合はどうなの？」

緑
「見てみますか？」

茜は緑が作ったゲームをプレイしてみた。

プレイキャラは七魔竜で、敵キャラは新機動六課メンバーだった。

茜
「……これって面白いのかな？」

緑
「面白いに決まってるじゃないですか！」

茜
「そう、かなぁ……」

茜がプレイすること数分……最終面（ラストステージ）にたどり着いた。ラスボスは……優太だった。

茜
「無理に決まってるでしょ！！優太に勝てるのは、綾華さんか真王

竜くらいでしょ！」

緑
「ところが……このゲームには秘密があるんですよ」

茜
「秘密ぅ？」

緑
「前の面（ステージ）で手に入れた道具（アイテム）がありましたよね？」

茜
「ああ、この“箒”みたいなやつ？」

緑
「それで攻撃してみてください」

茜は言われた通り、箒で攻撃した。すると、ラスボスをあっさりと倒すことが出来たのである。

茜
「何今の！？箒でパタパタ叩いただけで倒せちゃったよ！！」

緑
「どうですか、ラスボスをあっという間に倒すことが出来る“伝説の箒”です！！」

茜
「設定が無茶苦茶（むちゃくちゃ）じゃないの！！」

優太
「……いいじゃないか」

茜
「これでいいのっ?!」

その後、このゲームは大ヒットして優太たちの資金調達もガッポリとできたそうな……

黒美
「なぜ、優太様が主役じゃないんですか?」

緑
「それじゃあ面白くないじゃないですか」

全員
「確かに……」

【おまけ】

七魔竜
「……」

サンダナ
「ん……何やってるんだ?」

七魔竜
「……これ」

サンダナ
「ああ、“ドラゴンネイルマスター”か」

七魔竜
「……（コクッ）」

サンダナ
「そんなに面白いのか？」

七魔竜
「……（コクコクッ）」

サンダナ
「どれどれ……」

サンダナは登場する相手を見る。

【第１ステージ】

０１、新八：ＨＰ５０
０２、ヘイホー：ＨＰ１００
０３、ワドルディ：ＨＰ１００
０４、ヘイホー×３・ワドルディ×３
０５（ボーナスステージ）、コックカワサキ：ＨＰ１００
０６、御坂：ＨＰ４００
０７、当麻：ＨＰ４００
０８、ライナ：ＨＰ３００＆フェリス：ＨＰ４００
０９、神楽：ＨＰ５００

10、銀時：HP1000

【第2ステージ】

11、チンク：HP200
12、雅也：HP300&メアリー：HP300
13、皐月：HP400
14、ヴィヴィオ：HP450
15、リマ：HP500&ナオ：HP500
16、ファウニル：HP550&マイアル：HP550
17、スバル：HP600&ティアナ：HP500
18、はやて：HP800
19、フェイト：HP900&アリシア：HP850
20、なのは：HP1500

【第3ステージ】

21、メタナイト：HP2500
22、セイバー：HP2500
23、カービィ：HP2000
24、クロ：HP2500&マイ：HP1500
25（ボーナスステージ）、ヘビーロブスター：HP500
26、ミレイザ：HP1800
27、茜：HP2000&黒美：HP2000&麗：HP1800
28、緑：HP1500&絢：HP2000
29、綾華：HP2500&光：HP
30、優太：HP3000

※ボーナスステージは経験値が倍になるぞ！！

サンダナ
「最初と最後のギャップがありすぎだろっ！！それに最初の相手が1番弱いだろ！ヘイホーとワドルディより弱いってなんだ！！」

七魔竜
「……でも、面白い」

サンダナ
「ああ、そうかい……」

真王竜
「ハマったらやめられないな」

白天竜
「あなたもやってるんですか！！」

真王竜
「いやいや、やってみたら面白くてな」

サンダナ
「……あたしもやってみようかな」

白天竜
「わ、私も……」

こうして、竜の爪でも大ヒットしたそうな……

go to next episode.....

第３８－Ｃ話：〇〇マスター風にアレンジした話は面白いものだ（後書き）

※小説に関する感想等があったらよろしくおねがいします。

第３９話：大魔王、始動…姉妹、調査する…絵描きの天才、現れる（前書き）

※タイトル通りです。ついに奴が登場します。

第３９話：大魔王、始動…姉妹、調査する…絵描きの天才、現れる

クッパ軍団が黄忠にコテンパンに叩きのめされてから数日後、クッパ城では大魔王クッパが苛立っていた。

クッパ
「なんだと……奴等が戻ってこない？」

クリボー
「は、はい。調査に行ったきり……」

クッパ
「手のかかる奴等め……奴（黒き神）のせいでワガハイの出番が少ないというに」

クッパは青い死神――優太から事情は大体聞いていた。

ノコノコ
「く、クッパ様！　たった今調査部隊の残りが戻ってきました！」

クッパ
「残り……他の奴等はどうした？」

ノコノコ
「何でも、調査先の異世界人にやられて、そこで働いているとか……」

クッパ
「……」

ギュッ！！

クッパの握り拳がミシミシと音をたてる。

ヘイホー
「だ、大王様、落ち着いて！！」

クッパ
「これが落ち着いていられるかぁーーー！！」

そう言ってクッパは口から炎を吐いた。
そこに、クッパの側近のカメックが言う。

カメック
「カメック部隊で優秀な奴がやられたのであるなら、今の部隊では力不足かと……」

クッパ
「お前たちがそんなことでどうするっ！！」

カメック
「で、ですが……」

クッパ
「そうだな……それなら、お前たちを鍛え上げるためにあそこに行くぞ」

カメック
「あそこ、とは？」

クッパ
「……決まっているだろ」
クッパの不適な笑みを浮かべた。

「鍛えるのに適した城――“バトル・キャッスル”にな」

リマ
「はぁ……なんで此処で調査を」

ナオ
「リマ姉が『私たちに任せてください！』なんて言うから――」

リマ
「わ、私のせいだって言うの！」

ナオ
「正論を言ったまでだよ」

リマ
「ナオ、あんたねぇ……！」

ナオ
「何よっ！！」

なんでリマ・ナオのストワール姉妹が喧嘩をしているのかというと……

【回想】

リマ
「えっ、調査？」

はやて
「最近、異世界で見たこともない未確認物体（アンノーン）が出るようになってきてな。その根元と思われる場所が分かったんや」

ナオ
「その場所の調査を私たちにしてほしい、と？」

はやて
「せや……お願いしてもいいかな？」

リマ
「はい！私たちに任せてください！」

フェイト
「それじゃあ、お願いするね」

ナオ
「ところで、隊長たちはどこかに行くんですか？」

なのは
「うん、ちょっと……ね」

優太
「ＩＳ開発者のところへ赴(おもむ)いて、稼働実験に付き合わないといけないことになっている」

リマ
「……それは、あなただけでも良いのでは？」

優太
「それは……」

ナオ
「それは？」

優太
「なんとなくだ」

ガクッ！！

全員コケた。

優太
「実は、そのＩＳに搭乗する人は決めているんだが、魔力に関しての知識が全くないので、詳しく説明できる人を連れていきたいというのが本音だな」

リマ
「最初からそう言ってください！！」

優太
「あ、その世界にいるであろう知り合いに1つ伝言を頼めるか？」

ナオ
「伝言、ですか？」

優太
「そうだ。それはな……」

【回想終了】

そして、物語（ストーリー）は回想前に戻る。

リマ
「それにしても……次から次へと出てくるわね」

ストワール姉妹は、未確認生物（アンノーン）と戦っていた。

ナオ
「敵の数が多すぎるよ」

リマ
「どうしたらいいかしら……」

自分達の父親の父――――シャア・ストワールに鍛えてもらっていたとはいえ、相手にできる数にも限界がある。

「あ、あの……」

「「えっ……？」」

2人は背後から聞こえてきた声の主を見る。
自分達と同い年の少女が絵描きに使う筆とノートを持って立っている。

ナオ
「あ、あの……？」

リマ
「どちら様で……？」

「私、ですか？」

「私は“雨風　雪乃”と言います。ご覧の通り、絵描きをしている者です」

淡い琥珀色の髪をポニーテールにして纏めている、童顔な子である。
背丈は……高い部類には入らない。強いて言うなら、『魔法少女リリカルなのはシリーズ』に搭乗するキャロと同じくらいである。

雪乃
「貴女方はここで何をしているんですか？」

リマ
「えと、実はね……」

リマは、ここにいる理由を詳しく話した。

雪乃
「なるほど……では、この世界に来たのは“優太様”の指示ということですね？」

ナオ
「そうそう、そうなのよ」

リマは今の会話で疑問に思ったことがあった。

あの男――優太を様づけで呼んだことだ。

リマ
「あ、あの……今、彼（優太）を様づけで言いましたよね？　彼とはどういった関係ですか？」

雪乃は、「ああ、そうでしたね」と言うと、ノートに絵を描き始めた。

雪乃
「私は、元々ダークミラーに所属してね。優太様の下で働いていた1人なの」

雪乃はサラサラと筆を進ませる。出来上がった絵は『星のカービィ』に搭乗するクラッコだった。

雪乃
「そこで私はこう言われてたの……」

2人は驚愕した。雪乃の描いた絵が実体化したのである。

雪乃
「“絵描きの天才”――“ペイント・マスター”ってね」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　……

【あとがきコーナー】

皐月
「えっと……久々の更新でまた新キャラ（オリ）出しちゃって」

ヴィヴィオ
「また言われるよ、『原作キャラとの絡みは無いんですか？』って」

作者
「別にいいじゃない、出したかったんだから。それに、原作キャラ同士のフラグをたてたじゃない」

雅也
「『ＩＳ』と『リリカルなのは』でか？」

メアリー
「それなら良しとしましょうか。マスターも出ることですし」

マーブル
「女装した雅也くんが見られる……ぶはっ！！」

皐月
「ちょ、ちょっと！！」

ヴィヴィオ
「マーブルさんが鼻血を出して倒れちゃった！！」

メアリー
「しっかりしろ！！」

綾華
「ふふ……次回以降が楽しみだね」

雅也
「不幸だあぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！！！」

作者
「ではでは、また次回お会いしましょう」

プツンッ！！

第３９．５話：戦士の旅立ち（前書き）

※タイトル通りの話です。そして、話は短いです。

第３９．５話：戦士の旅立ち

それは、ある研究室の中で起きたことから始まった。

【とある研究室にて……】

優太
「ふっふっふっ……できたぞ……ついにできたぞ！！」

部屋の主である優太が大きな箱を手にして叫ぶ。傍にいた綾華が尋ねる。

綾華
「それじゃあ――――するの？」

優太
「ああ……んじゃ、さっそく試してみるとするか」

優太は箱を開けた。

すると、中から『星のカービィ』のザコキャラ・ワドルディが現れた。

優太
「あらゆるモンスターを呼び出すことができる……『モンスター・

ボックス』だ！！」

優太の能力の１つである『人物図鑑（キャラクターライブラリー）』を使えば難なく呼べるはずだが……

綾華
「教練用のものだから」

……なるほど。

優太
「では、ここで……」

優太は箱の蓋を閉めてから再び開けた。

「うがぁぁぁーーー！！」

中から魔獣が出てきた。

バタンッ！！

優太が呼び出したかったモノとは違ったため、すぐに蓋を閉じた。

優太
「……まだまだ改良の余地があるみたいだな」

綾華
「そうみたいね」

～～～

「何故そこで笑う？」

綾華
「何でもないよ……ただ、そこまで言う優太も珍しいかなって思っただけ」

優太
「……ああいう奴は応援したくなるんだよ、無償にな」

綾華
「そう……」

その後、優太は“モンスター・ボックス”の改良を、綾華は優太の作業が終わるまで見守っていた。

～～～

力とは何か……

私はその答えを見つけるため、旅に出ることにした

世界が繋がった今なら――――強者（つわもの）が揃っている今なら、その答えが出るかもしれない

そして……

その答えが出たとき、再び剣を交じりあいたい

彼ら――――メタナイトとカービィに……

私――――ギャラティック・ナイトはそう心に決め、翼を羽ばたかせた

第４０話：青い死神、ＩＳ学園に訪れる（前書き）

※タイトル部分の話は、最後の方でしかしません。

第４０話：青い死神、ＩＳ学園に訪れる

【バトル・キャッスル】

クッパ
「ワッハッハッハッ！！なかなかいいものだな、こういうのも。さすがワガハイ！！」

ホロウ、ハートレス、プリムの大群を相手しているにも関わらず無傷でいる。さすが力（ちから）だけが取り柄の亀の大王・パワーファイター。

だが……クッパ軍団は既に力尽きている者が続出していた。

カメック
「大王様、さすがにこれ以上続けては我々の体力が持ちません」

クッパ
「それでもクッパ軍団の一員かっ！！」

カメック
「ですが……」

クッパ
「仕方ない、ワガハイだけでも……む？」

カメック
「大王様、いかがなさいましたか？」

クッパ

「オマエたちは此処に残っていろ」

そう言ったクッパは、塔の上へと上がっていった。

絵描きには色々なタイプがある。その中でも、飛び出てくる絵を描く者はいないだろう。

ある者は食べ物や生き物を……またある者は幽霊・オバケを……
…またある者は妖怪を……
それぞれ出せる物は限定されている。

だが、2人が目の当たりにしているのは1つ目の現象だった。

リマ・ナオ
「「……」」

雪乃
「人がせっかく絵を描いてたのに……邪魔しないでください」

雪乃が絵から出したクラッコが未確認生物（アンノウン）を攻撃する。

アンノウン
「ガガガガ……」

雪乃
「ただでさえ異世界同士が混ざりあって混乱しているというのに……」

雪乃が雷の絵を描くと、クラッコが電撃をアンノウンに向かって飛ばした。

アンノウン
「ガガッ？！」

リマ
「絵から出てきたモンスターが、モンスターを攻撃してる……」

雪乃
「なにボケッとしてるんですか。今がチャンスですよ」

ナオ
「は、はい！！」

唖然としているリマとナオに指示する雪乃。

リマ
「シューティング……」

ナオ
「アルティメット……」

「「バスターーーーーッ！！！」」

2人の攻撃がアンノウンに直撃。

アンノウン
「グガガ――――」

攻撃を受けたことで消滅していくアンノウン。
完全に消滅したところで雪乃が描いたモンスターを絵に戻した。

雪乃
「終わりましたね」

リマ
「は、はい。あの……」

雪乃
「……何ですか？」

ナオ
「優太さんからここで貴女（あなた）に会ったら、伝えるように言われていることがあるんですけど」

雪乃
「優太様から……私に？」

リマ
「あ、あの、ですね……」

リマはモジモジとしていた。よほど恥ずかしいことなのだろうか、顔が少し赤くなっていた。

リマ
「で、では……！」

リマは意を決して口を動かした。

優太
『君の描いた絵がまた見たいんだ。よかったら彼女たちと一緒に来てくれないかな？』

「「「……」」」

……

この男は何者だ？

こんな言葉で彼女が落ちるわけ――

雪乃
「……ポッ」

あったよ……

雪乃の顔がリンゴのように真っ赤になった。

リマは未(いま)だに顔を赤くしていて、ナオはそんな姉を見て苦笑している。

ナオ
「そ、それじゃ、も、戻りましょうか、く……ククク ッ」

リマ
「な、ナオッ！！！」

リマはナオの苦笑する姿に我慢できなくなり、デバイスをナオに向けて発砲。そんなナオはヒラヒラと避けながら逃げる。

雪乃
「ゆ、優太様、一生御慕えいたします……」

雪乃は1人、優太に対する想いを強めていた。

そんな彼女たちの様子を影からクッパが覗いていた。そして、ひとこと――

クッパ
「何やってるんだ、アイツらは？」

3人
「「「ギロッ」」」

クッパ
「……？？」

3人
「「「み～た～わ～ね～～～！！」」」

クッパ
「……は？」

その後、3人に見つかったクッパは、キツいお仕置きをされてクッパ城に戻ったそうな……。そのときの3人は《白い魔王》にも負けないくらいの気迫があったと、目撃者【カメック】は語る。

【IS学園】

優太
「……？？」

なのは
「どうか、したんですか？」

優太
「いや、誰かに悪口を言われたような気がしたんだけど……」

はやて
「気のせいやろ、たぶん」

優太

「だと良いんだけど……」

フェイト
「あっ、誰か来るよ」

フェイトが言った通り、４人がいる正門の中――学園内から誰かがやって来た。

優太
「ほぅ、お偉いさんが登場か……しかも2人とは」

優太は出迎えに来た人物を見るなりそう呟いた。ちなみに、優太はいつものように仮面をつけている。

優太
「初めまして、私が“青い死神”です。これからよろしくお願いしますね、“ブリュンヒルデ”。そして……」

――ＩＳ学園“生徒会長”……いや、“１７代目楯無”と言った方がいいかな？

千冬
「貴様……何者だ？」

優太
「さっきも言いましたが、青い死神ですよ。ただ、情報量が豊富なだけですよ」

これが、優太と織斑千冬、更識楯無の最初の会話だった……。

to be continued.....

第４０話：青い死神、ＩＳ学園に訪れる（後書き）

※皆さんの感想や意見、待ってます。

ヴィヴィオ

「よろしくお願いします♪」

年末企画第1弾：〇〇愛好会（前書き）

※今年も残りわずかなので、特別企画を用意しました。

年末企画第1弾：○○愛好会

・特別編その1：優太愛好会

【とある会議室】

「今日、皆に集まってもらったのは他でもない……」

バンッ！！

「優太の女性への甘さについて、行き過ぎていないかを討議したい」

「……本編にまだ出ていない貴女が言うことかなぁ、クルミちゃん」

クルミ
「だ、だってぇ！！もっと早く出番が来るはずだったのに、まだその域まで達してないっていうのよ。あり得ないわよ、絶対にッ！！その辺りどう思う、綾華さん？」

綾華
「えぇと……話がずれてるけど、私は優太と一緒にいられるから別にいいかな」

絢
「あたしもお兄ちゃんといるから平気だよ」

茜
「あたしも～～」

黒美
「私もです」

ミレイザ
「見てるだけで面白いわね」

光
「……」

クイ、クイ……

クルミ
「ん……？」

光
「残念、だね」

クルミは渾身の一撃を受けた。

クルミ
「うわぁぁぁ～～～ん！！！」

茜
「あ～あ、泣いちゃった」

黒美
「どうしますか？」

ミレイザ
「そのままでも大丈夫よ」

光
「強く生きて……」

クルミ
「追い討ちをかける言葉を言わないでッ！！」

綾華
「でも……ちょっと気になるかな」

絢
「あ、綾華……さん？」

綾華
「優太は元メンバーに声をかけたときの発言は、ちょっとね……」

『また君の描いた絵を見たいな』

茜
「ああ、あれはすごいよね～～。さすが優太って感じがしちゃった」

黒美

「確かに。人の感情を言葉巧みに動かしますからね」

ミレイザ
「夫と子供がいなかったら、もしかしたら……してたかもしれないわね」

光
「……それが、優太の良いところ」

綾華
「そう……だから強く言うことができないの」

全員
『ハァ……』

こうして、今回の議題についての結論は、『優太は甘いのが普通だから、仕方ない』ということになった。

クルミ
「シクシク……」

絢
「まだ泣いてるよ……」

特別編その２：雅也愛好会

【とある会議室2】

ミニキュリア
「雅也《現在の私のマスター》が、ついにやっちゃった……」

皐月
「あの領域に……」

マーブル
「踏み入れちゃった……」

ヴィヴィオ
「似合うよね、女装姿」

ヴィヴィオたちは、メアリーが撮影した雅美【女装した雅也】を見ていた。

皐月
「女よりも女らしいって、どんだけ似合ってるのよ！！」

マーブル
「雅也くん……（ポッ）」

ミニキュリア

「マーブル、顔が赤いよ」

ミニキュリアは、小さいながらも雅也を《マスター》として日々頑張っている。

ちなみに、ミニキュリアは優太の技術で、過剰使用での生命損失の危機にさらされることはなくなった。

マーブル
「フ、フフ、フフフ……」

皐月
「マーブル、ナイフを出して笑わないでよ……」

ピピッ！！

メアリー
『通信ですまない。主（マスター）についての報告だ』

会議室にいた者【ミニキュリア以外】はビクンと動いた。

そして、ディスプレイには女装した雅也の姿が映し出された。

マーブル
「メアリーのＩＳ化での雅也くんの姿……なかなか様になってる」

皐月
「炎の属性で模擬戦？なかなかやるわね……」

ヴィヴィオ
「こ、これは……」

ヴィヴィオが目にしたのは、雅美の寝巻き姿――この日は淡い色のパジャマだった。

ヴィヴィオ
「似合いすぎだよぉ……」

ミニキュリア
「そ、そうだね」

メアリー
『何度見てもマスターは綺麗だですよ』

マーブル
「メアリー、言葉が変になってるわよ」

メアリー
『う、うむ……失礼した』

こうして、雅也ＬＯＶＥな者たちが雅也の動画・写真を見ながら和（なご）むのだった……

メアリー
『ちなみに、マスターの女装での裸姿の写真は…万円する』

皐・マ・ヴ
「「「買ったぁぁぁぁ！！！」」」

ミニキュリア
「それ、ある意味で詐欺だよ……」

特別編その３：遥かなる未来で

※今後の展開で変わっていくので、この通りになるとは限りませんのでご了承ください。

【とある戦場にて】

「なぜ、そんなに戦うことに執着するんだ！？」

「私の信念を突き通すためだッ！！」

「能力者が味方にする価値はないわぁぁぁ！！」

「そんなこと、関係ないよ……」

「俺は銀を取り戻す……それだけだ」

「能力があるからって、嬉しいことばかりじゃねーんだよ！！」

「お前のその幻想……この手でぶっ壊す！！」

「貴様には失望したよ。だから……神である私の手で葬り去ってくれる！！」

「それはこっちの台詞（セリフ）だぁ！！覚悟しなッ！！」

「私は騎士王……俗物には敗けはせん！！」

「貴様が騎士王などと語るなッ！！」

「ダメね……全然ダメね」

「貴様は此処で塵となれ……」

「あー……マジで寝みぃな……」

「そんなもの、一瞬で吹き飛ばしてくれる！！」

「戦国武将だからっていい気になるなぁぁぁ！！」

「……邪魔」

「さて……決着をつけようか……機巧魔神（アスラ・マキーナ）を持つ者として……」

「来い……！！」

「タク……」

「終わらせるよ……すべて……」

「星の戦士の力……試させてもらうぞ！！」

「ポヨ！！」

「君とこうして手合わせできることが光栄だな」

「こっちもだ。こいつがやりあいたいって疼いてるよ」

「テメェの呪いも役に立たなきゃ価値がねぇーよなぁ！！」

「黙れ！！　お前のような虫けらに価値を評価されたくないわ！呪うぞ！！」

「少し、お話……しよっか？」

「君の話では届かないよ……きっと……」

「俺たちは負けるわけにはいかないんだぁぁぁぁぁあ！！」

「マスタァァァァァァ！！！！」

「誰だ……アンタ？」

「私は……“織斑千冬”だ……」

【※さて……今回の会話に出てきたアニメ・ゲームは何でしょうか？】

ヒント：

1つ目はタイトルに関係していて……

2つ目以降は会話から想像してください。

誰の会話か解った人はいるかな？
もちろん、オリキャラもいるよ

年末企画第2弾：突撃！舞台【収録現場】裏のヘイホーたち（前書き）

※今回は、本編の舞台裏で活躍しているヘイホーの視点で話を進めます。

年末企画第2弾：突撃！舞台【収録現場】裏のヘイホーたち

「ホー」

「ホーホー」

「ホー……」

「ホッホー」

舞台道具の出し入れや舞台効果など……様々なことをこなす“ヘイホー”に今回はスポットライトを当てようと思う。

ちなみに、先程の会話の内容は

……

『こっちの作業は終わったよ』

『ご苦労様』

『ほらほら……次の準備に入るよ』

『はーい』

《※これからはヘイホー語は解りやすくします》

「なんでこんなことに……」

『綾華様ですから』

ヘイホーは雅也に女装させていた。

「何て言ってるんだ？」

「『綾華様ですから』って言ってるのよ」

着替えの最中、茜がやってきてそう言った。

「茜さんは解るんですか？」

「うん、あたしはヘイホーからヒューマン化したからね」

「なるほど……」

『出来たよ』

「もう出来たって」

「お、おぅ……」

「じゃ、頑張ってね～～」

茜に見送られて雅也は舞台【収録現場】に向かった。

「頑張ってるわね、アンタたち」

『これぐらいしか出来ないから』

「“縁の下の力持ち”ってことね」

『あ、ありがとうございます……』

「それじゃ、皆も頑張ってね～～」

『『は、はいッ！！』』

そう言うと茜は舞台に戻っていった。

『やっぱり、茜様はいいなぁ』

『うんうん、なかなかこんなに馴染(なじ)んで話せる人いないし』

「私では不服ですか？」

『『く、黒美様？！』』

ヘイホーたちの背後には、いつの間にか黒美が立っていた。どうやら休憩をしに来たらしく、水を飲んでいる。

「私は丁寧な言葉遣いですが、あなたたちのことは大切だと思っています。それは忘れないでください」

『『は、はいッ！！』』

「では、頑張ってください」

そう言うと黒美は舞台に戻っていった。

『た、確かに黒美様は丁寧な言葉ばっかりだから話しづらいところもあるけど……』

『黒美様はクールで丁寧語だから、憧れるよぉ』

『黒美様の部隊が羨ましい』

※ちなみに、黒美が指揮するヘイホーは全員『ブラックヘイホー』である。

【数時間後……】

「――というわけで、今回の撮影は終了だ」

『『『お疲れさまでしたー！！』』』

本編の撮影が終わり、解散する一同。

「それじゃあ……ヘイホー隊、整列！！」

ヘイホーたちの隊長（ボス）である優太の一言（ひとこと）で、ヘイホーたちは全員整列した。

「今日も1日ご苦労だった。これから充分な休息をとるように」

それを合図に、ヘイホーたちは解散した。

優太
「ふぅ……ヘイホーたちは使えるけど、食費がな……」

綾華
「ダメだよ、優太がそんなことじゃ。ヘイホーにはいつも頑張ってもらってるんだから」

優太
「それはそうなんだが……これを見てもそれが言えるか？」

優太が今月の食費代を綾華に見せる。その金額は8ケタを越えるものだった。

優太
「管理局やら他の世界の奴が乗艦してからさらに増えてな。その結果が此れだ……」

綾華
「で、でも、頑張ってもらってるんだから……ね？」

優太

「そうだな」

綾華
「ところで、優太は何でヘイホーをおいているの？」

優太
「イタズラ好きだが、機械をいじくる技術や舞台の設置、戦艦の整備なんかを難なくやってるあいつの……あいつらの腕に惚れたんだよ」

綾華
「フフ……機械いじりの好きな優太だからこそ言える台詞（セリフ）だね」

優太
「ああ……まったくだ」

そんなことを言いながら、後処理を進める優太と綾華だった。

年末企画第3弾：クリスマスの夜に……（前書き）

※最初に重要なお知らせがありますので、そちらをご覧になってから本編をお楽しみください。

年末企画第3弾：クリスマスの夜に……

あ～……どうも、作者です。

この度は【アニメ&ゲームキャラ大集合!2nd　復讐の戦場】を読んでいただき、誠にありがとうございます。

最近は更新回数が減っていますが、月1回の作品投稿は忘れないようにしています。

では、いきなり本題に入ります。

【アニメ&ゲームキャラ大集合!】の別シリーズの投稿を決定!!
（投稿日はまだ考えていません）

1つの作品をようやく完結させたので、ここで違う作品をつくりたいなぁ……と思った限りです。

登場作品として確定しているのは……

・魔法少女リリカルなのはA's　PORTABLE　THE　GEARS　OF　DESTINY

・星のカービィＷｉｉ

・Ｃ３【シーキューブ】（アニメ版）

・真剣で私に恋しなさい！！（ＰＣ＆アニメ版）

・ＩＳ―インフィニット・ストラトス―（アニメ版）

・緋弾のアリア（アニメ版）

・機動戦士ガンダムＳＥＥＤ＆ＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ【機体のみ、量産型は出す予定】

・オリジナル【心機一転するつもりです。要望に応じて出すキャラはいるかも】

・登場作品は、ほぼ原作に近いですが、多少変わるので予めご了承ください。

優太
「心機一転は良いが、こっちの作品をちゃんと軌道にのせてほしいものだな」

綾華
「そうだよ。見せ場をつくってもらわないとどうなるか……解ってるよね？」

は、はい……

優太
「ではまた次回」

綾華
「希望作品があったら書き込んでくださいね」
ではまた～～～

【おまけ】

コアッパ
「カービィめ……いつか絶対……」

コアッパは、あの日のことを思い出していた。カービィを追うことになったあの日のことを……

【～～～回想～～～～】

コアッパは、いつものようにお菓子を食べていたときのことである。

コアッパ
「さてさて、今日も美味(おい)しくいただくと……ん？」

コアッパの後ろには、ピンクボール――――カービィ――――が羨(うらや)ましそうにコアッパを見ていた。

コアッパ
「なんだ、お前も食べたいのか？」

カービィ
「ポヨ！」

コアッパ
「ま、ひとくちなら……」

カービィは大きな口を開けてお菓子を全て吸い込んだ。

カービィ
「ごちそうさま♪」

コアッパ
「誰が全部やるって言ったぁ！！」

コアッパはカービィを懲らしめようと突進した。

だが、カービィはコアッパを吸い込んだ。

コアッパ
「出せッ！　今すぐここから出せぇぇぇ！！」

カービィ
「ボヨォ」

カービィは勢いをつけてコアッパを吐き出した。

コアッパ
「うわぁあぁぁ……！！」

そしてコアッパは見えなくなった。

カービィ
「あ～～おいしかった♪」

そこでカービィは昼寝を始めた。

もちろん、コアッパの名前を知らないので、すぐに存在を忘れた……

コアッパ……哀(あわ)れなり……

特別編：【クリスマスの夜に……】

雅也
「んん～～～、今日も疲れたなぁ～～と……」

メアリー
「お疲れさまです、マスター」

ミニキュリア
「えーとね……じゃあ、頑張った雅也の肩を揉むよ」

メアリー
「ミニキュリア、それは私の役目です。貴女は食事の準備でもしたらどう？」

ミニキュリア
「別にいいじゃない。もう家族同然なんだし」

メアリー
「そういう意味じゃ……」

ばんっ！！

皐月
「雅也ぁぁぁぁぁぁ！！」

どげしっ！！

雅也
「ふぎゃあぁぁぁあ！！」

メアリー
「マスタァァァァ！！　皐月さん！！　いったい何事ですか！？」

皐月
「今、部屋に戻ったらこんなものがあったのよ！！」

皐月が見せたのは、ジャンボサイズのパンダのぬいぐるみだった。

皐月
「こんな大胆なことするのは……雅也、アンタしかいないでしょ！！」

雅也
「お、俺じゃねえよ」

皐月
「このパンダは超激レアなのよ。それを話したのはアンタしかいないの。だからアンタしかいないのっ！！」

雅也
「だからって俺がこんな高いモン買うわけないだろっ！！」

皐月

「じゃあ、いったい誰なのよ？！」

雅也
「知るかぁぁぁぁ！！」

メアリー
「まったく、マスターたちには付き合ってられ……」

メアリーが部屋のドアを開けると、箱が置いてあった。

不審に思いつつもその箱を開けると、メアリーは目を疑った。中には彼女が食べたかった【ＩＳ学園産・期間限定シュークリーム】が入っていたのだ。

メアリー
「……」（感激のあまりに硬直している）

ミニキュリア
「あれ、どうしたのメアリー？」

メアリー
「……ハッ！！　マスタァァァァァ！！！」

どどど……

雅也
「うおっ！？　メアリーまでどうし――」

メアリー

「マスターはイタズラが過ぎますよ！！」

皐月
「そうよそうよ！！」

雅也
「皐月のはともかく、メアリーは何のことだよ！！」

メアリー
「ごまかさないでくださいッ！！」

メアリーの急変ぶりにミニキュリアは不審に思い、メアリーの部屋に入る。

ミニキュリア
「い、いったいどうしたんだろ……って」

ミニキュリアはメアリーが見ていた箱をみつけ、中身を確認する。

ミニキュリア
「ああ……これのせいね」

ミニキュリアも呆(あき)れながらも、雅也のもとに向かった。

一方、その頃……

なのは
「ただいま……って、あれ？その金色のドレスどうしたの、ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ
「え、えっとね……戻ってきたら置いてあったの」

フェイト
「ヴィヴィオ宛に？」

ヴィヴィオ
「うん……」

なのは
「もしかして、雅也くんからかもね」

ヴィヴィオ
「ふぇぇぇ！？！？」

レヴィ
「そうだといいね」

シュテル
「フェイト・Ｔ・ハラオウン、貴女宛の荷物を預かりました」

フェイト
「私に？」

フェイトが受け取ったのは、ビキニの水着と蜂蜜（はちみつ）とクリスマスカードだった。カードにはこう書かれていた。

“ビキニを着て、蜂蜜を身体中に塗りたくれば、人気上がります！
ｂｙ　光翔竜”

フェイト
「……レヴィ、イッショニツイテキテクレル？」

レヴィ
「なんで僕なのッ？！」

フェイト
「ナントナク、カナ？」

レヴィ
「それって酷くないッ！！」

なのは
「にゃ、にゃはは……」

シュテル
「かつての高町なのはを思い出しますね」

その日、光翔竜は黒焦げになりながも笑顔であったという……

マーブル
「……チョコレート工場のチケット、せっかく雅也くんにもら

ったんだから行ってみようかな……」

雅也
「俺は渡してねえぞ！！」

優太
「フフフ……なかなか面白い展開になったな」

綾華
「優太もイタズラの度が過ぎてるよ」

優太
「そうだな……」

雅也
「いいから早く何とかしてくれぇぇぇぇぇ！！！」

【完！！】

年末企画第3弾：クリスマスの夜に……（後書き）

※ご意見・感想をお待ちしています！

新年特別企画！！：雅也たちの元日の過ごし方（前書き）

新年、明けましておめでとうございます！本年もよろしくお願いします！

作者より

※新年初投稿です。

新年特別企画！！：雅也たちの元日の過ごし方

【……元日】

雅也
「新年……」

ヴィヴィオ
「明けまして……」

『おめでとうございます！！！』

皐月
「本年も本小説共々……」

『よろしくお願いします！！！』

メアリー
「ま、まぁ、なんだ……本小説での正月企画は初めてだからな。少し緊張している」

マーブル
「メアリーたちはまだ良い方よ。あたしは初めてなんだから……」

ミニキュリア
「ほらほら、そんなこと言ってないで早く進めようよ」

雅也
「そうだな」

というわけで、女子郡の今日の姿を公開しちゃいます。

皐月は水色の着物を、ヴィヴィオは黄色の着物を、メアリーは白い着物を、マーブルは茶色の着物を、ミニキュリアは赤い着物を着ている。

皐月
「べ、別になんだっていいでしょ」

ヴィヴィオ
「えへへ……」

メアリー
「マスターが選んでくれましたから……」

マーブル
「か、感謝して着てあげるんだから……」

雅也
「……こんなに可愛いと、選んだ甲斐があるな」

４人
『……ポッ』

ミニキュリア
「あたしもまだそんな感情は“まだ”無いかな」

優太
「４人共、そんなに顔を赤らめてもねぇ」

雅也
「あ、優太さん」

６人
『明けましておめでとうございます！！』

優太
「はい、おめでとう。　それじゃあ、最初に新年のお年玉を預かってるから」

雅也
「預かってるって……」

ヴィヴィオ
「誰からですか？」

優太
「竜さんから」

６人
『ああ～～～……』

優太

「それじゃあ、雅也くんたちには……これ」

優太はプチ袋……ではなく封筒にお年玉を入れて渡した。

雅也
「ありがとうございます」

皐月
「さーて、いくら入ってるか…な……」

雅・皐・ヴ・マ
『……』

優太
「あ～～、やっぱりそんな反応になるよね」

４人の封筒には１万円札が１０枚入っていた。

雅也
「本気と書いて【マジ】ですか？」

優太
「マジだが……あとの２人にもお年玉を」

メアリーとミニキュリアにもお年玉が渡された。中身を確認した２人は顔を見合わせた。

メアリー
「なぜ、マスターの半分なんですか？」

優太
「理由は簡単だ。“小さいから”だそうだ」

ミニキュリア
「それって酷いんじゃないのかな？」

優太
「可愛らしくて良いってことだな」

メアリー
「し、しかしッ！！　私も大きくなればマスターと同じ大きさになるのにっ！！」

ミニキュリア
「あたしも大きくなれたような……」

優太
「まぁ、その……ガンバレ」

2人
『何か酷いことを言われたっ！！』

優太
「あと、俺から6人にはこれを……」

優太は1枚のディスクを渡した。

雅也
「あの、これは……？」

優太
「新しく作ったゲーム・“オリキャラオールスターズ！！”だ。遊び方は“ドラコンネイルマスター”【第３８－Ｃ話を参照】と同じだ」

雅也
「は、はぁ……」

優太
「それじゃあ……綾華たちを待たせてるから」

６人
『ありがとうございましたっ！！』

……神社に新年のお参りに行ったあと。

雅也
「どうする……これ？」

皐月
「今はやることもないし、やってみたら？」

ヴィヴィオ
「そうだね。私はやってみたい」

というわけで、もらったディスクをセットして起動させた。

マーブル
「ちょっと、何の冗談よ……これ」

メアリー
「笑えないな」

ミニキュリア
「あはは……」

確かに、“ドラゴンネイルマスター”のように【敵を倒しながら進めていくゲーム】だが、使えるキャラが変わっている。
ちなみに、使うことができるキャラは……

1、雅也
2、皐月
3、ヴィヴィオ
4、メアリー
5、ミニキュリア
6、七魔竜
7、リマ
8、ナオ
9、優太【隠しキャラ】
10、真王竜【隠しキャラ】

6人
『使えるキャラ、少なッ！！！』

とそこで、雅也は注意事項が書かれていることに気づいた。

※注：このゲームは【小説作品】のオリジナルキャラクターが【アニメ・ゲーム】のキャラクターと戦うゲームです。
【シンプルモード】：キャラクターがランダムに出現してくるので、その敵キャラを倒していく。

【ストーリーモード】：各ステージごとに用意されたキャラを倒していく。
なお、敵キャラとして登場するキャラクターは以下のようになっています。【敵キャラは特定の条件を満たせば使用可能になります】

【通常キャラ】
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
八神はやて
コーティカルテ&フォロン
カービィ
メタナイト
諫山黄泉
土宮神楽
坂田銀時
ブレイド
セイバー
スバル

ティアナ
ギンガ
ドゥーエ
チンク
織斑一夏
篠ノ之箒
セシリア・オルコット
凰鈴音
シャルロット・デュノア
ラウラ・ボーデヴィッヒ
クッパ
ばいきんまん

【隠しキャラ】
神崎・H・アリア
遠山キンジ
星伽白雪
峰理子
レキ
ジャンヌ・ダルク
フィア
夜知春亮&村雨このは
上野錐霞
川神百代
松永燕
織斑千冬
ギャラティックナイト
トーマ&リリィ
アインハイト
アミティニ・フローリアン

キリエ・フローリアン
星光の殲滅者
雷刃の襲撃者
闇統べる王
砕け得ぬ闇
優太【本気モード】

雅也
「敵キャラの方が多いわッ！！」

ヴィヴィオ
「アインハイトさん……勝負です！！」

皐月
「なのはさんに……勝つ！！」

マーブル
「ハァ！！　せいっ！！」

メアリー
「箒さんとの勝負……楽しみだな」

ミニキュリア
「か、勝てるかな……」

リマ
「やっと活躍できる……」

ナオ
「ここまでの道、長かったね……」

雅也
「あの……聞いてます？　ていうか2人は何時の間にいたんですか？」

その後、6人はゲームにハマったそうな……

真王竜
「……やってみたいな」

白天竜
「ダメですッ！！」

七魔竜
「……ダメなの？」

スイレーヌ
「ダメと言ったらダメです！！」

優太
「これで良ければ」

真・七
『感謝します』

白・ス

『余計なことはしないでください！！』

【……完！！】

新年特別企画！！：雅也たちの元日の過ごし方（後書き）

※ご意見・感想のある方はよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8188h/

アニメ＆ゲームキャラ大集合！ 2nd　復讐の戦場

2012年1月1日21時48分発行